
正義の街

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の街

【Nコード】

N1252T

【作者名】

杉林機構

【あらすじ】

魔界、魔力、そして魔法。現代社会の裏側に隠されていた秘密が何者かによって明らかにされようとしていた。魔法を研究していたが親友に裏切られ猫にされた父、かつて守護者としてその秘密を守り死んだ母、そして力を受け継いだ息子、小さな家族がそれぞれの幸せを求めようとするとき、彼らは正義と対峙する。

1 私の息子はアホの子でした。(前書き)

下ネタが含まれます。

1 私の息子はアホの子でした。

目を覚ますと、私は猫にされていた。

毒虫でなくてよかった、などと古典的ジョークを言っている場合ではない。

夜空に星が瞬いている。

街灯もなく、暗い場所であるはずだが、私の目はよく見えていた。人間であつたころよりよく回る首で己が黒猫になってしまっていることを確認し、相対的に広くなってしまった世界を認識する。見覚えがないのか、あるいは地表から十数センチから見上げる視界によつて印象が違うのか、どこにいるのかまるでわからなかった。凍える冬の空気に、総毛立つ。

「……こうなるのか」

思わず独り言を口にして、私は人語が話せていることに気付いた。

「私は、まそのけいすけ馬園圭介。三十七歳、A型」

もう一度、喋ってみる。少なくともニャーと言っているように耳には響かない。

デカルトは言った「我思うゆえに我あり」と。現在、認識できる限りの私は猫に他ならないが、しかし私は人間であつた意識を保っている。心まで猫になってしまったわけではない。名前はある。私は私で、私以外の何者でもない。記憶にさしたる欠損もない。

どうしてこうなってしまったのかも覚えている。

「りょうへい亮平」

私は、私を猫にした男の名前を口にした。頭の中には顔も浮かんでいる。

『悪いな、圭介。でもな、お前が迂闊なんだぜ？ 周りが見えてなかった。この研究がこの世の中を根底から変えちまうってことがわかっていながら、注意を怠った。だが、俺も長年同じ釜の飯を食ってきた友だちを殺すのは忍びない。だから——』

野末亮平、私の親友にして、共同研究者であつた男は最後にそう言った。

それで猫か。

親友の慈悲深い温情を思い返すと喉から毛玉が出そうな気持ちになる。

冷静にならなければ。

私はどこかもわからない原っぱに四本の肢で立ち上がり、新たな身体の動かし方をひとつひとつ確認する。駆けてみる。意識は人間だったが、肉体は猫に順応しているらしく、イメージと運動に大きな齟齬はなかった。むしろ人間だった時より軽やかですらある。後は慣れた。

「よし。だいたいわかった」

爪を出し入れしながら、私は己を鼓舞する。

この境遇を嘆いてもはじまらない。

もはや私に絶望などない。それは妻が死んだあの日に置いてきた。研究は実を結び、彼女を蘇らせる日は近かった。だからこそ、今、私はこんな目にも遭っている。世の中を根底から変える。野末はそう言った。その通りだ。私は私が属する世の中を変えてでも、己の運命を変えてみせる。人間に戻り、妻を蘇らせ、家族と共に暮らす、その日まで立ち止まらない。

そう決めていた。

それは私が猫になってしまおうと変わらない。

人間として記憶する最後の日付から半年が過ぎた。

季節は冬から春が過ぎ、夏になっていた。

月に一度しか連絡船も来ない離島に捨てられていた私は、人間社会と猫社会の狭間を漂い、やっとの思いで自宅のある懐かしい街、木乃市に帰り着いた。苦難の旅路についてはまったく思い出したくもない。人間の心を持つが故に、エサを恵んでもらう状況への抵抗感、心ない人間からの虐待的愛玩で受けた屈辱、珍奇な猫社会との

軋轢や迫害、何度「ただの猫になっていれば良かった」と弱気になったかわからない。

それでも諦めずに帰って来ることができたのは、家で帰りを待っている息子・勇希ゆうきを思えばこそのことである。妻が残してくれたかけがえのない私の宝だった。寂しい思いをさせたに違いない。それを考えると猫の心臓も痛む。

だが、人間に戻らないことには合わせる顔がなかった。

いくら人語も操れるとは言え、見知らぬ黒猫に「父だ」と告げられても勇希は困惑するだけだろう。わかっている。けれども、人間に戻るためには亮平との対決は避けられず、最悪、今度こそ殺されてしまう可能性もないとは言えない。それならば顔だけでも見ておきたいのが親心というものだ。妻に似て明るく朗らかな子だ。失踪状態の父を思つて落胆の日々を送っているのやもしれない。出来るならば「心配はいらない」というメッセージを残したい。

あるいはそれが最後になるとしても。

それに今日は、勇希の十二歳の誕生日でもある。

なにかプレゼントを、と探し回った四葉のクローバーの束を咥えて、私は半年振りの我が家を見上げる。猫の身体が刻む正確な体内時計は夜の零時を回った。二階にある息子の部屋はまだ明かりが灯っていたが、生活面での世話をしてくれている私の母は眠ったようだ。

行こう。

私はブロック塀へ飛び上がり、一階のルーフバルコニーへ飛び移つて二階のベランダへ駆け上がる。部屋のカーテンは閉じられていたが、窓は網戸になっていた。これならば中に入って息子の顔を見ることが出来る。猫の身体には辛い夏だが、今日ばかりは感謝しかない。

しかし、こんなに夜遅くまで勇希はなにをしているのだろうか？
小学生の息子には夜十時には寝るように、と口を酸っぱくして言ってきた。

私の失踪状態が生活サイクルに影響を与えてしまっているのだろうか？ 不安からくる不眠。ありえないとは言えない。幼くして母を亡くしている勇希にとって見れば、さらに父もという想像は大きなストレスになっているだろう。

私が不甲斐ないばかりに。

「これではいけない」

私は口の中でつぶやいた。

感慨に浸っている場合ではなかった。一刻も早く人間に戻らなければ。

力を貸してくれ、勇希。

最後などと弱気になる己の心をねじ伏せるように意を決し、私は網戸を静かに細く開けて頭を突っ込み、猫としてのしなやかな身のこなしでカーテンの外側へ、夜風にそよぐカーテンの隙間を肉球による無音ウォークで内側へと入っていく。たとえ見つかったとしても、息子は猫が好きだったからどうということもない。私にしては大胆な判断だった。

しかし、それが仇になった。

「あ、猫だ」

鏡の前に立つ勇希は即座に私を見つけた。

「……………」

猫らしく鳴くことも忘れて、私は口を開けたまま硬直した。

これはなんだ？

「近所じゃ見かけないヤツだなー」

そう言う勇希は女装していた。

猫の視点から見ればパンツが見えるのと同義と言うべき短い丈のタイトなデニムのスカートを履き、上はキャミソール、半年でそれほど髪が伸びるとは思えないので、黒髪の長髪はウィッグなのだろうか。しかしなにより問題なのはその見えるパンツが明らかに女物であることだった。子供用ではない。見覚えがある。妻のものであるような気がする。

なんだこれは？

「ぶっさいくな顔。毛並みもきつたねーの」

そう言いながらも、目の前でしゃがむと私の頭を撫で、顎の下をくすぐった。

「ノラだよなー、バアちゃんが猫アレルギーじゃなきゃなー」

さらに背中から腹へ遠慮の欠片もなくわしゃわしゃと毛をかきわけける。

「……」

目の前に見てはつきりと確認する。これは妻の下着だ。

私に似ず、美人だった妻に似て女顔で、最近の流行としても美少年の類だと評判の息子には似合っているとさえ言えたが、父親としては信じがたい光景であった。うつすらと化粧もしている。街で見かけたら間違いなく勇希ではないどこかの女の子と思ったに違いない。我慢ができなかった。

「なにをしているんだ、勇希」

「……？ 今、喋ったのおまえ？」

勇希は、長い睫毛をカールさせて一層ぱっちりとした目を何度もまばたきした。

私自身もはじめて鏡で人語を喋る己を見たときは驚いたものだが、人の言葉を話そうとするとき、私の口は猫の口にあるまじき奇妙な運動を見せる。

「私だ」

もはや私に誤魔化すつもりはなかった。

「うそだろ？ 猫がしゃべった？」

「そっだ」

「……すっげー。マジかよ」

勇希は子供っぽくコクコクと何度も頷いて私の口を引っ張って広げた。

「やばくねー？ ……って？ こいつ、さっき、おれの名前？」

「この声に聞き覚えはないか？」

この際なので、私は己で確認しにくかったことを尋ねてみることにした。

私自身では私の声が人間のときのままなのかどうなのかよくわからなかったのだ。

「……え？ もっかい、なんか言って」

勇希はウィッグをかきあげ、耳を出すと指を立てた。

「なぜ女装をしているんだ、勇希」

私は、ゆっくりはつきりと発音した。

「もっかい」

今度は目も瞑った。

「勇希」

「……もしかして、父さん？」

パツと目を開け、勇希はまじまじと私の顔を見た。

「わかったか」

「うっそ、なんで猫になってんの？」

「話せば長くなるのだが……」

もうすべてを語るしかない。そう思ったのだが、

「じゃ、いい」

私が語り出そうとするのを遮って、勇希は興味を失ったように立ち上がる。

「……いい、って勇希」

あまりに気紛れな物言い、私は取り残されたように動けなくなる。

「声が似てたって、父さんなわけないや」

「……それは」

合理的判断ではあった。

少なくとも我々の研究を知らなければ、そうとしか言えない状況である。息子は立派に科学的思考をしている。だが、それではこうして私が私であることを明かした意味がない。

「しかし、喋る猫は珍しくないか？」

興味を引こうと私は言った。

「前、テレビで見たことある。おはようとかおかえりとか言うヤツ」

「それは、そう聞こえる鳴き声だろう？ 意思疎通とは……」

「どーでもいい」

自分がスカートを履いていることなどお構いなしに胡坐をかくと、勇希はそう言い、つまらなそうにケータイを弄りはじめた。生意気にもスマートフォンだ。

「……そんなの買ってやったっけか？」

確か最小限の電話とメール機能のみのものを与えていたはずだった。

「誕生日プレゼント、バアちゃん買ってくれた」

「そうか」

まったく、デジタルに疎い母はすぐに欲しがるものを与えてしまう。子供にここまでのハイテクはきちんと使い方を教えてやらなければむしろ毒だろう。いや、いかん。これでは仕事にかまけてたまに家に帰っても子供に相手をしてもらえない父親そのものだ。

「私も勇希に誕生日プレゼントがある」

私は気持ちを立て直し、さきほど驚きのあまり床に落としてしまった四葉のクローバーの束を咥えて息子の膝の上に置く。二十本もの四葉は探すのに難儀した。

「……へー」

勇希はそれを摘み上げると躊躇うことなくゴミ箱に入れた。

「おい、それは少し」

「ありがとう。気持ちはうれしい。でもおれ、そういうのって信じてない。草だよ」

「……草」

確かにその通りではある。スマホという現実の利器に対して四葉のクローバーは無力であった。なにより猫になってしまった私が無力ということだが。

「あのさ、父さん？」

勇希はぼつりと言った。

「おれは、信じてないんだ。幽霊とかそういうのって。そりゃ、死んじゃって心残りがあって猫に化けて出てきたんだとしても、父さんの自由だけど、心配いらないから。母さんと向こうで楽しく暮らしなよ。おれ、ちゃんとやってくから」

そう言った勇希のタッチパネルに触れる指先はまったく動いていなかった。

フローリングの床にぼたりと涙が落ちる。

「……勇希」

息子が立派に育っている。一瞬、私は感動しかけたが。

「いや、ちよつと待て、私は死んでいるのか？」

「え？」

勇希は掌で目を擦ってこちらを向いた。

「死体はでていないはずだろう？」

「あつたよ？ 葬式して、焼いて、骨を拾った」

勇希は箸をもつジェスチャーをした。

「しまった。そういうことか」

私は己が大変なことを失念していたことに気付いた。私に施された猫化は《変異》であると理解していたのだが《転位》であつたのだ。どこかの猫と肉体を入れ替えられた。だからこそ人間としての意識が残つたのだ。冷静なつもりがまるで頭が回っていなかった。

そして私の肉体はこの世から失われた。

「どういうこと？」

「……人間に戻れない」

私は愕然として床に倒れると、腹を天井に向けて脱力した。

なんたることだ。肉体と魂の物理的遮断。亮平はおそらくこれを見越して、私を猫に《転位》したのだろう。これでは私が元に戻ることは死者の蘇生より困難な状態と言える。

少なくとも猫の身体のままではどうにもならない。

「おい？ 父さん？ 意味わかんないよー？」

勇希は私の腹を撫でながら言う。

その女装してすっかり少女にしか見えない息子を眺めている内に、私の脳裏にはおそるべき計画が組み立てられようとしていた。それは研究者にとつて、直感が理屈の先に立つ恍惚の瞬間、抗い難い発見の予兆そのものであった。亮平が私を完璧に始末したのだと安心しているのならば、やってやれないことはないはずだ。

父親としての理性は己の子供を巻き込むべきではないと告げている。

「勇希、母さんを蘇らせることができるとしたら、どうする？」

だが、私はその言葉を口にした。

父親失格の瞬間だった。しかし、このまま人間に戻れないとすれば、どちらにしても猫であり、父親になど戻れるはずもない。家族で暮らす日がやってくることは永遠にない。

ならば、私はあえて獅子の心で息子を千尋の谷に突き落とそう。

「へ？ よみがえらせる？」

勇希は可愛らしい少女のような仕草で首を傾げた。

「そうだ」

「生き返るってこと？」

「その通り」

私は起き上がり、尻尾を立てて強く頷いた。

「勇希が協力してくれるなら、可能だ」

「……父さんも生き返る？」

「もともと死んではいない。だが、人間に戻ることもできるだろう。」

「なら、やるよ、おれ。どうすればいい？」

勇希の目に光が宿っていた。

最後にこんな目を見たのはいつのことだっただろう。あるいは一度も見たことなどなかったのかもしれない。母の不在、家を空けがちな私、親の愛に飢えていることは想像に難くなかったというのに、

私はそんな息子の気持ちを考えてやったことがあっただろうか。

酷いことをしている。

手を汚すのは己だけのつもりだった。

だが、もはや後戻りはできない。

「綿密な準備が必要だ。だが、その前にひとつ、確認しておきたい

――」

妻の蘇生、私にとってそれが唯一生きる希望であった。

ならば勇希にとってもそれが生きる希望になりうるはずだ。親のエゴを押し付けていると言われようと、親が子供にしてやれることは、子供にも伝わるように愛情を表現することだけだ。そこに一般論としての正しさが入り込む余地などない。

「――その女装は、どういう意味だ」

私は、一連の出来事とは別個で気になっていた問題に踏み込む。

これから協力していく上で、理解を共有しなければならなかった。

「どういう意味って？」

私の質問の意味が伝わっていないらしく、勇希は繰り返した。

「つまり、だな。その。なんと言ったらいいか……勇希は女になりたいのか？」

父親としては複雑だが、科学的に言えば、肉体と精神の性がバラバラになってしまうということは起こりうることだった。きちんと気持ちを聞いておかなければならない。

「あー、これ？　ちがうよ」

あっけらかんとした口調で勇希は答えた。

「違う？」

「ちがう。おれは女になりたくはない、ぜんぜん」

そう言つて、息子は手に持っていたケータイを置くと、立ち上がった。

「ならばなぜそんな……」

「なぜって、オナニーするときコーフンするから」

「……」

私は二の句が継げなかった。

見上げる目の前で勇希はスカートの前をめくりあげ、自らのパンツに手をつ込んでずらそうとする。実際のところ、最初にそれを目にした瞬間から薄々気付いてはいたのだが、息子の息子はずっと興奮状態にあった。それは、つまり、性的嗜好としての女装癖――。

「猫パーンチっ！」

私は反射的に飛び上がって全身をねじのようにひねりながら伸び上がり、勇希の顔面に肉球を叩き込んでいた。半年間、猫社会で鍛え上げたパンチ力は伊達ではない。

「あいたっ」

「爪を立てなかったことに感謝するんだな！」

全体重を叩き込まれで床にへたり込んだ勇希に向かって私は言い放つ。

「……見せるってことじゃなくて？」

「私がいつそんなことを言った？」

息子が女装して自慰に及ぶさまを見たいなどという父親はいない。

「どういう意味って言うから……」

勇希は唇を尖らせてスカートの裾を元に戻す。

私は深く溜息を吐いた。

「すること自体が悪いとは言わない。自分で処理することがわかってくる年頃でもある」

最大限の譲歩をしながら私ははっきりと言う。

今、教育しなければ息子の性は明後日の方向へ突っ走ってしまう。
「とは言え、十二歳でそれは趣味が過ぎる。どうしてそんなことになる。なにがきっかけでそうなる。父さんの言っていることはおかしいか？ 勇希にもわかるだろう？ こと性に関して普通という概念ほどアテにならないものもないが、しかし、普通ではない」

「……」

胡坐をかいた膝に頬杖をつき、勇希はむくれっ面で話を聞いてい

る。

「父さんにはわかんないよ」

そう呟いた。

「なにがだ」

「……」

勇希は答えない。

「言わなければ永久にわからない。勇希、不便ではあるが、人間は言葉で意思疎通を図らないことにはなかなか互いの気持ちを理解しあうことができない。言ってほしい。すぐに理解できると安請け合いはしないが、私もわかりあうために努力を惜しまない」

「父さんは猫だろ」

「人と猫ともだ」

私の熱意が伝わったのかどうかはわからない。

目の前にいるのが黒猫であるということが、息子が父親に対して自らの性的嗜好について告白することへのハードルを下げていたのは事実だろう。しかし、それでも勇希はきちんと正座し、私と向き合った。親子の関係にこれは大きな一歩と言えた。

「怒らないで聞いてくれる？」

「ああ、もちろんだ」

私も可能な限り背筋を伸ばし、猫として凛々しく座り直す。

気持ち落ち着けるためか、勇希は深呼吸する。

静かな間があった。部屋の中をそよいでいた風が止む。

そして息子が口にしたのは、私の予想もしない一言だった。

「おれ、モテすぎるみたいなんだ」

「……なに？」

「なんていうか、クラスの女子とか、女の先生とか、中学生とか高校生とか、父さんの大学にいる女の人とか、街で出会う人とか、みんな、おれを見ると目の色が変わるんだよ」

冗談を言っている口調ではなかった。

勇希は真剣に言っている。だが、受け止める私の方が真剣になれ

なかった。

「……」

自慢話か？

「気のせいとかじゃなくて、本当なんだよ。女ってちょーこえーんだ。父さんは知らないかもしれないけど、おれ、ずっとなんだよ。保育園とかのころから、すぐキスされたり、信じられないかもしれないけど、学校でキスしてない女子の方が少ないくらいなんだ。気分が悪くて保健室で寝てたらだれかがベッドに入ってくる。女の先生は口コツにおれをヒイキするし、それがわかってるから男の友だちもできない。街をひとりで歩けば年上の人にナンパされて、強引に連れまわされたり、ともかく色々、大変なんだ」

「それは、犯罪に巻き込まれたとか、そういう話なのか？」

「たぶん、ギリギリセーフぐらい」

勇希は首を振った。

「ああ……」

つまりモテすぎる、と。

男の友だちができないというのは確かに深刻ではある。好かれすぎて孤立している。そんな状況なのだろう。それは大変だ。大変なのだ。だが、真面目に聞く気がしない。

おじさんはそんな少年時代を送りたかったですよ？

恵まれた容姿を持つ息子に対して小さな嫉妬心を抱いていることを悟られないように、猫として真面目な顔を作りながら、私は勇希と目線を合わせる。

「事情はわかったと思う。それと女装の関係は？」

私は努めて平静に尋ねた。

勇希はコクリと頷いた。

「父さんの葬式のあとぐらいから、なんかそれがどんどんひどくなってきて、女のカッコしてたら安全かもと思ったんだ。やってみたら、それがうまくいって。休みの日とかは女のカッコがフツーになつてた。バアちゃんには秘密にしてただけ。で、それで……」

正座した膝の上で組んだ指を落ち着かなくさせながら、息子の目が泳ぐ。

「それで？」

息子に嫉妬しても仕方がない。私は仏の心で優しく先を促した。

「ふと、鏡、見てたら、おれって美人だなーって」

「……うん？」

聞き間違いだろうか？

「だっ、だから、女のカッコしたおれのが好きになっちゃったんだ！」

勇希は顔を真っ赤にして言った。それは美少女に告白されているようでもあったが、実際は女装した息子であり、極めて歪んだ、あるいは真っ直ぐなナルシスト宣言であった。

ここまでイッてしまつと矯正不可能かも知れない。

「話を整理しよう」

なにか大きな勘違いをしているとも限らない。

「勇希は、女の格好をした自分を好きになり、鏡の中の自分を見ることで性的興奮を得る、つまり女装しての自慰行為に及ぶようになった」

「じいこうい？」

息子にこんなことを言わせているのが知れば私も変態だろうか。

「オナニーのことだ」

「へー、じいこうい……」

「間違いないか」

「うん！」

勇希はなにもかも白状してスッキリしたのか屈託のない笑顔で頷いた。

その様子を見ると、私は逆に不安になる。

「本当に間違いないか？」

再確認した。

「ないよ」

自信を込めた表情で勇希はきっぱりと言った。

「勇希が好きなのは？」

「女のカッコしたおれ！」

私の息子はアホの子でした。

いや、ちょっと待て、それだと私がアホということになる。

1 私の息子はアホの子でした。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
ご意見、ご感想ありましたらよろしく願います。

1 聖木乃女子学院アニメ研究会（初夏）（前書き）

時事的なアニメタしかありません。

1 聖木乃女子学院アニメ研究会（初夏）

聖木乃女子学院アニメ研究会。

会員数三人、部活動の要件を満たさないことから部費も部室もない彼女らの活動は図書室の片隅でひっそりとはじまる。こつこつと創作活動に勤しむ文芸研究会や、図書室を利用する一般生徒に迷惑をかけないように会話は小声で行なわれる。

口火を切るのはいつもナツメだった。

「ゴールデンウィークも終わって、そろそろ2001年春アニメも1クール物は中盤に入って、内容的な当たり外れがハッキリしてきたと思うっす」

会長なのだが、古臭い下っ端口調で言う。

校風的にこれまでなかったアニメ研究会を立ち上げた張本人である。色黒の肌と、その快活さからスポーツ少女にしか見られないが、本人の運動能力は惨憺たる有様である。

「観るものは好き好きだと思っつすが、これだけは観とくべきみたいな、いかがっすか？」

「春は数が多いから、どうしても全部は観れないものね」

図書室の本ではなく、自分で買ってきたマンガを読みながらヤタテが頷く。

ふんわりとウェーブのかかった髪と、育ちの良さが外見からうかがえるこの女子高が理想とするおっとりとしたお嬢様なのだが、頭の先まで趣味はずっぷりである。

「でもイチオシって言うなら、やっぱりタイバニかしら？ ベタと言われても」

「タイガー&バニーっす、そしてタイガー&バニーっす」

「スカイハイだ、ぜつと」

そう呟いてミズキはテーブルに広げた紙にさらさらと薄味の二枚目フェイスを描いていく。

ぴょんと伸びたアホ毛がトレードマークのロリっ娘、たまたま名前が同じだったアニソンの帝王を崇拜して止まないが、当人の歌唱力に極めて難がある。

「スカイハイもいいけど、キャラクターとしてはやっぱりバーナビーよ」

マンガ本に指を挟んで机に閉じると、うつとりとした表情でヤタテは言う。

「主役っすから、そして主役っすから」

「ナツメくどい、ぜつと」

「王子さまってきつとああいう感じなのよ。王族という家柄に生まれた宿命、自由を奪われた憂い。ヒーローという文脈に形が移っても、生まれもった人助けの宿命と、表には出さない能力に対する憂い。流行らない古典的キャラクター造形と言われようとも輝いてるわ」

ヤタテは夢見る乙女になる。

その様子に、ナツメとミズキは顔を見合わせて肩をすくめる。

「わたしの意見、変？」

二人の表情に気付いてヤタテは不安そうな顔をする。

「いや？ ヤタテっちの意見は正しいと思うっす」

「同感だ、ぜつと」

「それでやっぱりカップリングは……もごもご」

「ああ、もう結構っすから」

ナツメは声が大きくなってきたヤタテの口を塞いだ。

「ミズキっちはどうっすか？」

「断然。よндеますよ、アザゼルさん。だ、ぜつと」

ミズキは紙にさらさらとペンギンっぽいハエの絵を描いた。

横にはチヨコベビーも。

「らしいチヨイスっすね。水島努監督のギャグアニメはテンポが良いつす」

「ああ、ミズキちゃんが好きだものね。ああいう毒があるの。不思議

議なんだけどギャグアニメってどれも声がいいよね。ヘタリアとか、再開した銀魂とかもそうだけど声の演出が上手いと思う。それでね、やっぱり新撰組が……もっこ」

「アニメ研究会にもさくちゃんみたいなメガネっ娘が欲しいっす」
ナツメは放しかけた手をヤタテの口に押し付けた。

「くふっ」

ミズキはそれ以上語らず、思い出し笑いをしながら悪魔のキャラクターを描いていく。

「悪魔のデザインいいっすよね？」

「秀逸だ、ぜつと」

「憎たらしさとちよつととぼけた滑稽さが見事にマッチしてると思っす。自分としては、主人公のアザゼルが好きっすけど、ミズキっちはどうっすか？」

「岡田だ、ぜつと」

そう言いながらミズキはライオンの魂を持つ男の絵を描いた。

「岡田さんは悪魔じゃなかったと……声はアレっすけど」

「岡田トカゲ」

「ぶはっ、それでナツメさんのイチオシは？」

硬直したナツメの手を外して、ヤタテが尋ねた。

「あ……自分は、戦国乙女〜桃色パラドックス〜がイチオシっすね」
体勢を立て直してナツメは言った。

「戦国乙女？」

「エンディングテーマしか覚えてない、ぜつと」

ナツメの顔を見て、二人は信じられないという風に顔を見合わせる。

「お二方の言いたいことはわかるっす。自分も1話の直後は完全になんらかのブームを外したと思っただっす。けど、2話、3話と観ていくうちに裏表のないヒデヨシちゃんが可愛くなってくるんすよコレが。そうなってくると、全員女性化ではなくポイントを押さえた武将キャラクター配置がわかってきて、強いノブナガ、ノブナガが

好きだけど報われないミツヒデ、おとぼけヨシモトに腹黒イエヤス、そして本当になにをしでかすかわからないとぼけたヒデヨシ、このいつ崩れるかわからない歴史ネタ百合ネタとしての微妙な緊張感と、ほどよいギャグが心地好くなってるんすよ」

とうとうとナツメはまくしたてた。

「……そうかな？」

「ナツメの趣味は変わってる、ぜつと」

「奇しくも同時期にやってるへうげものも時代は近いんですけど、どっちがどっちを打ち消しあうというものでもなく、あちらの緊張感がある秀吉との対比もあって戦国乙女も両方とも味わい深いアニメになっちゃうつす。信長のように強力なイメージの刷り込みもなく家康のように落としどころが定まっているわけでもない、秀吉の面白さを再評価できる、お徳っす」

ドン引きする二人のことなどまるで気にせずナツメは喋る。

「こんなこと言ったら観たくなってきたっす！　これからみんなで……」

「図書室は静かに」

その時、少し離れた席に座っていた、たったひとりの文芸研究会がぴしゃりと言った。

「……すみませんっす、以後気をつけるっす」

「わたしたち、悪くないよね」

「ナツメが暴走した、ぜつと」

「申し訳ないっす」

そんなこんなでアニメ研究会は細々とつづいていく。

彼女らが少年と会ったのは、もう少し先の話だ。

「へうげものって言えば、急にオープニング変わったよね？」

「そうそう、なんだったんすかね？　秀吉が話の主役だったから特

殊オープニングっすか？」

「幾三の歌が楽しみだったんだ、ぜつと」

「だから、静かに！」

1 聖木乃女子学院アニメ研究会（初夏）（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

2 子供でもセクハラはセクハラです。(前書き)

下、
というか胸が出ます。

2 子供でもセクハラはセクハラです。

夏休みである。小学生のフットワークは軽い。

「じゃあ、今日、学院に行けばいいんだ」

予想通り、勇希は行くことを躊躇わなかった。

「出かける準備するから、しばらく父さん外で時間つぶしてよ」

看護師を長年務め、定年後も在宅ヘルパーとして働きつづける私の母に代わって、掃除と洗濯をする勇希の姿は、私が人間だった頃から馴染んだ光景ではあったが、猫となった今見ると、己の無力を痛感しないわけにはいかなかった。実際、よくできた息子なのだ。勉強も運動も人並み以上にこなす。学校で問題を抱え、女装に逃避するほど追い込まれていたとは想像もしなかった。自分の研究にかかりつきりで父親らしいことをあまりしてこなかったことに強い後悔がある。

とは言え、息子のナルシズムに特效薬はなさそうだった。

女装して女の外見を手に入れた自分自身を好きになっている。正直に言って私にはイメージできないが、感情としては完結しているように思える。学校側の問題を解決しようにも夏休みであり、その前に保護者である私が猫のままで力にもなれない。しばらくは近くで様子を見ていくしかあるまい。あるいは女装した自分よりも好きになれる人間が現れれば問題は簡単に解決するのかもしれないが、真面目に思考しているつもりだったが、気付くと私は日向でうとうととしていた。

猫の身体は昼間の行動に向かないのだ。人間時代には味わったことのない眠気と常に戦うことになる。実際、家に帰ってくるのに半年もの月日を要した理由の半分はそれだった。動物的勘というやつなのか、時間というものを肌で感じられるのだが、人間と同じ生活ができるようにはできていない。

「おまたせっ」

だが、勇希の声で頭を上げた私じゃ一気に眠気が飛ぶのを感じていた。

出会った頃の妻がいた。

「これでいい？ 学院の夏服って」

「……」

「母さんの昔の写真をサンコーにウィッグをおさげにしてみたけど」
「ああ、よく似てる」

長いふたつのおさげ、白いシャツに指定のリボン、ブリーツの入ったチェックのスカート、黒いハイソックス、こちらも指定のローファー。少しサイズが大きい風であることを除けば、妻が女子高生だった頃の姿そのままだった。時間が巻き戻ったような気がして、私は口を開けたまま硬直し、そして鼻の奥にツンとした痛みを感じていた。泣きそうだった。

「父さん、泣いてるの？」

勇希は首を傾げる。その仕草も似ていた。

「いや、なんでもない」

私は頭を振った。一瞬、永遠に息子が女装していてもいいような気になっていたからだ。

身勝手な人間、もとい猫である。

「じゃ、行こ！ レッツ、魔法！」

「あまり大きな声で言うな、それに想像している魔法とは違う。魔界の生活技法、だからな」

てくてくと歩き出した息子を追いかけて、私も家の敷地を出る。

「鍵は閉めたか？」

「うん！」

歩き方だけは小学生男子のそれで勇希はご機嫌だった。

無理もないだろう。魔法が使えるようになると誑かしたのは私だ。魔界の生活技法、通称・魔法。それが我々の研究対象だった。過酷な環境に適応し、生き残るために編み出された技法は本来こちら側の世界では使えない。その魔法をこちらへ持ち出すための条件整

備が我々の課題であり、その目標は達成されつつあったのだ。

しかし、奪われた。

「でも父さん、なんで学院に行けば魔法がつかえるの？」

「穴がある」

私は答えた。

「あな？」

「魔界の穴だ」

そう。この世界と魔界を繋ぐ穴、すべてのはじまりがそこにある。

「それってどんなの？」

「普通の方法では見えないのだが……しっ、人が来た」

表で猫が会話しているのはまずい、私は勇希に注意を呼びかける。

「……」

口を閉じ、勇希は一度足を止めると、気持ち内股気味にゆっくりと歩きはじめる。少なくとも口を開かなければ少年には見えない。髪型をおさげにしてしまったことで少しレトロ口はあるが、制服を着ている限りでは女子高生であることを疑わることはいらないだろう。

私は野良猫のふりをして身体を舐めながらその場に留まる。

自転車に乗った少女が我々の脇をすり抜けていった。

「後は、打ち合わせたとおりに——」

先に進んだ息子に追いつき私は言う。

「……あれ、クラスメイトだよ」

勇希は憂鬱な口調で言った。見るからに顔が青ざめている。

「それは……どういうクラスメイトだ」

「ストーカーなんだ」

「ストーカー？」

「……」

私の問いかけに勇希は答えなかった。

「バスに乗って行けばいいんだよね？」

「あ、ああ」

「じゃ、行こう」

そう言つと駆け足で道を折れる。一刻も早くこの場から離れたい
かのように。

「ストーカー……？」

好きな男子のところに女子が行くことを指しているとすれば過剰
反応だろう。

だが、結果としての息子を見れば必ずしも状況は私が想像してい
るほどのどかな話では済まないのかもしれない。父親としては事情
を確認したかったが、しかし猫のままではどうにもならない。無力、
だからこそ、それ以上は追及せずに後を追った。

勇希は高校生としての料金を払い、私は迷い込んだ猫を装ってバ
スに乗車する。

何度やつても、ということだが、交通機関への便乗は緊張する。

乗客の中に一人でも迷い込んだ猫を降ろしてやろうという優しい心
根を持った人間がいるくらいなら抵抗もできるが、猫嫌いや猫アレ
ルギーがいて彼らに配慮する場合は逃れようもない。

夏休みの午前中ということもあってバスの乗客はまばらだった。

先に乗った勇希は事前の打ち合わせ通り関係ないフリをしている。
乗客のほとんどが私に気付いたが、ケータイのカメラを向けられる
程度のことで猫の無銭乗車を黙認してくれた。

聖木乃女子学院高等部までは二十分弱、よく知った道のりだった。
私がまだ高校生だった頃、同じく高校生だった妻と出会ったのがこ
の路線バスである。こうして利用するのは久々であり、窓の外に見
える街の変化など、ある種の感慨を抱けるのだろうが、猫の視線か
ら見えるのは人の足と薄汚れた足元の景色だけである。

出会わなければしまらなかった。

だが、出会っていなければ私はどうしていたというのだろう。

私は女子学院前ひとつ手前の停留所でバスを下車して、学院へ向か
う。下手に乗降を同タイミングにすると勇希が連れているのだと疑
われかねない。単なるマナー違反ではあるが、あまり他人との余計

な接触を持つことは避けたい。息子の女装がバレるのもあまりよろしくはないだろう。だが、降りてすぐ私は後悔した。夏の焼けたアスファルトは肉球に厳しい。

「……………にゃあ」

猫の身体が悲鳴を上げる。

己の身体にまとわりつく毛皮を脱ぎ捨てたくなるような気分で、激しい照り返しの灼熱を歩いて行くと、バス停の日陰でアイス舐めている妻に瓜二つの息子が見える。感情の整理がまるでつかなかった。軽い殺意と、強い懐かしさ、相殺し合わない動揺で猫の小さな脳みそが溶けてしまいそうになる。

「……………あ」

勇希は私に気付くと食べかけのアイスを持ったまま私に駆け寄ってくる。

「……………食べる？」

しゃがみながら小声で言った。猫の肉体を得てから味覚は役に立たない状態だが、食べたい気持ちはあった。しかし、よりもよつてチョコレートアイスである。

「猫にチョコレートを食わせるな」

私も小声で答えた。

「いけない？」

「食べられない、下手をすると死ぬ」

「チョコレートで？」

「そうだ…………と、あとひとつ、なんで今日も下着が女物なんだ」

見たくはないのだが、猫の視点からは見えてしまう。

「だってスカートめくれて男物とか変じゃん」

「変なのはおまえだ！」

苛立ちから思わず叫んで、勇希がハッと周囲を見回す。人の気配がないのはわかっていた。

いかん、頭ごなしに言えばいいというものではない。

「いや、女物なのは百歩譲っていいとして、母さんのものを穿くの

は止せ」

用途的にも、いろんな意味で危ない。

「……わかった、帰りに買つてく」

勇希は頷く。

「買うのか……」

「こづかいはまだあるから」

言いたいのはそのうちのことじゃなかった。

小学生の男子が抵抗なく女物の下着を買う状況がおかしい。常識が大きくずれていくのを感じる。男用のブラジャーなどもある時代になにを言つてもはじまらないのかもしれないが。

私の先導で学院の敷地内に入る。

夏休みと言えど学校には生徒たちの活気があった。運動部が盛んな学校であるし、併設されている大学部の学生たちの出入りもある。人の出入りは多いし、普通に言えば見咎められる可能性は低い。問題があるとすれば、普通ではない生徒の存在だけだ。

「こんにちは」

「……」

すれ違う生徒に声をかけられ、勇希は、にっこりと微笑んで会釈する。声で違和感を持たれないようにという私の指示だ。声質自体は声変わり前ということもあって女子に対応できるのだが、まだ演技力が伴っていない。

私は花壇へ潜り込んだり、木を引っかいたり、猫らしく気まぐれに移動し、勇希はそんな私を追っているように見えないよう立ち止まったり、ベンチに座ったりしながら広い敷地の奥へと入っていく。警戒して警戒しすぎということはない。

私の目論見が当たったとして、問題はそこから先の立ち回り方なのだ。

複数の校舎に取り囲まれる高等部の中庭はそこだけが植物園のようになっている。校内の他の場所と違い、手入れがされていないのではないかというように生い茂る植物が人を寄せ付けない。蜂の羽

音、鳥の囀り、色とりどりの花々、夏の中庭は生命力に溢れていた。まったく変わらない、あの時から。私の猫的感觉器官である髭と眉が激しく反応する。

「もう喋っていいぞ勇希」

私は中庭に入って少年らしい表情の緩みを堪えることができなくなっている息子に呼びかけた。この場所には滅多に普通の生徒が入ってくることはない。

正確に言えば、入れないのだが。

「すっげー、なにここ。ジャングルみてー」

「魔界の穴だ」

私は緊張しながら中庭の中心へ足早に歩を進める。

「あな？ どこ？」

勇希は私の後を追いかけてながらキョロキョロと辺りを見回す。

「あれだ」

顎をしゃくりあげて、私はそれを見上げた。

「あれ？」

息子は見当違いな空を見上げる。

「樹だよ、大きな桜の樹があるだろう？」

「桜なんだ、あれ」

青々とした葉を茂らせる巨樹がそり立っている。かつて、その幹の内側に当たる空間に魔界の穴が開いていた。この中庭の植生が極端に激しいのも、樹齢百年に満たない桜の樹が古木のような佇まいを見せるのも、魔界から吹き出す魔力を含んだ風の所為である。

私も、直接見たのは二度目なのだが。

「勇希、ペンダントを出してみろ」

「え？ うん」

息子はシャツの胸元から母の形見、鍵の飾りがついたペンダントを取り出す。

母の形見として仏壇に仕舞っておいたものを持ってこさせていた。「光ってる……」

無色透明のクリスタル、だがその内側に小さな紫色の光が宿っていた。その光は私たちの目の前で徐々にその勢いを増し、一筋の光線となって桜の樹へ。

「やはり」

反応している。私は呟いた。予想通りだ。

光のあたった部分の幹が意志を持ったように動き、鍵穴が開かれる。

「勇希、それを差し込むんだ」

「……うん」

どこかぼんやりとした表情で息子は樹に近づいていく。

そして私の髭がそれを察知した。

「現れたか」

「待ちなさいっ！」

守護者だ。

ぐっしょりと汗をかいたTシャツにショートパンツ、運動着姿の少女がそこにいた。中庭に強く降り注ぐ日差しが、光沢のあるブロードのポニーテールに乱反射する。青い眼、日本人離れたハッキリとした目鼻立ち、厚ぼつたい唇、遠目にもわかるスタイルの良さ。なるほど、海外から優秀な人間を引っ張ってきたというのは聞いていたが、外見的にも優秀だった。

だが、遅い。

「勇希！」

駆け寄ってくる少女を視界の端に捉えながら、私は振り返って叫ぶ。

「……」

こくりと頷く息子の手には、力を取り戻し、輝きを定着させた鍵が握られている。

よくやった。

「猫がしゃべ……って、あなた、それは」

「……」

振り返って、勇希はにつこりと微笑んで会釈した。

「どういうことなの？　ここの守護者は……」

守護者の少女は動揺していた。無理からぬことだ。

これ以上の長居は無用だった。

「さあ、勇希、帰ろう、目的は達し……」

私がそう言いかけ見上げた時、息子は自分の胸に鍵の先端を押し込んでいた。

「おい！　待て、ここで」

「……はっ、はっ、はっ」

荒い息を吐きながら、そのまま勇希は鍵を突き立てるように押し込み、捻る。

開放された。

「……なっ！」

次の瞬間には少女の身体が宙に舞っていた。

勇希が立っていた場所にポトリとおさげのウィッグが落ち、少女が立っていた場所に拳を突き上げる息子がいる。その目は冷ややかな光を湛えていた。

「気持ちいい……」

そう呟く勇希の姿に私はぞっとした。

「いきなり攻撃してくるなんて、ふざけないでよ！」

「……は」

不完全ながらも防いでいたらしく、体勢を立て直し叫んだ少女に向かつて、息子は躊躇うことなく飛び上がった。空気が震え、中庭を取り囲む校舎の窓がガタガタと音を立てる。巻き上がるような風が一瞬に吹き抜け、空中で息子と少女が組み合っている。

「どういうつもり！　どこの守護者よ！」

「じゃま、するなよ！」

組み合った手を器用に動かして、勇希は身体を捻ると少女の腹を両足で蹴り上げる。

それを読んでいたのか少女は、パツと手を放してかわす。

「男の子？　なんで？」

「勇希、止せ、戦う意味はないっ！」

「……」

私の声に息子はちらりとこちらを見たが、すぐに視線を外した。

「なんでもいいわ、仕掛けてきたことを後悔させてあげる！」

二人はほとんど同時に着地する。

その一瞬の後には勇希が校舎の二階、壁面に叩きつけられていた少女が脚を振り上げていて、息子が脇腹を押さえていることから蹴られたらしいと推測はできるが、目では追い切れない。私は動けなかった。

丸く凹んだ壁から前のめりに生い茂った植物の影へ勇希が落ちる。

「その猫、逃げようとしたら殺すわ」

確かな殺気を込めた瞳で少女が私を睨んでいた。

「……っ」

無論、息子を放置して逃げるつもりなどなかったが、私の全身は恐怖に竦んだ。

「父さんを、ころすなよ」

植物を掻き分けて、勇希がよろよろと歩み出してくる。

「父さん？　この猫が？」

「……そうだ」

そう答えて、息子はスタンスを両足を踏ん張りながら少女を見据える。

まだやる気なのか。

「ふーん？　複雑な家庭の事情があるみたいね」

少女は私と勇希を交互に見たが、応戦する構えは崩していない。勝ち目などない。不意打ちであった初撃ですら防がれている。そもそも守護者とは戦うなときちんと説明はしていた。息子もそれには納得していたはずだ。力を手に入れて、小学生男子らしい好戦性が出たのかもしれないが、しかしこれまでの流れで息子自身にそれを補強するだけの爽快感はなかったはずだ。少なくとも単純に力を

振るってそれが通用する相手ではない。それがわからないほど勇希はアホの子ではないはずだ。

ならば、何故？

「そんな怖い顔したって無駄。あなたも死にたくなかったら止めなさい」

そう言いながら、まるで冥福でも祈るように目の前で十字を切る。黄金色に輝く光跡が中空に現れ、少女はそれを握りしめた。

守護者の剣だ。

「女に指図されたくねーっ！」

そう叫んで、少女の言葉を払いのけるように勇希は大きく腕を払った。

横一文字に紫色の光跡、見様見真似だろうか、それを握りしめる。

「女に……そうか」

私はようやく理解する。

さっきの「気持ちいい」という呟きも、唐突に開花したかに見える好戦性も、すべては女性に対する屈折した感情に起因するものか。確かにそれは計算外だった。この場所のことを考えれば守護者になっている人間が九割方女性であるとわかっていたのだから、もつと慎重に気を配るべきだった。気付くのが遅すぎた。

「うあああああっ！」

先に踏み出したのは息子の方だった。

もちろん剣の心得などないから、力任せに振りかぶってまっすぐに突っ込む。

「なんにもわかつちやいないわ、あなた」

少女はその場を動くこともなく剣の先でそれをいなして避けた。勢いそのままに勇希は反対側の校舎に激突した。

振り返って少女は腰を少し落とし、構えた。アンガルド、フェンシングの構えだ。

「死にたがりにつける薬は、ない」

そう言くと、深く息を吐いた。

本気だ。

本当に殺されるかどうかはわからない、だがどちらにしても、魔界の穴があるこの場において、守護者の判断はすべてに優先する。仕掛けた以上、殺される可能性はある。なんにしても息子は無事ではすまない。止めなければならなかった。

「動くな！」

踏み出しかけた私の肢は少女の声で硬直した。

「おおおおおっ！」

ほぼ同時に、植物を薙ぎ払いながら、勇希が飛び出してくる。

「ちっ！」

舌打ちをしながら少女は輝く剣を突き出した。

二つの光が交錯して弾ける。

あまりの眩しさに私の猫の目ですら一瞬眩んだ。

ぶらりと垂れ下がった息子の手から剣が零れ落ち、霧散した。中庭に敷かれたレンガに鮮血が飛び散っている。少女の剣が勇希の脇腹をかすめて止まっていた。制服が大きく裂け、そこが見る間に真っ赤に染まっていく。決着はついていた。

「甘いわ、あたしも」

悔しそうに少女は呟いた。

「……ほんとにね」

硬直していた私はその呟きにハッとする。

「は？」

電光石火の早業だった。

勇希が少女のＴシャツをまくり上げていた。俊敏な動きでブラジヤーのフロントホックも外され、ぷるんと重力に逆らう丸みを帯びた乳房がまるびでる。私は自分の目を疑った。すかさず息子が両手でその胸を鷲掴みにしてもみしだく。

「え？」

なにが起こったのか少女にも即座に判断できないようだった。

「ええ？」

「おっぱいがでかけりやいいと思ってんなよ！」

血を流しながらも、そんなことは気にもならない様子で勇希は笑った。

「……！」

彼女でなくともこんな状況で絶句しない方がおかしい。自分の胸と、それを握る息子の顔を交互に何度も見て、事態を飲み込んだように、見る見る少女の顔が真っ赤になっていく。気温に汗が相まってうっすらと湯気すら立っているようであった。

「ひひひひひ」

心底、嬉しそうに勇希は笑った。子供っぽい笑いだった。

見ているこつちも呆れるしかなかった。父親の前でそういうことするかね。

「こ、このおつ」

今度は手加減してないであろう少女が剣を振るったが、先程のような鋭さはもはやなく、息子はパツと胸から手を放してかわし、そのまま私とウィッグを拾った。

「やーい、おっぱいでつかい女ーっ」

そのまま過ぎる罵倒をして、勇希はベロを出した。

「……あなた、こんなことしていいと思ってるの？」

剥き出しになってしまった胸を片手で押さえながら少女は抗議する。

「ぶーす！」

もはや小学六年生としても幼稚すぎる捨て台詞を言うと、息子はそのまま中庭から逃げ出した。小脇に抱えられながら私は息子が無事であったことに安堵する。ともあれ勝てないということは理解してくれていたようだなによりではあった。

だが、美人の胸を揉んでブスとなんて、将来必ず後悔するとおじさんは思う。

「……くっそ、あの女、ほんとに刺すなんて、いってーよ」

勇希は校舎の壁を駆け上がり、大きくジャンプして学院の敷地内

から飛び出す。

「大人だったらそんなもんじゃ済まないぞ」

説教したいことは色々あったが、私はひとまずそう忠告するに留めた。

「どういう意味？」

「……いや、ま、いいんだが」

子供でもセクハラはセクハラです。

その言葉はいいものを見せてもらったので飲み込むことにした。

2 子供でもセクハラはセクハラです。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

3 私の息子がソフトなプレイに巻き込まれていました。

勇希は一気に家まで飛んで帰るつもりだったようだが、いくつかの建物に飛び移ったところで肉体が鍵を排出した。予想していたことだが子供の身体では守護者の力を維持できる時間に限界がある。体感ではおよそ三十分と言ったところだろうか。

コッソ、とコンクリートの上に落ちた鍵はそれでも静かに光を放っている。

「……………はあ、はあ」

着地したマンションの屋上で息子は膝をつき、脇腹を押さえている。

「痛くないか？」

「はあ、いつてーよ、ちょーいつてー……………さっきまでそーでもなかったのに」

息子は半泣きで言った。

守護者の鍵は魔力の源となる魔界の穴を使用者の体内に《転位》する。その上でクリスタルに刻まれた魔法情報で肉体を戦闘向きに《変異》させる。使用者の行動を制限しない程度に痛覚を弱めるのもその効果のひとつであった。

「戦うなどあれほど言ったのに、ほら傷口を見せてみる」

私は切られた脇腹を検分する。衝突の勢いのせいか多少派手に血は出ているが、表面が裂けた程度の傷であった。既に血も固まりはじめている。一応、医者には見せておきたいが。

「……………はあ、だって、ペンダント見てたら、なんかコーフンしてきた」

「興奮？」

魔力が人間の感情に影響を与えるというのは知っていたが、聞いたことのない事例だ。

「はあ……………でもなんで、これ、胸にさしても痛くなかったんだろ？」

勇希はペンダントを拾い上げ、シャツの中に入れた。

「そのクリスタルは魔力を伝導するとき、こちらの世界と魔界の境界域に存在するからだ」

そう説明してもわからないだろうが。

「……はあ？」

「勇希が使えば痛くないってことだ」

「そー……」

息子にはあえて説明していいことがある。

守護者の鍵が家にあった理由、そして勇希がそれを使える理由。

だが、それは知らなくてもいいことだ。妻さえ蘇るのなら過去の諍いなど子供には関係ないことであるべきで、私もこれを復讐のための戦いにするつもりはない。

「疲れたか？」

「うん……かなり」

勇希はコンクリの屋上に横になろうとしたが、熱かったのか、這いずるようにして屋上の出入り口のドア横にできた日陰へ移動する。南中間近の影は極めて小さかった。

「これも説明したことだが、肉体への負荷を考えると多用は禁物だ」
頬ずりしかねない勢いでコンクリにへばりつく息子の顔の前に私も腰を落ち着けた。

「一日一回？」

「それでも多いぐらいだが……待て、誰が来る」

私の耳がドアの向こう側の音を拾って勝手にそちらを向いた。

細く硬い足音、おそらくはヒールのある靴を履いている。守護者はそう簡単に持ち場を離れないし、あの少女の気配ならば髭が感じるだろうが。私は緊張する。

「女だ」

「え……やば」

勇希はあわててウィッグを頭に乗せた。すこしズレている。

「それより傷が不味い、事情を説明……」

屋上に隠れる場所は、この内側が階段の出入り口上にある給水タンクがあるだけだった。それもいまの息子の状態で梯子など登らせたくはないが、他に遮蔽物はない。

「……勇希、上に」

ガチャリ。

ドアのシリンダーが回って、私は開きかけた口を閉じた。傷も不味いが、猫が喋っているのも同程度かそれ以上に不味い。なるようになるしかないのか。

ぼさぼさ頭の女だった

「う、あつ」

ヒールのあるくたびれたサンダルで現れた女はそう呟いて目を細めて空を睨みつける。化粧つ気のない顔は完全に寝起きであり、相当に着込まれて首回りが伸びきったＴシャツに、ゆるゆるのスウェット、という組み合わせは男つ気もないことを示している。年齢は二十代後半から三十代前半、間違いなく独身だろう。

「あ、いた」

女はこちらを見てぼさぼさの髪の毛を掻き上げた。

私は身震いする。この手の女性は気まぐれに猫を拾って飼おうとする。エサをねだるには丁度いいのだが、一度ぼんやりしていて捕まらなかったこともある。油断できない。

「夢か寝惚けて見間違えたのかと思ったけど、うちの生徒だ」

うちの生徒？

いよいよ不味い、その口ぶりは教師だ。

「いや、いやいや、飛んできたってのは非常識だ、予知夢だった？
どう？」

「……」

脇腹を押さえ、脂汗をかきながらも息子は微笑もうとしている。律儀に私のアドバイスを守ろうとしてくれることは親として嬉しくもあるが、上手く誤魔化してくれないと大変なことになる。私は焦れる。怪我也不味い、女装も不味い、制服を着ているという状況

も不味い、飛んできたのを見られてるのも不味い、不味い不味い不味い。こういう時、猫でしかない自分の無力さは、限らない己への怒りへ転嫁する。

畜生！ 己の猫畜生たる身体が憎い。

「お腹が痛くて喋れない？」

「……」

笑顔のまま勇希は首を振った。が、声を出さないのでは一緒だ。

「見覚えのない顔なんだよな、こんな可愛い子忘れるかな……」

ぶつぶつ呟いていた女は、はたと気づいて息子の腕をつかんだ。

傷口を押さえたことで真つ赤な掌と、避けたシャツから覗く傷口は見えているだろう。言い逃れはできそうにない。

「血、だけど……あれ？ これ……なにがあつた？」

一気に目が覚めたようで、さつと屈んでシャツをめくり上げ女は真剣に尋ねた。

「……」

強い視線に射すくめられ、勇希の表情も強張る。

「なんとか言ったら？」

「だ、だいじょうぶ、です」

シャツをつかむ女の手を血のついていない方の手でやりわりと退け、消え入りそうな声で息子は答えると、よろよろと立ちあがった。最低限の演技はしようとしている。

私が小さく頷くと視線が合った。逃げるということだろう。ベストではないがベターな選択であるように私にも思えた。

「大丈夫って」

「しんぱい、いりません、から、っ」

痛みと疲労が祟ったのだろう、女の横を通り過ぎようとして勇希はよろめいた。

「ほら、大丈夫なんかじゃな……」

とっさに女がその上半身を受け止める。

「……い？ あれ？ やっぱり？」

「っ！」

自分を受け止めた女の腕から跳ねるように逃れた息子の姿を見て私も気付く。

触れられれば男だということがバレるのだ。

「君、もしかして」

「し、しつれい、しますっ」

そういつて小走りに逃げようとした息子だったが、それよりも早く女の手がウィッグのおさげを掴んでいた。ただ乗っていただけのカツラはふわりと頭から離れた。

「男の子だ」

「ち、ちが……」

ぶんぶんぶんと涙目で勇希は首を振った。そしてさらに振る。その涙が痛みからくるものなのか、バレたことによるものなのか私には区別できない。足が震えているのが見える。私が目撃した時と反応が違いすぎるような気がしたが、それは私が猫だったからなのだろうか？

ゴクリという生唾を飲み込む音が私の耳に、やけにはつきりと聞こえた。

なんだ？

私は女を見上げる。熱い場所のせいか、出てきた時より血色がよく見える。

「……わかった。もうなにも聞かないから、傷の手当だけさせて」

女は中腰で息子と視線を合わせ、優しい声色でそう言う。

「なにも？」

「そんな状態で街を歩いたら大変でしょう？」

「……うん」

「そう、それでいいから」

ポロリと目から涙を溢れさせて頷いた勇希の両肩に女は手を置いた。

なにかが不穏だった。

「その猫は、君の？」

「うん」

「じゃ、一緒においで」

そう言うのと、よろける息子の肩を抱いて屋上から出ていこうとする女を追って、私も建物の中に入る。外と比べると中は一気にひんやりとした空気が漂っていた。

胸騒ぎがする。

それがななに起因しているのか私にはわからなかった。息子の女装がバレたことは問題だがなにか大事なことを見落としている。それがなんなのか。

六階建てのマンション六階の八号室、女の部屋は角部屋にあった。部屋はある意味において予想通り片付いていなかった。人間の度合いだとそれほどでもないのかもしれないが、猫の鼻には十分に異臭が漂っている。主に腐敗しはじめた食材だろうか、ゴキブリの気配もある。私は自分が少し空腹を感じていることに気付いた。

いかん、人としての意識が弱まっている。

虫や鼠に本気で食欲を感じるという感覚は恐ろしい。狩猟の本能とも結びついていているらしくそれは時に極めて抗いがたい衝動としてやってきて、拒む私に耐えがたい飢えを引き起こす。人として越えたくない一線がそこにあった。残念ながら猫化して半年、一度以上は越えてしまった一線だが、しかし息子の目の前で父がそんなものを食っているなどと。

「それじゃ、服を脱いで」

「え、あの……ここで？」

「そう。まずお風呂で汚れを洗って、それから――」
息子たちのやりとりが聞こえる。

薄汚れた洗濯物が山積みになった脱衣場で女が勇希のシャツをめくりあげていた。恥ずかしそうにしている息子と、嬉々としている女の表情、もどかしげにスカートのホックに手をかけている。傷口を洗浄して消毒するには……私はハッとして気付いた。

鼠がいる！

空っぽの胃がよじれ、口の中いっぱい唾液が分泌される。

全身の感覚が張りつめ、一瞬にして研ぎ澄まされる。動物的集中力。

私はそろそろとゴミ袋が並ぶ廊下を進み、生活感がむき出しになっているリビングに踏み出した。髭にピリピリとくる甘美な衝動、肉体に刷り込まれた狩りの快楽、人間だった頃には味わったことのない本能が毛先まで行き渡り、それを探り出す。

一匹……。

迂闊なヤツだ。

積み上げられ崩れた雑誌の山、脱ぎ散らかされた服、干しっぱなしの洗濯物、割り箸が引つ掛かったままのカップ麺、散乱する書類、その気配は移動していく。

人家に住む鼠が巣に戻ろうとするルートを先読みして、私はその気配に爪を立てた。

「んみゃっ！」

「ぢっ！」

転がっていたクッションから綿が飛び出す。

僅かに残るフローリングの床に姿を現したそいつは丸々と肥えた大鼠であった。

「ぢいー」

ミミズのような尻尾をピンと立てて、鼠は丸々と太った身体をさらに大きくして威嚇する。

「……にゃあお」

そこからは乱戦であった。

小回りの聞く鼠と、障害物を弾き飛ばさねば室内を移動できない私、速度においては互角であった。だが、私はヤツの逃げ道を推測していた。人家において、脱出ルートをふさがれた鼠はまさに袋の鼠であり、この世に猫が鼠に敗北する道理はない。

ほどなく、私は部屋の隅に相手を追い込んだ。

あとは料理してやるだけだ。

「み、見逃しちゅあもらえやせんか！」

鼠は髭をピリピリと動かし動物共通語の周波数で訴えた。

動物には種族固有の言語の他に、共通語と呼ばれる異種族とのコミュニケーション手段がある。そんなことを知ったのはもちろん猫になってからだが、駆るものと駆られるものの間において、言語が通じることはあまり意味のないことであった。

弱肉強食の世界は極めてシビアである。

「見逃す理由がない」

鼠の味を想像しながら、私は冷酷に伝えた。

「わかっておりやす。あつしと鼠捕りは遭遇した時点で食うか食われるか、そいちゅが猫と鼠の理だつちゅーことはわかっておりやす」
「ならば私の糧となれ」

私は四肢のばねを溜め、トドメの一撃を繰り出そうとする。

「しかし、鼠捕りに捕らえられた鼠があっしだけでないとしたらどうしやす？」

「なに？」

「鼠捕りが連れてきた鼠、お連れさんの身に危険がせまってやす」

「……勇希」

私はハッとした。

シャワーの音が急に耳に大きく響く。

「お気付きになったようでやすね、この部屋の主、そいちゅが本当の鼠捕りあのアマは熟さぬ果実ならば男でも女でも食つちゅまうつちゅー極悪非道雑食無頼の徒。食うか食われるか、人の世も空しさしかないのです」

なんとということだ。

私が本能にかまけて鼠を食らおうとしている間に、息子が食われようとしている。

『なんていうか、クラスの女子とか、女の先生とか、中学生とか高校生とか、父さんの大学にいる女の人とか、街で出会う人とか、み

んな、おれを見ると目の色が変わるんだよ』

勇希が言った言葉が脳裏を過ぎる。

胸騒ぎの正体。

非常事態であった。この場合、あの女が教師であることはなんの安全性の担保にもならないことは世事に疎い私でもわかることだ。鼠を追いかけている間に息子の純潔がわやくちやにされてしまったなどということになれば妻に合わせる顔がない。

慌てて浴室へ駆け戻ると、開け放たれたままの扉から湯気が立ち昇っている。

「いたいたいいたいたい、やめて、やめて、おばさん！」

全裸にされ、浴室の床に転がっている勇希は身を擦って言った。

「おばさん？ おねえさまと言いなさい！」

脇腹めがけて熱いシャワーを当てる女も下着姿だった。

「お、おば、おねえさま、やめて、やめて、いたい、はずかしいよ！」

「恥ずかしい？ 君は不思議なことを言う。自分では女装していた癖に、裸がなに？ さあ、ほら、傷口を洗う間に答えなさい！ どうしてうちの学校の制服を着ていたの？ どこから持ち出したの？ それを着てどうしたの？ 答えなさい！」

「学院に、行っただんです、中に入りました！」

「入っただけじゃないでしょう？ なにをするつもりだったの？ なにをしたの？ 君が穿いていた下着はもしかして盗んだもの？ どのような？ 答えなさい！」

「パンツは、母さんの……」

「お母さん？ 君、それはいけない。それはいけない！ 倫理に悖る！」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「謝っても許さない、君の穢れを洗い流さなければ！」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「ほらほら、傷口に黴菌が！」

私の息子がソフトなプレイに巻き込まれていました。

あまりの状況に私は一瞬立ち尽くしたが助けなければと周囲を見回す。

「あつしの申し上げた通りでやしよう？ ああして洗って食っちゃうんでやす」

こいつだ。

バカ正直にも逃げていなかった鼠を私は無言で洗面所脇の洗濯機に叩きつけた。あまりに理不尽な不意打ちだったからだろう、鼠は避けることもできず、バンとぶち当たってキュウと伸びた。助言に免じて命だけは助けてやろう。

「おね、おねえさま、そこはやめて！」

「ほらほら、そんなことだから男の子にも女の子にもなれやしない！」

これ以上は不味い。

私は鼠の首の皮を啜えて女の足下へ飛び込む。

「と、父さ……」

「ね？ ……ねずみ？」

女の顔が恐怖に歪んだ。大概の女性はそうだろう。いける。

「なあ」

猫の鳴き声と人の呼びかけ、その中間的な発音で私は女の足めがけて鼠をぶつける。

「ちょ……つと、あつ」

それをかわそうと足を持ち上げたところにすかさず私は転がっていた石鹼を滑らせた。下ろした足がそれを踏ん付け、女はあられもない体勢で仰向けに浴槽へひっくり返った。熱いシャワーがばしやばしやと壁と天井に反射して降り注ぐ。

「勇希、逃げるぞ！ 外へ出て、なにかで腹の傷口を塞げ、できれば消毒もしろ、それからこの女の服を適当に着ろ！ ペンダントを落とすなよ」

「え？ う、うん」

首にぶら下がった鍵を握りしめ、転がるように飛び出した息子を見送って、私は女が転がる浴槽に飛び入る。女は仰向けに転がったまま痙攣している。ぺちぺちと肉球で顔を叩くと反応はある。それほど心配はいらないだろうが、打ち所が悪いと困るかも知れない。出る前に119番でもしておくべきだろうか。出っ放しのお湯もよろしくないか。

そこまで心配してやる義理もないことではあるが。

カランは猫の手でもどうにかなるタイプであつたのでお湯だけは止めると、私は浴槽の縁に立ち、しばし思案する。勇希の顔は覚えられてしまっただろうが、再び出会う確率は低い。ペンダントを目標しながらも気付かなかつたことから言って関係者でもないだろう。「だ、だんな、酷えでやすよ」

お湯を浴びて目覚めたのだろう。鼠もこちらもピクピクと身体を震わせて立ち上がろうとしていた。まったくしぶとい生き物である。だからこそ美味しいのだろうか。

「命があつただけ幸運だろう？」

「……この恨みは、忘ねえでやすよ」

怒りに濁った瞳をこちらに向け、鼠はさつと逃げていった。

「鼠風情が」

この半年ですら食べた鼠の数など覚えていない。

「う、う……？」

女が薄目を開けた。

無事ならばいいだろう。仮に女が被害を訴えたとしても息子が不利になることもあるまい。鼠の言葉のすべてを信じる理由はないが、叩いて埃が出るようならなおのことだ。

「父さん、準備できたよ」

ウィッグを被った勇希は白いブラウスにスーツスカートの装いで戻ってきた。女教師っぽい雰囲気になっている。この場面なのだからあえて女装してこなくても良かったのだが、時間もないのでなに

も言つまい。

「腹の傷は」

「包帯とかどこにあるかわかんないからタオル巻いてる」

息子は言いながらブラウスを捲り上げる。

「その袋は？」

私は息子が片手にぶら下げているファストファッション店の袋を見た。

「母さんの制服が入ってる」

「そうか」

確かにそれは捨ててはいけない。

私たちは頷きあうと、ゴミの山をすり抜けて部屋を出る。

もちろん勇希は痛みも疲労も抜けていない。だが、足元がおぼつかないながら、それでもこの場所から一刻も早く離れたいと言う気持ちのようで、顔を歪めても足を止めることはしなかった。何度もうしろを振り返り、人通りの少ない裏通りを進んで、マンションが街並みの影に隠れて見えなくなるところまで来ると、緊張の糸が切れたのか、電信柱に手をつけて地面に崩れ、荒い息を吐く。

「あのおばさん、なにも聞かないって言ったのに……」

「は？」

「女はいつもそうだ、すぐウソつく」

あのシチュエーションを理解していなかったのだろうか。
純真というかアホの子というか。

「こういうこと、初めてつてわけではないのだろう？」

言葉を選びながら私は尋ねた。

「うん……」

「ならば、責任は勇希にもある、そう簡単に人を信じてはいけない。モテ過ぎるという自覚があるのなら尚更だ。自分の身は自分で守らなければ……」

「だって！ 父さんが横にいたから……その、だいじょうぶだと思つて……」

徐々に声を小さくしながらも勇希は反論した。

「う……む」

私も口ごもった。鼠を追いかけての危機だ、息子だけを攻め立てられはしない。

だが、父親として引き締めるべきところは引き締めなければなるまい。

「勇希、そうやってすぐに人に頼ってはいけない。私は確かに父で、もちろん勇希を守るために行動するが、見ての通り猫だ、人ではない。出来ることにも限界がある。守護者の力を手に入れたからには、自分の身は自分で守る覚悟が肝要だ」

己の無力を棚に上げた我田引水な論法であつたが、ここで父の威厳を保たなければ。

「それに勇希は女性にそういう目に合うことを嫌がつているようだが、さっきの学院でのことを思い出せ、あの金髪の守護者に対してやったことはどうだ？ 自分にやられて嫌なことを人にやるのは一層よくない。わかるだろう。これはある意味因果応報の出来事だったのだ。あの場はあれで助かったとは言え、ああいうことは二度としてはいけない。わかるか？」

喋りながらふと気付くと目の前に息子はいなかった。

「勇希？」

私は周囲を見回す。

息子はすぐ目の前の店のショウウィンドウを覗き込んでいた。

私の視線に気付いたのか振り返ると、笑顔でコクコクと頷き、店の中に入っていく。

「ああ、帰りに買うつて言つてたな……つて」
ランジェリーショップだった。

男子として躊躇なくそういう店に入るのがどうかとか、さっきまでへたばっていただろとか、そういう問題はこの際どうでも良かった。言いたいことはひとつだけだ。

「説教を聴け、よ」

父の威厳などランジェリー一枚の重みもないのかもしれない。
私はアスファルトにぐったりとのびた。

3 私の息子がソフトなプレイに巻き込まれていました。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

4 私の息子に舌が入っています。

これからのことを考えなければならない。

いくつか想定外の事態は起こったものの、準備の第一段階、勇希に守護者の力を持たせることには成功した。危険な領域に息子を巻き込むことについて良心の呵責がないではないが、それが妻の資質を受け継いでいるものである以上、いずれは通る道であると理解すべきだろう。私が私の目的を達したときには世の中が変わってしまうのだ。

なにより勇希が魔法を得たことで、私はより動きやすくなった。少なくとも魔法を使えない者に対しては圧倒的優位に立つことになる。その点ではむしろ息子は安全になったとさえ言えるだろう。猫の身体ではどこまでやれるか不確定だった要素もおよそクリアされ、奪われた研究を取り戻すこともそう難しくはなくなる、はずだ。

亮平が単独で私を裏切ったのであれば。

問題はあの男の裏切りに別の要因があった場合だ。

研究成果を独占したくなって私を陥れた、と言う推論にそれほど違和感はない。私たちの魔法研究は極秘裏に進められていたことも間違いないはずだ。魔法はもともと世界の一部の人間によって独占的に管理されてきたものであり、それが世界の大きな秩序であったから、もし研究の存在が外部に漏れたとすれば、亮平の裏切りを待つまでもなく、私たちは闇から闇へ葬られていたはずだ。とすれば、ありうる要因は外部ではなく、内部。

極秘の研究と言っても予算はある。亮平のバックに私たちに資金を出した人物がいるとすれば、話は非常にキナ臭くややこしいことになってくる。これを猫の身体で前もって調べるのは容易ではない。なにせ相手は私が猫になっっていることを知っている可能性がある。この場合、息子もかなりの危険を抱え込むことになるだろう。それは断じて避けなければならない。

まさかあの人が私を裏切るとは思えないのだが。

バスを降りて自宅へ向かう道を歩きながら、私はこの半年間絶えず繰り返してきた自問自答から抜け出せなくなっていた。もし、私に対して行なわれたことが、親友の単なる裏切りで済まないのだとしたら、という可能性の検証。それは、ただ最悪を想定する研究者としての基本的な思考パターンに過ぎないのだが、心許ない猫の身体になってしまった己には妙なりアリティが感じられて堪えるのである。

「……んにやつ」

そんな考えごとをしていたせいで、立ち止まった息子の足に鼻をぶつけた。

「どうし……た？」

見上げた私は、勇希の目が一点を見つめて動かないことに気付く。自宅の玄関前に止められた一台の自転車、後輪の泥除けに「如月舞」と書かれている。どこかで見覚えがあるなと思い、それが今朝家を出た直後に見た息子曰く「ストーカー」のものであることを思い出すのにさほど時間はかからなかった。

家が上がっているのか？

「バアちゃん、また……？」

勇希は呟いてしゃがみこむと脱いだ制服を入れた袋に手をつ込んでケータイを取り出す。メールをチェックしているようだった。本日付の未読が溜まっていて「如月 舞」の名前がずらずらと並んでいる。時間は朝から……五分間隔？

「……すごいな」

そう言うしかなかった。

「……」

それには答えず、息子はそのメールを内容も読まずにすべて削除する。

「外面良くって、バアちゃんに取り入って、勝手に家にあがんだよ、約束してたーとか」

「なるほど」

時刻は十二時を回ろうとしている。仕事を一端抜けて、孫の昼食を作りに戻ってきた母が認めれば確かに家には上げられる。だが、三時間近く待っていたというのだろうか。

「しかし、メールアドレスは？」

普通に考えればそれを教えた時点では友好的関係であつたのではないだろうか。

「盗まれたんだ」

勇希はうんざりした表情で吐き捨てた

「学校で、体育の授業中に。見学とか言ってそういうことする女なんだよ」

「そうか……」

女性不信が鬱積している。

「あー、めんどくせー」

そう言うつと勇希は体勢を低くして、家の周囲を回ってリビングの窓に向かう。どうやらその女子が家のどの部屋にいるのかを確認しているようだった。確かに、女装していることがバレないように帰宅する必要があるのだろう。

「バアちゃんと話してた。父さん、先行って、二階のベランダで待っててくれる？」

「ああ、わかった」

勇希は玄関からこつそりと入ることに決めたようだ。

リビングに母とその少女がいるのなら、玄関すぐの階段を上って、自室へ向かうことが可能だろう。これでは息子も自分の家に入るのにまるきり泥棒のような振る舞いだ、こればかりは致し方ない。私は頷いて昨晚入ったのと同じルートへ向かう。

ベランダに到着してしばらくして、窓が開いた。

「昼ごはんはこれで、我慢して」

バス停前のコンビニで買ったネコ缶を開けて床に置くと勇希は言った。

「悪いな」

我慢などんでもない、文化的な猫生活である。味覚的にもうまうまだ。

目の前で勇希は素早く着替える。

それから、本棚から一冊の辞典を取り出し、そこから一本の古びた鍵を取り出すと、音を立てないようにゆっくりとクローゼットを開けた。買ってきたものと脱いだもの、そしてウィッグをまとめてクローゼットの中の鍵つきの大きな宝箱に放り込む。かつて、息子が幼かったころにちよつと洒落たオモチャ箱として買ってやったものが、こうして禁断の趣味の秘密保持に役立っているというのは親としては複雑な心境である。

「腹の傷は大丈夫か？」

まぐる味を咀嚼しながら私は小声で言った。

「……もう血は止まったみたいだ」

血が固まっていて、巻いていたタオルをはがすときに少し顔を歪めた息子だったが、そこに滲んだ血はそれほど多くなかった。そのタオルも箱に放り込んで、中にある化粧落としてのシートでごしごしと顔を拭く。女装とは実に大変なことだ。

「ふきのこしないな、よし」

勉強机の引き出しから鏡を取り出し、自分の顔を確認している。

そしてすべてを箱に詰め込んで、鍵をかけて元通りにする。

これで母がいない間に洗濯・乾燥を行い、服のシワには自らアイロンをかけ、と面倒な手順を厭わず自己管理で女装をつづけてきたと言う息子の努力には頭が下がるが、その情熱をどこか別のところに向けるべきだろうとも思う。とりあえずは褒めるべきだろうが。

一連の手順は十分足らずで行なわれた。

「…………… たっだいまー、バアちゃん、腹へったー！」

静かに玄関まで戻り、勇希が帰宅をやり直す声が聞こえた。

私はネコ缶を隅々まで舐めると、毛繕いもそこそこにして床に丸まった。

これからのことを考えるのは後回しでいい。今日の目的は達した。
猫は寝子。これは生態なのだから。

だが、一時間もしない内に、私の安眠は阻害された。

「——だから、うつぜーよ、あっちーよ、帰れよ」

「——ひどい、舞、^{まい}ずーとまっていたのに！ メール何度もしたのに！」

バタバタと階段を上がってくる足音は二つ、

私はそれとなく部屋の隅に移動する。

「それがうつぜーって」

「そうじゃないと夏休みに会えないんだもん！」

「あいたくねーから！」

部屋の扉が開かれ、息子が空ろな表情で現れ、まわりついている少女を振りほどいて自分だけ椅子に座る。邪険に扱われているのがわからないわけがないと思うのだが、少女はそれでもひるまずひとつの椅子と一緒に腰掛けようとしていた。

彼女が勇希の言う「ストーカー」なのだろう。如月舞。

通りすがりで記憶に残るようなパーツはないが、クリっとした目をしていて、賢そうな顔立ちをしている。気の強そうな柴犬って感じだろうか、年を取ってくると子供の顔の見分けが曖昧になってくる気がするのだが一般的に可愛い子であるように思える。

「勇希くんのイジワル」

舞は息子の拒絶的態度はまったく気にならないようで、どんどん身体を密着させていく。

「イジワルで言ってるねーよ、ホンネだ！」

「うっん、舞、わかるから」

ぴったりと身体を寄せると、思い切ったかのように勇希の身体を跨ぎ、正面から向かい合う体勢になる。私の脳裏を不適切な単語が駆け抜けたが、要するに馬乗りというやつだ。近頃の小学生はなんと大胆なのだろう。

おじさんが子供の頃は手を繋ぐぐらいでいっぱいでした
が。

と、それも見栄っ張りな発言で、私の小学生時代、そして中学生時代、さらには高校生時代まで進んでもそんな出来事はありませんでした。ごめんなさい。この二十年の間になにかが起こってしまったのか、それとも私の息子が異常なのか。ごめんなさい。

死にたくなってきた。

冷静に言えば大学の一時期、結婚後の一年と少し、私の人生に華があったのはたったそれだけの期間しかない。妻がいてくれた期間それだけ、妻が死んで十年余り、もちろん一途に想ってきた。そこに嘘偽りは一片もない。しかし、この親にして勇希の人生の華やさはどうなんだ。私をはじめておっぱいを揉んだのはいつ？ 大学三年のとき。それをこの息子は十二歳で成し遂げている。これは敗北感？ 泣いているのは私？

いかん、完全に僻み根性と独り身の寂しさが出てしまっている。

「わかってねーよ……」

私は勇希の呟きで目を覚ました。

そうだ。息子は女装した自分が好きというナルシストで、好きでもない女の子に迫られまくって辟易しているって羨ましい人生だなこの野郎、ではない。父親が息子を妬んでどうするというのは。落ち着け、私には妻がいる、妻がいる、妻がいる。妻が。

その妻がいらないからこんな目に合っているのだ、畜生め！

笑子！
えみこ

「わかるよ、すぐに」

「な……んぐ」

舞の唇が開きかけた勇希の口に覆いかぶさった。

私の息子に舌が入っています。

一瞬、見開かれた勇希の目が私を捉えた。涙が溜まっている。好きでもない相手にキスされればそうなるかもしれない。だが、私にもわかる、そうしている内に好きになることもある。それは悪いこ

とではない。人の心は弱く、脆い。荒療治かも知れないが、あるいは舞が、息子を心の袋小路から引き上げてくれるのかもしれない。

大人になれ、勇希。

私は、あるいは子供のままだったのかもしれない。死んだ人間を蘇らせようとして、親友に裏切られ、恩人を疑って、息子を妬んで、大人になるどころか猫になっている。

『てもな、お前が迂闊なんだぜ？ 周りが見えてなかった』

人として聞いた最後の言葉。

『この研究がこの世の中を根底から変えちまうってことがわかっていながら、注意を怠った』

記憶が耳鳴りのように頭の中を反響する。

これは私の弱い心だ。

「やめるよ！」

勇希は舞を突き飛ばした。

「あ、つと」

だが舞はそれを予想していたかのようにかわして自分で飛び降りる。結果的にバランスを失って倒れた椅子ごと息子が床に崩れ落ちた。カシャカシャカシャと椅子のキャスターが空転する音だけが室内に響く。

「お昼の冷やし中華の味がしたね？」

舞は口元に垂れた唾液を舐めとりながら微笑む。とても子供に見えない。

「もう、やめてくれよ、こんなの……」

倒れた椅子の上で、ぐったりと動けずにいるらしい息子は俯いて呟いた。

「やめてもいいけど、そしたら勇希くん、また元通りだよ」

「それは、もともと如月きづきが……」

「舞」

空気が凍りつくような鋭く冷たい声だった。

俯いたままの勇希に近寄ると、少女はその顎に手をかけ顔を上げ

させる。

「舞のことは舞って呼んで、って言ったよ、ねっ」

そう言いながら脚を振り上げる。息子の顔色が変わるのがわかった。

「っあぐあぁっ」

突き刺さった爪先は、完璧に傷口を捉えていた。

「いつもより痛がるね？」

床を転がって荒い呼吸を吐く勇希を見下ろしながら、舞はとんでもないことを言った。

いつもより？

啞然とする私を余所に、少女は息子の上着をめくり上げる。男子もののTシャツの裏側に新しい血がついていた。閉じかけていただけだから簡単に開いてしまうのだ。

「どうしたの？ この傷」

少し驚きながら、しかしむしろ嬉しそうに舞は尋ねる。

「な、なんでもねーよ……」

暑さのせいだけでない汗をかき、明らかになんでもなくはない表情で勇希は答えた。

「なんでもない？ なら、こんな風に」

こともあるうに舞は傷口の周りの腹を圧迫する。

「……う」

「痛い？ でもね？ こうやって勇希くんを痛くする舞も痛いんだよ？ 痛がつてる勇希くんを見るたびに、思い出すんだ。舞のおでこを、ね？ これが二人のキズナだもん」

歯を食いしばっている息子の顔を覗き込みながら、舞は前髪を持ち上げて、縫合されたと思いき額の傷を見せつけた。それを見て、勇希の表情が苦痛に歪む。

「そんなの、如月が勝手につけ……」

「だから、舞」

少女はそう言いながら耳元にあったヘアピンを外し、その先端を

傷口に突き刺した。

「ぐ……………がああああっ」

息子はブリッジするようにのけぞった。

「勇希くんだって、舞と付き合ってることになって、うつつしい女たちから解放されて嬉しかったはずでしょ？ それなのに、約束無視して家にいなかったり、メールの返事もくれなかったり、何時間も待たせたり、舞、傷ついちゃう……………」

傷口をえぐりながら、しかし少女はうつとりとした表情でシャツをさらにめくりあげ、息子の身体に頬ずりをする。猫の世界でそれはマーキングを意味する行為だが、もちろんそんなことは関係ないだろう。

止めなければ。己の弱い心に負けている場合ではない。

私は焦った。だが、これは守護者の場合とも、偶然出会った女教師の場合とも違う。相手は息子のクラスメイトであり、今後也會う可能性の高い人物なのだ。そして、すでに入り組んだ人間関係を形成している。状況を把握せずに下手な手出しをすることは事態の悪化を招きかねない。その上に私は猫である。私の存在がなんらかの形で広まることも避けなければならない。それはさらに息子の安全にもかかる問題になる。胸を揉んで逃げるとか、鼠を投げつけて逃げるとか、この場を切り抜けるといったことだけでは問題解決にならない。

だが、どうすれば。

「だから、勇希くんが感じてる痛みは、舞の痛みだよ？」

舞は傷口を押さえるのを止め、滲みだした血を舐めとっていく。

「……………はっ、はっ、はっ」

息子はのけぞったまま天井を見上げ、小刻みに呼吸する。

どうすればいいのかわからなかったが、止めるしかない。私がそう決断した瞬間、

「これ、きれいなペンダントね？ 舞、これ欲しいな」

少女の手が息子の素肌を滑った鍵を拾い上げ、

「それにさわんな！」

直後、勇希の平手が舞の頬を打っていた。

「……今度は、本当に叩いてくれたね？」

だが、少女はショックを受けた風でもなく、嬉しそうに笑った。

「帰れよ！」

そんな舞から逃れるように立ち上がって、壁に全身を預けて勇希は部屋の入り口を指し絶叫した。少女に突進しようとしていた私の肢も止まる。

「いいよ。今日は、帰ってあげる」

「……」

「メール、するから」

「いらねーよ……」

パタパタと少女が部屋を出ていく音が遠のいて、息子はずるずると床に座り込んだ。ガチャン、と玄関が閉じる音の後、自転車のベルがアピールするように何度も鳴らされる。

しばらく気配は去らなかった。外から確かにこちらを見ている圧迫感を私は感じていたし、おそらくそれは勇希も一緒だった。静まり返った部屋の中で、息子の顎から垂れた汗がフローリングに落ちる。室温の上昇は留まるところをしないようだった。

ケータイが鳴った。

緩慢な動作で息子はそれを見て、叩きつけようとするように振りかぶったが、すぐに肩の力を抜いた。ゴト、と軽くはない音を立てて床に転がされる。

「どうして、ずっと見てたんだよ」

傷口を押さえて、刺さっていたヘアピンを抜くと息子は私を私に投げつけた。手元が狂ったようでその金属片は細かい血を飛び散らせて見当違いの床を跳ねた。

「勇希……それは」

「父さんは、父さんのの？」

そう言って私を見た勇希の目に映るのは不格好な黒猫一匹だった。

「……」

私はなにも言えなかった。

勇希もそれ以上なにも言わなかった。

父親が父親であるということはということなのだろうか。

人であった頃、私は研究にかまけていたが、勇希のことをおろそかにしていたつもりはなかった。授業参観や運動会や年中行事、保護者の集まりにも積極的に参加していた。知るべきことは知ろうとしていたつもりだ。たまの休日は一緒に過ごしていた。

けれども、今となつてはしてやれたことよりしてやれなかったことの方が気がかりになっている。私は息子のなにを知っているのだろう。好きなもの？ 嫌いなもの？ 食べ物好みぐらいは言えるだろうか。でもそれは相当幼いころのものだ。子供は成長する。

現に、息子の学校での人間関係は把握していなかった。母に様子の変化があれば伝えてくれとは頼んでいたし、ある程度のことは知っているつもりだったが、不十分であった。そしてあの女装のこともある。あれも昨日今日のことではないだろう。

『母さんと向こうで楽しく暮らしなよ。おれ、ちゃんとやってくから』

猫として遭遇した最初の晩、勇希は言った。私の死を諦めとともに受け入れていた。

そのこの意味をよく考えるべきだった。

勇希の中に、私は不在だったのではないか？

『だって！ 父さんが横にいたから……その、だいじょうぶだと思つて……』

あるいはチャンスを与えていたのかもしれない。

『父さんは、父さんなの？』

十二年前、勇希が生まれた日のことは覚えている。

私はまだ二十五で、ただのポスドクだった。笑子の両親には結婚を反対されていたが、子供ができたので仕方なく許すというような

形ではじまってしまった新婚生活の中、なんとか周囲にこの結婚を認めさせようと必死だった。だから予定日にも関わらず海外出張に出ていて、予定通りに生まれた息子の顔をビデオ電話で見たのだ。

『ほらここ、おでこの形があなたによく似てる、あと耳の形も』
私に似なくて良かった。

確かにそう思ったのだ。後にその話をして笑子に怒られたのだが、私は私という遺伝子が息子に伝わることを恐れていたような気がする。チビで髪が薄くて、目も悪くて、顔だちも残念であることと、私の孤独な人生が必ずしも関係性をもたないと理解していても、可能性の芽はないほうが良かった。妻の分身が生まれた。そういう喜びだった。

伝わっていたのだ。

笑子の死後、勇希は幼い頃からおそらく気付いていた。自分に向けられる父親の視線が、自分の背後にある母親に向けられていることに。最初は小さな違和感だったのかもしれない。だがそれは蓄積して、大きな疑念として息子の中に根を張っている。

父親にならなければ。

ベッドに眠る勇希の顔を見ながら私は己の弱さに後悔していた。なにもかもが迂闊だったのだ。

だが、私はまだ己の本当の迂闊さに気付いていなかった。

4 私の息子に舌が入っています。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

5 私の息子がプロポーズしていました。

「傷が治ってからでも構わないのだが」

「え？　なんで？　父さんだって早く人間になりたくねーの？」

ボブヘアーのウィッグをセットしながら、勇希は鏡越しに私を見た。

傷口の処置も自分で器用にこなし、今朝方ガーゼを取り換えたときも、あれだけのことがありながら化膿すらしていなかったので傷そのものに不安はなかったが、それでも。

「いや、私のことより、勇希の安全をだな……」

「やっべ、おれ可愛い」

手櫛で全体をふんわりとさせながら、勇希は表情を作る。

昨日の今日だったが、息子は表面的にはなにもなかったように振る舞っている。そのことが私には余計に辛かった。正面切って親子喧嘩ができるほどの関係を築けていないことが明るみに出たに等しい。責められた方が楽だ、というのが己に都合の良い考えなのだと痛感させられる。

「それに、今日は女装せずとも」

「昨日ウィッグが外れたのは重いヤツだったからだと思うんだー？」

「そうではなく」

「今日は父さんの大学で野末のおじさんに会うかもしれないんだろ？　魔法使うときに一見しておれだとわからない方がいって言ったのは父さんだ」

リップクリームで唇に光沢を出しながら息子は私の言葉を遮ろうとする。

棘がある。

「……今日は、鍵を使うことはない」

私にできることは、これからでもきちんと父親として振る舞うことだけだった。

「なんで？」

「使わなければいけない場面になりそうならば、そうなる以前に逃げていくからだ」

昨日のように出たとこ勝負では動かない。そう決めていた。

「危ない気配があれば、私が勇希に指示する、逃げてほしい」

「……………」

前髪を整えながら息子はじつと鏡に映る私の顔を見つめていた。

静謐な瞳だった。化粧を整えると五歳は大人びて見えるその表情をうまく読み取ることができない。

それが今の私と勇希との距離だ。

「わかった。そうする」

目を瞑って頷いた。

「そうか」

「でも、おれ、男のカッコで外、出歩かないよ？」

そう言うのと、空色のワンピースを翻してターンした。

「……それは、好きにしてくれ」

そちらについては昨日の件で問題の根深さを感じている。一朝一夕にどうにかなりそうではない。我慢させるよりストレスがないのなら、当面は口を出さないことにする。

「父さんがあんまり言うから、下にホットパンツも」

「見せなくていい」

スカートをめくり上げようとする息子を制して、私は床に置かれたリユックサックに潜り込む。今日は電車に乗らなければならない暑いのも息苦しいのも身体には堪えるが、こうする他ない。大学に行ってから野末に目撃されるのも問題だ。

「じゃ、行こ！ レッツ魔法の装置！」

つばの広いストローハットを被ると勇希は少しの隙間を残してリユックを閉じた。

しかし、親バカのつもりはないが、昨日といい今日といい、まったく見た目が美少女そのものである。自分で自分に惚れるというアホ

の子つぷりは別の問題として、昨日は女子高が目的地だからそれほど心配しなかったが男ばかりの工学部キャンパスとなると別の心配がある。

私の学生時代を思い返してもシャイな学生が多いのは確かだが。

「よいしょと」

持ち上げられると袋の中は激しく揺れた。

私の持ち物であったリュックには、勇希に頼んで開けてもらった覗き穴があり、外が見られるのだが、歩行中は揺れが激しすぎて酔いそうなので、私は力を抜いて横になる。

一時間半ほど電車で揺られ、駅から十数分歩くと私の勤めていた大学がある。

勤めていた。

法律上は完全に死亡してしまったのだから、そうとしか表現のしようがない。元に戻っても復職しようという気はないが、学生時代から二十年近く通った場所だ、感慨はある。冷静に考えると夫婦揃って社会的には死んでいるという状況をどうするのかという問題もあったが、それは後回しでいいだろう。

生前、という表現もややこしいが、私が勤めていた頃、魔法を研究していないオープンな方の研究室には何度も来ていた勇希はまったく迷うことなく広大なキャンパスを歩いていく。後方しか見ることのできないリュック内からの視界でもそれはよくわかった。

私は集中し、猫としての五感を研ぎ澄ませる。

「えーっと、この建物の……」

外で勇希が紙を広げる音がした。

息子にはすでに秘密の私たちの研究室への道筋は地図として渡してある。まず突破しなければいけないのは暗証番号とID認証である。番号はもちろん知っているし、IDカードは家に保管してあった私の予備を持ってきてはいるが、普通に考えれば使えはしないだろう。その場合は別の侵入方法ということになる。だが、私のもの

を試す意味はある。

亮平が私を警戒しているかどうか、ということが計れる。

《転位》の魔法実験は何度も行っただけだが、人間を別の生き物にしたときに意識がどうなるかということについては未検証だった。それでも猫と犬を入れ替えて猫が犬になるぐらいのことは試しているから、人間もそうなるという推論は立つが、猫の身体にいれられた私が、ここに戻ってくることで推測の内に入っているかどうかということだ。

あの認証システムを入れたのは私だ。本音を言えば指紋認証か網膜認証でもっと高度なセキュリティにしたかったのだが、表向きの研究内容との兼ね合いもあり予算を取るのが難しいのと、あまり目立つと余計な疑いを持たれかねないということもあり、最低限のものになった。

私の登録が消されていれば警戒されている、と判断できる。

それさえわかれば十分と言えた。

警戒されているとなれば、手の打ち方もある。魔法の使いどころも明確になるだろう。息子の安全のためにも危険は極力排除しなければならぬ。

人の気配はまばらだった。廊下ですれ違った学生の数人はすこしビクビクした顔をして息子を振り返る者もいた。鮮やかな色彩のライトブルーは、少なくとも普段構内で見かける色ではない。派手すぎるのではないかと私は指摘したのだが「ハデな服の色はおぼえても顔はおぼえねーから」と勇希はケロリと言った。確かにそうかもしれない。

一般的に言えばおそらく学生の誰かがカノジョを入れたのだというぐらいに思われるだろう。そういうことは珍しくもない。そういう目立つことをする学生の評定を下げる僻み根性の強い教授もいるので、場合によっては「君、誰をお探しかね？」などといやらしく呼び止められる可能性については伝えてあったが、そういう不運にも出くわさなかった。

勇希の歩みが止まった。

「この部屋？」

くるりとリュックが回転し、私の正面、つまり息子の背中側にドアが見える。

「……そうだ」

室内の照明は消えている。内側に人の気配も臭いもない。私はリュックの上から鼻先を突き出して答える。それを聞くか聞かないかの内に再び横方向の遠心力がかかり、私はリュックの蓋側にへばりつく。そんなに機敏なターンをしなくてもいい。

「んじゃ、カードを通して……」

ハケタの暗証番号を息子が押すと、ロックが解除される聞き慣れた音を確認する。

「開いたけど、どうする？」

「……ちよつと待て」

罨か？

なにかすんなりと進みすぎている。亮平は私を殺さなかったのだから、やってくる可能性に気付かなかったとは思えない。学生時代からの長い付き合いがある。私の執念深い性格も熟知しているはずだ。中の装置を守るならIDを消さない理由がない。それが消されてないとなれば、私をここに招きいれようとする狙いがあると考えるのが自然ではないか？

いかん、逆に不安だ。

ここに来た狙いは研究室内の装置である。その装置は巨大になりすぎて簡単には運び出せなくなっている。半年前の時点で場所を移転するかどうか真剣に話し合っていたが、機密保持の観点で安全な代替地は見つかっていなかった。私を猫にしてから運び出せたとも思えない。室内のスペースを使い切っているそれは十中八九、まだ中にある。

人工魔力生成装置と、蘇生の石版。

猫にされた日から半年、装置が順調に稼働しているとすれば、私

の肉体ぐらいいはすぐにも蘇生できるだけの魔力が生み出されているはずだ。

「……入らないの？」

「勇希、鍵を握っておけ」

情けないことだが前言撤回である。私は覚悟して言った。

「使うの？ 別にいいけど」

息子は特に気にした様子もなく答えた。

「使わせないと言ったのは本気だったんだが、すまない、予定が変わった」

身体が取り戻せるとなれば話は別だ。

危険を冒す価値がある。ドアの向こうになんらかの罠が仕掛けられているとしても、既に守護者の力を手に入れた息子を捕らえることなど同等以上の魔法でなければ不可能だ。息子は安全である。この世に守護者と同等の力など、守護者以外にはない。

罠は意味を成さない。

要するにこれはチャンスだ。

「入ろう」

漠然とした不安を振り払って私はリュックから飛び出すとドアを開けるように促した。

「うん」

勇希はドアノブに手をかける。

装置は変わらず静かに稼働していた。

部屋の大部分を天井まで埋め尽くす巨大な箱を見上げて、勇希はポカンとしている。

私は罠を警戒していたが、研究室の中は半年前とほとんど変わるところがない。装置をモニターするための機材もそのままであり、私の椅子もそのままあった。ひとつだけ違うのは、私が最後に作っていたカプセルが完成していることだった。

箱の壁面に埋め込まれたそれには蘇生魔法使用の基となる青い魔力溶液が注がれている。澄み切った青は水に溶けた魔力濃度の高さ

を示している。見た目にはただの縦長の水槽だが、底部にはめ込まれた石版も本物に違いない。私は内心の高揚感を抑え切れずに駆け寄ってカプセルの中を子細に見分した。設計通りだ。そして準備万端整っている。

まるでお膳立てされているかのように。

「なんか、地味」

気付くと私の後ろでカプセルを見ていた息子がつまらなそうに呟いた。

「地味？ 勇希、開けて見せられないのがアレだが、この装置の中には人工的に再現された魔界を封入している。わかるか？ この壁ひとつ隔てて別の世界があるということの凄さが。そして原理的には無限に魔力を生み出すんだ。計算上ではこの装置の大きさを東京ドーム二つ分まで大きくすれば魔界の穴が一年に吐き出す魔力とほぼ同等の……」

「つまらない」

子供にはわからないか。

確かに音も光も発せず、ただ魔力を生み出して溜めるだけの装置ではある。この技術にたどり着くまでの紆余曲折を語っても研究者の苦労と喜びに共感しろというのは無茶だろう。ならばここで実際に私の肉体を蘇らせてその凄さを示すしかないまい。

「少しそこで見ている」

そう言っ、私はモニター装置に飛び上がり、猫の手でキーボードを叩く。

この日が来ることはわかっていたから、猫の肉体でコンピュータをいじるためのトレーニングはしてきたのだ。まさかここまで早く役に立つとは思っていなかったが。

「私を猫にしたときのデータが残っているはずだ……」

貴重な実験である、研究者がそれを破棄するわけがない。猫を《転位》させた私の肉体を観察し、最終的には殺すに至るまで、どのくらいの期間だったのかはわからないが、私が亮平だったとしたら

間違はなくやっている。私たちはある意味で似た者同士なのだ。

「あつた」

私は興奮していた。それが己の肉体の死という残酷な現実を見る行為であると感じないではなかったが、蘇るという大きな希望の前には大した衝撃ではない。交通事故死に偽装？ まったく、人の身体を好き勝手に弄んでくれたものだ。

力チャ。

耳は無意識にドアが開く音を聞いていたが、脳の処理はそれを無視した。

「父さん！」

息子にそう呼びかけられて、私はハッと入り口を見る。

「相変わらずだな、圭介。その姿になつて相変わらずというのも変だが」

ひっかけた白衣の下はアロハシャツに短パンにビーサン、髭面の長身男が立っていた。気障ったらしく長髪を掻き上げる仕草、見間違えようにも見間違えようがない。

「……そうだな、それはこっちの台詞だ」

亮平。

「来ると思つてたよ。だからIDは残しておいた」

そう言いながら、亮平は白衣の胸元に手を突っ込んだ。

「ならば、このまま私が蘇ってもいいだろう？」

「それは困る、やっと溜まつた魔力なんでね」

ガツン、と鈍い炸裂音が室内に反響する。

亮平が拳銃を抜くのと、私が飛び退いたのはほとんど同時だった。データを映し出していたモニターが弾け飛んだ。

「よく俺が拳銃を持っているとわかつたな？」

「動物の勘つてとこだ」

私は肉体が訴える激しい危険の予兆に従つただけだ。

亮平のアメリカ留学中における拳銃狂いは同期の間で語り草であるし、一緒に仕事をしているときも、ガンマニア向けの雑誌などをわ

わざわざ向こうから取り寄せて悦に入っていたことから、改造拳銃でも作っているのではないかという噂が広まったこともあったが、頭の中でそれが一瞬に結び付いたというわけではない。

「なるほど、意外に猫が板についている……半年もあれば当然か？」
亮平は笑いながら銃口を私に向けていた。

「招き入れておいて殺すのか、穏やかじゃないな」
まずい。

二発目をかわすことは無理そうだった。研究室内の狭いスペース、直線で十メートルもない距離、先程の的確な狙い、隠れる場所もない。猫の身体だ、当たれば必ず死ぬ。

恐怖で肢が竦んだ。

「お前を生かしたのは俺だ、俺の手で殺してやるのが慈悲だろう？
友だちとしての、な」

「……」

引き金にかかった指に力が籠められる。躊躇ってはいない。

二発目の銃声は響かなかった。

拳銃が床に叩き落とされてスルスルと床を滑った。

「勇希」

「……おじさん、なにやってんだよ」

片方の手を胸に当てた息子が、亮平の腕を弾き飛ばしていた。
守護者の力が開放されている。

助けてくれたのか。

「勇希？　なるほど、猫になったとはいえ圭介が女の子を誑かすなんて変だと思ったんだ。お父さんの葬式ぶりじゃないか、男子三日会わざればと言うが、これは、美少女に育って。その上、お母さんの力を受け継いだ訳か、お笑いだな圭介！」

「なんで父さんを！　友だちだろ！」

「友だちだからこそさ」

そう言つと、亮平は息子の頭を撫でた。

「？」

「笑子さんを蘇生するのは俺だ」

なんだって？

拳銃を亮平から遠ざけようとしていた私も思わず振り返った。

「おじさん、なに言ってるの？」

「ずっとお母さんのことが好きだった。そう言ってる」

なに言ってるんだコイツ。

私も息子も言葉を失って亮平の顔を見ていた。

冗談を言っているという雰囲気はない。私が亮平に妻を紹介したのはいつのことだっただろう。学生だった頃なのは間違いない。それ以前に会っていたという話を聞いたことはないし、その時が初対面のはずだ。その時から？ 確かに、私と違って女にモテるタイプの男がいまだに独身で、浮いた話も聞いたことはなかったが、いやまさか。

混乱する私を余所に、亮平は息子の両肩を掴んで目線を合わせた。

「勇希、実はおじさんが、君の本当の父親なんだ」

「え？ ええ？」

「おいっ！ むちゃくちゃ言うな！」

頭に血が上った。気付いた時には私は全力でその顔面に体当たりしていた。

しかし亮平はひるまなかった。

「ならば確信をもって言えるのか圭介、このどこもお前に似ていない美少女が、本当に自分の息子だと！ どっちかっていうと俺の方が似てるだろう！」

「似てたまるか！ 確信もあるに決まってるだろうがアホ！」

冷静には言っていられなかった。

「どうかな？」

「なにがどうかな、だ！ バカ！ 大体、四十手前にもなって、十年前に死んだ人の妻に惚れてたとか正気なのか？ 中学生や高校生じゃないんだぞ、頭おかしいんじゃないのか！」

「圭介、お前にも秘密にしてたことだが、俺、童貞なんだ」

「はあ？」

直前まで父親を騙ろうとしていた男がなにをいきなり。

「どうてい？」

勇希は私たちのやりとりにはまったくついていけないようで呆然としている。

それでいいと思うが。

「今でも思い出すよ、笑子さんをお前に紹介された日のこと、一目惚れってやつだよ、悔しかった。チビでハゲの癖にうまいことやりがつてと憎しみを抱いた」

「……」

私は絶句した。子供以下だ。

「笑子さんが亡くなったと聞いたときは落ち込んだよ、俺がついていながら」

ついてないだろう。

「その後、お前から魔法の話が聞かされて、チャンスだと思ったね。蘇生した彼女を俺のものにできるチャンスが巡ってきたと、確信した。思ったより時間がかかったが」

「それで私を猫にしたのか？」

こんなヤツと親友のつもりだった自分を恥じながら私は言った。

「理由は他にもあるが、俺の気持ちとしてはそうだ」

「バカだな、魂を蘇生する限り、蘇るのは同じ人間だぞ？」

「未熟な魂ならばどうか？」

そう言うつと亮平は残っていたモニターの前に駆け寄ってキーを叩いた。

「まさか」

「そのまさかだよ！」

「まで、そんな試してもいないことを思い付きでやるなんて」

私はその背中に飛びかかったが、人間の身体をどうにかできるものではない。

「十五年待った！ もういいだろう！」

エンターキーを叩く様を目撃しただけだった。

魔力溶液に満たされたカプセルの底、蘇生の石版が反応し、液体に次から次へと水泡が湧き上がってくる。魂と肉体を死亡した当時の完全な形で蘇生するには絶対的に魔力が足りない。魔法的に自明のことだった。

「なんてことを！」

私は呻いた。

我々の目前で、水槽内に肉体が蘇っていた。それは胎児から一気に成長していく。魔力が十分ならばデータに残された死亡時の状態まで行くのだが、青い溶液の色が見る見る透明になっていく。そして完全に透明になるとカプセルは定められた通りに水を排出した。

少女の妻が立っていた。

「子供にしかならなかったじゃないか！」

私は友の顔面に爪を立てた。

「俺的にはむしろストライクだ」

亮平は真顔で答えた。

「バカ野郎！」

もうこんな男、友でも仲間でもない。

おそらく今の勇希と同じぐらいの年齢辺りだ。もちろん全裸である。私も見たことのない姿だ。ぱつちりと目を覚まし、内側からカプセルを開けようとしている。なにか声を出しているようだが聞こえない。しかしそれにしてもよく似ている。

女装した勇希と瓜二つだ。

「……魔法、すっげー」

息子がカプセルを引っぺがした。

正しい開け方ではない。それにやわなものではないが守護者の力の前には紙同然なのだろう。

半年で溜まった魔力は使い果たされ、妻は不完全に蘇った。これはもう動かしようのない現実だ。人の魂はひとつしかない。また蘇らせるということはできないのだ。

しかし、どうすればいいのだ。

「……あの、ここ、どこですか？ わたし、なんで裸なんだろう？ あなたは？」

懐かしいような初めて聞くような声で笑子はもう喋っていた。

そうだ、ともかく妻をここから連れ出さなければ。考えるのはその後だ。

「おれは……馬園勇希」

「まその、ゆうきくん？ 男の子？」

笑子の髪が長く、勇希はおかつぱ、それ以外はまるで鏡写しのように二人は向かい合う。息子が物心つくまえに妻は亡くなったのだから、これがはじめての母子対面とも言える。

数奇な運命だ。

「とりあえず、おれの服を着てよ」

顔を真っ赤にして、息子は素早くワンピースを脱ぐと、笑子に手渡した。

「う、うん、ありがとう」

「あ、あと、おれと結婚してください！」

上半身裸にホットパンツ姿の勇希はそう言つと深々と頭を下げた。

「……わたしと？ 結婚？」

「うん」

私の息子がプロポーズしていました。
母親に。

5 私の息子がプロポーズしていました。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

6 私の息子が失恋しました。 / 私と君とで作った子です。

蘇った笑子はまじまじと勇希の顔を見ながら、受け取ったワンピースを着たのだが、生地が身体にぴったりと張り付いたことで自分がびしょ濡れであることに気付いたようだった。長い髪の毛に触ると魔力溶液のぬめりがわかったようで顔をしかめた。

「……女装してる人は無理です」

そして容赦なく宣告した。あるいは不愉快さをそのままぶつけるように。

私の息子が失恋しました。

同時に、私は懐かしさを感じていた。私が出会う以前の妻なのだが、きつぱりとした性格と物言いはまったくそのままだ。不本意な形ではあるが本当に蘇ったのだ。

「わたし、十三歳だし、初対面だし、結婚とかありえないけど、女装してる人は無理、生理的に受け付けません。ごめんなさい。それで、ここはどこですか？」

「……」

息子は言葉を失っていた。

失恋させることはあっても、したことはなかったのだろう。だがそれはいい。当たり前前の結果だ。この場と状況で上手くいくわけがない。母と息子とか、それ以前の話である。

だが、問題は山積みだ。

この状況を本人にどう理解させればいいのだ？

死んだ年齢で蘇ったという状況は想定していた。その場合も大人の笑子ならば魔法についても十分に知っていて話の把握も困難ではないだろうと思えたが、蘇った子供の笑子からすれば十年以上も若返った上に世の中は二十年以上進んでいる。ありのままに説明しても飲み込むのが大変だろうし、猫の私の話を信じてくれるかどうか。「こうなるとお前の立場はないよな」

息子の失恋風景をにやにやと眺めていた亮平が私に向かって呟いた。

「な……」

「結婚以前の状態に戻ったんだ。お前の妻でもなきゃ、お前は夫でもない。夫婦として話を信じさせることは不可能だ。この意味、わかるだろう？」

「……」

髭が萎えた。

亮平がこの場で一番、説得力のある言葉を述べられる。女装してプロポーズして断られた勇希はそもそも子供同土である。ついさっき人間性に欠陥があると分かったとはいえ、大人で外見も常識の範囲内であるこの男が、一番信用のおける存在に他ならない。

猫が喋るよりはよほど。

「ここは大学の研究室です。笑子さん」

動けないでいる私を嘲笑するような表情を浮かべ、亮平は笑子に向かって歩み寄る。

「大学？ あなたは？ なんでわたしの名前を」

「野末亮平、この研究室の責任者です。そして笑子さん、あなたは一度死んで、この研究室で蘇ったのです。そう言われてもすぐには理解できないとは思いますが」

「わたしが死んで、よみがえった？」

笑子はビクと身体を震わせた。

「詳しい話は場所を変えましょう。その前に着替えとシャワーを用意します。サッパリした後で、落ち着いて現実を理解してください。時間はあります」

亮平は淀みなく語りながら、笑子の手を取ろうとする。
パチン。

「なにもなかったようなフリ、してんなよ」

その手を払ったのは勇希だった。

「なんだ？ 君の出番はもう終わりだろ？ 失恋少年、いや少女か

な？」

「うるせーっ！」

次の瞬間、亮平は研究室の壁に叩きつけられていた。

勇希が怒りにまかせて振り上げた拳が強かに顔面を直撃したようで、ずるずると床に崩れ落ちたその顔は血に染まっていた。意識も失っている。守護者の力を使っていることに気付いていたのに、子供を煽ったらしい結果になる。バカだ。同情には値しない。

だが息子のしたことだ、私を猫にしてくれた件は、これでチャラにしておこう。

友情の釣り銭ぐらいくれてやる。

「なんでこの人を！」

笑子の声で私は振り返る。

「無意味に暴力を振るうような人は、最低です！」

「……」

笑子に詰られて、勇希は無言のままウィッグを外して床に捨てて。

「なんとか言ったらどうなんですか！」

「……」

息子はなにも言わず、履いていたブーツサンダルを脱いで笑子に押し付ける。顔を背け、私を見つめる泣き顔を見れば、私もかける言葉がない。

堪えていたのだ。

よく我慢したというべきだろう。私は勇希に頷いてやる。

「ちよ、つと？」

「父さん……おれ、先、帰る……から」

震える声を押し殺すように勇希は言葉を絞り出した。

「ああ、わかった」

リュックからs u i c aだけを抜いて、両手をポケットに突っ込んで歩いて行く後姿を私は見送るしかなかった。この状況で私と笑子の帰宅手段まで考えているのなら冷静だ。上半身裸、脇腹の傷口にバイアステープで張られた痛々しいガーゼ、裸足、ホットパンツ

のみの息子が部屋を出ていくのを私は見送る。

あんな姿で表に出してしまつてよくはないだろうが、このまま一緒の空間にいろというのも酷だった。女装した自分と同じ容姿を持った少女、勇希にしてみれば運命の出会いに他ならないだろう。二人といたはずの理想の女性だ。それが母親だとしても、むしろ母親だからこそであるのかもしれないが、恋破れた今となつては苦痛でしかないだろう。

私は捨てられたウィッグを見つめた。これは、もう……。

「猫が、しゃべつた？ 父さん？」

声をした方を見上げると、笑子が私を見ていた。

「驚かせてすまない。私は馬園圭介、勇希の父親だ。見ての通り猫の姿だが」

「それってどういう……ことですか？」

「私たち親子のことはいい、とりあえず君の話をしよう」

こうなつてしまつた以上、すべてを理解してもらうのは不可能だ。特に私と夫婦であつたことはとても受け入れられまい。だからこそ、なによりも先決なのは笑子が蘇つたこの世界で生きられるようにすることだ。ならば、私も、私の感情を殺すしかない。

「わたしのこと、死んで、生き返つたつて……」

「本当だ。その証拠はこれから見られる。だが、その前にこの部屋を出よう。そのリュックの中にタオルが入っている。少々、猫臭いかもしれないが、それで身体を拭くといい。君の記憶する季節とずれているかどうかかわからないが、今は夏だ。外ならばすぐに乾く」

「……夏、ですか」

口に手を当てて、笑子は考え込む。

「あと、そのサンダルも履いてやつてくれないか？ 気持ち悪くはあるかもしれないが、息子も悪い人間ではないんだ。その男を殴つたのも、君を守ろうとしてのことだ」

「……わたしを、守ろうと？」

押し付けられた履き物を見つめて呟く。

半分以上、腹いせの八つ当たりだったとは思うが、それは言わないでおく。

「すぐに信じては貰えないだろうが、とりあえず、私も息子も君に危害は加えない。いや、見ての通り、私は猫なので加えようと思っても大したことはできないのだがね」

つまらないジョークだ。

「ふふ、そうですね。まそのさん」

だが笑子は笑った。そう、彼女はいつも笑ってくれた。

呼ばれた名前に私の心臓がズズキと痛んだ。出会った頃、そう呼んでくれた記憶は私の中で変わらず生きている。けれども、彼女の中にそれが蘇ることはない。

もう二度と。

魔法における蘇生は、すべての技法の基礎となっている。

滅びかけた、あるいは滅びた肉体を《変異》し、魂を《転位》する。それが結果的に魔法という形へ発展、発達した根本には魔界において人間が極めて短命な生物であったことがあると伝えられている。魔界に暮らす人間は一定年齢までに生きる上で必要な生活技法のすべてを習得し、死亡前、あるいは死亡後に、魔法によってその年齢まで退行して自己蘇生する。その繰り返しによってのみ魔界で生存が可能であったのだ、と。

この説を採用するならば、魂は上書きされるということだ。

十三歳で蘇った笑子は、十三歳までの記憶は魂が刻んでいるが、それ以降は新たな経験をもとに記憶を魂に刻んでいく。つまり、私との出会いは二十年前のことではなく、猫としての出会いが最初ということになる。

「2011年って、未来ってことですか？」

「未来……確かに君の記憶からすればそうなる」

大学構内からほど近い、池を臨む公園ベンチに腰掛け、私は順を追って笑子に事情を説明する。この状況は確かにほとんどタイムト

ラベラーのそれだ。

「そんな、わたし……二十五年も前に死んじゃったの？」

「そこが複雑なところなのだが、君は二十七歳までは生きている」

笑子が死んで十年、いや、もうすぐ十一年。

「……え？」

「君が十三歳で蘇ってしまったのは私の不手際だ」

亮平のことも含め、これは己の迂闊さが招いたことだ。

私は地面に飛び降り、頭を下げて体勢を低くした。四足歩行動物に土下座もへつたくれもないが、もはや私にできることはこれ以外になにもなかった。

「君が生きた残りの十四年、これを失わせたのは私だ。申し訳ないと思っている。言葉で償いきれるものではないだろうが、これから君のためにできることはなんでもする。猫の身体でどこまでできるかはわからないが、それでも……」

「いいですよ、まそのさん。顔を上げて」

頭の上から降り注ぐ優しい言葉が痛かった。

私は鼻を地面にこすりつける。

「まだよくわからないけど、死んでいたわたしが生き返ったのなら、それって凄いことじゃないですか。二十七歳で死んで四十歳になっちゃったとかならそれはかなりくやしい感じですけど、十三歳に戻ったならやり直せるってことで、むしろトクしてます」

「……申し訳ない」

本当によくわかっていないだけだ。

ある意味で失われた十四年を惜しんでいるのが私であることは事実だが、しかし、その失われた時の重みを彼女はまだ知らないだけなのだ。家族も、友だちも、皆が二十五年の月日を生きている。一人だけ取り残されていることに気付いたとき、そうは言えないだろう。

憎まれても仕方のないことだ。

「詳しい話は、君のお母様のところでしよう。重ね重ね申し訳ない

が、私が詳しい事情を説明するので、リュックに詰めて運んでほしいのだが……」

私は笑子を見ないようにして、ベンチに上がってリュックに潜り込む。

「あ、はい。あの、でも疑問なんですけど」

チャックを閉めながら笑子は言う。

「詳しい話は……」

「まそのさんは、どうしてわたしを生き返らたんですか？　というか、お母様を知ってるってことはお母様が生き返らせるように頼んだんですか？」

「……」

リュックの中から笑子の顔を見上げて私は答えに窮した。

本当のことはもう言えないのだ。

「あの、まそのさん？」

「……実験だ。正直に言って」

きちんと彼女と距離を取らなければいけない。

「死亡した肉体のデータがあつたのが偶然、君だったというだけのことだ」

どうしようもない嘘だ。だが、そう言うしかなかった。

私は私の感情を殺し、私の妻であつた笑子の死も改めて受け入れなければならぬ。蘇らせることが私の生きる希望だった。そして蘇つた。想定外であろうと、不手際であろうと、私の本意でなかろうと、目標は達成されたのだ。それが私の笑子であつて欲しかったというのはエゴだ。そう、私の愛情がエゴと等価である限り、死んだときのまま蘇らせたとしても、私が拒絶される可能性はあつたのだ。その事実から目を瞑っていただけだ。

本人が蘇りたいと言つたのではない。

私のエゴに私が責任を取るだけのことだ。

「実験？　ですか」

私の答えにガツカリしたような顔で笑子は呟いた。

「申し訳ない」

「いいえ、運が良かったってことだと思います」

「……」

私は未熟な人間で、今や人間ですらない。

結局、息子にも妻にも、まともに向き合えていなかったのだ。

「あの、まそのさん？」

リュックを背負おうとした笑子が肩ベルトを掴んで怪訝な顔をしている。

「どうした？」

「ここ、震えてるんですが？」

「震えてる？」

私はリュックから頭を突き出して笑子の手元を確認する。

「ああ、ケータイだな」

リュックのベルトに専用ポケットがある。息子が持っていたのかなったのだ。

「ケータイ？」

「携帯電話……とそうか、君は」

知っているわけがない。

「ポケットを開けて出してみるといい。今の時代では広く普及しているものだ」

「電話？……この薄い板が？」

笑子は両手で表裏をためつすがめつしていたが、液晶画面に目を奪われたようだ。

「テレビ？」

「現在のテレビという意味ではおよそ間違っていないのだが、電話だ。通話ボタンを」

いや、ケータイがある生活を前提に説明しても伝わらないな。

私がどうしたものか考えている内に、しかし子供の笑子はシンブルにボタンを押して電話できるように画面を耳に当てた。適応が早い。そして本当に繋がっている様子だった。

「というか、相手は誰だ？」

「もしもし？ どちらさま？ え？」

「私は耳を立てて集音能力を高める。人間の耳にはできない芸当だ。『だれなの？ これ勇希くんのケータイでしょ？』」

「聞き覚えのある声だ。」

「あ、そうです。ゆうきくんの？ けいたい電話？ です。わたしは聖笑子、そちらはどちらさまですか？」

『あの？ 電話受けといて名前がわかんないってことないでしょ？』

「いえ、わたしこっぴうの初めてで」

『画面見なさいよ！』

「画面？」

笑子が太陽光に反射する液晶画面の角度を変えて目を細める。

如月舞、あの少女か。

「舞さん？」

『そうよ、舞、ひじりだかひじきだか知らないけど、そっちこそ何者なの？ どうして勇希くんのケータイ持つてるの？ 勇希くんはそばにいるの？ 変わりなさいよ！』

距離を取ってみると恋人の母親を母親と知らずに怒鳴りつける自称カノジョという具合で、ある種のおかしみを感じないでもないがそれほどのかな状況ではない。

「んー……」

うるさくなつたのか笑子はケータイを耳から離れた。もちろん元々は電話で道具としての接点がなくもないとはいえ、飄々と新しいツールを使いこなすものだ。

「まそのさん、この人知ってますか？」

「ああ、息子のクラスメイトだな、なんなら私が代わるが……」
電話越しなら猫でも父親として対応できる。

「クラスメイトかー」

だが笑子はふいと電話に戻った。

『——ちよつと！ 聞いてんの！』

「舞さん、ちよつと不躰じゃないですか？」

『な？』

「電話に違う人がでるのは当たり前でしょう？ それなのにいきなりケンカ腰で、家族でもない単なるクラスメイトがそういう態度、よくないと思います」

ケンカ売ったよ！

私はすぐにでも止めたかったのだが、間の悪いことにベンチのそばを人が通りかかっていたので、リュックから出した前足をじたばたさせることしかできなかった。

『単なるクラスメイト？』

電話の向こう側で舞に火が点いたのは聞くまでもなくわかった。

『舞は、勇希くんの恋人です！ そっちこそ家族でもなくクラスメイトでもない、何様？』

「恋人？ 恋人なんですか？」

驚いたように笑子は私の顔を見たが、私はなにも言えない。

『そうです』

「別れた方がいいですよ、舞さん」

『はい？』

なんだって？

じたばたしすぎたせいでリュックが転び、私はベンチの下に転げ出る。

「実はわたし、ついさっきゆうきくんに結婚してくださいって言われたんです。わたしは裸だし、ゆうきくんは女装してるし、初対面なのにどうかしてるんでお断りしたんですが」

『……裸？ 女装？』

息子の秘密があっさり暴露。

「にゃあああああ！」

私は猫として精一杯の静止をかけた。

だが、そんな私の様子など意に介さず笑子は喋った。

「恋人がいるのに別の人に結婚してくれなんて言ってるんですから、

舞さん、間違いなく騙されてます。別れた方がいいです。あの、もしも？ 聞いてます？」

『……でよ』

「すいません、よく聞こえないんですが？」

『ふざけんなって言ってるの！』

「っ！」

一氣に上がったボリウムに笑子は顔をしかめた。

『何様のつもり？ このひじき女！ 勇希くんがプロポーズした？ そんなことあるわけないでしょ、あんまりペラペラ嘘ついてるならその舌引っこ抜いて炭火焼にしてやる！』

この子も大概メチャクチャだ。

「ウソなんか言ってます。本当のことです！ 別れなさい！」

笑子はまったく退かなかった。

『ひじき女、どこにいるの？ 直接あつてケリをつけてあげる』

「ここは上野の不忍池ですけど、それには及びません、わたしがそちらに伺います！」

『来る？』

「行きますよ。舞さん。何度だって言います。ゆうきくに騙されてます！」

いや、息子は割と被害者なのですが。

などと、私が今更言っても遅いのだろう。笑子の瞳が燃え滾っていた。もはや己の迂闊さを疑う余地もない。こういう性格だったのだ。しまさかとは思っていたが、魔法のことを知るより以前、守護者になる前から、彼女はすでに彼女であつたのだ。懐かしくもある。

笑子の正義感は尋常でない。

『なら来てみなさいよ！ 舞の家は木乃市の——』

「——わかりました。よく知っています。ちょうどいいぐらいです。わたしもそちらへ向かうところでしたから。まっすぐそちらに伺います」

だが、その正義感が彼女を死に至らしめた。

いかん。違う、蘇った彼女は、彼女であって以前の彼女でないのだ。同じ運命が繰り返すわけがない。なにより守護者の鍵は息子が持っている。新しい守護者も街に来ている。

頭を振った。そうならないために私がいるはずだ。

「電話、切れました。これこのまましまつていいですか？」

「……それは、いいんだが」

舞と笑子が会って事態がどう打開されるのか私にはまるで見えなかった。

止めるべきだ。

「その、君が会いに行ってもおそらくにも解決しないと思うのだが」

「まそのさん、ちゃんと息子さんを教育してますか？」

笑子は私の首根っこを掴んでリュックに放り込みながら睨んだ。

「え？ あ……」

「女装といい、恋人がいるのに結婚の申し込みといい、ゆうきくんはまるで普通じゃありません。親のあなたの責任じゃないんですか？ どういう躰をしているんですか？」

「……親ですいません」

私と君とで作った子です。

言つてもはじまらないことしか頭に浮かばず、しかし笑子の言葉は正論で、私は小さくなるしかなかった。躰が行き届いていなかったのは厳然たる事実だ。

「これからちゃんとしましょう」

「はい、そうします」

なぜ説教されてるんだろう？ 十三歳の女の子に。でも。悪い気はしないのだ。

「さ、急ぎますよ。やることがひとつ増えました」

蘇ったばかりとは思えないバイタリティ。

そう、彼女はネガティブに陥りがちな私と違って、まっすぐにポ

ジティブな女性だった。憧憬、私の胸にあつたこの感情は間違いない、かつての彼女に向けられたものだが、でも今、ほとんど変わる事のない感情も新たに生まれている。愛している。

伝えることが叶わなくとも、この気持ちだけは死なないのかもしれない。

6 私の息子が失恋しました。 / 私と君とで作った子です。 (後書き)

お読みいただきありがとうございました。

2 聖木乃女子学院アニメ研究会（盛夏）

木乃駅前のファストフード店、二階。

ロータリーを見下ろす窓際の席にヤタテとミズキは向かい合って座っていた。会話はない。ナツメがいない場において彼女らは基本的に噛み合わない。アニメを観るスタンスも、楽しむポイントも、ある面においては反発しあう立場がある。

見るからにお嬢様然とした流行の服を身にまとったヤタテはひたすらに自分の本を読み、見るからにサイズの合っていないラフな既製服を着たミズキはPSPの画面に釘付けだ。とはいえ、集中しているのもそれほど気まずいという訳ではない。

正午過ぎの店内は混み合いはじめていた。

「ナツメちゃん、遅いね」

ページをめくりながら、ヤタテは何度目かの言葉を繰り返した。

「いつものことだ、ぜっと」

画面から目を離さず、ミズキはも繰り返す。

二人は、一人だけ補習で学校に行っているナツメを待っていた。

「おい、あれなんだ？」

誰の声かきつかけかはわからなかったが、店内の人々がざわつきはじめる。それでも二人は自分の世界に没頭していたのだが、ざわめきは収まることなく広がっていく。

「映画の撮影？」「コスプレのイベントじゃね？」「このくそ暑い中よくやるよなー」「そんな情報あったか？」「なんかのオフ会とかだろ、ほらあっち系の」「ああ、そういう？」

客たちの視線は窓の外に向けられている。

流石の二人もちらりと視線を向け、それが異常事態だと気付いた。普段なら客待ちのタクシーが並んでいる駅前のロータリーを、若い女の子たちが占拠している。ヤタテやミズキと同じぐらいの年齢層、それぞれがカラフルで華やかなコスチュームを身に纏っている。

彼女たちは駅の改札口を取り囲むように集まっていた。

その数はざっと三百人。

「……ミズキちゃん、なんのコスプレかわかる？」

「……知らない、ぜっと」

二人は息を飲んだ。

「魔法少女？」

ほとんど同時に同じ単語が浮かぶ。

「でも、なんの？」

「未知だ、ぜっと」

古典から最新作まで、ナツメによって相当数の作品について知識は入れ込まれている二人だったが少なくとも記憶する限り、似たようなものはあっても、同一というものはない。なにか特定の作品について集まっているとは思えない状況だった。

「ナツメちゃんに連絡しないと」

慌ててヤタテはケータイを取り出し、

「記録だ、ぜっと」

こちらで慌ててミズキはカメラで撮影をはじめ。

「——あ」

そして二人は同時に気付いた。

その魔法少女たちの輪に向かって、聖木乃の制服を着た女子が一人、走っていることに。遠目にもわかるほど興奮している彼女はロータリー中央を貫く横断歩道の赤信号で足踏みをしている。

「ナツメちゃん」

「ナツメだ、ぜっと」

二人が顔を見合わせて苦笑いをした直後、

「やばい！　ここから逃げろ！」

店内の一人の男が叫んで、椅子を倒して二階席から飛び出していた。

客たちはそれぞれ顔を見合わせたが、追隨するものはいない。
「なんだったの？」

「……駅からなんか出てきた、ぜっと」

ミスキが窓を指差した。

「なになに？」

ヤタテが見ると、改札口から上半身裸に裸足で、ホットパンツのみという少年がとぼとぼと歩き出てきたところだった。俯いていた少年だったが、正面に居並ぶ魔法少女たちに気付いて立ち止まる。

少年の風体も夏とはいえ都市部には異様な光景であり、奇妙な緊張感が店内にも漂い始めていた。ざわめきが大きくなる。

「……なんて美少年」

それとは関係なくヤタテは頬を緩めていた。

「だめだめだ、ぜっと」

ミスキが肩をすくめた次の瞬間、店の窓ガラスが吹き飛んでいた。店内に悲鳴が響き渡る。

「え？」

「……！」

ガラスが店内に吹き込んだ衝撃で床に転がった二人は、さっきまで自分たちが向かっていたテーブルの上に立つ少年の背中を見上げていた。そして、その向こう側から大勢の魔法少女が店内におしよせようとしているのを。

「いてーよ」

そう呟くと、少年は信じられないような速度で店の外へ飛び出していった。

彼が足場に使っていたテーブルが店内奥の壁に突き刺さる。

「……なんだったの？」

「わからない、ぜっと」

呆然とする二人を余所に、店内はパニックになっていた。

？がったままだったケータイが途切れた。

「ヤタテっち、聞こえてるっすか？」

待ち合わせ場所だった店の二階を見上げながらナツメは意味がな

いとわかりつつも叫ぶしかなかった。駅を取り囲むように立つビルからビルへ、次々と爆発のような煙が立ち昇る。駅前には騒然としていた。立ち止まるナツメを押しつけて人々が逃げ惑う。

「なんなんっすか？」

魔法少女たちが集まっていたのだ。

なにかのイベントだと駆け寄ろうとしたナツメは、駅から出てきた裸の少年に金髪の魔法少女が襲い掛かるのを目撃した。だがそこまでだった。吹き飛んだファストフード店、それからは空気がはじけ飛ぶような音と同時に、そこかしこで爆発が起きていることしかわからない。彼女の脳裏ではいくつかのアニメの名前が浮かんでいたが、もはや現実には不適当なだけだった。

なにより一刻も早く友たちの無事を確認しなければならぬ。

ビルから吐き出される人々の流れに逆らって、ナツメは待ち合わせ場所へ向かう。すれ違う人の中には血を流している者もいた。ヤタテとミズキ、二人の顔を探しながらも、彼女は目を瞑りたくてたまらなかった。こんなことは夢かアニメであるべきだ。

「ヤタテっちい！ どこっすか！」

不安を振り払うには叫ぶしかなかった。

「ミズキっちい！ 返事してほしいっす！」

後悔しかない。

自分が勉強をしなかったこと、赤点をいくつもとったこと、補習を受けていること、補習の後に遊ぼうなどと二人を呼び出したこと、そして待ち合わせに遅れたこと。

「ヤタテえ！ ミズキい！」

すべて自分の責任だった。

「邪魔だ、どけ！」

誰かに突き飛ばされて、ナツメは転んだ。

すりむいた膝から滲む血、そして視界が滲んでいく。目の前の道路が吹き飛んだ。丸く凹んだアスファルトに魔法少女の一人が仰向けで倒れている。現実とは思えない光景だった。ナツメはごしごし

と目を擦って周囲を見回す。よく見ると、そこら中に魔法少女が倒れている。また爆発音。見上げると少年が飛び上がって、魔法少女の一人を蹴飛ばしていた。

「あの子が、たった一人で……？」

この惨状を。

ビルの屋上の看板に巨大な穴が開いた。

ナツメは自分が立ち上がれなくなっていることに気付いた。腰が抜けるなんて、フィクションの話だと思っていたのに身体が自由にならない。脚に力を込めようにも地面の上を滑る。焦る。早く二人と合流しなければ、二人になにかあれば自分の。

じたばたしていると不意に腕を掴まれて身体ごと引っ張りあげられる。

「君、大丈夫かい？」

口ひげを生やした男だった。短く刈り揃えた髪には白髪が混じっているが、顔立ち自体は若く、日焼けした腕は引き締まっている。

「は、いっす」

一瞬ボーっとして、ナツメは首を振った。

「そうか、なら早く逃げるといい、ここにいてはダメだ」

「ダメっす、自分、友達を待たせてるっすから……」

「この状況だ、友達も逃がっている」

「いえ、さっきまであの店にいたはずなんす、だから、ありがとう
ごさいましたっす！」

ナツメは店を示して頭を下げると駆け出した。

「わかった、一緒に行こう」

男はそう言いながら、ついてきていた。

「そ、そんな、オジサンこそ、逃げた方がいいいっす！」

「君みたいな可愛い子を見捨てられない。あとオジサンじゃなくて
オニイサンでよろしく」

「かわ……っ、なに言ってるっすか！ おおおオニイサン？」

「そういう感じが可愛いんだ。はっはっは」

「そそそ、それ以上言つと、け、警察呼ぶつすよ!」
「そりゃ困るな」

そんなことを喋っていたので、ナツメは横を通り過ぎた二人を見落とした。

「ナツメだ、ぜつと」

「ナツメちゃん!」

気付いていた二人は呼び止める。

「呼ばれてるの君じゃないかい?」

「え? あ、二人とも、無事だったんすね?」

振り返つてナツメはほつと安堵して笑つた。

二人とも少し埃まみれで汚れた雰囲気はあつたが、傷などはなさそうだった。

「良かったつす、ホント、良かった……」

そして涙が溢れてきていた。

ナツメは両手を広げて二人にかけよっていく。

「……なにを、この非常事態にっ!」「ラブコメしてるんだ、ぜええつと」

そこに二人のカウンターパンチがダブルで入つた。

ナツメは仰向けにぶつ倒れる。

「もう、信じられないっ! ナツメちゃんがそんな尻軽吊り橋効果女だったなんて!」

ヤタテは地団太を踏んだ。

「見てた。ずっと見てた、ぜつと。アニメしか愛せないと誓つた星を忘れたか」

倒れたナツメの顔に向かってミズキは呪詛を吐く。

「ちょ、君ら、友達なんだろう」

「黙れロリコン!」

「ロリ……?」

男は二人の勢いに気圧され、二人の制裁を止めることができなかった。

2 聖木乃女子学院アニメ研究会（盛夏）（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

3 子供にもわかること

子供にもわかることがある。

「大人しく従うなら、丁重に扱うわ」

昨日の女が冗談のように黄金色に輝く衣装で目の前に立って言う。身体にフィットするような素材で出来ていて、上半身はピッタリしているのに、下半身は花の蕾をさかさまにしたような膨らんだスカート状になっている。変なカッコだ、と勇希は思った。だが自分もおよそ変なカッコだという自覚はあった。ホットパンツしか履いていない。だからそのことは口にはしなかった。

「……おとなしく？」

自分を取り囲む奇妙な装いの女たちと、首にぶら下げた鍵が魔力に反応してか勝手に光を放ちはじめたのを交互に見て、勇希は笑った。大人しく従うと思っていけないから、仲間を集めてきている。そんなことは口にしなくともわかり切ったことだった。

躊躇うことなく鍵を胸に突き立てた。

「ぶーす！」

力は瞬時に解放される。

「二回目よ、それ」

正面から向かってくる女の拳は勇希にも見えていた。そして彼自身考えるより早く、頭の中にその拳を払ってカウンターを決めるイメージが浮かんでいる。父親が説明したところによれば「鍵には過去の戦闘経験が蓄積されていて、必要に応じて使用者の脳へ干渉する」ということだが、理解はしていないし、使用する当人には反射と変わらない。

「だあっ！」

改札口の地面に女の拳を片手で叩き付け、その顔面を残るもう一方で捉えようとする。

だが、

「大人しくしなさいっ！」

突進してきていたのは他の女たちも同時であつた。

死角から飛び出してきた別の女に勇希は脇腹を強かに打たれて吹っ飛ばされる。傷口が露わになり、蘇ってくる痛みにも勇希は齒を食いしはる。

なんとか踏み止まろうと突っ込んでいく壁に体勢を立て直すものの場所がガラスだったため思い切り碎ける。裸足の裏に痛みは感じることはなかったが、殺しきれなかった勢いのまま店内に降り、テーブルの上に踏み止まった。

「いてーよ」

相手は本気で自分を倒そうとしている。

逃げるべきだ、と鍵の経験は告げていた。だが、同時に勇希が見下ろすロータリーに居並ぶ女たちはそれをさせまいと動いているのもわかった。近くの五人ほどが距離を詰め、その周囲は彼の動きを見逃すまいと囲みながらも注意深く見つめている。

やるしかない。

逃げられないとしても、大人しく捕まるのは論外だった。捕まるものなら女たちは自分にどんな要求をしてくるかわからない。それが勇希にとって自分と女たちとの関係をめぐる世界のすべてだった。モテるということがポジティブな特質であるということは彼自身もわかっていたが、初恋もまだだった勇希にとって、気がついたら押し付けられている好意はただひたすらに理解不能で恐ろしいものでしかない。

好きでもない子に好きではないとはつきり伝えても攻め立てられ、曖昧に誤魔化せば攻め立てられ、嫌いだと言えば攻め立てられた。そんな風に言わなくても、はつきりして、そこまで言うなんて酷い。どうすればいいのか答えはなかった。

思い切りテーブルを蹴って高く飛び立つ。

「どけええええっ！」

目の前に来た一人を勢いのまま突き飛ばすが、周りの数名にカウ

ンターを食らって鋭角に別のビルへ叩きつけられた。全身の骨が激しく軋む。

「……っが」

意識は空ろになり壁面が崩れるのと一緒に地面に向かって落下する。

しかし回り込んでいた別の女が視界に入って、勇希はハッと壁を蹴り、自ら選んだ地面へ着地し、挟み撃ちにしようとした別の二人の蹴りを防御する。

「何人いるんだよ！」

数え切れなかった。

二人の攻撃を受けて動けない勇希に向かって更に二人が突っ込んできている。

「あなたみたいな子供が、この力を使っちゃダメなの！」

「勝てっこないのわかるでしょう？」

「……っ」

勇希は全身に力を込めた。

胸の中で鍵が激しく熱を帯びているのがわかった。それは降り注ぐ太陽の熱とも、足の裏を焼くアスファルトの熱とも違う、勇希自身の奥底に点火する熱だった。負けたくなかった。打ち勝ちたかった。自分を取り巻く不自由に。

「だああああっ！」

目の前の一人に拳を振り回したが子供の腕ではリーチが足りなかった。

軽くかわされ、別の三方から頭と胴体に打撃を受け、踏ん張りきれずに地面を転がる、別の誰かに蹴り上げられ、更にまた別のビルへ。ピンボールのように空を舞った。何度も意識が飛ぶ。何度も痛みを堪える。何度も足掻く。コンクリートの壁が打ち砕かれ、瓦礫が飛び、人々は逃げ惑っていた。それはまるでスローモーションのように見える。オフィスになだれ込み、ガラスが飛び散り、粉塵が巻き上がった。

そして限界が訪れる。

「……もう」

身体が鍵を拒絶しはじめている。胸の辺りで熱が澱む。吐き気のような、眩暈のような、耳鳴りのような。今日は二回目だが、合わせても十分も経っていない。

まだ、ダメだ。

「なるおっ！」

勇希は胸を押さえて踏み止まると目の前に迫っていた一人を反射的に後方へ投げた。立ち上がった場所はビルの空きテナントのようで、フロアにはなにもない。三方に窓があり、数人の女たちがじりじりと迫ってきている。逃げるのは無理だった。

子供にもわかることがある。

「負けられねえーんだ！」

そう叫んだものの、勇希の意識は朦朧としていた。

ふられるとは思っていなかった。

自分とまったく同じ顔の少女が自分の母親だと勇希も理解していた。本当は父親が人間に戻るはずだったのがどうしてそうになってしまったのか、父らの会話からは理解できなかったが、母親のことを話しているのだとは理解していた。

でも蘇ったのは母親になっていない母親だった。

カプセルの中で肉体が形作られる様の一部始終を見届けばわかる。顔立ちも背丈も変わらない、そんな母親を目の前にして勇希は混乱した。

しかし混乱しながらも銃弾でモニターが碎けるような、そんな激しい衝撃が彼の胸を突き抜けていた。それが恋なのだとは理解するまでもなかった。いつも鏡の向こう側に見ていた、ありえないもう一人の自分が現実の世界に現れたのだ。

そして同時にそれが母親であることもよくわかった。確かな記憶にはないにしても、写真では何度も見て、いてくれたらどんなにいいものかと何度も夢想した相手がそこにいるのだ。入学式も、授業

参観のときも、遠足のお弁当も、運動会も、学芸会も、誕生日も、クリスマスも、欲しかったものの、心が躍らないわけがなかった。

母さん、そう呼びたかった。

けれども、この母親はまだ自分を産んでいない。これから産むことも決してない。

母親ではあるが、決して母親ではない。

衝撃と感動の中で、勇希はそんな残酷な事実に向き合っていた。

『あ、あと、おれと結婚してください！』

口走ったのは自分のものにしなければという焦りだった。それ以外には思いつかなかった。父親にも渡せない。仮に父親と夫婦になって、そこに生まれてくる子供は決して自分ではないのだから。勇希には直感が働いていた。自分がモテてきたのはこの瞬間のためだったのだと、ある種の運命すら感じる。告白するのははじめてだったが、つられるわけがない。

だが結果は。

あそこで逃げずに、いつそ無理矢理にでも連れて来れば。

一瞬の思考だった。スローモーションでよろける視界の中、勇希は悔しさを噛み締める。

「呆れた子ね、どれだけ頑丈なの」

「油断しないで、テイさんも言ってたでしょ、この子は……」

女たちはもう半歩で手の届く位置にいた。

「あー、そーか……」

鍵穴に鍵が納まるような感覚があった。

ぴたりと足の指が床を掴むのを感じながら、勇希は呟いた。

「わかった」

自分も、自分に好意を押し付けてきた女たちと、結局は同じだということ。

カチリ。

それは小さな音なのに、バラバラと崩れる壁の音や、ビルの外から聞こえてくる騒音をもともせずフロアに響いた。勇希の耳はそれ

が意味するところを理解している。

シンダーは回る。扉を開く準備が整ったのだ。

その低い響きで、フロアにいる女たちは顔を見合わせて立ち止まる。

「……聞こえただろ？」

殴られた身体中が痛んでいた。

「負けられねーんだ」

それでも、こんなところで捕まって立ち止まってはられない。
母さん。

勇希の肉体に変化が現れはじめていた。鍵を突き立てた胸の中心から、うつすらと光の模様が描かれはじめる。それは地中に張る根のようにじわじわと首へ、腕へ、腹へと伸びていく。限界は超えていた。吐き気も眩暈も耳鳴りも、もうない。

その様子を見て、女たちはすかさず剣を抜いた。

「まずい、あれって」

「《変異》を制御できてない、止めないと」

「おそいよ」

勇希は床を蹴っていた。

最初の女がビルから飛び出したのと、最後の女を突き飛ばしたのはほぼ同時だった。八人、勇希を取り囲んでいた全員がビルの四方八方から飛び出してフロアが一気に崩れ始める。壁と柱を貫通するように平手で押し出しただけ。力関係は逆転していた。

勇希は悠々と歩いてロータリー側の破れた壁に向かう。

「父さん……」

ビルを囲む女たちを見下ろして勇希は唇を吊り上げた。

「やっぱり、おれ、父さんに母さんをわたせないよ」

抜けるような青空を見上げ、肌を焼く太陽の輝きに目を細めながら、それにも負けず胸の中で力を増していく感触を勇希は感じていた。迷う必要はなかった。

子供にもわかることがある。

本当に欲しいものは自分で手に入れなければならない。

3 子供にもわかること（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

4 扉の開放

カチリ。

その音を聞きながら、テディは運命を呪っていた。

数秒も経たず、ひとつのビルが崩壊をはじめた。追い込まれた少年の《変異》が暴走をはじめた証だった。こうならないことだけを祈っていた。

「おじいちゃん」

神を信じないテディは胸に手を当てながらそう呟く。

テディ・N・ボールドウィン、彼女は四分の三までアングロサクソンの血を受け継いでいる。母方の祖父だけが日本人だったが、結果的にテディが守護者になることを決定付けたのは、少ないその四分の一の血であった。両親の不和が原因で預けられた日本の地、そこが木乃市であり、そこで魔法と出会ってしまった。

そして今、こうしてここで守護者をしている。

不満はなかった。テディにはその資質があり、それを為す意志があった。道のりはまっすぐに協道も寄り道もなく、障害は自らの努力によって破ってきたのだという自負もある。これまでしてきたことに疑問も疑念もない。魔界の穴を守護し、この世界の安定を保つ。それは、まぎれもなく彼女にとっての疑う所のない正義であり、守護者としての拠り所であった。

だが、それも一夜にして一変しつつある。

あの少年との遭遇によって――

初めての失敗。

守護者の最も重要な仕事は、魔界の穴そのものの守護である。

とは言え、基本的には穴の存在がまず秘密であり、穴周辺には魔法によって一般人は近寄ることもできない。その上、日本という治安の良い条件、木乃市の場合は長年に渡って女子高の構内という極め

て特殊な場所を維持していることなどで、世界的に見ても安全と看做される場所であった。事実、三十年遡っても重大事案はたったの二件しかない。だからこそ、まだ若いディー人が正式な守護者として任命されたのだとも言える。そして彼女が一高校生として聖木乃女子学院にやってきてから二年半、さして大きな事件は起こらなかった。

しかしそのことでディーが油断していたという訳ではない。小さな事件は月に数回のペースで必ず起こる。多い月は十数回、守護者の主な仕事はそちらになる。

魔法の穴に近づく者の選別だ。

近づく者はおよそ二種類に分けられる。

一つ目は資質を持った者たちだ。魔力に対して反応する魂を持つた人々、彼らは望むと望まざるとに関わらず魔界の穴に誘引される。二つ目は知識を持った者たちだ。非合法に取引されている書物などから魔法を知りその悪用を目論む人々、彼らは望んでやってくる。守護者はその二種類を選別する。その内にある資質によって他意なく近付き、魔法を知ってしまう人々を守護者は捕らえ、そして専門の教育機関に移送する。魔法の存在を知り、それを悪用しようと近づく人々を守護者は捕らえるか、あるいは殺すことを許されている。

しかし、少年は前者であり後者でもあるように見えた。

ディーには最初からいくつかの誤算があったことは確かだった。

少年の女装を見破れなかったこと。穴の周辺にディーが張った魔法が破られ、駆けつけ、その後姿を見た彼女はある意味において安堵してしまった。同じ学校の生徒ならば、二種類の前者であれ、後者であれ話し合えないということはない。

その油断。

猫が喋ったこと。魔法を使えばそういうことは起こりうるという知識はあったが、現物を見たことはなかった。ほんの一瞬だが目を奪われた。

その一瞬の隙。

少年が鍵を持っていたこと。鍵は守護者がその候補生であるときに与えられ、その当人にしか使用できない。その数は厳重に管理されており、使用者が引退するか死んだときにのみ候補生が補充されるシステムで、過分も余分も原理的に存在しないはずであるものだった。それ持っているということは「敵ではない」という確信があった。

その思い込み。

猫が父親だったこと。テディの身体は、刻み込まれた激しい訓練の結果をきちんと飲み込んでいた。強襲を防ぎ、反撃を与え、確実に追い込んだ。少年は魔法を知って、それを悪用している。だが子供だ。悪意があるのか、父親に唆されているのか、それが判断できなかった。子は真剣に父を心配し、父は本気で子を心配している。それが感じ取れたことで、殺すつもりで動かした選別の手は気付かず緩んでいた。

その甘さ。

そして最大の誤算。

「あなたらしくなかったわね」

「……申し訳ありません」

どうしようもなく下らない手口を思い出して、テディは俯く。

中庭を見下ろす学院の理事長室。報告を受けて夜半過ぎに出先から戻ってきた理事長は、椅子の背を彼女に向けて、窓の外を見ている。窓ガラスに映る顔には深い皺が刻まれている。この地において何十人も守護者を見てきたという老女もかつてはひとりの守護者であった。

「怒っている訳ではないわ、少年と、喋る猫だったかしら」

「はい」

ガラス越しに理事長の目を見て、テディは頷いた。

「私に心当たりがあるわ。管理外の鍵の件を含め、あなたが気に病むことはない。すべては私の責任だわ。あなたがされたことも、十

八歳の乙女がそれを受け流すようでは、守護者としてはともかく、学院の生徒としては問題があると思わなければ」

そう言つと、理事長は満更でもないように笑った。

「……」

「けれど、タイミングは最悪だったわね」

「え？」

テディの目の前で理事長の椅子がぐるりと回転した。

「失態は私が被りますから、名誉は自らの力で挽回なさい。あなたに、その少年の捕縛、さもなくば抹殺を命じます。その際、学院外での鍵の使用、扉の開放も認めます。補助として関東近縁から召集する候補生314名を付けます。有効に活用なさい」

「学院外、ですか」

テディは青ざめながら言う。

守護者は通常、鍵の使用を定められた場所のみに限定されている。それは魔法の秘密を守るためであると同時に、周辺への被害を最小限に抑えるためであった。

「無関係の人々を巻き込むのが恐ろしい？」

「いえ、相手は鍵を持っています、ですから、必要な措置だと……」

「魔力は人の魂を魔へ導く」

理事長は守護者たちが絶えず聞かされる言葉を口にした。

「それはあなたがたたちも例外ではない。扉を開ければ、確実に魂は魔に染まっていく」

「……」

テディは唇を噛む。

理事長の表情に揺らぎはない。だが、彼女は十年前に、この地で守護者をしていた孫を失っている。その事実はこの学院にいる候補生含め、全員の知るものだ。

「あなたがたが外で戦えば、相応の被害は出る。それでもあなたがたが敗れば」

覚悟を持って自分たちを送り出している。

「わかっています」

正義を行使する者にとって、迷いは弱さに他ならない。

—— テディに全ての人々を守ることはできなくなっていた。

鍵の使用が都内で観測され、その波長が木乃駅へと向かう路線で移動しはじめたとき、駅前には決戦の場と定められた。魔法について説明することができない以上、事前に人々を逃がすことも出来ない。守護者も、その候補生も鍵の使用時は一般市民との接触を断つ。

その覚悟を示すのが戦闘装束である。

少年がこの場から逃げ出さないように抑え込みつつ、派手に暴れて危険を知らせ、人々が自主的に退避する時間を稼ぐこと、それだけがテディにできることだった。

「テディさん…… 大丈夫です、二百人は配置に着きました」

候補生のリーダーが、ロータリーの中央に立つテディの前に現れる。

「やれます」

「街の人たちは？」

少年が次々に候補生たちを弾き飛ばしていた。胸元の布地を掴んでテディは感情を抑制する。自分が戦えば仲間たちを助けることはできる。だが、それでは被害が拡大するのだとわかっていた。それでも相手に殺意がないのがせめてもの救いだった。

「範囲内からは逃げてくれたようです。ケガ人も相当数…… ですが確認する限り、死者は」

リーダーはそう言いながらも目を伏せた。

「わかった、みんなは順次下がって、あとはあたしがやる」

テディは頷き、意識を集中する。

装束の内側で身体に流れ込む魔力が増大するのがわかる。

「三分…… それで扉を開けるから」

「了解しました。生きて、帰ってきてください」

リーダーはそう言うと、少年に吹き飛ばされた候補生を拾いに離

れていく。

「……死ぬつもりは、ないけど」

呟いた。

覚悟は持っている。

テディは大きな十字を切り、剣を抜き放って地面に突き立てた。

ロータリーの中心から地割れが広がり、光が溢れ出す。それが合図だった。少年に立ち向かっていた候補生たちはそれぞれが決然と立つ守護者の姿を見て、その場から離れていく。空気が変わったことに気付いたのだろう、少年は周囲を見回している。

「……」

そして地上から見上げるテディと目が合った。

ふわりと空中を蹴って、少年が駅舎の屋根の上に降り立つ。

「おれのことあきらめてくれた？」

「そう見える？」

少年に合わせて、テディは声を張り上げた。

「ぜんぜん！」

悠然と、少年は笑って言う。

「あなた、名前は？」

「馬園勇希」

「ユウキ。そう。あたしはテディ」

名前を聞いたことに理由はなかった。だが、誰を殺すのか、知っておくことが必要であるようにテディには思えた。ここで少年が死んだ場合、その最期は彼女しか知ることができない。

「テディ。おれ、昨日みたいにはいかないよ？」

そう言う少年の身体は溢れ出す魔力を受け入れようと《変異》をはじめていた。

扉が開かれつつある。

「それはこっちのセリフね。女に恥をかかせて、無事で済むと思わないで」

軽口に応じつつも、テディは緊張して、その様子を見守る。

残り一分。

テディの目の前で少年の肌が紫色に染まる。血管を通じて伝わる魔力は白目まで染める。両肩から生えてきた角のようなものは、その紫の皮膚を広げ、毒々しい翼となった。少年自身も自分の身体の変化に気付いたようで驚いたような顔をしている。女の子のようだった身体も、ごつごつとした骨が浮かび上がってまったく別のものに変わっていく。

「なんだこれ」

「ユウキの魂は開かれた」

テディは迷いを振り切る。

扉の開放。

鍵を使うことによって起こる肉体の《変異》は本来『そのもの』の形に影響を与えることはない。魂は『そのもの』の形を記憶し、この世界に繋ぎとめ、魔力に対して魂は自己防衛のために閉ざされているものだからだ。だが、魂がそれを求めるとき、鍵はその扉をこじ開ける。それは鍵に内在する性質であり、魔力が持つベクトルそのものである。

魂が望む限り、扉が再び閉ざされることはない。

「それはあたしを排除するまで戻らない」

テディは自らの扉を開けていく。

十秒。

「そして、あたしのこれも」

そう言った瞬間、二人の頭上に輝いていた太陽が消えた。

4 扉の開放（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

5 境界域の戦い

暗くなつたというより、自分の周りからなにもかもが消えてしまったかのような一瞬の闇の後、勇希の目は淡い光を見ていた。それが胸に突き立てられた鍵の輝きであることに気付くのにそう時間はかからない。駅前には夜よりも暗く、静かだった。立っていた駅舎の屋根はそのままであり、目の前に見える景色も変わっていないのだが、街が平坦に見える。

遠景が失われていた。

見渡しても、数百メートル先にはなにもない。見上げてもなにも見えない、空はなかった。木乃駅前に見慣れた景色が切り取られたセツトのようになってしまっている。だが、勇希にも数十メートルのビル数十個と学校のグラウンド二つ分はあるロータリーと駅をひとまとめに配置できる巨大なスタジオがそうそうあるものではないことはわかる。

変わっていないのはデディが目の前にいることだけだ。

しかし、その姿は先ほどまでの奇妙な衣装を身につけた女ではなくなっている。

金色の体毛に覆われた獣がそこにいた。その《変異》によって破れてしまったであろう衣装が足下に落ちている。元々の人間としてのラインは残っていて、顔の正面、身体の前、掌にこそ体毛は生えておらず、デディであることは確認できる。勇希が昨日もみしだいた乳房もむき出しになってそこにあった。野生味溢れる姿であった。

「……デディ、カッコいいっ！ クマみてーっ！」

勇希は正直に感想を述べた。

「どうもありがと」

あまりうれしくなさそうにデディは苦笑いする。

「おれはどう？ どう？」

勇希は自分に生えてきた翼を広げて見せた。思う通りに動かせる。広がった薄い皮膚の部分が魔力の光を帯びている。ふと触るとおデコに小さな角も映えていた。肘の骨が鋭く伸びて槍先のように見える。身体中から力が溢れてくるような気がする。

「強そうね、悪魔的に」

「マジで？ つよそう？ やったっ！」

単純に嬉しい言葉だった。男子として一度は言われたかったことである。コンプレックスがあったということではないが、普段、男らしさについて褒められることはまずなかった。

思わず羽ばたいて宙返りした。

「んんっ」

浮かれる勇希にテディが咳払いする。

「忘れないでね、あたしたち、敵同士だから」

「……あつ、そうだった」

ふわふわと浮かびながら胡坐をかき、勇希は手を叩く。戦うのだった。自分と相手と世界に起きた変化にビックリして頭から吹き飛んでしまっていた。

「でもここ、どこ？」

「ここは境界域、あたしたちの世界でもなく、魔界でもない、世界の狭間」

その質問を待っていたかのように、すかさずテディは説明した。

「……？」

浮かんだままさかさまになつて勇希は首を傾げる。

「わからないと思う。理解しろと言つても難しいだろうってこともね」

「そっか、じゃ、やろうっ！」

考えてもわからないことで勇希は悩まない。翼を大きく広げて、きりもみ回転すると、彼はロータリーに向かってまっすぐ突撃する。一瞬の加速だったが駅舎の屋根がめくれ上がる。拳に魔力を込めテディに振りかぶる。

だが次の瞬間、テディは飛び上がって勇希の背中に組んだ両手を振り下ろしていた。

「……んげがっ」

「まったく子供なんだから」

地面に叩きつけられた勇希は背骨がへし折れるような嫌な音を聞いていた。既に割れていた地面は、衝撃で瓦礫を巻き上げる。潰れるように伸びた彼の両翼をテディの足が踏みつける。足の裏にも体毛は生えていない。

「この世界について理解はしなくてもいいけど、ユウキ、あたしを倒してここからどうやれば出られるのかわかってるの？ 浅はかな子ね」

そう言いながらテディはグリグリと爪先に力を込める。

「……んぬぬーっ」

踏まれた翼で強引にはばたこうと勇希はもがく。

その力は強く、上に乗ったテディをもともしない風を周囲に起こしていた。

「まったく……」

「えっ？」

まったく不意の動きだった。テディがその場でジャンプしたのだ。その瞬間、勇希の翼は自由になり、一気に飛び上がる。

だが、

「痛い目を見て頭を冷やすことね」

それも一瞬だった。

テディの両手、そこにある鋭い爪が翼の筋肉に引っ掛かり掴んでいた。浮力を失い、落下していく勢いもそのままに勇希は振り回され、今度は頭から地面に叩きつけられる。

「はがっ……」

勇希はテディの冷たい双眸を見てこの状況にはじめて恐怖する。
「まだよ」

垂直に地面に突き刺さるような状態の勇希をテディは蹴り倒し、

その背中を踏みつけ、掴んだままの両翼を容赦なく思い切り引き千切った。

「うあああああっ！」

ぎちぎちぎちと肉が避ける嫌な音が勇希の全身を駆け巡る。見上げると、テディのテディの手の中で切断されたトカゲの尻尾のように、自分の翼が暴れていた。紫色の肉の中に、白い骨のようなものも見える。

「……殺^やる、ってこういうことよ？」

そう言って、テディは翼を地面へ投げ捨てる。

「う、うう」

「でも、まだ殺さない。話し合いで解決するならそれが一番だからね？ この境界域の内から元の世界に出る方法は一つしかない。鍵を二本使う。わかる？ ここに刺さっている状態で、もう一本刺そうとする。簡単でしょ？」

「……」

テディがその大きな乳房の谷間を指差すのを勇希は涙目で見ていた。

痛みが治まらない。血は止まっていたし、翼が取れた場所はすぐに再生しようとしているのがわかる。けれども動けなかった。痛みもそうだが恐ろしかったのだ。殺される。その意味がようやく実感として彼の中で理解されつつあった。

「この場所に鍵は二本しかない。あたしの一本と、ユウキの一本。お互い、相手から殺して奪うか、殺されたくなければ相手に鍵を差し出すか、そうしなければ出られない。でも、安心して、二人一緒に出ることは可能よ？ ここはあたしたち守護者が実戦に即したトレーニングをする際に使う場所でもあるから。使い方さえ間違えなければ安全に出られる。ただし、二人一緒に帰れるのはユウキがあたしに鍵を差し出したときだけ。元の世界に戻って、あなたは二度と鍵を使わない、そういう条件でならば生きて出してあげることができる」

血飛沫を浴びた状態だったが、テディは妙に朗らかに喋った。

「意味、わかる？」

「……おれがこのまま出るには、テディを殺すしかないってことだろっ！」

再生して一段大きくなった翼を広げて、勇希は飛び上がった。しかしそれは、戦う意思を固めたというより、逃げる意識からだった。完全に飲まれていた。

「正解」

そう言いながら、テディはスタンスを開いて空を飛ぶ勇希に向かって拳を突き出す。

「でも、無理っ」

「っえ？」

先に両翼が本のページを閉じるようにぺたんと張り付いた。

直後、風と言うにはあまりにも硬い空気の壁が勇希の自由を奪う。気付くと背後のビルに叩きつけられていた。そこでようやく拳の風圧が大砲のように自分を打ち抜いたのだと理解する。コンクリートの壁を数枚突き破ってもその勢いはなくなり、ビルを貫通して勇希の身体は中空に投げ出された。

「バケモノだ」

貫いたビルの向こう、テディの背後で駅舎が跡形も無く吹き飛んでいるのが見える。

反動だけであの破壊力である。

「……勝てねー」

もう鍵を渡してしまった方がいいのではないか。

はばたく気力を奪われて、勇希の視界はぐらりとなにもない空間を見上げた。

少年を弱気にさせるには充分な一撃だった。あれだけの力を持つ相手が自分に鍵を渡すことなどありえない。そんなことは勇希にもすぐにわかった。殺さないでいてくれるだけなのだ。丁寧に事情を説明してくれたのも、鍵を差し出せば殺さないという意味表示

でしかない。テディは負けるつもりがないのだ。

「けど」

鍵を渡してどうなる？

死にたくはない。生きていなければ母親にもう一度会うこともできない。だが、大人しく渡して会えるのだろうか。そんな願いが通るのだろうか。勇希は理解している、この戦いは自分が挑んだものだ。学院で、そして駅前で、女が嫌いだったから。

身勝手だ。

「許されるわけねーよ」

都合のいい、どこまでも自分に都合のいい甘えた考えだった。

勇希は地面すれすれで踏み止まり、正面を向く。

間髪入れずにビルの壁を突き破ってテディが現れる。

「死ぬ覚悟は決まったの？」

金色の体毛はその一本一本が生きているように動き、徐々に内側から発光していく。魔力が満ち満ちているのが伝わる。それはそのまま威圧感そのものとして周りの空気を細かく振動させていた。降り注ぐ瓦礫がテディの周囲だけ弾かれて飛散する。そのひとつが勇希の頬を掠めて皮膚を切り裂いた。

「……死なねーよ」

異様な重い音と共に、傾くビルを見上げて勇希は唾を飲み込む。

「死ぬのはそっちだ」

来る。

「そ」

勇希は高く飛び上がった。だがそれよりも早くテディの掌が彼の顔を掴み、地面へ叩きつけた。声も出せないような衝撃だった。その地面を中心に、周りの建物が吹き飛んでいくのを顔に当たられた指の隙間から目撃する。

「楽に殺してあげる」

「……っ」

仰向けの顔面に振り下ろされる拳を翼で防いだのは反射的なもの

だった。

硬くなれ。

両側から勇希を包んだ翼はその思いに応えるかのように硬度を増す。衝撃は内側まで貫いていたが、二枚重ねてめり込んでくる拳そのものは止めていた。それで勇希はようやく自分の翼の使い方を理解した。一瞬、柔らかくして拳を受け流すと、横にゴロゴロと転がった。

「死なねーだろ？」

血反吐を吐きながら、勇希は強がった。

直撃でなくともテディの拳から受けるダメージは尋常ではない。

「……苦しくなるだけ」

そう言った次の刹那にはテディの脚が勇希を捉えていた。

腕で受けるより早く翼が勇希を守る。だが、衝撃で地面と水平に吹き飛ばされる。水切りの小石のように地面をバウンドし、自ら踏ん張って、勇希は飛び上がる。

信じられない光景が広がっていた。

「あんなの、勝てねーよ」

テディの正面方向にあった駅前建物は粉々になって真っ暗な空間へ広がっていた。一瞬にして風化してしまったような具合である。周りを見ると、来た時にはあった街の大部分がもう跡形もなくなっている。身体が無事であることの方が不思議なぐらいだった。

「余所見してていいの？」

「げっ」

気付くとテディは目の前まで飛び上がってきていた。

振り下ろすような拳が身体を反らせた勇希の正面を掠める。

「厄介な力」

そう言いながら落ちて行くテディの足下、眼下の光景は街の風景を砂漠に近付けていた。翼を？ぎ取られるような暴風に流されながらも、勇希はさらに高くへ舞い上がる。自分に唯一あるアドバンテージは高さだけだ。

「……でも」

逃げていても勝てない。勝てない限りここからも出られない。
地上のテディが豆粒に見えるまで高くまで上がって、勇希は息を吐く。自分でも拳を握って振って見たが、対抗できるような腕力は備わっていない。鍵の《変異》が自分の身体にどう影響するかは個人の資質によるもの、父親のそんな説明を思い出す。

勇希ははばたく自らの武器を見る。

「そっか」

紫色に輝く翼、それは魔力が通っているということだ。
やるしかない。

勇希は思い切り翼を硬くして、一気に急降下した。

一直線に金色の獣に向かって。

「ちつくしょおおおおおっ！」

ぐんぐん速度を増していく。鍵は告げていた。翼を剣のように使え、と。

見上げるテディと目が合う。

「死ねえええっ！」

「……バカな子」

ほとんど無造作にテディは勇希の突撃をかわした。

「予想してるよ、そのくらいっ！」

切り返して、背中にその毛むくじゃらの背中に向かって翼を当てに行く。

一閃。

滑り込むように着地した勇希はバツと立ち上がってテディと正対する。

「この毛が飾りで生えてると思った？」

「え？ あっ」

ボロボロになっていたのは翼の方だった。硬さで負けていたのだ。
「剣は、こう使う！」

テディの指先、鋭く尖った爪が輝いたかと思うと、勇希の両翼が

バラバラに切り落とされフカのヒレのようになった。そして目の前に立っている。

「終わりよ」

まさにクマが獲物を仕留める時のように掌を振り上げるテディ。

死ぬ。

「なるお……」

その時、勇希の脳裏に過ぎったのは、昨日の戦いのことであった。相手の懐に入り込み、スキを作る。

「これでどうだあっ！」

むぎゅ。

そういう感触を想像して掴んだのだがそこはまるで金属のように硬かった。

「あれ？ え？」

勇希は半笑いで目の前のテディを見上げた。

「……」

振り上げたのとは逆の掌が勇希を突き飛ばしていた。

「ひとつ教えておいてあげる」

地面を転がる勇希に追いついて、拳を振り上げながらテディは勝ち誇った。

「おっぱいは女の武器！」

その通りだ。

薄れゆく意識の中、顔面にめり込む衝撃と共にその言葉は強く勇希の魂に刻み込まれた。気安く手を出していいものではない。迂闊に触れようものなら死を招く。

5 境界域の戦い（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

6 魔法よりもっとマジカルな利権

時は少し遡って。

声をかける相手を間違えたかも知れないと大友好男おおともよしおは後悔していた。

今まさにこの木乃駅前が異様な状況にあるというのに、
「申し訳なかったす！ ヤタテっちのマンガと、ミズキっちのP
SPとソフトは自分が弁償するっす！ するっすけども、この人とはそこで会ったばかりで、ラブコメなんて誤解なんすよ。信じてくれないっすか？ 自分、アニメに魂売ったっすから！」

好男が声をかけた少女は地べたに跪いて頭を下げ、

「それはこれからの行い次第だからね？ ナツメちゃん」
「反省は行動で示すのだ、ぜっと」

それを見下ろす友人らしき二人は仁王立ち、この女子高生たちには緊張感というものがこれっぽっちもない。好男は上空で戦っている少女たちが自分の方へ落ちてこないかビクビクしながら待っていた。後悔はあるが、チャンスはチャンスなのだ。

「あー、君ら、話がまとまったなら早く避難しよう、ここは危険だ」
「……オジサンに言われなくても私たちは逃げられますから」

「心配無用だ、ぜっと」

そう言う私服姿の二人は制服姿の少女の手を引っ張っていきなり走り出した。

「え？ ちょ、ちょっと待って」

「オニイサン、さよーならーっすっ！」

ずるずるとひきずられて少女は細い路地に入っていく。

「……おいおい」

呆気にとられた好男だったが、すぐに追いかける。

瓦礫が落ちてくるかも知らないのにどうしてそっちへ逃げるのかまるでわからないが、女子高生に論理性を求めても仕方がない。

この街に来て、最初に見かけた聖木乃の制服、それを追いかけた結果こうして奇跡的な現場に居合わせる事ができたのだ。掴んだ糸は最後まで離すまい。半信半疑だったが本当に世の中が変わるのかもしれない。好男にもそういう高揚感があった。魔界の穴とやらが開かれる現場を見られるかもしれない――

そのタレコミは半年前、冬。

「大友さん、魔法、わかりますか？」

挨拶もそこそこに、男は話しだした。

「……あれでしょう？ ハリー・ポッター？ なんてあんなに売れたんですかね？」

好男はテーブルに置かれた名刺の肩書きと、男の顔を交互に見ながら苦笑いした。

都内の喫茶店。上司が世話になった政治家の紹介だから、と取材を押し付けられて出向いてみれば、国立大学の教授、ラフな格好だったが、年齢的に言えば出世コースに乗っている方と言うべきだろう。やり手ということだ。しかし、世の中に出ていないのが丸わかりというか研究に没頭してきたという子供っぽさも同居している。

「そういったフィクションの魔法ではなく『魔界の生活技法』、それが魔法です」

「はぁ……生活技法ですか」

好男の頭に浮かんだのは、油汚れが驚くほど落ちる裏ワザ、みたいなものだった。さもなくば、女性が必ず喜ぶセックステクニク。どちらにしても上司の話の「秘密のスクープ」という響きからは程遠い。期待していたわけではなかったが、あるいは魔法のセックスというタイトルなら穴埋め記事ぐらいにはなるかもしれない。

「信じられないのが当然だと思います」

「いえいえ、そんな。魔界の生活技法、興味深いですね」

つまらなそうな顔をしたかどうかと、好男はコーヒを飲んで誤魔化する。

「あるものはある、としか言えない面があつて、魔法の存在という前提を議論すると長くなってしまうので、こちらの資料を渡します。後で確認してください」

「……はあ」

そこは大事じゃないのだろうか、と思いながら、好男は男の差し出したフラッシュメモリを受け取る。面倒な話ならば聞かないで済むに越したことはない。

「それで、魔法を使うには魔力、というものが必要なのです。大友さん」

「魔力」

ふんふん、と頷きながら好男は今晚なに食べようかと考えていた。魔力、魔法、魔法と言えば床とかにごちゃごちゃと円を描いてうんたらかんたら。まりよ、まりよね、マヨネーズでごちゃごちゃと、そうだ。お好み焼きを食べよう。鰹節が踊り、ブタ玉が召喚される。考えると胃がきゅつとなった。

「魔力はこの世界には存在しないものです」

「……え？ 存在しない？ でも魔法はあるって、先生？」

脳内で焼ける鉄板から現実に戻って好男は反応する。

「魔界にあるのです」

「……はあ、だから魔界の生活技法」

魔界があるのかよ。

好男から真面目に聞く気力は失せていた。一人でお好み焼きは少し寂しい、最近、いい感じになってきたあの子を食事に誘おうか、そんなことしか頭には浮かばない。

「この世界で魔法を使うためには、魔界から魔力を持ってこなければなりません」

「はー、大変ですね」

相槌だけは職業的に欠かさない。

学校の先生をやっているって言うからなー、急に呼び出しても来てくれないかなー。

「そこで魔界の穴、というものが登場してきます」

「ええ、ええ、穴、穴ですね」

いいケツしてんだ。

「しかしそれは基本的に閉ざされているものです。何故なら、魔力と言つエネルギーはエネルギーであると同時に人間の魂に強い影響を及ぼす危険なものでもあるからです」

「なるほど」

「魔力によつて魂が《変異》すると多くの人間は自らが持つ本来的な欲望から逃れられなくなると考えられます。その先にあるのは社会秩序の崩壊に他ならない。それ故、世界中に数千箇所あるとされる穴ですがひとつひとつ厳重に守られている」

「ガードが堅い、わかります。」

落ちそうで落ちない。

「そう、本来は決して開かれるものではないのです。にも関わらず、ある勢力が魔界の穴を開こうとしている。その事実を広く世間に伝えてほしいと考えています……」

男は結局それから二時間ぶつ通して話しつづけた。

しかしそのタレコミが広く世間に伝わることはなかった。その日、好男は女にふられた。そのショックもありメモこそ取っていたもののその存在を忘れたままになる。それを記事にせよとの上司の指示もないまま、春になる前に彼はクビになり、結果としてそのタレコミの存在自体、最初からなかったのと同じことになってしまった。

失業後はずっとパチンコに通うばかりのプラプラした生活を送っていた好男は、金に困って売るものを探していたときに、男から受け取ったフラッシュメモリを見つけ、気紛れの興味と暇に飽かせて男の話を追うことにしたのは気の迷いみたいなものだった。

季節は夏になっていた。

——そして、世の中なんて変わってしまえばいい。

魔法は胡散臭かった。それでも好男の関心を集めたのは男から受

け取った資料の中にあつた大規模で不透明な予算である。防衛予算が形を変えて、国内のいくつかの私学へ流れ込んでいる。そこまでわかれば充分だった。魔法の存在は信じられなくとも、金の動きは信じられる。金が動く所にはなにかがある。魔法よりもっとマジカルな利権が。

魔界の穴。

好男の頭の中で、それは金を飲み込んでいくブラックホールのようなものになりつつある。長くつづく不況、下り坂の世情、上がりつづける税金、失業した自分、なにかもがそのせいであるように感じられてくる。八つ当たりには違いない、だが当たる理由はある。それが開かれて世界が変わってしまうなら、自分を取り巻く境遇も変わるはずだ。

シンプルな確信だった。

そして確信は実感に結びつく。

木乃市、そして聖木乃女子学院を選んだ理由は単純にリストの中で最も近場だったからという理由だが、結果的には正解だった。

守護者。

男の資料によれば、魔界の穴を守るために教育されている少女たちで、幼い頃から清廉潔白な魂を育て魔力に対して抵抗力を獲得した魔法使いであり、その任務遂行のために超法規的権限を与えられているとのことだ。

「……………一般市民を勝手な戦いに巻き込んでも痛くも痒くもないってことだ」

駅前の惨状を後に見ながら、好男は細い路地を駆けていく。

あいつらこそがこの世の癌で、

「頑張れ、少年」

ならばそれと戦うあの子供こそが正義に違いない。

男子が魔法使いになることはない。そう男の資料には書かれていた。

それは女子と男子の魂の生育過程とやらの根本的な違いがあるから

だという。男は欲望から成長し、それを理性で押さえつけていき、女は理性から成長し、それに応じた欲望を持つ。好男にも同意すべきなのかどうなのかはわからない意見だが、あの少年が男である時点でそうした魔法の裏事情から外れた存在であることは確かだった。誰かが魔界の穴を開けてくれればいい。

その現場を見届けてやる。

「にしても、足速いな、あの子ら」

ナツメと呼ばれていた少女の足が遅いらしく、時々もたつくので離されるということはなかったが、あとの二人はまだまだ余裕がありそうだった。体力に自信があるつもりだった好男だが、若さにはなかなか勝てない。脇腹が痛くなってきていた。

運動不足だ。

一キロぐらいいは走っただろうか、肩で息をしながら追いかけると不意に三人の動きが止まった。来た方を見て硬直している。変質者と勘違いされたかと好男は作り笑顔を試みたが、その表情が恐怖に染まってるので振り返る。

「街が……」

思わず呟いた。

四人が立つ百メートルほど先から、線路辺りまで、直線で五百メートルほどだろうか。

好男は慌てて駆け戻る。

ケーキにナイフを入れて四角にくり貫いたかのように、地上の建物とそれを支える地面が忽然と消失していた。十メートルはあろうかという深さまで抉れた地下は、寸断された上下水道から溢れていると思しき液体が広がってきている。

「魔法少女っす！」

背後からした声で見上げると、守護者の少女がその周辺からジャンプして飛び去っていくところだった。あの少年ごと街の一角を消し飛ばしたのだ。魔法で。好男がそう理解するのに時間はいらなかった。なんということだ。

たった一人でこの腐った世の中に戦いを挑んだ少年が死んだ。

「これで社会の秩序を守ったって？」

そんなバカな話はない。

「ふざけんな」

それでいいはずがない。

陽炎の立ち昇るアスファルトの上、ぽっかりとあいた巨大な穴、一気に流れ出してきた汗を拭いながら、その時、好男は決意していた。

「穴を守るために街に穴をあけて、それではいそいそですかとは言えないな」

誰も開けてくれないなら、自分で開けよう。

6 魔法よりもっとマジカルな利権（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

7 君の尻を見ていいのは私だけだと思いたい。

列車が一度急停車し、しばらくして動き、近くの駅に降ろされた。リュックの中にいる私には細部の状況までは把握できないが、人身事故の類ではないらしい、ということぐらいは聞こえる音からもわかる。少ない乗客の戸惑いの雰囲気も伝わってくる。どうやら異常事態のようだ。

「この駅もきれいになってる……」

笑子の方と言えば、二十五年で大きく変わってしまった駅や街並みの数々に驚くことばかりのようだ。自動改札には引掛かり、山の手線の広告モニターは信じられないようだった。長年この沿線に暮らしている私でさえ、ふと気付くと昔の風景がひとつも残っていないことに驚いたりするのだからそうだろう。それでも、彼女は自分が過去から未来へ来たのだということそのものは落ち着いて飲み込んでいるようだ。SF小説が好きだといつか言っていたから、おそらく心の準備が出来ていたということなのだろう。

「……ふあー」

感嘆している。

ゆっくり二十五年後に慣れてもらいたところだったが、私の髭が感じる気配はなんらかの危機を感じ取っていた。

虫の知らせもそうだが、半裸の状態で先に帰してしまった勇希のことも気がかりになってきていた。子供だから捕まりはしないだろうと考えていたが、冷静になってみれば、なんらかの事件に巻き込まれたと警察に保護されるというような事態は充分に予想される。それでもまだ警察ならいい。鍵を使わしてしまったことで《転位》反応から息子の居場所が守護者側に発見される可能性もあった。

そんな私の心を反映しているのか、ホーム内を行き交う人々の顔もどこか不安そうに見える。嫌な予感がする。最近の私の裏目つづきから言っても。

「君、駅員か誰かに事情を聞いた方がよくないだろうか？」

リュックの内側から背中を押し、私は呼びかける。

「え、あ、そうですね。まぞのさん」

やはり異常事態だった。改札脇の駅員室前が騒然としている。キップの払い戻しや振り替え輸送について尋ねる人々、そして完全に顔色が変わっている人々。私も思わずリュックから半分出していた頭を思い切り出して聞き耳を立てる。

「木乃駅が消えたってどういうことですか？」

中年の女性のヒステリックな叫びが突き刺さる。

消えた？

「どういうことですかね？」

「……」

笑子の問いかけにも、頭を出している状態なので返せなかったのだが、そもそも返す言葉はなかった。消えたと言われてもわけがわからない。事実を確認している、そんな通り一遍の答えをする駅員の顔も突っ撥ねているというよりは本当に確認している最中という具合だった。断片的に聞こえる人々の会話からすると、そういう情報がネットを通じて流れているというようなことしかわからない。

私はリュックに引っ込んで笑子の背中を押す。

「とりあえず出よう、タクシーを拾って行くしかない」

「タクシーですか？ お金あります？」

「あ……」

私は中で勇希の財布を確認する。私が死んだことになった後、母からずいぶん小遣いを与えられているらしく財布の中身が潤っていたのを最初の晩に見たが……案の定というか、下着を買ってかなり目減りしている。ギリギリ、いや笑子の実家ならば、と言っても笑子が十三歳になっていては事情を説明して金を出してもらうのも時間がかかる。

悩ましい所だ。

「あ、この地下鉄開通してます」

「え？」

リュックから顔を出すと、笑子が路線図を見上げている。

「小学生のとき、授業で習ったんですよ。そういう計画があるって大人になるまで乗れないなって言ってたんですけど、本当に二十五年ってすごいなー。これに乗れば、隣町まで行けます。そこからならバスで市内まで、バス残ってますよね？」

「……ああ。そうだ、った」

首を引つめて私は落ち込んだ。使っていない路線は失念しがちとは言え、タイムトラベル状態の少女に現在の路線の的確な利用法を指摘されるなんて赤っ恥もいいところだ。

私が過去の人間か。

「なんかこんなに早く乗れるって得した気分ですね」

「そうかもしれない」

足取りも軽く笑子が歩き出すのを感じながら私は深く深く沈んでいく。

地下鉄には影響が出ていないようだった。その車内の会話からおよその事態が私にも飲み込めてくる。そしてその意味するところも。『魔法少女』という単語がしきりに出てくる。私も詳しい方ではないがそれが守護者たちをある種のフィクション的な存在として捉えた呼び名だろう。話の大枠は、魔法少女が少年を襲い、街が壊れたという未確認の情報。そして駅前のビル群と駅舎の消滅。そのタイミングから類推されるものはひとつしかない。

勇希だ。間違いなく。

しかしあまりにも手回しが早い。半年前の時点でも、そこまでフットワークの軽い組織ではなかったはずだ。確かに管理されていない鍵とそれを使う男子が現れたことは重視される案件だろうが、そこまで強引な手法を取る事前準備が一日やそこから整うとは考えにくい。つまりは準備が出来ていたということになる。

私たちに対してというより、別の勢力に対する対抗措置の準備が。

隣町の地下鉄駅にも微妙な雰囲気漂っている。

この目で見えるまでは信じたくないが、噂として流れている情報が本当ならば当然だろう。

「バス、運休ですか」

笑子が残念そうに言っている。

私はすぐにでも飛び出して向かいたい気持ちを殺してリュックの底で丸くなる。猫の私が出て行っても笑子に背負われて行くより早く移動することはできないし、消えた街の中に勇希がいるとするならばすぐに外から助ける術はない。私の力だけでは及ばない。それを考えると笑子に事情を説明もできない。まずは笑子の母に会い、そこから話を通すのが事態を打開する最短の順序だ。

これは本当にタイミングが悪いかもしれない。

「ここからはタクシーを使うしかなさそうですね」

駅周辺で客待ちをしているタクシーに乗ろうとするが、運転手たちから木乃市近辺の道路は大混乱で到着が困難だと言われ、次々に乗車を拒否される。大通りに出て数台を止めてみたが結果は同じだった。笑子が子供なので乗せたくないという裏も伺える。

しかし恐らくそれすらも表向きの事情だろう。

笑子は人気のない裏路地に入り、リュックを地面に置いて私を引っ張り出した。

「どうなってるんですか、もう」

憤懣やるかたない様子で、そう言う。

「木乃市は今、封鎖されている」

状況から導き出される推測を私は口にした。

「封鎖、ですか？」

「電話も通じないはずだ……」

極めてまずいことになった。

これは私が知る限りでも非常事態の対応に相違ない。人間の行き来を止め、物理的な封鎖が行なわれると同時に、内側では外からの情報が封鎖されているはずだ。市民にも知らさないまま、街は孤立

している。パニックを封じるための自衛隊も活動をはじめては
ずだ。

勇希への対応はその一部でしかない。

むしろ私と息子の行動がなにかのきつかけとなったのかも知れな
いが、この際どちらが先で後でも問題は同じことだ。笑子の実家も、
私の家も同じ市内にあるわけだから行く手を阻まれたに等しい。完
全に蚊帳の外。いや、それは人間だからだ。

そう、今の私は猫だった。

猫ならば封鎖もなにも関係ない。市内に入ることも難しくはない
はずだ。笑子を連れて行けない状態で笑子の母親に会って説明する
のは大変かも知れないが、それくらいはやってやれないことではな
いだろう。笑子をここで待たせることになってしまいが、息子のこ
とを放置しておくわけにもいかないだろう。どちらが危険かと言え
ば息子の方である。

「……君、しばらくここで待っていて、え？」

思考から、顔を上げると、笑子はいなかった。

どこへ？

私は周囲を見回して路地から通りへ出る。その左手側、五十メー
トルほど行ったところにケータイを耳に当てて首を傾げている笑子
が立っていた。まったく知らない道具だったはずなのにもうその使
用を飲み込んでいる。のほっとか何をしているのだ？

「あ、それをお願いします」

集中して声を拾う、なにかを指差して、何度も頷いている。

「乗って帰られますか？」

女性の声もする。

「はい」

「少々お待ちください」

リュックから離れることも出来ないので見ていると、笑子がこち
らに気付いて、両手で大きな丸を作った。なにがオーケーなのかさ
っぱりわからない。と想う間もなく、笑子の正面の建物から自転車

を押して女性の店員が現れ、値札等をテキパキと外し、ペダルを取り付け、タイヤに空気を入れ、サドルの調整をしている。

自転車だ。

ものの十分で、笑子は赤いそれを押して戻ってくる。

「本当に電話繋がりません。直接行くしかありませんね？」

「……いや、君、封鎖の意味を」

「それにしても自転車って安くなったんですね。さっきタクシーを止める時に見つけて気になってたんですよ。さあ、行きますよ。舞さんと約束しましたから、なにがなんでも」

そう言って、笑子はリュックと私を拾って、自転車のカゴに放り込む。

そしてワンピースの裾を気にしながら自転車に跨ってペダルを漕ぐ。服の下にはなにも着けてない状態だから無理もないが、サドルに乗せた尻が落ち着かないようでもあった。というようなことはどうでもよくて、

「自転車で行っても通れやしない」

私は周りを気にしながら小声で言う。

「まそのさんは、わたしに約束を破れって言うんですか？」

身体より少し大きな自転車をふらつかせながら、笑子は私を睨んだ。

約束を守る、それはかつて少女が私の妻だった頃にも、大事にしていた正義でもあった。変わっていない。そのことは少し嬉しかったが、怒らせたのは確かだった。

「そうは言っていない、言っていないが……」

慌てて取り繕おうとするが、笑子は取り合わない

「わたしの街です。行けばなんとかあります」

それだけ言って、腰を少し浮かせてスピードを上げた。

向かい風が来て、瞬間、ワンピースがまくれあがった。

なんの反射なのかわからないが、道行く男数名が凄い勢いで振り返る。

「き、君、落ち着いて、丸見えだから！」

「見たい人には見せておけばいいんです！」

完全に前傾姿勢の立ち漕ぎで、笑子はぐんぐん加速していく。

「それ絶対ダメだから！ 捕まるから！」

なにより気前が良すぎる。

君の尻を見ていいのは私だけだと思いたい。

まだ、今のところは。

「お願いだから、君！ お母様に合わせる顔もなくなるから！」

猫が喋っている状態を見咎められるかも知れないという懸念すら忘れて、私は時を越えた嫉妬に駆られて喚きつづけた。どんなサーブ精神があろうとも、安売りしていいものではないし、そんなに安くもないはずだ。

「わかった！ じゃあ、せめてパンツ、それか下に履くものを買っ
ていこう！」

というか、女の子として先にそっちを思いついてほしい。

「自転車、買ったらお金なくなりました！」

笑子は変速機を変え、さらにスピードを上げていく。

「ギアチェンジなんかできなくても、もっと安い自転車あったら
う？」

「だって、この自転車がいちばん可愛かったから！」

「……可愛い？」

私はママチャリと呼ぶにはワインレッドでスポーティに過ぎるシティサイクルを見る。可愛い要素がまずわからないが、その点は男子と女子のセンス差として、優先順位が端からおかしい。可愛い自転車の前に可愛いパンツでも買ってくれ、真面目に。

加速していく景色の中で、私は笑子の顔を見つめながら、それ以上にも言えなかった。こういう無鉄砲な気質は、確実に息子に遺伝している。そう強く感じながら。

勇希、無事でいてくれ。

7 君の尻を見ていいのは私だけだと思いたい。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

7 自作自演のキズナ

「なら来てみなさいよ！ 舞の家は木乃市の東側、駅からなら、すぐ近くに小学校があるからそこで会いましょう、木乃東小学校よ。そこに午後一時、わかった？」

『——まっすぐそちらに伺います』

笑子との電話を切って、舞は勢いでケータイをソファーに放り投げた。

「なんなの、ひじき女！」

落ち着かない気持ちでうろつろと家の中を歩き回る。

「舞が、勇希くんに騙されてるって、結婚を申し込まれたって、なに！」

無意味に壁を叩いたり、じたじたと足を踏み鳴らしたり、クツシヨンを放り投げたり、家の中を散らかしながら少女がたどり着くのはいつものように両親の寝室にある立派な鏡台の前だった。ゆっくりと前髪を持ち上げ、額を見て、深呼吸する。

キズナだ。

左眉の上から額の中央に向かって周りの皮膚とは違う白く細長い傷跡が残っている。これがある限り、勇希と？がっているのだと確認できる。舞はそれが変わらずそこにあることに安堵する。どんな相手が現れたとしても、これがある限り勇希は自分を裏切らない。

舞が勇希と同じクラスになったのは小学五年のクラス替えが初めてだった。

勇希の名前は既に女子の間では有名だったが、舞はそれほど興味を持っていたという訳はなかった。彼女はみんなが熱狂しているのに逆に冷めるタイプだった。美少年だということも、モテるということとも認めるが、バレンタインに貰ったチョコを全部ゴミ箱に捨てたとか、告白してきた相手に容赦なく「ぶす」と言うとか、やたらと「女は」と口にして邪険に扱うとか、悪い評判は枚挙に暇がない。

それがクールなのだとうつとりする友人もいたが、彼女に言わせれば単なる嫌なヤツでしかなかった。

実際、同じクラスになると、その嫌なヤツっぷりは明らかだった。勇希は最初からクラスで孤立していた。男子の友だちもいる様子はなかったし、女子は遠巻きにけん制し合っている。いい気味だ、そう舞は思った。いくらモテたって人望があるということにはならない。すまし顔でいるから男子からは避けられ、告白してきた相手を雑に扱うから女子も遠巻きに眺めるだけになる。自業自得だ。

舞が見る限り、勇希は子供だった。

昼休みなど、男子がサッカーやドッジボールで盛り上がっている様子をずっと眺めている。理科の授業中に新しいことを見ると目を輝かせている。図工で絵を描いているときは妙に真剣だ。朝から憂鬱そうな顔をしていると思うと給食で嫌いなおかずが出たらしい。恋愛に関して妙に大人っぽい扱いを受けている癖に、内面はまったく子供だ。

特別に観察しなくてもすぐにわかる。

要するに不器用だった。恋愛のことはよくわかっていなくて受け入れられないが、人に好かれないとは思っていて、でも上手く表現できない。舞の中で嫌なヤツ勇希は、いつの間にか、可哀想なヤツ勇希に変わっていた。それが恋のはじまりだとは彼女自身も気付かなかった。

女子の間で勇希の話題は度々出た。その顔や、運動神経や、勉強のできるできない、立ち振る舞いが語られたが、可哀想なヤツとしての側面が語られることはなかった。そのことが、舞の中で「自分が一番勇希を理解している」という見えない優越感を育んでいく。

クラスメイトになって一年近く、勇希が忌引きしたのは半年前のことだった。

「お父さんが亡くなったんだって」

どこからの情報なのか教師が事情を説明するより早く噂は広まった。

勇希が既に母親も亡くしているという事実は周知のことで、両親共に失ったのだということを皆が把握する。それを知ったときに、舞の心の中で膨らみ続けた優越感が化学反応を起こした。なんとかしてあげられるのは自分しかないのではないか？
純粋な親切心のつもりであつた。

「馬園くん、おはよう」

舞が意識的に勇希に話しかけた最初だつた。

一週間ほどの忌引き明けで、他のクラスメイトがどう話しかけるかと様子をつかがう中、彼女はその一步を踏み出していた。自業自得で、可哀想なヤツでも、もう放つてはおけない。

「……おはよう」

勇希はしばらく間を置いて視線を逸らしながら答えた。

「これ、休んでる間のノート。舞ので良かったら使つて」

父親の死という話題には触れないように、そう悩んで決めたセリフを舞は口にする。賭けだつた。これまでの勇希は女子から貰つたものはことごとく捨ててきていた。

でも今ならば間違いなく受け取る。

寂しさを誤魔化してカッコつける余裕はもうないはずだ。舞には確信がある。勇希の心をわかつているのは自分だという強い思い込みを疑う客観性までは彼女になかつた。

「あ、ありがとう」

そして、勇希ははにかみながら受け取つた。

「うん」

賭けに勝つたという事実は少女の母性を満足させた。

手のかかる子供に対するような舞の態度とタイミングの妙。複合的要因が結果的に勇希の女性に対する基本的な警戒心を解いたのだらう。二人が次第に親しいクラスメイトの関係を築きはじめるのに時間はかからなかつた。目に見える不幸な境遇に、同情的になつていたクラスメイトたちも、彼女を基点にそれなりに穏やかな輪を形成していく。

大きな変化があったというわけではない、ただ少し勇希が素直になっただけのことだ。

そうして小五の冬が終わる。

小六、毎年の、そして最後のクラス替えがあり、舞はまた勇希と同じクラスになる。

「また一緒だね、馬園くん」

「そうだな、如月」

二人の関係は変わらなかった。よく話すクラスメイト。

だが、クラスを構成するメンバーの変化は、それを許さなかった。舞は気付くと女子グループから浮いた存在になっていた。そして陰湿な嫌がらせがはじまる。上履きを隠されたり、体操服を水浸しにされたり、あからさまに無視されたり。それがイジメと言うことはすぐにわかった。しかし、彼女には最初、自分がイジメのターゲットになってしている理由がわからなかった。そういう状況になることも初めてで、どうすればいいのかわからなかった。

先に気付いたのは勇希だった。

「おれにこーすりゃいい話だろうーが！」

ある朝だった。

憂鬱な気持ちで登校した舞は、教室に入って、自分のロッカーにぶちまけられたゴミと、自ら頭にゴミをぶちまける勇希を一度に見て、それを理解する。

嫉妬されていたのだ。

「だれがやったかしらねーけど、おれが原因なんだろう！」

勇希は怒りをぶちまけていた。

そんな風に怒りを露わにする彼を見るのは舞もはじめてだった。自分を守るうとしてくれていることがわかった。呼吸が苦しくなると胸が痛くなる。

「おれが如月と……っ！ 如月」

さらに叫びかけてだが教室の入り口に立つ舞を見て、バツが悪そうに黙る。

「馬園くん」

その瞬間、舞は恋に落ちていた。

「……如月のロッカー、やったのおれだから」

だが勇希は、意外なことを口にした。

「え？ それは……？」

わけがわからず、舞は彼を取り囲むクラスメイトを見回す。

だれもなにも言わなかった。

「わかんねーかな？ 上履きも体操服もおれがやった、うぜーんだよ、ぶす」

ゴミまみれの髪の毛をくしゃくしゃと掻いて勇希は言った。

掲げていたゴミ箱をその場に放り投げ、舞の横を通り過ぎる。ボドン、とプラスチックの空箱が間の抜けた音を立てて床に転がった。気まずそうにしていたクラスメイトたちがすぐに掃除用具をもってゴミを片付けはじめるのを見ながら、彼女は立ち尽くす。

その日、勇希は教室に戻ってこなかった。

それからイジメはピタリと止んだ。翌日からは勇希も登校していたが、舞はこれまで通りに話しかけることができなくなっていた。勇希の拙い自作自演を信じたというわけではない。自分を犯人にして原因ごとなかったことにしようとしてくれたのは、自分を想ってくればこそのことだ。その真心をムダにしているのか彼女にはわからなかった。

それにイジメられるのが怖くないと言えば嘘になる。

舞にも、かつて女子たちがけん制し合っていた気持ち理解できるようになっていた。勇希はモテるのだ。一人が仲良くすれば間違はなく他の嫉妬を買う。多くの女子たちが段階を踏まずに告白一発勝負に出るのも道理だった。あるいは勇希がそのことごとくを無下にしてきたことも、勇希自身がその立場をよく理解していたからなのではないか。

自分が知らないだけで似たようなことはこれまでにあったに違いない。

しばらく舞は悩んだ。

気持ちを整理しなければならなかった。好きになってしまった気持ちは疑いようがなかったが、果たしてそれがイジメを甘受して耐えられるだけのものであるのかどうか。友だちが友だちでなくなるかもしれない恐怖で舞は何日もうなされた。クラスでの孤立に耐える自信もなかった。

「でも、馬園くんは耐えてたんだ」

そう思ったとき、舞の覚悟は決まった。

放課後の教室に勇希を呼び出したのはGW前。

廊下の窓に沈む夕陽を見ながら、舞は教卓の上に腰掛けて待っていた。呼び出され慣れている勇希ならば、手紙を見ただけで意図は伝わってしまう。それでも、告白されるとわかっていながら、彼が呼び出しをすっぱかしたことがないことを彼女は知っている。

「如月、か」

教室後方の戸口から、長い影と共に勇希が入ってくる。

「うん」

舞は教卓からぴょんと飛び降りる。

「舞は、馬園くんのことが好き」

高鳴る胸の鼓動に急かされるように、その言葉が真っ先に出た。

「おれは……」

「わかるよ。あの時、馬園くんが舞のことを好きだったら、あんなやり方じゃなくて、みんなにそう言えば済んだもん。馬園くん、好きな人がいるんでしょう？」

もし、仮に勇希自身がだれかを選んでいたら、こんな状況にはなっていない。

両想いの可能性は最初から外していた。

「……」

黙る勇希に向かって、舞は教室を縦断する。

「おれは、如月には感謝してる。友だちとして」

「友だちじゃダメなんだよ」

舞は、俯く勇希の前に立つ。

「恋人じゃなきゃ」

状況は変わらない。

「でも、おれは好きでもないのに付き合ったり、そんなの」

「優しいんだね。でも、これから好きになってくれれば、舞は、いいよ？」

「きさら……ぎ」

舞はそう言いながら勇希の顔を掴んでキスをした。彼女自身にとつてもはじめてのキスだった。告白するだけではダメだとわかっていた。なにか結果を、彼の感情を動かさなければいけないと思い詰めていた。彼女は映画の映像見真似で唇を舌でこじ開ける。

味はよくわからなかった。

「やめろよっ」

顔を仰け反らせて、勇希は舞を突き飛ばす。

ふらりとよろけたが、舞は完全に踏み止まる。だが、キスしてもダメだったという絶望感が彼女の胸の中をいっぱいにしていた。本当に好きな人がいるのだ。自分以外に。そう思うと鼻の奥がツンと痛んで、まともにものを考えられなくなっていた。

だからこそあんなことができた。

机の脇にぶら下がっていた習字道具入れ、黒く長方形の箱を留める金具、それが視界に入った瞬間、反射的に舞は跳んだ。頭で突っ込んで、机と椅子ごとひっくり返す。

「如月！」

「……やった」

舞は痛む額を撫でて、手についた血を見て呟いた。

「やった？ なに言ってたんだ、血が……」

舞からは逆光で、勇希の顔は良く見えなかった。

「ねえ？ 勇希くん、舞の顔に怪我させた責任、取ってくれるんでしょう？」

舞は、真っ黒な勇希の顔を血のついた手で撫でる。

「如月？」

「舞。そう呼んでよ。恋人になったんだから」

言っていることがメチャクチャなのはわかっていた。

まるきり当たり屋の手口だ。この怪我の責任を押し付けて脅迫している。

「どうして、おれなんかのためにそんなこと」

「それは――」

鏡に写るデジタル時計が正午を告げる。

額から流れ落ちる汗に、長時間ぼんやりしていたことに気付いて、舞は前髪を元に戻す。どんな相手も恐れることはない。あんな脅迫の結果でも、勇希は表向き恋人として一学期の残りを一緒に過ごしてくれた。自分の気持ちさえ変わらなければ、この関係は終わらない。

「――好きだから、だよ？ 勇希くん」

鏡に向かって微笑むと、舞は立ち上がった。

だれにプロポーズしようが、裸を見ようが、女装をしていようが既に関係ない。

勇希の本心を無視した時点で、浮気されることも舞の想定の内だった。どれだけ浮気しようとも、自分にこの傷がある限り浮気以上の意味を持つことはない。それが浮気である限り、帰ってくる場所は自分以外にはありえない。

舞は、クスクス一人で笑いながら、階段を降り、リビングに戻る。ソファーに投げっぱなしになっていたケータイを拾って相手にかけなおそうとする。別れるつもりなんか毛頭ない。それだけを告げれば会う必要もないはずだった。

「……あれ？」

リダイヤルをして、しばらく。

「圏外？」

市内で圏外なんて話は聞いたことがなかった。なにかの通信障害だろうか、舞はリビングにある家族用のパソコンを立ち上げる。

起動までの間に麦茶を飲む。あとで勇希になんと言おうか考える。そろそろキスより先を強請ってもいいのではないか。

冷凍庫からアイスキャンディを取り出し舐めながら液晶画面に向かう。

「……ネット、？がないや」

ページを表示できません、の文字。

深く考えることはせず、できないならばと電源を落とす。

「テレビ、テレビ」

そして舞も知ることになる。

テレビの画面にはどのチャンネルを回しても同じ文字しか表示しない。

「市民の皆様は指示があるまで屋内で待機してください？」
この街に起こる事態を。

7 自作自演のキズナ（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

8 魔界帰り

魂の奥まで刺さった鍵は、その器である肉体を壊さない限り引き抜けない。

「……バカな子」

テディは呟く。渾身の力を込めて放った一撃によって出来た巨大なクレーターの中心、頭から突っ込むような体勢で地面に埋まる勇希へゆつくりと歩み寄る。子供の細い脚が萎れた花のように垂れ下がっていた。

意識があればすぐに回復することから、気絶したのだとわかる。殺すしかない。

これまでも、テディは必要があれば人を殺してきた。魔法は、その源泉である魔力が魔であるが故に、どう使おうとも人の魂を蝕む。放置しておけば地上に拡散する魔力を魔界の穴で食い止め、そこに近寄る人間を排除する。それが守護者であり、その力を与えられた人間の責務だった。躊躇いは自らが為してきたことさえも否定する。呼吸を整え、テディは勇希の脚を引っ張って持ち上げた。

「綺麗な顔だったのにね……」

泥に塗れ、原型を留めず歪んだ顔を見ながら少年の肉体を高く放り投げる。

「せめて跡形もなく」

心臓と脳、肉体を壊すためにはその両方を一度に潰す必要がある。そうするだけならば容易いことだった。だが、テディには、だれに葬られることもない亡骸を、無残な形で残していく気にはなれなかった。神を信じない彼女にとって人を葬るのは人だけだ。そして、ここにいる人間は自分だけである。

合掌でもするように両手を合わせる。

勇希の上昇が止まり、吊り上げる糸が切れるように頭から落下に転じた。

「……消してあげる」

テディが力を込めると、合わせた両手の先から金色の剣が現れる。少年の身体ひとつくらいならば易々と飲み込むであろう幅広の刃を構えて、彼女はタイミングを待つ。

「同じ世界の人間同士、殺しあうこともなかるうに」

それは足下からの声だった。

瞬間的に、テディは飛び上がるうとしたが、それよりも早く地面から伸びた手が彼女の脚を掴んで地面に引きずり込んだ。それと入れ違いに、複数の人影がクレーターの地面から這い上がってくるのを目撃する。

「このっ」

半分埋まった脚を掴んでいる手と土ごとテディは蹴り上げる。

「おっと、どっこい」

足先にぶら下がるようにして地表に現れたのは普通の人間の姿をした男だった。土で汚れてはいるが時代劇の着流しのようなラフな着物を着ている。そして腰には刀をぶら下げていた。男は掴んだ手を離して自ら空中に放り出されると、落ちてきていた勇希の身体をキャッチしてすんなりと着地する。

普通の人間業ではなかった。

「やれやれ、まったく派手なお嬢さんだ」

男は、勇希を地面に横たえようと、着物についた土を払う。

「あなたたち、何者なの？」

結果的に、テディは地面から現れた人間たちに取り囲まれていた。男もいれば女もいるが、一様に若い。そして皆、洋服ではなく着物を身に纏い、刀を携えている。髷や結髪でこそないが、どう見ても現代的でない雰囲気がある。

「俺たちや、魔界帰りさ」

男はそう言っですらりと刀を抜いた。

「あんたらの方じゃ、魔人、とか言っただったか？」

「魔人……」

男をきっかけに、周りの全員が一斉に抜刀したのを確認しながら、
テディは呟いた。

本物の魔人を見るのははじめてだった。

近代まで全世界的に魔界の穴にはある種の使い道があったことはテディも知識として知っている。魔界送り、と呼ばれるそれによって、各々の時代、迫害を受けていた人々であったり、罪人であったり、敵国の人間であったり、その他諸々、穴を利用する者、多くは時代の権力者たちの主義主張によって邪魔なものをこの世界から送り出すために利用された。

ただし、魔力がこちらの世界に出てきているように、魔界の穴は一方通行ではない。送り出せるということは戻って来ることも可能ということであり、魔界の環境に適応して帰ってくる魔界帰りが歴史には時折現れる。『魔界の生活技法』をこちら側に伝えた人物が、記録に残る最初の魔人とされているように、常にこちらの世界の脅威というわけではない。
だが、多くの場合、こちら側の世界に対して恨みを抱いている、と言われている。

テディは慎重に口を開いた。

「私は、守護者です。正式な手続きを踏んでいただければ、こちら側にはあなた方を帰還者として迎える準備があります。必要ならば私の方から話を……」

「そんなこたあ、知ってるさ」

丁寧な話そうとするテディを遮って、男は言った。

「そちらの世の中が大分変わったってこたあな。お嬢さん、あんた方が作ったこの境界域に俺たちが現れたことをまずあ考えた方が賢明だろうよ？」

「……」

テディは黙るしかなかった。

男の言う通りである。境界域へ駅前の時空間ごと《転位》するこの魔法に魔界から干渉する術は限られている。そして限られた術の

どれを使うにしても、いつ、どの場所を、どこへ《転位》するかを把握していなければならぬ。なにもないが故に、ほぼ無限にひろがる境界域に当てずっぽうで魔界からやって来られるものではなかった。

それが出来たということは、

「俺たちがここに居るのは偶然じゃねえってこつたな」

だれかが自分たちを裏切ったということだ。

薄く笑む男を見ながら、テディは状況が逆転していることを知った。

「望みは、あたしの鍵ってこと？」

テディは唇を舐めて言った。

「あんたがそれを素直に差し出してくれるなら、ここでだれが死ぬこともなく片あ付くんだがね。いやまあ、あんたが自分の務めを優先して、このガキから鍵を取り出して、俺たちを連れてってくれると約束してくれるなら、それでも構わねえんだが……」

「それはない」

守護者の誇りにかけて、鍵を誰かに渡すことはありえなかった。だからと言って、こちらの世界の法を侵^ルしてやってくる魔人に道を与える理由もない。正式な手続きを踏まないという意味は、彼らの目的が正式でないということだった。事情も動機もわからなくとも、それが有害であることはわかる。

戦うしかない。

「あたしが守護者である限り」

集中力を高めるように、テディは深く息を吐いた。

「さっきの戦い、ずっと見てたぜ。あんたは強い。だが、魔界帰りを舐めちゃあいけねえ。俺たち全員を相手にして勝てる法があるとは思えねえなあ……」

男は自然体の構えで切っ先をテディに向ける。

魔人は魔力に馴染んだ魂と肉体を持っている。それだけで扉を開放した守護者と同程度の力がある。彼らが人間の形を保っているの

は、その形を重視しているからというだけで魂が閉じているわけではない。むしろ完璧に開放されていると言える。

数の差で圧倒的不利、それが冷静な状況分析だった。

「それでも、勝つ」

しかし、そんなことでテディは揺らがない。

十五人、彼女は視線を動かして魔人の数を数えて両手を地面に突く。四足歩行。鍵が告げる獣の本性に従う。獣でありながら人の冷静さを持つこと。

「やっちまえ！」

男の合図で数人が一斉に切りかかるのと、テディが突進したのはほぼ同時だった。

勝算はひとつ。

殺されるより先に、勇希を殺してしまうしかない。

最高の想定はその鍵を奪ってテディのみで元の世界に帰還することだ。そうするだけで魔人たちはこの境界域を超えることができない。最低でも勇希の息の根さえ止めてしまえば、自らの命と引き換えにして魔人たちの越境を食い止めることができる。

やることはさっきまでと変わらない。

テディは正面の男に突っ込むフリをして、勇希に向かう。

「おっと、そうはイカ焼きタコの墨ってね」

だが、男は読んでいた風で、彼女の行く手を阻んで刀を払った。

喉首を掠めるすんでのところで切っ先をかわして、テディは背後から突っ込んできていた一人にパンチでカウンターを決めた。その一瞬で男の力量を察知する。

「強いねえ。だが、お嬢さん、俺がいる限り、あんたの目論見は達成されないぜ？」

男は横たわる勇希とテディの間に立ち、鋭く睨みつけた。それは丸く迫力を欠いた目で、よく見るともっさりとした眉毛が上に乗っかっている。ざんばらの長髪に尖った耳、開いた胸元から胸毛をのぞかせている。腕や脚に生える体毛も濃い。

要するに毛深い。

「志賀良木、俺の名だ。覚えておくといい、冥土の土産にしな」

「……ぷっ」

テディは笑ってしまった。

獣になった自分が他人の毛深さに不快感を覚えている。

「残念。まだ八十年は生きるつもりだから、そんなお土産貰っても腐らせちゃう」

にじりよる気配をけん制しながらテディは言った。

「死んでもいい」

8 魔界帰り（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

9 敵の敵は

敵の敵は味方なのか。

勇希にはわからなかった。

目を覚ました勇希は口の中に溜まっていた血を吐き出して、自分がまだ生きていることを確認した。吹き飛ばされたのではないかと思った顔が残っている。どのくらい意識を失っていたのかわからない。だが、状況が大きく変わったことはわかった。

テデイが戦っていた。

金色の体毛をなびかせ、刀を持った集団に囲まれながらも一步も退かず応戦している。両手の爪先から出ている光の剣が刀と接触するたび、閃光が弾けた。しかしそれでも数にはおされているようで、血飛沫のようなものも見える。決して優勢ではない。

時間が経てば負けてしまいそうだった。

「お目覚めのようだな」

「……だれ？」

抜き身の刀を下げて横に立つ男を勇希は見上げる。全体にタヌキっぽい外見の男だった。父親よりは若そうだったが、しかし垢抜けなく泥臭い。それは薄汚れた着物のせいというより中身の問題であるように思えた。胡散臭い。

「黙って見てな、そうすりゃあ、てめえの命はひとまず助かる」

男はそう言つて、勇希の首筋に刀を当てた。

「……っ！」

「切り落とすのは造作もねえ」

敵の敵も敵だ。

けれど、なぜ自分を殺さないのだろう？

男を睨みながら、勇希はそうも思う。結果的に、この男によってテデイに殺される所から助けられた形ではある。だが、友好的かというところでもない。しばらく考えて、勇希は父親の言ったことを

思い出した。鍵は資質がない者には使えない。

そしてテディは言った。鍵を二本使わないとここから出られない。

「にひ」

それはひらめきだった。

「なに笑ってんだ？」

「おれのこと、殺せないんだ？」

挑発するように勇希は唇を大きく吊り上げて男に笑いかける。

「……そうでもねえさ」

男の表情に薄い動揺が浮かんだのを勇希は見逃さなかった。

翼を広げて飛び上がったのと、男の刀が走ったのは同時だった。

相手は結局、勇希の予想通り首を狙わなかった。ワンテンポ遅れた片翼が切り取られたが、痛みには歯を食いしばって回転しながらもう片方だけで力任せに上昇する。

「ガキが」

男が自分めがけて刀を振るった。

直後、

「な？」

勇希の身体を斬撃が駆け抜けた。脚から脇腹、胸、そして顔を通過する。

バランスを崩して墜落しかける。

「このくらいでっ」

テディの一撃に比べれば痛くない。

片翼で滑空、地面すれすれで復活したもう片翼を加えて飛翔。

巨大なクレーターを巻き、勇希は高く高く境界域の中空へ昇って行った。地上の男が刀を振り回すたび、空気の層が裂け、彼の身体も切り裂いたが、致命傷ではない。斬れる痛みは、むしろ意識を確かにする。テディを相手にしても、あの男たちを相手にしても、勝ち目などない。そのことをはつきりと把握する。

だからこそ。

「負けなきゃ勝ちだろ」

勇希は呟いて、地上で戦いつづける集団に向かって降下する。

「なにをする気だ？」

男が刀を振るう手が止まった。射程範囲に仲間がいる。

「……っ？」

テディがハッと勇希を見上げ、それにつられて刀を持つ男女も勇希を見る。

この一瞬だった。

勇希は翼を剣に変えて集団に突撃する。数人が彼を避け、数人がカウンターで彼の身体を斬ったが、それに構わず中央を突破する。そして目標を抱きかかえて飛び上がった。

「な、なに？」

「へへ……やった」

集団を突き抜けたとき、勇希は両手にテディを抱いていた。

降下の勢いで高く上昇し、瓦礫と化した駅前が小さく見えるところまではばたく。

「どういうつもり？ あたしを助けたって、あなたは……」

「助けてない」

血と共に噴き出す痛みを堪えながら、勇希は言った。

「は？」

「あのさ、テディの鍵、おれにくれ」

「……はいい？」

「だから、ここでおれに鍵をくれて一緒に元の世界に帰るか、このまま落としてあいつらに殺されるか、テディが選んでよ。はい！

さーん、にーい、いいー……」

言いたいことだけを言っつて、カウントダウンする。

「そんな、あたしは、あなただってあいつらだって——」

「……ち、ぜえー」

ふわりとテディの身体を空中に放り出す。

「——んっ！ わかった！」

テディが空中で鍵を抜いた。身体を覆っていた金色の輝きが光の

粒になる。

「悔しいけど、あいつらを外に出すよりはマシよ!」

そう叫んで握った手を勇希に向かって伸ばす。

「そうこなくっちゃ」

その手を掴んで、勇希は裸のテディを抱え直した。

そのままぐんぐん男たちが見えなくなるまで遠くへ飛んでいく。

「まさか、鍵を受け取ったらあたしを落とすとか……」

「しないよ。おれ、別にテディを殺したいわけじゃねーもん」

この場所から元の世界に戻りたいだけだった。

母に会うために。

勇希はテディから鍵を受け取り、鍵の告げるままにもう一本を胸に突き刺した。するとなにかのスイッチが切り替わるように、パツと見慣れた夏の太陽が頭上に輝きだす。

ロータリーを中心に切り取られた街の上空を飛んでいた。

「ひっでー」

勇希は街の惨状に顔をしかめた。

「他人事みたいに……」

テディは空を見上げて目を瞑った。

「もうあたし、守護者失格」

そう独り言のように呟く。

「……」

血の気が引いていた。

駅前がなくなっただけでも異常だったが、勇希は街に人が極端に少ないことも気付いていた。代わりに、自衛隊の車両や、自衛隊員と思しき人々がいたところを歩いている。異様な雰囲気で、胸騒ぎのする光景だった。自分がやったことで街が大変なことになっている。

じわじわと不安に襲われながら手近なビルの屋上に降り立つ。

「テディ、鍵、返す」

勇希は熱くなさそうな日陰のコンクリートの上にテディを置いて、

二本目の鍵を渡した。

「え……これ、どうして？」

信じられないという風に見開いて、テディはそれを受け取る。

「おっぱいもんだことはごめんなさい」

勇希は深々と頭を下げた。

「は、い？」

「その、テディはぶすじゃなくて、その、美人だと思います。あの……パンチも痛かったし、もう戦いたくないし、死にたくないし、でも、おれ、おれは……おれが母さんに会うまで捕まえるの待ってもらえませんか？　お願いしますっ！」

「……ごめん、あたし、ユウキがなに言ってるのかわからない」

勇希が頭を上げると、呆れ顔のテディと目が合う。

「じ、自首します、あとで。信じてください……」

「それをあたしが信じると？」

テディはよろめきながら立ち上がり、自らの胸に鍵を刺す。

「う……」

信じてもらえるわけがない。

街の様子を見たら、自分がやったことが恐ろしくなったなんて都合のいいことを。

「……お母さんに会ったら、あたしのところに来るのね？」

「う、うん」

鋭いテディの目に射竦められ、勇希は縮み上がる。

逃げるだけなら逃げられた。だが、勇希は父親から守護者が何人もいることを聞いている。これから先のことを考えると、テディのような相手と永遠に戦いつづけるわけにはいかないことに気付いていた。だからこそ大人しく鍵を渡したのだ。

「行きなさい」

「え、あの、いいの？」

「あたしは、命を惜しんでるわけじゃない。でも、ユウキに救われたのも事実。戻ってくると約束するなら、一度ぐらいは見逃してあ

げる。でも嘘だったら……」

立てた親指を首の前で一文字に滑らせながらテディは言う。

「や、約束する、約束する！」

勇希は慌てて答えた。

「……わかった、行って、あたしの気が変わらない内に」

テディは鍵を引き抜き、疲れ切った様子で、ずるずると座り込んだ。

「ありがとう！」

「行って、いいから」

「うん！」

何度も頭を下げながら、勇希は空に飛び立った。

「おかしな子」

それを見送りながらテディは頭を振る。甘かったかもしれない。

「でも、あそこに魔人を呼び寄せた裏切り者があたしたちの中にいるなら、あの子は利用されただけなのかもしれない。この状況を作り出すために。それが何者か……」

敵の敵は味方なのか。

「あたし、裸でどうやって帰ろう……」

テディにもわからなかった。

9 敵の敵は（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

8 君はここまで自分から見せていたと思います。

自転車を選んだことは笑子の慧眼だったと言える。

次第に渋滞していく道路を見ながら、私はそう感じていた。タクシー運転手らの言っていたことは正しかった。交通の混乱ばかりは隠しようがない。木乃市に近付くにつれて自動車はおよそ動かなくなり、およそ市境の幹線道路まで出たところでそれは現れる。

対向四車線が封鎖されていた。

手前までの混雑ぶりが嘘のように一般車両が一台も走っていない道路。ただし、装甲車両が交差点を塞ぐように停車していて、完全装備の自衛隊員が一定間隔で立っている。まるでこの道の先を占領したとでも言うような異様極まりない光景だった。

「なんで行けないんだ！」

「申し訳ありません。現在、木乃市内への通行を制限しています」

「だから、それがどうしてなんだと聞いている」

「我々はその質問にお答えする立場にないのです」

少なくとも野次馬が歩道の半分を埋めていた。笑子は自転車を押して、歩道に上がっていく。道を越えようとする人々とそれを止める自衛隊の小競り合いがいたるところで起こっていた。どこかしこも騒然としている。

「困りますね……」

笑子はそれを見ながら独り言のように言った。

「……東西南北、どこもこうだろう」

自転車のカゴの中から私は小声で答える。

封鎖された道路に沿って歩道を歩くが、細い路地に至るまで人員が配置されていて、少なくとも道路の向こう側へ人間が渡ることはできそうもなかった。息子が気がかりである。

「やはり、私が行こう」

「まそのさんですか？」

「ああ、彼らも流石に猫を追いかけて持ち場を離れたりはしない。私が先に行つて、君のお母様に会つてくる。約束のことなら今日でなくとも大丈夫だ。相手もわかつてくれる」

笑子もこの雰囲気に触れれば、ここを越えられるとは思わないだろう。

「……」

「君を一人にしたいわけではない。だが、確実に市内で勇希が巻き込まれている。父親としてはここで手をこまねいてはいられない。どこか安全な場所で待っていてほしい。ここに来る途中に図書館があつただろう？ あそこなら長時間いられるだろうし、それなりに人目もあつて安全なはずだ。なに、こんな状況は一日もつづかない。夜までは迎えに……」

「わたしも行きます」

「……は？」

笑子は私になにかを言うよりはやく走り出していた。

歩道の切れた先には広い交差点が見える。

「どいてくださーいっ！」

自転車のベルを鳴らしながら、笑子はペダルに片足を乗せ、人垣に向かつて一直線に進んでいく。気迫のこもった表情だった。ぎよつとした様子で野次馬たちが道を開ける。複数の自衛隊員がこちらを見るのが私にはわかった。

「ちよつと待ちなさい、ここから先は……」

一番近くにいた一人が自転車の正面に立ちはだかると、

「ごめんなさいっ！」

笑子がワンピースの裾を翻して自転車に跨るのはほぼ同時だった。喧騒が止む瞬間があつた。

丸見えだ。

「にゃああああ！」

私が猫として叫んだ気持ちは理解してほしい。

汗を流しながら、笑子は躊躇わなかった。一気に最高速までペダ

ルを漕ぐと一人目の脇をすり抜け、その背後から迫っていた二人目をドリフトで威嚇、ジグザグに交差点の中央へ飛び出していく。私は振り落とされないようにカゴにしがみつくので精一杯だった。

猫の三半規管をもつてしても目が回る。

「その少女を止める！」

だれかが叫んだ。

反対車線で待機していたと思われる複数名が向こう側に暴走族を止めるときに使う柵を展開していた。このまま進むことは出来ない。左右も同様に封鎖されていた。

「まそのさん、リュックに入っ！」

そう言いながら、笑子はカゴからリュックを引っ張り挙げ、背負った。

私はぶら下がるように中に潜り込む。

「飛びますよ！」

飛ぶ？

「せーのっ！」

自転車の速度を維持しながら、笑子はまっすぐ突っ込んでいく。3メートルはあろうかという柵と自転車が衝突する寸前、ペダルから離れた両足でサドルを蹴り、飛び上がった。

伸身の縦回転。

空中でリュックから飛び出してしまった私は、足先まで揃えた美しい体勢で柵を飛び越えていく笑子を目撃していた。体操選手ぶりである。幼い頃から守護者になるべく修行を積んできた、というような話は聞いたことがあったが、サーカスの訓練まで受けていたとは、などとはまらないジョークを言っている場合ではない。

その様子を見る隊員たちが目を丸くしている光景までスローモーション。

「十点！」

小気味いい音を立てて、両手をピンと挙げ、揃えた両脚のまま着地する。

その瞬間、胸元までめくれあがったワンピースを見ていたせいで、猫の私が着地失敗。

「行きますよ、まそのさん！」

笑子は間髪いれずに市内に向かって走り出す。

「あ、ああ」

私もその後を追いかける。

自転車は乗り捨て。

その道は木乃市中央を南北に結ぶ古くからの街道だった。ここ十数年で道幅は拡幅され、街並みも近代的になっている。道なりに行けば駅、とは言うものの、距離としては直線でも4、5キロはある。そして市内にも自衛隊員はいる。いくら運動能力が高い笑子でも走ってすぐ移動できる距離ではないし、そもそも市内を通過できるかどうかは、別問題だ。

横を走っていた笑子の脚が止まる。

街道の左右から、車両が次々に現れて私たちの行く手を塞いでいく。

「……どうします？」

「どうもこうも、君はなんにも考えてなかったのか？」

呆れるほど楽観的に行動している。

この際、笑子は保護してもらった方が安全かも知れない。蘇ったばかりという特殊性を差し引いても、この状況に対して笑子は関係ない一般市民に過ぎない。封鎖を突破するという荒っぽいことはしたが、子供でもある。手荒な扱いは受けないだろう。なんとなく見捨てていくようで心苦しいのは確かだが、これ以上危険な行動をされてからでは遅い。

私がそんなことを考えていると、

「対象、確認……」

声が上空から降って来た。

私が見上げるのとはほぼ同時に、笑子の正面に着地する。

「えっ？」

「……任務、遂行」

睡蓮の花のような白い戦闘装束を身にまとった少女だった。小柄で、身長は息子よりも小さい。暑い最中だというのに汗粒ひとつ出していない白磁のような肌が陽射しを受けて輝いている。胸元には透明の光、表情のない大きな瞳に笑子の顔を映していた。

「危ないっ！」

私がそう叫ぶより早く、少女の細い腕が笑子の首筋に伸びていた。
「っあ……！」

避けることも出来ず、首を捕まれた笑子の身体が地面から離れた。じたばたと脚を振り回して、何度か少女を蹴っていたが、少女は眉一つ動かさない。気付くと、私たちの周りを自衛隊員が包囲して、その様子を見ている。なんで急にここまで……。

「あ」

私は気付いた。

勇希と誤解されているのだ。女装した息子と十三歳の母には外見的な差がほとんどない。

「待ってくれ、その子は違う！」

私は少女の足にすがり付いて言った。

「……喋る猫、確認」

少女はちらりとこちらを見て、感情のこもっていない声でそう言う。

「違うんだ。君は守護者だろう？ 昨日、魔界の穴を襲撃した子供は少年だという情報を聞いているんじゃないか？ その子は女の子だ！ 関係ないんだ！」

「……」

少女は無表情に笑子を見つめ、そして無造作にスカートをめくり挙げた。もちろん、そこで見えるのは隠されていない笑子の下半身である。遠巻きに様子を見ていた自衛隊員の何人かが視線を逸らした。少女の方はかなりじつくりと見ている。

「女子」

そう呟いてパツと手を放す。

私は溜息を吐いた。これほどノーパンが役に立つ日もないな。

「はっ、こほっ……けほっ」

落とされた笑子はアスファルトに膝を付いて呼吸を整えている。

しかしこれはチャンスである。

「その、君、守護者なら教えてほしい。君が見間違えた少年は……」
「信じられません！」

私が少女に話しかけるのを遮って、笑子が立ち上がって叫んだ。

「あなたも女の子でしょう？ どうしてスカートをめくったりするんですか！」

顔が真っ赤だった。もしかして恥ずかしがっているのだろうか、今更。

君はここまで自分から見せていたと思います。

「いや、そんなことはどうでもよくて……」

私は二人の間に入ろうとしたが、笑子が少女の両肩を掴む方が早かった。

「なんとか言ったらどうなんですか？」

「……邪魔」

その直後、少女は笑子を突き飛ばした。

守護者の力を使っていた。胸を圧迫された笑子がガクンと仰け反って倒れる。

声も出ていない、ピクリとも動かない。

「え、笑子！」

駆け寄ろうとした私だったが、身体がふわりと浮かんで、見上げると少女に首の皮を掴まれていた。じたばた暴れてみるが、ふりほどけない。

「確保」

「何故だ！ あの子は関係ない！ 関係なかった！」

「……関係ない」

少女はそう応えると、私を掴んだまま、その場を立ち去ろうとす

る。

無関係の人間だろうと関係ない、と？

「ふざけるな！ 君は守護者なんだろう？ 人々を守るためにそうして力を……」

おかしい。

なにかがおかしかった。本当にこれは魔界の穴を守るための行動なのか？

少女が歩き出すのと同時に、周りを囲んでいた自衛隊が笑子に向かって動きはじめる。私を不安が襲っていた。安全に保護してくれる気がしない。ついさっき考えていたことを、ざわつく髭が否定している。わけがわからない。

「……やめろ！ さわるな！ 彼女にさわるな！ はおうは！ ……」

叫ぶ私の口を、少女の手が塞ぐ。

力なく横たわる笑子の身体が抱きかかえられていく。

笑子！

「母さん！」

その声で、少女が空を見上げ、私を放り投げるまでは一瞬だった。空中をぐるぐると回りながら、私も空にその姿を確認する。見間違えでなければ、

「勇希、なのか？」

巨大な翼を広げた息子が空を飛んでいた。

8 君はここまで自分から見せていたと思います。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

9 息子よ、父は無力だ。

白い少女がアスファルトを蹴った。

その弾かれた空気だけで吹き飛ばされそうになり、私は爪を立てて踏ん張る。弾丸のように飛び上がった少女はこちらに向かって飛んできていた勇希の、身長の三倍はあるうかという翼に剣を突き立てぶら下がる。互いの光が反発して弾けていた。

「……う」

痛みがあるのだろう、苦しそうな顔をした勇希に向かって少女はもう一振りの剣を抜き放ち、容赦なく振り下ろしたが、それはもう一方の翼が防いでいた。それでも両翼を塞がれ、揚力失った勇希と少女は回転しながら道路に落下する。

下にあつた車両がくしゃりと潰れ、砂埃が舞い上がる。

「戦うつもりないから！」

身体を守るように巻きつけた翼を広げて、勇希が叫んだ。

「……関係ない」

二振りの剣を構えた少女がそう答えたのと同時に飛び込んでいた。

「ちょ、あばれたら、街壊れっ……」

「抹殺」

勇希の躊躇いを少女は見逃さなかった。逃げようとはばたいた瞬間には剣の一本が勇希の左肩と翼を貫いていた。動きを制限し、袈裟懸けにもう一振りを振るう。びしゃ、とトマトが潰れるような音と共に、熱いアスファルトに血が飛び散った。

「つてえっ！」

「……！」

だが、直後、少女の身体は後方に吹き飛ばされていた。まっすぐに街道の南に向かい、笑子を運ぶ自衛隊員の頭を越えていく。砂埃をかき消して現れた勇希の右翼がその力を示すように風を巻き起こした。

「勇希！」

私は大声で呼びかけた。

「……父さん」

左肩を押さえながら、勇希は苦笑いをする。人間の肌の色ではない紫色に、ごつごつと尖った骨、額には小さな角、そして翼、類型的な悪魔の姿と言って過言ではない。

「それ、どうしたんだ？」

「ちよつと……」

なにかを言いかけた息子の声を遮って、獣の咆哮が響き渡った。犬に似ているが、より大きな生き物であるとわかる遠吠え。周囲の建物のガラス窓が一斉に軋む。

白い狼がそこにいた。

「扉を開放しているのか……」

思い出すより早く口について言葉が出ていた。

少女の装束が破れ、身体中から光り輝く体毛が生え、身体一つ分はあろうかという真つ白な尻尾が空を突くように実体化するのを見ながら、私は動けなくなっていた。猫の身体が恐怖に震えている。かつて笑子に聞いたことがあった。守護者がその魂を魔力に預け《変異》の力を完全に引き出すことを、扉を開放する、そう表現していたことを。

ならば勇希の姿も。

「勇希、戦っては」

「わかつてる！ でも、母さんを！」

勇希は駆け出していた。息子の視線の先には笑子がいる。私たちがこうしている間にも彼女は自衛隊の車両に乗せられ、連行されようとしていた。左右の翼のアンバランスにふらつきながら、勇希は地表すれすれで飛び、突進する。

「オォーン！」

だが、白い狼が既に息子の前に高らかに吠えながら立ちはだかっていた。四足歩行で走り、しなやかに伸びる身体をひねりながら飛

びかかっている。勇希は翼を器用に動かして衝突をかわしたが、狼の輝く牙がその脚に喰らいつく。二人は地面を転がった。

「はなれろっ！」

勇希がその腹に向かって足を振り上げると同時に、尻尾がその身体を薙ぎ払う。

「……」

狼は空中で身体を仰け反らせながらもぴたりと着地する。

叩きつけられた勇希はうつ伏せに倒れていた。

「ちく、しょ……」

笑子に乗せた車両が走り出していた。

立ち上がるうとする勇希に狼となった少女がゆっくりと近付き、その背中を押さえつける。アスファルトの地面が息子の身体ごとジワジワと沈んでいく。私は走り去る車両と、その様子を交互に見ながら動くことができていた。

どちらも助けなければならず、どちらも助けられない。

もはや己の無力は罪であった。猫だから、などという言い訳が通用するものではない。私が全ての原因なのだ。息子を巻き込んだのも、笑子を蘇らせたのも、もとを糺せば私である。ここまでの事態になることを想定できたかどうかなど関係なく責任を……。

「あーっ！ もーっ！ どちくしょおっ！」

勇希が叫んで、翼をジタバタと動かし、地面に拳を叩きつける。道路が陥没し、狼が飛びのくのと同時に一気にはばたいた。地表から数メートルの高さに浮かんで相手を睨む。

「街が壊れると思って、大人しくしてれば……！」

言葉を言い切らず、悔しそうに息子はぎりぎりと奥歯を噛んだ。

「関係ない」

白い狼は鼻先をツンと上げて言った。

「あーっ！ ム力つく、おまえマジム力つく！」

勇希はくしゃくしゃと頭を掻いた。

「いちいちローテンションでぼっそぼそしゃべりやがって、じゃー

おれも関係ねーよ！ 街ごとぶっ飛ばしてやる！ 後で泣いてもやめねーかな！」

「……」

「なんとか言えよ！」

後周りにぐるぐると回転しながら勇希は怒りを露わにする。

いかん。

「勇希、落ち着け！ 戦っては……」

「うつせーんだよ！ 役立たずの猫はそこでたまってる！」

勇希は私の言葉を遮って怒鳴った。

役立たずの猫。

私は息子の言葉に射竦められる。その通り、しかし……その通りだ。項垂れるしかない。実際、なにもできていない。笑子の暴走を食い止めることも、息子を助けることも、状況を打開することも、これからの道を示すことも、父親らしく、あるいは夫らしく振舞うことも。

なにも。

「酷……」

私たちの関係を知っているのか狼は鼻を鳴らして言う。

「よそ見してんじゃねーっ！」

「……」

突撃してきた勇希を難なくかわして狼はその爪を振るった。私の位置からは翼の影になって見えなかったが、息子の体勢がぐらりと揺らぎ、ぼと、と鈍い音で地面に転がったのは肘から先、腕である。斬り落とされた。それでも、なにかを掴むように指先が動いている。

「うああああああああっ」

勇希の絶叫が響いた。

「外した……」

そう呟いた狼の尻尾が息子の身体を続けざまに打つ。

腕を押さえて苦痛に顔をゆがめた息子が街路樹にぶち当たる。

幹ごとメキメキとへし折れるその様子を私は身動き一つできずに見

守るしかなかった。

「ああ……こんなにやろっ」

それでも勇希はすぐに立ち上がり、ぼたぼたと血が溢れる右腕を押しえて飛ばうとする。その瞳には鬼気迫る光が宿っていた。命懸けの目である。

「勇希、もういい、それ以上は」

「よくねーんだよ!」

息子は私を見なかった。見ているのは正面の敵だけだ。

勇希。

「よく……ねー」

翼は動いていたが、勇希の身体は浮かばなかった。よろよろと狼に向かって歩いていく。それではエサになりに行くようなものだ。笑子に乗せた車両が角を曲がって視界から消えていく。大切なものの両方を失おうとしている。

私が猫であるばかりに。

いや、人間だったとしてもなにも出来はしなかった。私には資質がないから守護者の力を使って戦うこともできない、笑子を助けようにも、自衛官と戦う運動能力もない。もとより無力な中年男ではない。出来ることなどなにもなかった。

だが、私がいけなかったのか？

妻と子と、幸せに暮らす未来を欲したことが。

「にゃーああ……」

気付くと空に向かって私は啼いていた。降り注ぐ太陽の光が私の無力な魂を焦がす。

白い狼が機先を制して勇希に飛び掛った。

息子は両翼でそれを正面から防いだが、衝撃で踏ん張った地面が凹んでいく。

「なめんなあっ!」

翼の内側でそう叫んだ勇希の右腕が見る間に生え変わる。作り出されたばかりの血管が魔力の輝きで煌めいていた。息子の回りだけ

太陽の光が暗く感じられるほどに発光している。翼を開いて狼が弾かれたところに、勇希はその光を放つ拳を叩きつけた。

「……！」

インパクトの瞬間、少女の身体を覆っていた狼の体毛が弾けた。閃光、そして旋風。

なにもかもが真っ白に染まる光と、吹き荒れる風に私の身体はなす術なく宙を舞った。息子と少女がぶつかりあった場所に爆弾でも炸裂したかのような穴が出来ている。そしてその中心に、勇希は立っていた。翼がなくなり人間の肌色に戻っている。

正面には全裸の少女が倒れていた。

「……父さん」

そう言っただけで息子が私を見上げた直後には抱きかかえられていた。街道脇の建物の壁を蹴って、着地する。

「勇希、大丈夫なのか？」

全身が傷だらけだった。

「母さんは？」

「五つ目の信号を右折して……」

「わかった！」

コクと頷いて、勇希は私を抱えて駆け出した。

私たちの様子を残ってみていた自衛隊員が道を塞ごうとしたが、構わず飛び越え、停車する車両を飛び石のようにしながら、風より早く駆け抜ける。

車両はすぐに見つかった。おそらく息子の姿をバックミラーに捉えたからだろう、加速したが、追いつくという状況に変わりはない。勇希は走行する車両のボンネットに乗って無理矢理に停車させると、有無を言わずフロントガラスを叩き割った。

自衛隊員の顔が恐怖に歪むのは私からも見えた。

「かあ……」

「うわあああつー！」
パン。

乾いた音だった。ガラスの破片を浴びた助手席の一人が発砲している。

「ぐっ」

銃弾が勇希の塞がりきっていない左肩の傷口に当たった。

「よせつ、相手は」

運転席の男がその手を押さえつける。

「……さんを、返せ」

左腕に抱きかかられた私に向かって血が流れ出していたが、それに気を留めることもなく勇希は言う。子供の声ではあったが、尋常ではない迫力を孕んでいた。

私は声を出すこともできなかった。

「わかった」

運転席の男がドアを開けて出ると、助手席が「ひっ」と悲鳴にもならないような声を上げて転がり出て、後部座席の二人も降りた。

勇希はガラスを踏みながらそのまま中に入り、後部座席に横たえられていた笑子の顔に触れた。

「……んっ」

「生きてる……」

勇希は反応があつたことに微笑んで、そう呟く。

そして、私を笑子の腹の上に乗せて、両腕で抱えて車を降りた。

私たちを取り囲むように、自衛官たちは立っていた。

「悪いことはいわない、これ以上は止すんだ。君のやっていることは……」

「どけよ」

勇希は踵で自動車を蹴り上げ、ひっくり返した。

十分な威嚇だった。私を含めて、その場にいた大人全員が言葉を失う。

「どけ」

だれも、息子の前に立ちただかりはしなかった。

猫よりも軽やかに、息子は住宅街の屋根伝いに市の東側に向かって走っていく。

「どこへ行くつもりだ？」

「ガッコ、バアちゃんいるし、あんなことしちゃって家には帰れねーから」

そう答える勇希の顔色は良くない。

撃たれた傷も塞がってはいる。だが、疲労は隠しようもなかった。扉を開いたことで、鍵からほぼ無限に《転位》で魔力を得られるとは言っても、肉体の消耗だけは如何ともしがたい。電車が止まった時間から戦いつづけているとすれば一時間近く、加えて死ぬか生きるかの戦いだ、精神的負担は私の想像を超えている。

そこまでわかってても、私にできることは僅かしかない。

「……少し先だ」

「うん」

勇希はぴたりと足を止め、体勢を低くする。

家と家との間、静まり返った街中を、一人の自衛官が歩いていく。住宅街を巡回する自衛隊。私は、最低限、彼らに見つからないように移動するためのセンサーとしての役割をこなすだけだ。息子と笑子を安全な場所で休ませるためにはどうしても必要なことではある。しかし、たったこれだけのことしかできない。

屋根瓦を踏みしめる息子の足が熱そうだった。

「行っただ？」

笑子のワンピースにばたばたと汗をたらしながら、勇希は言う。

「ああ……いや、待て、もう一人」

小さな足音も聞き漏らすまいと私は耳を立てる。

「……ふー、うん」

深く息を吐いて、勇希は頷く。

胸が痛む。助けにもなってやれない己が呪わしかった。

夏休みの小学校は静まり返っていた。勇希が入ったのは、外からの目隠しが行き届いている屋外のプールサイドだった。悪くない判

断である。日除けのあるベンチに笑子を横たわせると、勇希はコンクリートの上に仰向けに倒れて、自分の胸から鍵を抜き取った。

「もー、ダメだ……」

大の字になって目を瞑ったが、すぐに起き上がると、

「くそあつちーよ!」

そう叫んでプールに飛び込んだ。準備運動は既に十分だろう。私はベンチの下で丸くなってその様子を見つめる。水飛沫が弾け、小さな虹がかかる。

「しみるーっ」

傷口に染みるのか、冷たさが染み渡るのか、両方なのかわからなかったが、息子はそれでも気持ち良さそうに泳いでいた。先ほどまでの鬼気迫る緊張感は一瞬で解けたようだ。こうしているとただの小学生である。それにしても元気だが。

「ひとまずは、安心、ということか」

私も冷たいコンクリートに身体を伸ばす。

情けないことではあるが、力を持った息子がいることで、笑子を無事に家まで送り届けることはそれほど難しいことではなくなった。後は事情を説明し、事態が収まるのを待てばいい。こんな状態、一日つづけるのも困難なはずだ。魔界の穴にどういった危機がせまっているのかわからないが、そこまでは私たちが預かりしところではない。

なにか忘れていそうな気がする。

毛繕いをしながら、私はふとそんなことを思った。なにかを見落としている。勇希は無事で、笑子もまだ目を覚まさないがここにいる。街は大変な事態だが私たちの問題ではないはずだ。あそこで置いてきた白い守護者も救助はされているだろう。やや乱れていた私の毛並みもすっかり整った。どこへ出て来ても恥ずかしくない猫だ。あとなにが。

それに気付いたのは私の耳だった。

ガシャン。

学校の内側、施錠されているプールの入り口フェンスが揺れ、少女がよじ登っている。その姿には見覚えがある。クラスの子だろうか、だれだったか、

「……あ」

笑子があのだ月舞と話をつける約束だった。どこで待ち合わせか聞いていなかったが

「学校だったのか……ゆ」

「勇希くん！」

私が呼びかけるより早く、フェンスの頂上から少女が手を振った。
「げっ……」

勇希がそう呟いて水中に潜った。

それでは逃げられまい。

「まずい……ような気がする」

勘の域をでないものだったが、私もおちおち丸まっではいられない。髭にビンビンと嫌な予感がしている。だが、この状況をどうすればいいのだろう。勇希は笑子にプロポーズをしていて、笑子がそれを舞に告げていて、舞は笑子と戦う気だろう。これは要するに三角関係というやつのはずだ。息子を挟んでの。

おじさんにはこういった経験がありませんが。

いや、今日になって、親友だと思っていた男が自分の妻を長年狙っていたという実にどうしようもない話は聞かされたが、それはともかく、血みどろの修羅場の後に、ドロドロの修羅場となったら息子が流石に不憫だ。どうにかして――

『――役立たずの猫はそこでだまってる！』

そうだった、私は役立たずの猫……。

「勇希くん、どうしてここに？」

嬉しそうな顔でプールサイドをかけてくる舞の姿を見ながら、私は丸くなる。

息子よ、父は無力だ。

9 息子よ、父は無力だ。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

10 マザーコンプレックス

学校へ行くことはそれほど難しくなかった。

舞の家から学校までは五分もかからない距離であつたし、生まれ育った街でかくれんぼをして大人に負けるといったこともない。表に出るなと言われたとしても彼女の側に従う理由がなかった。両親は共働きで家にいないから止めるものもない。

しっかりと日焼け止めを塗って家を出る。

「いつになったら出られるんですか？」

「それについてもテレビやラジオでお知らせします」

街を見回る自衛隊員たちは大人の相手が急がしそうである。

方々の家の前で繰り広げられる問答、近所の住民たちもこの屋内待機に納得していないのだとわかつて、舞は安心する。危険があるということではないのだ。なにか大人たちの不手際で混乱が起きているだけ。子供の自分が気にすることではない。

生垣の隙間や、庭先を通って道路は最小限横切るだけ、そんな風にして学校にたどり着いたのは約束の十五分前だった。そこで舞は、学校とは言つたものの具体的な場所を決めていないことや、そもそも相手がここまでやって来られるのかについて考える。

ケータイはやはり？がらなかった。

夏休みでも最低一人は先生が来ているはずだったが、学校は締め切られていた。職員室の窓も白いカーテンで中が見えない。冷房が使われている様子もない。この暑さで窓も開けずにいられるはずもない。敷地内を舞は歩き回つたが、本当に人がいないことで少し不安になってくる。だれかに会えばこの状況について教えてもらえる、そういう樂觀があつたのだ。

「ひじき女め」

心細さから、会いたくない相手を想像して舞は呟いた。

蝉の声も聞こえない静まり返つたグラウンドを、とぼとぼと歩く。

よく見る寂しい夢のようだ。舞は思う。目的もわからないまま、慣れた風景をぐるぐると回る。だれにも会わない。なにかに追われているような気がする。それがなにかはわからない。漠然と目覚めの悪い嫌な夢。正夢だったのだろうか。陽炎が揺らめくトラックを見つめる。

ぱしゃん。

水音が聞こえたのは直後だった。

「あ、そっか」

グラウンド脇に設置されたプール。舞は参加したことがないが、夏休みは開放されている。先生もそれを監視しているのかもしれない。だれでもいいから会いたかった。

勇希がいた。

見間違っはすもなかった。フェンスの向こうにプールに浸かる姿を見て、舞は思わず顔を隠した。どういことなのか、ケータイストラップの手鏡でおかしなところがないか真っ赤になっている自分の顔を点検しながら考える。結論はすぐに出た。ひじき女が電話に出たことを知った勇希が自ら事情を説明しようとしている。それ以外にありえない。

舞は思い込みが激しい。

客観性皆無で都合の良い答えを導くと、舞はプールの入り口に向かう。フェンスの扉には鍵がかかっていたが構わずよじ登る。どうして開いてもいない中にいるのかという基本的な疑問は抱かなかった。どうやって街をやってきたのかも。

「勇希くん！」

嬉しさが溢れた。

「勇希くん、どうしてここに？」

そう尋ねたのは、自分を選んでくれるという答えをはやく聞きたかったからに他ならない。プールサイドを小走りに進み、飛び込み台の上に身を乗り出し、水面から顔を出した勇希に呼びかける。

「ねえ？ どうしてここに？」

「どうしてって……そっちこそなんでここに？」

だが、勇希の答えはそうではなかった。濡れた前髪を掻きあげ、首を傾げる。

「え？ 勇希くん、聞いてきたんじゃないの？」

「聞いて？ なにを？」

とぼけている風ではなくそう言っているのは舞にもわかった。

「ひじりえみこ、知らない？」

「……聖、って」

その瞬間、動いた勇希の視線の先、プールサイドのベンチに横たわる少女がようやく舞の視界に入った。どういふことなのか、結論はすぐに出た。ひじき女が説明もせず連れてきたのだ。自分と彼を別れさせるために。それ以外にありえない。

舞は思い込みが激しい。

「へえ、そう……」

舞は寄り掛かっていた飛び込み台から立ち上がり、スタスタとベンチに向かう。

「そう、って……如月？ おい、ちょっと」

勇希が慌ててプールから上がるうとしている間に舞はベンチの前に立つ。

「……ええ？」

信じられないものがそこにあった。

舞は横たわる少女の顔を見て、プールから上がってきた勇希の顔を見る。ほとんどまったく同じ顔だった。髪の長さが違って、身体つきを見れば隠せない性差があるものの、目も鼻も口もそっくりである。さっきまで湧いていた怒りの感情が一気に混乱する。

「如月、待て、その人は寝かせて……」

水滴をボタボタ落しながら勇希が舞の肩を掴む。

「勇希くん、この人だれ？」

その手を払って、舞は振り返った。

「はい？ いや、さっきそっちが言ったら、聖、笑子って」

「勇希くんとどういう関係？」

「関係？ カンケー？ えー、と。それはー……」

あからさまに勇希は困った顔をする。

その身体に昨日はなかった大小さまざまな傷があることや、水着でもないホットパンツで泳いでいたことが舞の目には入った。いよいよ状況がよくわからない。彼女の中でいくつもの想念が絡み合っ
てこんがらが。思考がまとまらなかった。

「……その、なんて説明したらいいか」

「無関係です」

園声に背後を見ると、いつの間にか笑子がベンチの上で起き上が
っていた。苦しそうに胸元を押さえて、周囲を見回している。

「話は途中からですが、わたしと、ゆうきくんは無関係です。今日、
初対面ですから。えっと、それで、ここ学校ですか？ 舞さん、で
すよね？ わたし、どうやってここまで来たんですか？ そうだ、
まぞのさん？ どこですか？」

「そう、だけど」

なにを言っているかわからない。馬園は目の前にいる。

「……無カンケー」

その言葉に落胆する勇希を見て、舞は冷静になつて笑子に向き直
る。

「そんなに顔そっくりで無関係とか信じられるわけないでしょ」

「顔そっくり？ わたしと、ゆうきくんがですか？」

舞の言葉に、笑子は勇希の顔をマジマジと見て首を振る。

「いいえ？ まったく似てないです。なに言ってるんですか？」

「はあ？ 鏡みたことないの？ そっくりじゃない！」

舞は俯いている勇希の顔を掴んで、笑子の前に引きずり出した。

「あの、ちよつと、痛……」

「おでこ耳がぜんぜん違いますよ？」

「おでこ耳以外はほとんど同じよ！」

抵抗する勇希の言葉など二人の耳には入っていなかった。

「……んん？　そうか、わたし、よくいる顔なのかも知れませんか？」

しばらく勇希の顔をじっくりと見て、笑子は結論する。

「はあ？　なにそれ自慢？　そんなに可愛くてよくいる顔とか！」
あまりの強情さに舞も怒りを抑えられない。

「え？　可愛いですか？」

「褒めたんじゃなくて！　真に受けんな！」

「あの、ちよつと、似てるか似てないか、そんなに重要？」

ヘッドロック状態の勇希が口を挟む。

「それもそうね。でも、プロポーズされたんでしょ？　その時点で無関係ってありえない」

「けれど、わたしが蘇った直後ですよ？　いきなり。無関係でなくとも一方的ですよ」

「うえっ？　わー！　わー！　わー！」

「蘇った？　なに言ってる……」

「わー！　わー！　わー！　わーっ！」

舞の手を振りほどいて、勇希は二人の間に割って入る。

「如月！　おれと、この人は無関係、それでいいだろ？　なにか問題あるか？」

自分と笑子を指差して、涙目で言う。

「プロポーズはしたんでしょ？」

舞は冷ややかにそんな勇希を見た。言葉を額面通りに受け取れない。

「しましたよね」

背後から笑子が援護する。

「した、したけど断わられた！　な？　断わられたら無関係だろ、フツーは」

半ば投げやりに勇希は言う。

「舞と勇希くんは違うけど。それで？　蘇ったって？」
舞は知リたかった。

プロポーズされるほど目の前の少女が勇希に好かれる理由を。

「だからーっ！ それはー！」

「実はわたし、一回死んでるらしいんです」

笑子はあっけらかんと答えた。

「言っなー！」

「死んでる？ なに言ってるの？ 生きてるじゃない」

舞は眉を寄せる。

「聞くなー！」

「ええ、だから蘇ったってことですよ」

「もうやめろーっ！」

勇希がじたばたと二人の会話を遮ろうとしたが、会話はもちろん筒抜けだった。

「死んで、蘇った？ そんなことあるの？」

「わたしもびっくりなんです。でも地下鉄は通ってますし、電話は小さくなって持ち運びできるようになってますし、街の雰囲気もだいぶ変わっていましたし、東小も、あの校舎の建物、綺麗になってますよね？」

「建て直したって……」

思わず舞は考え込む。

瓜二つの顔をしていて二人が無関係とは考えられなかった。なにがある。それは必死な勇希の姿を見ればわかる。それに彼に限って初対面の相手にプロポーズするようなことはない。自分が告白したとき既に、彼にはずっと好きな相手がいたのだ。その相手が目の前の少女だったとすれば話は繋がる。蘇った、その言葉通りの意味を取るならば、むかしに死んだ相手のことが好きだったということになる。

けれども、東小で新校舎と呼ばれる建物ができたのは舞が入学するよりずっと前のことだ。正確に記憶しているわけではないが、生まれるよりも以前の話である。目の前の少女が見た古い校舎など見られるタイミングがない。それを見ている過去の人物と、同じ年の

勇希が出会っていたなど仮定においてもありえない。

「は、はっ、はっ……」

勇希は息切れしている。

なぜ、ここまで必死なのだろう？

「どうかしましたか？ 舞さん」

「死んだのっていつなの？」

その疑問を解き明かすには知るしかない。更に質問を進めようとする。

「舞！」

叫びが質問をかき消した。

そして、腕を引っ張られていた。

「勇希くん、いま、舞のこと舞って……」

自分から？

「ちよつと来いつ、話しておくから！」

「う、うん」

強引に自分を連れて行こうとする勇希を見ると疑問に嬉しさが勝った。

「ゆうきくん、舞さんと話するのはわたしの……」

「その話は後で！ あとベンチの下！」

舞は勇希が指差した先に黒猫が丸まっているのを確認する。

そのまま、勇希は舞をシャワーの影に連れて行く。

「あの人は、おれの母さんだ」

その事実が単刀直入に告げられた。

「……それってどういう？」

舞の中で疑念が綺麗にまとまりを見せたが、結局、一点だけが問題だった。

「言った通りだよ。母さんなんだ。おれらと同年ぐらいで生き返った。でもそのことを本人は知らない。だからこれ以上、死ぬ前のことを聞くのはやめてくれ」

勇希は舞の目を見ず、シャワーヘッドを見上げて言った。

「そうじゃなくて、勇希くんはお母さんだとわかっててプロポーズしたの？」

「……それは」

舞の目を一瞬だけ見て、勇希は目を伏せた。

「そんなのおかしい。お母さんでしょ？ そんなの……」

看過できない事実だった。

普通ではないのもそうだったが、舞にしてみれば恋人を母親に取られるという状況そのものが許しがたかった。口にはしなかったがマザコンである。

「わっかんねーよ！」

勇希は大きく首を振った。濡れた髪から水滴が飛ぶ。

「わかんないって」

「だってそうだろ？ あの人はおれの母さんだけど、このまま生き続けたっておれを生んだりしない！ おれの母さんにならない！ 父さんとまた結婚したって、おれは生まれてこない！ だったら、おれの母さんになってもらうには……」

感情的に喋っていた勇希の目が不意に一点を見つめて止まった。

「どうしたの？」

つられて舞もそちらを見る。

「……わたしが、ゆうきくんのお母さん？」

ひきつった表情を浮かべて、十三歳の笑子が立っていた。

10 マザーコンプレックス（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

10 諸々、私たち家族は大変なピンチです。

しばらくの間、三人は立ち尽くしていた。

どうすればいいのかわからないに違いない。勇希は自分を挟む二人と視線を合わせようとはせず胸元にぶら下がる鍵を握りしめていたし、笑子はだれかが冗談だと言ってくれるのを待っているかのような顔をしたまま言葉を失っていて、舞は考え込むように腕を組んで目を瞑っていた。そんな様子を見つめる私こそどうすればいいのかわからないのだ。

少し転寝をしている間にどうしてこうまでこじれるのか。

などと、己の怠慢をなにかに転嫁しても仕方がない。

避けて通れる問題だと思っていたわけではない。蘇った笑子が、以前の自分がなにをしてきたのかということに興味を持つのは自然なことである。守護者として戦い、結婚をして、子供を産み、どうして死んだのか。そのすべてを、いつかは私が責任をもって知らせなければならぬことはわかっていた。だが、蘇って数時間、十三歳になってしまった彼女には受け入れられないであろう事実が多く含まれていることもわかっている。

だから時間が欲しかった。

しかし、それも私の言い訳に過ぎない。いきなりのプロポーズなどで見失っていたが、幼くして母親を失っていた勇希の気持ちを考えれば、蘇った母親を、どういう形であれ自分の近くにあるものにしたと思うのは必然的なことだ。これまで一度も息子の口から母親を求めるような言葉は聞いたことがなかったが、それこそ死んだ笑子を唯一の母親と思えばのことだったのかもしれない。時間を待つ余裕などなかったに違いない。

遅かれ早かれ、いずれは直面しうる状況だった。

私は誤認していた。

これは息子の三角関係の問題ではない。

家族の問題だ。

「……そんな。わたしが、ゆうきくんのお母さんなら」

笑子は勇希から私に視線を向ける。

「ゆうきくんのお父さんのまぞのさんは、わたしの――」

「そのことは気にしなくていい！」

彼女の呟きを遮って、私は口を開いた。

「猫がしゃべった？」

舞が驚いているがそれには取り合わず、私はまっすぐに笑子を見る。バレることを気にしている場合ではなかった。ここで沈黙することは私が私の責任を放棄するに等しい。

決断しなければいけないことだった。

「まぞのさん……」

笑子が私を見る目には恐れが浮かんでいる。

自分では知る由もない、過去であり、未来でもある自分に対する恐れだ。

「はつきりと言っておく。かつての君がどう生きたかは問題ではない。君は、いま十三歳の君として自由に生きる権利がある。それが『蘇った』ということだ。私は君を過去に縛らない。他のだれの過去にも縛られることはない。もちろん、私の息子の過去にも」

そう言って、私は勇希を振り返る。

「……」

勇希は私の目を見ると、なにも言わずに視線を外した。

「勇希、わかつているはずだ。彼女は……」

「それなら！ 父さんはどういっつもりで生き返らせたんだよ！」

「それは……」

私は答えに窮する。

死んだ人間が、蘇ったとして同じ人生のつづきを選ぶのかどうか考えなかったわけではない。それでも、私は信じていたのだ。死んだ当時の笑子ならば、私と、息子との、三人家族のつづきを選んでくれる。疑う余地はなかった。信じればこそ研究をつづけられた。

けれども十三歳で蘇らせてしまった。それが私の意思に反することであり、意図せぬことであつたにせしても、蘇らせた責任は負わなければならぬ。選択の余地はなかつた。信じるということが、そのリスクを飲み込むものである限りは。

「……仕方がない」

辛うじて口にできたのはその一言だけだつた。

「なんなんだよ！　好きなんだろ！　愛してんだろ！　だつたら……」

勇希は私の首を掴んで吊るし上げる。

「……」

「なんとか言えよ！　父さん！」

鼻先に息子の悲壮な表情を見ながら、私はなにも言えなかつた。言つべきことはもうなかつた。

首が絞まつてきていた。息子の腕は記憶しているよりよほど力強かつた。猫の首ぐらい、容易くへし折れるに違いない。私は空を見上げる。死ぬことは恐ろしくなかつた。死んでも魂は残るのだ。この世界でも、魔界でもない、魂の在り処とも呼ぶべき場所へ行くだけだ。笑子を蘇らせた後、その研究を進めようと思つていたが、それももういい。

愛している。

妻だつた笑子を、私の息子を。

かけがえのない家族を。

雲ひとつない夏空が視界に広がっていく。もういいはずだ。私の十年は無為ではなかつた。笑子が新しい人生を選び、息子は自立する。そう信じられる。だれよりも過去に縛られていたのは私で、そんな私だから報われなかつた。ただそれだけだ。命を操つた、命が大事などとは言わない。息子に殺されるならそれでもいい。惜しむ命でもない。

仕方がない。

「なんとか言えよ！」

ぐらぐらと視界が揺れる。揺さぶられる。

「すま、なかった、勇希」

「……っ！」

息子が両手で私の首を掴んだのがわかった。

息が詰まる。

視界が白くなる――

「ダメっ、勇希くん！」

「まそのさん！」

――時間間隔を失って、気付くと私は座り込んだ笑子の膝の上にいた。

だが、彼女は空ろな視線を正面に向けていた。

「どけよっ！ カンケーねーだろ、如月には！」

「よくわからないけど、お父さんなんでしょ？ ううん……お父さんじゃなくて、猫を殺すなんてダメだよ！ 勇希くん！」

そこには舞に背中から両腕を抑えられ、うつ伏せに倒された勇希がいた。振りほどこうとしているが、ぴったりと少女が張り付いていて動けないようである。

「ムカつくんだよ！ ずっと、ずっと死んだ母さんのことしか考えてなかったくせに！」

射殺するような視線を私に向け、届かない手を伸ばす。

「夫婦だったんだろ？ ずっと幸せにするって誓った！ だから生き返らせた！」

爪を突きたて、コンクリートを引つ搔く。

「なのに、いざとなったらなにも言わない！ 父さんはオクビョーだ！ 猫にされて、半年もかかって戻ってきて、自由に生きるケンリ？ バカじゃねーの？ そんなの怖がつてるだけだ！ おれは、おれは母さんを母さんにする！ そうじゃなかったら……」

息子の目から涙が溢れて、落ちた。

それは一瞬で蒸発する。

「そうじゃなかったら、おれは、なんでここにいるんだよ……」

指先から力が抜け、勇希は地面に顔を押し付けた。

「苦しかったんだ」

舞はそう呟いて慰めるように息子の背中を優しく抱いた。

私はなにも言えなかった。

臆病。

その通りだ。

猫になり、笑子を十三歳にしてしまった私には本当のことを告げる勇気がなかった。息子の言う通り、好きで、愛していても、それを伝えることができなかった。そうすることが彼女の幸せなのだと思いを付けて、己の無力を言い訳に、欺瞞だけを口にした。

勇希が憤るのは当然だ。

「……ゆうきくん」

不意に、笑子は立ち上がった。

膝の上にいる私のことは忘れたようで、こてんと転がされる。

「わたしは、どうしたら……」

ババババババババババババ。

笑子の言葉をヘリコプターが掻き消した。私の耳には遠くの音として少し前から聞こえてはいたのだが、気付くとそれらは四方から一斉に向かってきていた。複数機の音が重なり合う爆音が校舎の窓を揺らし始めている。

その場にいた全員がそれぞれ空を見上げた。

ほどなくやってきた一機がプールの真上でホバリングをはじめ、おくれて四機が東西南北から姿を現す。自衛隊機ではない。それらはまるで学校を囲んでいるようであり、だれがどう見ても異常な光景であった。舞が立ち、勇希も起き上がる。

プールの水面が激しく波打っていた。

「……………」

声は聞き取れなかったが、舞がなにかを叫んで指差す。

「ごきげんよう、諸君！」

私たちの真上にいる一機から男が身を乗り出していた。この暑さ

だというのに上下きつちりとスーツを着込んだ男で、拡声器を構えこちらにむかって叫んでいる。

「ご覧の通り、諸君らは包囲されている！ 我々は警察庁警備局警備課特定魔法対策室！」

機動隊？

「その黒猫、馬園圭介には逮捕状が出ている！ 及び……双子？ 聞いていないのだが！ ……息子の馬園勇希は保護の要請がある！ おとなしく投降しなさい！」

男はへりの中に怒鳴る声まで拡声しながらそう宣告する。

「私の正体を知って……野末か」

自発的に告発したとは考えにくい。喋らされたのか。

「……！」

勇希が私を見てなにか言っているがまるで聞こえない。

「まずいな……」

私は首を振った。

魔法の研究等に関しては日本国の法令はないので警察の出る幕はなかったはずだが、大学に勝手に侵入し、施設を破壊したりもした本日の行動に関して言えば逮捕される理由がないわけではない。別件からの手回しは可能だろう。とはいえ、私たちの行動を見越していたとは思えない。それならば大学で取り押さえられる。考えられるのは、今日の事態に対する対応ということだ。自衛隊と連携していない彼らの行動が意味すること。

それは――

「父さん、これは！」

勇希が近くまで来て叫ぶ。笑子と舞も私を取り囲んでいる。

「彼らが首謀者かもしれない」

「はー？」「首謀者ってどういう……？」「警察でしょ？」

子供たち三人はそれぞれ首を傾げた。

正確に言えば彼らに指示を与えられるだけか、だろう。実際のところ、心当たりがないわけでもなく、噂も聞いたことがなかったわ

けではない。もちろん類推と憶測から導き出した、あくまで私の予測だ。だが、予測が当たっている場合を考えれば、

「説明している暇がない、逃げるぞ！」

私は鼻先でプールの出口をさし、駆け出そうとする。

「に、逃げるんですか？」「え、えっ？ 舞も？ 逃げるの？」

「ムダだ！」

叫んだのは勇希だった。

じつとヘリを見上げている。その視線の先、まだビルの七、八階はあろうかという高さから男が飛び降りていた。その他の四機からもスーツ姿の若い男女が計五名。パラシュートなど使える高さでもないというのに躊躇無く飛んでいた。

私と笑子と舞もそれを見上げるしかない。

「三人とも、そこにいろよ！」

だが、勇希の判断は早かった。

胸に鍵を差し込み、剣を両手に構え、男に向かって飛び上がる。閃光とともに、ヘリの暴風とは違う爆風が吹き荒れた。

それを合図にするようにホバリングしていた五機のヘリは散っていく。直後、プールから激しく水柱が立ち、私たちに降り注いだ。その最中、他の四人が、プールサイドの四隅を抑えるように地上に着地する。ほんの一瞬の出来事だった。

水柱が消え、空に虹がかかる。

そして私たちの二十五メートルと少し先、プールサイドの更衣室が壊滅的に壊れていた。粉塵が舞い上がり、プレハブの屋根がひしやげ飛び、ロッカーらしきものが壁に突き刺さっている内部が露わになっている。言葉を発する間もなかった。

ヘリの音が遠のいていく。

ずぶ濡れの私たちはお互いにお互いの顔を見た。

「どうなってるの……？」

前髪からしたたる水滴を拭って舞が呟く。

「その、よく考えたら警察から逃げるのはよくないと……」

ぶるぶると頭を振って水気を払って笑子は現実逃避的なことを口にした。

「へりから飛び降りる連中がただの警察だと？」

濡れた身体をどうする気力もなく私は俯く。

「いえ……それは確かにそうですけど」

「ゆゆゆ、勇希くんは、どこに？」

「おそらく」

きちんと見えたわけではなかったが、私はプールに視線をやる。

「……このっ！」

すると、勇希が飛び出してきて、目の前の飛び込み台の上に立った。

そして壊れたプレハブからもスーツの埃を払いながら、何事もなかったかのように男が現れる。なにかぶつぶつ呟いているようであるが、聞き取れはしない。私は、取り囲む他の四人にも注意を払っていたが、動く気配はなかった。どういふつもりなのかわからない。だが、これだけはわかる。

魔法に対抗できるのは、同じスケールで考えれば魔法だけだ。相手がへりから飛び降りられる軽業師であつたとしても束ねられた魔力である剣を防ぐことはできない。空中で勇希とぶつかって、互角それが意味するものは彼らもまた魔法を使っているということだ。肉体を強化し、そして攻防に魔力を用いている。でなければ理屈に合わない。

あの男がそうであるということは、他の四人も同様だろう。息子の言う通り、逃げることに意味はなくなっている。なんと言っても、猫と普通の少女が二人。頼れるのは勇希だけだ。

「勇希」

呼びかけると息子は振り返った。

「父さんのこと、もう父さんと思わない。おれが守るのは、母さんと、如月だけだ」

そして私にだけ届くような小声で言った。冷やかな目で見てい

た。まるで他人を見るような目。そこには怒りや哀しみといった感情すらなかった。なにが乱入してこようと、すぐに忘れるはずないことではある。見限られたのだ。臆病な私が、勇希に。

「……」

私には返す言葉がなかった。

「……ゆうきくん」

笑子はそんな勇希を頼もしげに見ている。

「勇希くん！」

舞が勇希に飛びついた。飛び込み台の上でくるとスイングする。

「どうなってるの、さっきの光るの。なにしたの？」

「あぶねーから、ちよつと離れて待ってる」

「う、うん」

急に男らしく見える勇希の言葉に、舞は頬を赤らめた。つい数時間前まで女装していた息子だと言うのに少し見ないうちに逞しく成長している。少女たちに勇気を与えている。

諸々、私たちは大変なピンチです。

私の存在を抜いても、母と息子と、その彼女で家族が成立してしまっつ。

いや、ちよつと待て、これは私がピンチなだけだ。

10 諸々、私たち家族は大変なピンチです。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

11 しょっぱい戦い

一人ぐらいならば楽に隠れられるダンボール。

勇希と別れた後、屋上から入ったビルの内階段に家庭用エアロバイクの空き箱と、放置されたままのガムテープを見つけたときに、テディの腹は決まった。

これを使って自力で学院まで戻ろう。

テディは全裸だった。守護者が扉を開放して戦う上では、防御のために魔力を体表に展開する必要がある。彼女らはそれを動物の体毛としてイメージし肉体を《変異》させるのだが、その作用として衣服は破壊されざるを得なかった。そういう意味ではどうしようもないことなのだが、まさかそのまま街を歩き回るわけにはいかない。ダンボールに身を隠して移動しよう。

あまり賢い方法とは思えなかったが、選択の余地がなかった。

街にいる自衛隊に助けを求めることはできた。彼らは魔法についても基礎的な事情は把握している。近くにはテディが境界域から脱出した場合のためのバックアップもある。姿を見られることを覚悟して鍵を使えば自力で戻ることできる。

だが、それらの方法を選べば、無事に戻ってきたことが知られてしまう。

不信感がテディを突き動かしていた。

境界域で受けた魔人の襲撃。

「ユウキがあしなかったら、あたしは間違いなく死んでた」

目の幅に合わせてテディは鍵の先で突き刺してダンボールに穴を空ける。

認めたくないことだが事実だった。あのまま魔人数人を相手に勝負見込みはなかったし、自分の命を引き換えにして魔人がこちら側に出ることを阻止しようとしていた。一連の事態の中心にいるように見えた少年は利用されていると確信した瞬間でもあった。

現れるはずのない場所に現れた敵、それが意味するのは身内の裏切りだった。だれかが魔人を魔界からこちらの世界へ連れてこようとした。テディが巻き添えに死ぬことを厭わない方法で。結果的にそれは防ぐことができたが、裏切り者の正体がわからない。堂々と生きて戻るのは危険だった。

テディ自身を狙う動機がある相手である可能性はもちろん、守護者、ひいてはこの世界に仇なす相手であつた場合、無事に帰つてこれで終わりにはならない。だれが裏切っているのかわからない以上、だれに助けも求められない。

守るべきは魔界の穴だ。

基本に立ち戻るしかなかった。だれが敵でだれが味方かなど、考えてもわかりはしない。この世界を魔力の侵食から守ることが守護者の目的であり、それを邪魔するものが敵になる。テディはシンプルに考えることにした。

そんな風到大義名分を立て、シンプルに考えないと挫けそうだったのだ。

「これって、どう見てもヘンタイだし……」

建物を出て数分も動くと、ダンボールの中はサウナ状態になった。全身にびっしりを汗を掻き、それでも脱ぐわけにはいかない箱を被ったまま、かたつむりのように鈍い歩みで、さらに周囲を警戒しながらテディは進む。住人たちが屋内待機を指示されていることは知っていたので、警戒すべきは自衛官だけだったが、冷静に考えるとこうしているところを見つかれば恥もいところだった。

ダンボールを持ち上げられ、汗だくの裸と、張り付いた髪と陰毛を見られる。呼吸も荒く、おそらく湯上りのように上気しているであろう顔、自分がするに違いない苦笑い。総合的に見て、相手がそれをどう捉えるかなど考えたくもなかった。

「……死んだほうがマシよ」

垂れ落ちる汗がアスファルトに残ってないか背後も確認する。

道の隅、ダンボールが置かれていても変には見えないであろう箇

所を主に選んで、極力道路を横断しないようにしながら、テディは確実に前進をつづける。やるからにはやり遂げなければならなかった。守護者としての正義のために。

「のど、渴いたな」

箱の中にこもった熱気で朦朧としはじめていた。

真夏である。ダンボールの中である。ほとんど蒸し焼きの状態である。

テディは周りを見回し、一般家庭の玄関先に設置された水道を見つけると、ずるずると移動する。普段の彼女ならまず口にしようとも思わない水だが、贅沢は言えなかった。むしろオアシスである。ずるずると移動して周りにだれもないことを確認すると箱を半分持ち上げ、蛇口に直接口をつけゴクゴクと飲む。生温く、苦い水だったが、染み渡った。

生き返る心地。

「熱中症のこと、考えてなかった……」

一息入れ、ダンボールを被ってアスファルトに座り込む。

太陽は無慈悲だった。別の意味で死ぬ寸前だった自分に気付いて、テディはぞっとする。これをつづけるには水分補給の手段が必須だった。水筒かペットボトルか、しかし全裸で、金も持たない彼女にすぐにそれを手に入れる術がない。

「ペットボトルが道に捨ててあれば……」

そう呟いて彼女はハッとした。

「いけない。完全にダメな人になってる」

ぶんぶんとう首を振り、人間としての尊厳が残っている内にと先を急ぐ。

少し進んだところに自販機があった。

その横には当然のことながらゴミ箱がある。

「……捨ててあるペットボトル」

ごくりと喉が鳴る。

だれが口をつけたかわからないものだったが、洗えばなんとかな

る。このまま水を持たずに進めば死んでしまう。自分が死ねば街は危機だ。背に腹は変えられない。テディの脳裏に次々と自己正当化の文言が現れ、消えていった。

「いやいやいやいや、それはダメ、ダメよあたし、それならいっそ……」

自販機をぶっ壊して。

飲みたいものを飲み放題！

「それはもつとダメでしょ、あたし！」

ダンボールの中で這い蹲りながら渴きのことしか考えられなくなっている思考から這い上がるようにテディは呼吸を落ち着ける。守護者の力を使えば、位置を観測され、こうして隠れて戻ろうとしていることの意味がなくなる。自販機を破壊するのは論外だった。ならば。

「生きるためなの、生きるため……」

戦場の兵士ならば泥水をすすってでも生き延びなければ、ここが日本で普段は平和な街と言っても、今は非常事態だった。ゴミのペットボトルがなんだというのだ。世界にはもつと苛烈な環境で生きている子供たちがいる。

素っ裸でダンボール被って、ゴミを拾ってでも。

正義のために。

「カッコつけてなんて……」

「自販機見つけたっす！」

テディがゴミ箱の横まで這って行った直後、背後から声がした。ばたばたと複数の足音が近付いてくる。あまりの渴きに周囲への警戒をおろそかにしていたことに気付いて、テディは青ざめた。動いている所を見られただろうか。

おそろおそろ覗き穴から外を見る。

「ここは自分がおこるっすよ、ヤタテっち、ミズキっち」
制服を着た下級生と、

「紅茶おねがいします」「サイダーだ、ぜっと」

「了解っす」

おそらくその友人たち二人と、

「じゃ、緑茶で」

一人の男。

「オニイサンは自腹っすよ？」

「え？」

「大人じゃないっすか」

制服を着た少女がチャリチャリと硬貨を機械に投入していく。

ボタンを押され、小気味いい音を立てて落ちてきたペットボトルが二人に手渡される。冷えたドリンク。テディは唾を飲み込む。プシュ、とキャップを外してその冷たさを飲み干していく。まるで嫌がらせのような光景だった。

「ケチだな、一緒に逃げる仲間じゃないか」

「仲間っすか？ どうなんすかね？」

路上に置かれたダンボールには気も向かない様子だったことに安堵するより、なぜ彼女らが街中をうろついているのか考えるより、目の前の飲み物を奪いたいという衝動を抑えるのでテディは必死だった。この世界を守る。その本人がまさか略奪などありえない。

テディは握りしめた鍵を見つめた。

欲望に反応し、光を帯びはじめている。守護者は魔に魂を支配されないために、自らの欲望と常に向き合うことになる。移ろいやすく、時に意思とは無関係に暴走しかねないもの。それを制してはじめて、魔に魂を支配されたものを制することができる。それが守護者の教えだった。彼女をはじめ、守護者はそのことに誇りを抱いている。

それがたとえ生存の本能的欲望であろうとも。

「自分たちは、オニイサンの言ってることを全面的に信じたわけじゃないっすよ？ あんな風に駅前を消し飛ばしちゃった犯人が学院にいるとか、アニメじゃないっすか」

制服の少女は最後に缶コーヒーを買い、一気に飲む。

その言葉にテディは耳を済ませる。事情を知っている？

「それは酷くないか？ ならどうして俺の言う通りに逃げるわけ？」

男は入れ替わりでお茶を買い、ペットボトルを額に当てる。

「ぶはっ、それは…… 本当のことを知りたいからっすよね。現実なんてそんなに面白くないって、大したことないって、確認しなきゃアニメの方が面白いつて言えないっすから」

「あれだけのものを目撃してまだアニメ？」

男は呆れたように言う。

「どれだけのものを目撃しようとアニメっすよ。現実の価値なんて簡単に崩れたりしちゃっすから。人間が価値を作って、価値を制御できるのは非実在の世界だけっす」

そう言うのと、残りの二人もうんうんと頷いていた。

ダンボールの中でテディは首を傾げる。

「…… 君ら、変わってるって言われるだろ？」

その気持ちを代弁するように男が言う。

「そういう標準を求められる価値観から抜け出したいんです、私たち」

「新しい価値が欲しいんだ、ぜつと」

男は一口お茶を口に含んで、キャップを閉めた。

「本当のことを見て、それでもそう言えるなら立派だとは思っけだね」

そう言うのとやれやれとダンボールに腰を下ろしてきた。

予想外の行動だった。ダンボール自体が厚手のものだったので凹んだり折れたりしなかったが、路面との間にあった隙間がふさがれ、内部のテディは一気に息苦しくなる。もともとサウナ状態だったがもはや限界を超えていた。

蒸し焼きにされることを想像してテディはパニックになる。

「でも実際のところ、学院に近付くにつれ自衛隊の人数が増えるのは事実だ。ここまではなんとかこれたけど、どうしたものかな。やっぱり四人で行動するのは無理があると思う。ここは二人ずつに

分かれていくのはどうだろう？ 俺とナツメちゃん、で、君ら二人」

「ロリコン」「ロリコン」

「自分、そんなにロリ需要ないと思うっすけど」

「いい加減ロリコンから離れてくれないかな？ こう言っちゃなんだけど、君ら三人に女性としての興味は抱いてないよ？ 俺の好みは年齢っていうより成熟度なんだよ。いるだろ？ 同学年でも凄い完成されてるような子。年食っててもそうならない人もいるし、その逆もある、その辺りを無視されると困るんだよ。あえて言うならさ……」

動けない。

男はテディの頭上で長話をはじめていた。暑さに呼吸が激しくなり、そしてどんどん酸素が減っていくような錯覚が襲う。喉の渇き、べたつく汗、アスファルトに焦がされるような足の裏、密閉空間。なにもかもが耐え難かった。いつそダンボールごと男を持ち上げ、爽やかな夏の風を全身に浴びたい。そんな衝動さえ生まれつつあった。

しかし、ここで見つかったらすべてが水の泡だ。

耐えるしかなかった。

いったいなにをしているのか、これが正義なのか、守るべき人々の無理解はわかっていたつもりだったが、こうして現実には虐げられる謂れがあるのだろうか。テディはとろけそうな脳みそを集中させ、身体を丸く抱え込み、耳を塞いだ。

「……美はそういうところにあるんだよ。そういうわけで、わかる？」

男はゆっくりとペットボトルを飲み終えるまで喋っていた。

「変態です」「変態だ、ぜつと」

「変態っすね、っていうかもう自分たちさっさと行くっす」

あまりの露悪趣味に三人は完全に男を信用できなくなっていた。

「ちよ、ちよっと待って」

テディはしばらく、彼女らが去っていったことにも気付かなかっ

た。

汗は舐めるとしょっぱい味がする。

「熱中症には塩分補給、熱中症には塩分補給、熱中症には塩分補給……」

現実的なことだけを考えるしかなかった。

結局、ゴミ箱からペットボトルを拾い、着実な水分補給をつづけ、二時間近い時間をかけてテディは学院の前までたどりつき、

「——動くダンボールってこれ？」

「ええ、そうなんです」

学院の周辺を警備していた候補生たちによってあっさりと発見された。

「て、テディさん？」

「はだか？」

そのときの彼女の顔は、涙と汗でぐちゃぐちゃであったと言っ。

事情はわからなかったが、緊急事態であることは明らかであった。発見した二人はテディの名誉のため、箱ごと速やかに保健室へ担ぎ込む。だれが敵か味方かもわからない状況においてこのことは結果的に彼女にとって幸運であった。それもこれも正義を貫こうとする不屈の意志が引き寄せたものだろう、間違いなく。きっと。

そう言わなければ報われない。

11 しよっぱい戦い（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

男はきちんと締めたネクタイを首から引き抜きながら、二十五メートルのプールを挟んで勇希の正面、飛び込み台に立った。シャツのボタンを外し、胸元を露わにする。細身ながら鍛え上げられた筋肉が覗いていたが、しかしそれ以前に、その胸に埋め込まれた機械に私は息を飲んだ。大人の掌ほどの円形から胸の内部に向かって植物の根のようなパイプが繋がれている。そしてその機械の中央には見覚えのある澄んだ青色の——液体。

魔力溶液だ。

「馬園圭介、見えているか！」

男は大声で言った。

「君の研究成果 人工魔力生成装置だ！ 小型化し、人間に埋め込んだ！ この意味はわかるはずだ！ これが新たな時代を開く『鍵』となる！」

「……バカな」

ありえない。装置の完成から半年で小型化を達成していることもそうだが、私の研究にない応用的な活用まで。野末が協力していたとしても、とても追いつくものではない。

いや、そんなことより、この状況は、

「勇希！」

息子が危険だ。

「……」

私の声に、ちらりとこちらを見た勇希だったが、頷きもしない。

「戦うな！」

「もう、おそい」

息子が呟く通りだった。

目にも留まらぬ速さで移動できる彼らにとって、二十五メートルという距離は間合いの内に入らない。プールを縦断して男が突っ込

んできていた。大人と子供の身長差そのままに覆いかぶさってきた手を受け止める。衝撃で足元の飛び込み台がひしゃげ、背後でプールの水が左右に溢れた。

「肝の据わった立派な息子だな、馬園」

余裕の笑みを浮かべ、組み合ったまま、男は私を見る。

「あんな猫の子のつもりはない！」

そう叫んで、勇希は男の腕を押し返そうとした。

反り返りかけていた身体を起こしながらプールに向かってじりじりと進んでいく。

「なるほど、一理ある。だが、子は親を選べないもの、だっ！」

「えっ？」

だが、男の方が一枚も二枚も上手だった。笑顔のまま、あっさりと力比べを放棄して、軽やかに身体を入れ替え、息子をプールに投げ落とす。全力の力を受け流され、ふたたび巨大な水しぶきがあがった。完全に遊んでいる。

「我々の職務は、君の逮捕と、息子君の保護だ。馬園」

男はプールに沈んだ勇希を見つめながら言う。

「だが、聞き分けのない子供に道理を説いてやる義理はない。この際、手荒な躰を施して、鍵を押収できるのならば手柄にもなる。本物の守護者に対する前にこうして『練習』する機会もそうはないだろう。我々にとってこの状況はとても都合がいい」

プールの底が抜けたのか、奇妙な音を立てて水が流れ出しはじめる。

男は私に決断を迫っている。

私の逮捕、勇希の保護などは警察として動く口実に過ぎないことは明らかだった。つまるところ、彼らは守護者と戦いに来ているのだ。その目的もおおよそ推測できる。

「ひとつだけ教えてくれないか」

私は呆然と立ち尽くす笑子と舞に目をやりながら言う。

「我々に答えられることならば」

「？先生？はなにを望んでいるんだ？」

「君もよく知っていることだ」

男は振り返って唇を皮肉に吊り上げた。

「世界平和」

荒唐無稽の響きだった。

プールから紫色の光が迸る。

「魔界の穴を開くことがか？」

私は推測を口にした。

「質問はひとつだけじゃなかったのか？」

男は否定しなかった。

「そんなことをすれば、こちら側が魔界になるのと同じだ！」

「君たち学者連中が誤解しているのはそこだ。魔力が人の魂を魔に染める？ 違うだろう？ 最初から人の魂は、魔だ。潜在的にある

ものが引き出されているだけだ。だとすれば、それも力で捻じ伏せる必要がある。平和を望まぬ者たちに先んじて」

「それが世界平和だとしても……」

「君にそれを口にする権利があるのか？ 死んだ妻を蘇らせることさえできれば、この世界の秩序さえも破壊して構わないと言ったそうじゃないか！」

「……っ！」

その通りだった。

「——この研究が世の中を根底から変えちまうってことがわかっていながら——」

人の生死が自由になってしまったらどうなるのか。

わかりきったことだ。世界は混乱する。人口の際限ない増加、それから引き起こされる諸問題、あまりにも影響が大きすぎるので、具体的なシミュレートをする気にもなれなかった。

それに私にとってはそんなことはどうでもよかったのだ。

「このおっ！」

濡れた翼をはばたかせながら、勇希がプールから飛び上がった。

血管を走る魔力が、身体の色まで変える。身長は三倍はあろうかという筋張った翼、《変異》によって過剰に強化された肉体、そして男を見る殺気立った瞳、それは正に悪魔的な姿だった。

魔法が人の本性を暴くのか？

そうではない。私が世界のことなど考えなかったように、人は最初から……。

「勇希くん？」……ゆうきくん」

舞は目を擦ってまばたきを、笑子は手で口を押さえた。

「扉の開放か。直に目にするのははじめてだ。なかなか凄いものだ」

余裕の態度を崩さず、男は呟いた。

「このっ、ヤローっ」

そう叫んで、勇希がさらに上昇、勢いよく反転して急降下してくる。

男はその様子を見上げながら、ゆっくりと手を挙げた。

「撃て」

銃声。

四方を囲んでいた四人が一斉に拳銃を抜いていた。

勇希はそれに気付いて翼を盾にしたが、銃弾が当たった所に閃光が走り、見る間に大きな穴が開いて貫通した。直後、二射目の銃声が響く。三射目、四射目と立て続けに撃たれ、踊るように空中それを受けた息子の身体は、そのまま真つ逆さまに墜落した。

またプールに水しぶきがあがった。

私は慌ててかけより中を覗きこむ。半分ほどまで減った水面に、勇希の身体は浮かんでいた。意識がないようで、肉体の回復がはじまっていない。水に紫色の血が広がっていく。

「圧縮した魔力を込めた弾丸だ。高密度の魔力は、それ以下の魔力を相殺する。結果、銃弾は銃弾としての威力を充分に発揮できる。効果は実証できたな」

「相手は子供だぞ！」

「その子供を使って戦わせている君が言うことではない」

急に無表情になり、男は言った。

「……」

なにも言い返せず、私は首を振る。

そんなつもりではなかった。あくまで私が人間の身体を取り戻し、妻を取り戻し、家族を取り戻す、そんな小さな、だれもが望む幸せを欲しただけだ。世界平和などという大それた正義を掲げるつもりもない。私は。ただ。それなのに。

「もう、やめて！」

「やめてください！」

舞と笑子がプールに飛び込んだ。

腰ぐらいまである水を掻き分けて、勇希のもとにかけよっていく。
「押さえる」

だが、男は構うことなく部下たちを動かして二人を取り押さえさせた。

「はなせ！」「はなして！」

じたばたと暴れていたが、為すすべなくプールから引つ張り出される。

「繰り返すが、我々の職務は君の逮捕と、その息子の保護だ」

「……」

「だが、君の息子が魔法を用いて我々に抵抗する限り、それは制圧しなければならぬ。無軌道な力は平和を乱す。こちらには正当防衛を行なう用意がある」

男は淡々と言葉を繋いだ。

「だが、鍵から無尽蔵に魔力を得て、心が折れない限り戦いつづけようとする君の息子にいつまでもつきあうことはできない。現状、我々に埋め込まれた人工魔力生成装置から肉体の《変異》に十分な魔力を得られる時間は限られている。従って鍵を奪う必要がある。魂の奥にまで突き刺さった鍵を抜くには、君も知っての通り、忍びないことだが……」

「私が説得して、息子に鍵を渡させる」

私は男の言葉を遮った。

どうあれ勇希を殺させるわけにはいかない。

「……賢明な答えだ。父親としての責務を果たせ」

私はプールに飛び込んで、息子のところまで泳いでいく。猫の身体は水泳には向かないが、底には大きな穴が開いていて、水はほとんど減っていた。

順序を見失ってはいけない。

たとえ、勇希が私を父と思わなくとも、私にとってはかけがえのない息子であることは変わらない。笑子が私を夫だと思わなくとも、私にとっては永遠に愛した妻であることも変わらない。私たちはどうしても家族なのだ。そこに今は私の居場所がなかったとしても、これから作っていくことはできる。私の思いひとつ、行動ひとつ、失った過去をとりもどせなくとも、未来は作り上げていくことができる。

猫の身体で泳ぐのははじめてのことで、溺れそうになりながらも、渦巻く水面を私は必死で四肢を動かし、進んでいく。浮かんだ、息子の身体は段々と穴に吸い寄せられていた。

「起きろ！ 勇希」

呼びかけると水が口の中に入ってむせる。

「勇希！」

「……う、あ？」

目を開けた息子の身体に力が入って沈み、飲んだ水を吐きながら起き上がった。

「げっ、げほ……、あれ？ おれ……」

「勇希、よかった……おあ？」

私は安堵しながら、必死に脚を掻いて寄っていく。だが、息子の身体より、私の猫の身体の方が流されていた。流出する水の勢いに負けて、穴に吸い込まれそうになる。

いかん、あまりにも後先考えずに飛び込んでしまった。

「助け、で」

と、言った直後に、勇希の手が私の身体を掴んでいた。

「なにやってんの」

「……すまん」

息子は私を抱えて水底をけり、プールサイドへ転げ出た。

「ちくしょ……母さん、如月」

私を放り出して、勇希は取り押さえられている二人を見ると翼を立てた。さきほどの銃弾で穴だらけのそれは徐々に回復をはじめているが、息子自身の疲労の色は明らかだった。両腕で震える膝を押さええている。立つのがやつとの有様だ。

「もういい！ 戦うな」

私は息子の背中に向かって叫んだ。

「？ ……ふざけんな。母さんと、如月を助けなきゃ」

「戦わなくとも助けられる。彼らは敵じゃない」

味方でもないが、少なくとも彼らは職務としてここに来ている人間だ。

「……いみ、わかんねーよ。逃げろって言ったのは」

勇希は言いながら、前に向かって足を踏み出す。

「私だ。だが、もういい——」

あの男の言葉で状況は充分にわかっていた。

仕組まれていた。私が猫にされる以前、人工魔力生成装置の研究に金を回してくれ、私に不相応なポストまで用意してくれた？ 先生？ が裏で糸を引いているのだと。おそらく野末を動かして私を猫にし、同じようにして他の人間にもさせていた研究を統合して、人工魔力発生装置を小型化し、ああして人間に埋め込む技術まで導き、警察内に魔法に対抗する組織を作ったのだろう。それができる人物だ。世界平和のため。それが本気かどうかはわからないが、口癖だったことは知っている。

けれども、そんなことはどうでも良かった。怒りの気持ちもわからない。それについて追求する気もない。私は世界平和などにはまる

で興味がない。しかし、だからこそ、彼らは私たちを殺しはしない。目的の障壁と思えば排除するだろうが、そうでなければ無事に済むはずだ。特殊な立場とは言え、警察である限りは無闇に人を殺したりはしないものだ。

だが、そう言っても息子を説得する材料にはならないだろう。

「――勇希、私は母さんを愛している」
「……」

息子は、さらに一歩歩こうとして、足に力が入らないのか崩れ落ちた。

「だからこそ、蘇った母さんが、聖笑子として新しい人生を歩むことを尊重したかった。それが私の愛なのだった。わかってくれとは言わない。私が臆病で、気持ちを伝えることを怖がっただけだと言われればその通りだ。言い訳のしようもない」

私はゆっくりと這い蹲る息子の正面に回り混む。

「でも、それでも、だ。息子である勇希のことも同じように愛している。その気持ちが伝わらなかったかも知れない。不甲斐ない父だったかも知れない。許してくれと言っても、許されるものではないかもしれない。だが、私たちは家族だ。どんな形になろうともそれは変わらないと私は思っている」

「……わからねー、よ」

荒い息を吐いて、勇希はよろけながら起き上がった。

「鍵を渡すんだ。大事なものはなんなのか、わかるはずだ。もう魔法は必要ない。私たちは家族で、一人も欠けていない。それが大事なんだ」

「……これは、母さんの形見、だろ」
苦しそうに勇希は言う。

「本人が生き返っている。形見はもう形見ではない」

「おれは、母さんと、父さんと……」

勇希の身体の色が元に戻りはじめていた。

「そうだ。私も笑子と、勇希と」

歩こうとする足がもつれで、力なく座り込むと、翼が光の粒になつて消えていく。

「……これを渡せば、みんな、助かる？」

焦点の合わない目で私を見て、勇希は自分の胸に手を当てた。

「ああ、助かる。父さんが保証する」

「そつ、か。じゃ……」

鍵を抜き取つて、私に手渡そうとして限界を超えたのか、息子はぐったりと倒れた。

すぐに寝息が聞こえてくる。無理もないことだ。

カチン、と転がった鍵を啜えて拾い上げ、私は男の前に向かう。

「これで、いいだろう？」

足下に鍵を投げ、私は言った。

視線の向こうで、押さえられていた笑子と舞が解放され、勇希のもとへ駆け寄っていく。完全に眠ってしまったらしい息子を仰向けにして頬を叩いたりしているが起きる様子はない。

「十分だ。迎えも来た」

拾い上げた鍵をしげしげと眺め、男はプールの入り口に目をやる。

コツ、コツ。

いつのまにやってきたのか、制服の警察官が多数、その中央に杖を突く老婆が一人。葬式にでも行くような真つ黒な、それでいて明らかに高価な洋装を身に纏い、ゆっくりと歩いてくる。真夏の陽射しが降り注ぐプールには似つかわしくない風景だった。

その姿に私は目を疑った。

「お婆様？」

背後で笑子が素つ頓狂な声を出した。

それも無理からぬことだ。

だが、私の驚きとはまったく違う種類の驚きである。

なぜ、ここにいるのだ。

笑子の祖母にして、聖木乃女子学院の理事長、そしてこの街の守護者を統括しているはずのこの人物が、よりによって？先生？と？

がつていたというのか？

ならば、この状況は――

「奇遇ね？」

動揺する私の心を見透かすような声で聖千笑^{ちえみ}は私に言った。

「でも、こういうことを運命^{ちえみ}って言うのよ？ 圭介さん」

「……運命、ですか」

そんなものは信じていない。

しかし、そのときの私は、それを否定する言葉を発することができなかった。老婆は、笑子の姿を見てぽろぽろと涙を流していたからだ。そこに嘘はない。これがどんな理由による再会であれ、水を注す気にはなれなかった。

――かつての孫に対する裏切りなのではないか？

11 「……運命、ですか」(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

12 私自身、若かったとは言え、ありえない返答でしたが。

思考がまとまらない。

「お約束のものはこれで宜しかったですか？」

シャツをきちんと着直すと、男は、私から受け取った鍵を千笑に手渡した。

「ええ、結構です」

ハンカチで涙を拭い、枯れた枝のような手で受け取った鍵をそれで包んだ。

「子供たちはお任せするわ」

「我々で責任を持ってご自宅までお送りします——おい」

男の指示で、制服の警察官たちがまず倒れている勇希を抱え上げた。迅速な動きだった。呆気にとられていた笑子と舞の二人も有無を言わず運び出そうとしている。

「まそのさん！ お婆様！」

「ちよつと、勇希くんをどうするつも……変なトコ触らないで！」

「抵抗しなくていい。警察の言う通りにすれば安全だ」

私はその声をかけるので精一杯だった。

制服たちと共に、四方を囲んでいた四名もプールサイドから立ち去り、私と男と老婆だけがその場に残った。奇妙な静寂の後、蟬の鳴き声が急に激しくなったように感じる。そして、気付くと二人は私を見ていた。

そうだった。私の思考がまとまろうがまとまらなろうが、私の立場は変わらない。

「覚悟ならできている、と言えば嘘になる。心残りも数え切れない

——」

私は自分に向かって口にした。

役目は終わったのだ。

男が迫っていた決断はつまり、私が息子を見殺しにするかどうか

だけだった。

最初に自らの身体に埋め込まれた人工魔力生成装置を見せ？先生？が私に見い出した価値の終わりを告げ、息子と戦い、必要以上に力を誇示して優位性を見せ付け、そして繰り返し『逮捕』を強調した。少し考えればわかることだ。日本で猫が法廷に引きずり出されることは、決してない。捕まえた先は殺処分なのだ。取引ですらない。

勇希を見殺しにはできない。それは考えるまでもないことだった。逃げられない私が果たすべき責任はひとつだけだ。

「——だが、笑子の命と、勇希の命、ふたつの命と引き換えなら、己の命も惜しくはない」

だから、私は息子を説得して男に鍵を渡した。この世界で魔法を知りながら生きられる道は二通りしかない。魔界の穴を守る側につく道か、それに対抗する側につく道か。笑子が生きていた頃、私は前者で、笑子が死んだ後、私は後者になっていた。どちらに正義があるかが関係なかった。私に必要なのは笑子であり、勇希である。それだけだ。

それだけなのだ、
「が」

私は己の無力を感じながらも尋ねるしかなかった。
「果たして、この状況で二人がこの先も生きていくことができるのか懸念している。この街にある魔界の穴を守る立場である聖家の当主と、そして世界の秩序を変革しようとする？先生？が手を結んでいるということがどういうことなのか」

「圭介さんの想像している通りだと思うわ」

千笑はハンカチを懷に入れ、ゆっくりと歩きだす。

杖を突いて歩く、その横に男が従った。

「あなたもいらっしゃい。笑子を殺したものの最期を看取りに」

「笑子を殺したものの……？」

それは――

笑子が守護者であることを知らされたのはプロポーズの後だった。

「――あ、その、笑子さんを、幸せに、だから、僕が、そう、えっ……と」

「どうしたの？」

「幸せを、僕に、笑子さんが？ 違う、いや、違わないけど、結婚を」

「結婚？」

「だ、だから、はい。これを、受け取ってください。結婚してください」

悩みに悩んで選んだレストランで、考えに考え抜いたセリフが土壇場でひとつも出てこないという様にならない私に、彼女はひとしきり笑うと、少し言いにくそうに答えた。

「圭介くんがそう言ってくれたのは嬉しい。けど、少し考えさせて」
渡した指輪の箱を静かに閉じた。

「わたしの家、ちょっと特殊だから」

「家？ それは、その格式？ みたいなことで？」

聖家が古くからつづく資産家であることはその時の私も知っていた。そういう意味で一般家庭の出である私とはいくらか不釣り合いであるということは周囲からも言われていたし、結婚を申し込むに際してももちろん悩んだことはある。

「ううん、そうじゃなくて。わたし、圭介くんに隠してるからあるから」

「……隠してること？」

聖木乃女子学院の中庭に連れて行かれたのはその一週間後だった。魔界の穴を封じている桜の巨樹の前に立たされ尋ねられた。

「なにも感じない？」

「……え？ いや、女子校だからって興奮なんかしてない、本当に私には資質がなかった。

「はあ……圭介くん。そうじゃなくて」

「じゃなくて？」

「わたしの家は、代々この場所を守ってるの」

笑子は自嘲するように唇を歪めて、聳える樹の幹を見上げた。

「ああ、もともと木乃市一帯が笑子さんの家の土地だったって話は聞いたことがある。市役所があるところとか、公園とか寄付した場所も多くて、市長も初代からしばらく聖家の人だ。街の歴史とは切り離せない。この学校が出来たのは大正年間だっけ？」

「ここを守ることが、世界を守ることだって言ったら信じる？」

「はい？」

私はそこで魔法と守護者のことを聞かされた。

笑子自身が守護者であることも。

「——だしたら、それは秘密っていうか、僕なんかに言っちゃって、ここに連れてきちゃって大丈夫なのかっていうか、そりゃ僕は喋らないけど……あの、笑子さん？」

「ごめんね、勝手に色々なもの、圭介さんに背負わせて」

気付くと、笑子は泣いていた。

「そ、それは、あの僕はそんなつもりじゃ……」

涙を拭つても拭いきれない様子で、しゃがみこむ笑子を見ながら、当時の私はおろおろするばかりだった。極めて頼りない男であったことは間違いない。

「でもね。わたし、あのね……」

泣きじゃくりながら、なにかを言おうとする笑子を私は抱きしめた。

「大丈夫。笑子さんが何者でも、僕の気持ちは変わりません」

「本当に？」

「本当に」

私は深く頷いた。

「……わたし、ズルいんだよ？　こうやってなにもかも教えちゃって圭介くんのこと、ここに縛ろうとした。わたしの家の事情に巻き込んで、わたしから離れられないように」

「ズルくたつて縛ったつていい。むしろ、僕は笑子さんになら縛りたい」

私はその時、本当に彼女の全てを受け入れる覚悟を決めた。

「今度は、わたしから言うね」

照れくさそうに笑子は私の耳元に囁いた。

「結婚して」

あの時『僕たち』はキスをした。

私たちの気持ちはそういうことで固まってはいたのだが、笑子の祖母、千笑は反対した。

「認められません」

初対面で、私が笑子の両親に「娘さんをください」と言うよりはやく、上座でお茶をすすりながら老婆は言った。シチュエーションのあまりの容赦なさ故の錯覚かもしれないが、虫けらを見るような目であり、首筋に氷を当てられるような冷ややかさであった。

「認め……？」

まだなにも。そう言う前に笑子が立ち上がった。

「どうして？ お婆様」

「理由は言わなくてもわかってるはずでしょう？ 見ただけでわかる。その男の種では良い跡継ぎが生まれない。諦めなさい」

種。

あまりにストレートすぎて私は言葉を失ったが、笑子はひるまなかつた。

「なにそれ！ だったら、お婆様のとくと同じでしょう？ 自分のときにそれで失敗したからってわたしも失敗するみたいに言わないでくれませんか？」

資質は遺伝する（というのが定説となっている）。

挨拶に行く前に説明は受けていた。聖家は女系で、代々もつとも資質の強いものが守護者を務め、後に当主として家を継いでいくのだということ。許嫁というほどハッキリしたものではないが、各地にいる守護者の家系の男から適齢期になれば婿を取るのだという。

その意味で反対は予想の範囲内ではあったのだが、それ以上に私が資質を持っていないことが問題になるであろうこともわかっていた。ただ、笑子はその点については気にしなくて良いのだと余裕だった。

なぜならば、千笑こそ家の反対を押し切って資質のない男と結婚した、聖家はじめての女だったからだ。失敗というのはそのことで、笑子の母の資質が弱く（なったと聖家の人々は思っている。もちろん学術的根拠はない）、守護者になれなかったことを指している。なれなかったというのは、千笑の時代から、外の資質を持つ人々を育てて守護者にするシステムがある程度確立され、候補生としての競争に敗れたということ、実際のところ、それは時代の変化としか言いようのない側面もあった。

「別にいいでしょう？ わたしは守護者になったけど、なれなかったとしたってわたしたちの家がすべてを引き受ける理由はもうないでしょう！」

自分もやったことで反対されるいわれはない、というのが言葉の裏に隠された笑子の主張であり、筋も通っている。私の立場ももちろんそれを支持するわけだ。

「私も若い頃はそう思いました。けれども、それだけではありません。この聖の家が力を持っているということこそが、どれだけ重要なことか、いずれわかります。諦めなさい」

「なんなの？ お婆様が言うから我慢して頑張つてやっと守護者になったのに、わたしの人生まで我慢しなきゃいけないの？ そんなのおかしいでしょう？」

「私たちはこの国の皆様からお金をいただいて……」

「うっさいババア！」

「な！ だれがババアですか！ 口を慎みなさい！」

お婆ちゃんっ子だったという笑子と、千笑の口論に私が口を挟む余地はなかった。

片身小さく正座をして嵐が過ぎ行くのを待っていると、正面に座

っていた笑子の両親も苦笑いをしていた。後に知ったことではあるが、笑子の両親は結婚に反対していたわけではなかった。家の中において絶対権力を持つている千笑に口答えができなかったということらしい。それはそうだろう。笑子の母が守護者になりたかったのかどうなのかは知る由もないが、なれと言われ、しかし母親のせい（かどうかは明言できないが）で資質が弱く、その後、資質の強さだけで結婚させられたということで笑子の弁を借りれば「最大の被害者」である。実母とは言え、複雑な感情があつたに違いない。結局のところ「娘さんをください」というより「お孫さんをください」の方をなんとかしなければいけないのだということを理解する。

その日はそれから話が進まず、またの機会を。ということと終わったのだが、私たちが千笑を説得することは最後までなかった。笑子が勇希を妊娠したからである。既成事実を作って強引に納得させようというつもりではなかったのだが、結果的にそうなった。

「やってくれましたね」

その報告に行ったときに千笑に言われたことだ。

「……はい、やりました」

もちろん私の責任なので弁解はできない。

私自身、若かったとは言え、ありえない返答でしたが。

妊娠に伴い、笑子の守護者としての任は解かれた。そして聖家からも出る形で、私たちは結婚することになった。千笑は式には現れず、その後、勇希が誕生した時に一度だけ、私の実家にやってきたことを除けば私とは接点がまっただけだった。もちろん同じ市内に暮らしているので、なんだかんだで笑子は勇希を連れて時々顔を出していたようでもある。

「プチ勘当だよ」

状況を笑子はそう表現した。

「それは、どうだろう……」

ともあれ、私もいつかきちんと千笑と話し合わなければいけない、そう思いながらも、仕事を言い訳に逃げつつ、そしてあの日を迎

えることになる。

笑子が殺されることになった十年前のあの日を。

——だが、今更だ。

学校の正門前に停められていたパトランプの乗った黒い車に私と千笑と男が乗る。私と千笑が後部座席、ハンドルを握っていたのはヘリから飛び降りてきた一人の女だった。ドアを閉めると音もなく発車した。他の通行車両のいない道路はスムーズで、要所を封鎖する自衛官たちも、警察と見ると道を開けた。現実感のない光景だった。

「自衛隊と警察の間には協定がある。互いに邪魔をしない、というね。とは言え、管轄外なので外から入るときは手続きを端折るために強引な手段を使ったが」

男が説明したが、私はなにかを答える気にはなれなかった。

シートの上に座って、見上げる窓から見える街並みは見慣れたものとは少し違った。

「笑子は蘇りました。見たと思いますが」

十年越しに言うべき言葉を探した。

「今度は私のような男に引っ掛かることもない。やり直せます。元夫として、息子の父としては勇希との今後の関係に一抹の不安はありますが、十三歳に若返っても彼女はやはり彼女でした。強い正義感を持っている。それはつまり、そう育てられていたということだ。大きな愛情で。私の存在が許せない貴女の気持ちは今ならわかるかもしれません。でも、勝手な男の頼みとして聞いてください。笑子は貴女の孫で、勇希は曾孫だ。笑子を殺した相手のことなど、もういいじゃないですか。貴女が復讐に囚われても……」

「笑子を殺したのは、私たちよ」

千笑はまっすぐにシートに腰掛けたまま、こちらを見ることもなく言った。

「私たち？」

「そう。この世界に住み、知らず守られ、力なく守られる『私たち』すべて」

すべて。

『――笑子を殺したものの最期を看取りに』

「これは復讐ではなく……」

千笑はなにかを言いかけたが、きゅつと口を閉じた。顔中の皺の陰影が一層濃くなったような気がして、私は寒気を感じ、尻尾が思わず立っていた。

復讐ではなく、なんだと言っただ。

12 私自身、若かったとは言え、ありえない返答でしたが。（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

12 進むべき道

氷嚢を額に当て、冷たいミネラルウォーターをごくごく飲む。ティを見ながら、看護教諭は溜息を吐いた。軽い脱水症状を起こしていたこと以外、異常なし。シャワーを浴び、候補生たちが寮から持ってきた制服を身に着け、小ざっぱりとした少女のタフネスに言葉もない。常人離れた頑丈さだった。

「お世話になりました、先生」

ペットボトルを握り潰してティは立ち上がる。表情にすっかり覇気が戻っている。

「……お大事に」

「ええ、死なないように気をつけます」

そう言っただけ。

保健室を出ると数人の候補生たちが待ち構えていた。

「待たせてごめん」

ティはそのまま学院の廊下を歩き出す。候補生たちもそれに気づいた。まだ乾いていないブロンドの髪が首筋に張り付いたがそんなことは気にしていられない。確認すべきことが数多くある。そして立場を決めなければならない。

「街の様子は？」

「それが……」

ティの斜め後を歩く候補生は言いよどんだ。

「なに？」

「その、瀬尾^{せお}さんがやられました。幸い、魔力解除を受けただけです」

「魔力解除？ 華夢衣^{かむい}が？ だれに？」

ティは思わず振り返った。候補生たちは目を伏せる。

「アンタが取り逃がした子供によ、ティ！」

候補生たちのさらに後方から廊下中に声が響いた。

明らかに外からそのまま履いてきたというヒールで床を叩きながら、パンツスーツ姿の細身の女はまっすぐにテディを睨み付け、つかつかと接近する。キリッとした男っぽい顔立ちで、細かいウェーブのかかった短い髪はボリューミーに膨らんでいる。

「玲^{れお}於……」

「正井^{まさい}さん、でしょ？ 昔じゃないんだから」

テディの呟きに明らかにイライラしながら、鼻先まで近付いて立ち止まった。女性としては充分に背の高いテディよりもさらに頭半分高く、靴の分で、頭一つ抜けた位置から威圧的に見下ろして鼻息荒く胸を張る。

「アンタたち、ここはもういいから持ち場に戻って」

そのまま虫でも追い払うようなジェスチャーをする。候補生たちは玲於の気迫になにも言えず、深々と頭を下げ、その場から離れていった。

「あいさつには行こうと……」

テディはバツが悪そうに言った。

正井玲於はテディが候補生だった頃の先輩に当たる人物だった。

だが、守護者になったのはテディの方が先になる。

「ウソね。アンタがアタシを避けてたのはわかってる」

「それは……」

凶星を突かれてテディは口ごもる。

候補生時代から強いライバル意識を持たれ、なにかというところから力腰になるの玲於をテディは苦手としていた。瀬尾華夢衣と共に、今回木乃市に召集されたことは当然知っていたが、なんかややと理由をつけて顔を合わせないようにしていたのは確かだった。

「すいませんでした。その……用事があるので失礼します」

ともかく切り上げようとテディは会釈して踵を返したが玲於に肩を掴まれた。

「アンタの最年少記録を破った華夢衣が憎かった？」

「はい？」

テディは肩の手を掴み返ししながら玲於を見る。

「言ったでしょ？ アンタが逃がした子供が華夢衣をやった」

「……」

「アンタが裏切ったって言うてんの」

玲於にそう言われて、テディは自分が微妙な立場に立っていることを思い出した。

勇希の捕縛、もしくは抹殺。自らに下された命令を果たさず、少年を逃がし、その結果、味方の守護者がやられた。どこからどう見ても裏切りである。候補生たちが「だれに？」の問いに答えなかったのは、自分が疑われているからだ。

けれども、そうなることは承知の上でテディはそうしていた。

「……最年少記録とか、あなたこそ昔のままじゃない」

ふっ、と息を吐いて、テディは玲於を見据えた。

「なっ……」

「そんな動機であたしは後輩を陥れたりしない。その程度の動機しか思いつかなかった時点で疑われるのも心外だし、長い付き合いなんだからその位は信じてくれてもいいと思うんだけど？ 十五歳だろうが十二歳だろうが、早く守護者になることが重要じゃないってことは、いまや本部付きの玲於にはわかりきったことでしょう？」

そう言いながら、テディは玲於の反応を見る。

位置情報さえわからなければ外部からは侵入されない境界域で魔人の襲撃を受けた。つまり、テディに下された命令は、彼女の命を狙うか、あるいはどうでもいいと思う者によって利用されていた。裏切る前に裏切られていた。それを知りながら、ただ勇希を抹殺するという命令だけをバカ正直に遂行するわけにはいかない。それは彼女の正義に反することだった。

既に内部に裏切り者がいる。

「……それなら、なんであの子供を逃がしたの？」

「逃がしたって言うのは正確な表現じゃないわ。あの子のお陰で、あたしは魔人から逃げられた。助けられたってこと、情けない話。

最後に見逃したのは事実だけだね」

「テディは正直に言ってみる。もし、玲於が裏切っているのならば、……魔人？ 助けられた？」

一連の状況を知っていたとしても知らない素振りを装うはずで、言動に不自然なところが表れる可能性があった。同じ守護者同士、競い合った者同士、信じたい気持ちは彼女にもあったが、信じたいということ、信じられるということは別の問題だ。

そしてそれは相手も同じことである。

「アタシの次に負けん気の強かったアンタがそう言うってことは」
玲於はそう呟いて腕を組んだ。

「事情はある、と？」

怪訝な表情は崩していなかったが、攻撃的な気迫を抑制しながら目を大きく開く。

「今回ばかりはあなたが相手で良かったと思うわ、玲於」

「正井さん。そこは譲ってない」

玲於は指差す。

「それはごめんなさい。正井さん？」

理事長室へ向かいながら、テディは玲於に事情を説明した。

「——ということで、初の実戦で手痛い敗北を喫した華夢衣には申し訳ないけど、あたしはあの場で命令に従う気にはなれなかった。あのまま魔人を相手にすれば死んでいたのはあたしに違いないし、あの子がああいう判断をしなければ帰ってくることもすらできなかった」

そう言いながら、テディは理事長室のドアをノックする。

「ひとつ疑問だけど、そのユウキって子は華夢衣に勝てるレベルなの？」

「力を得たのは昨日、でも命懸けで戦ってるのは大きい。結果的にあたしが稽古をつけたみたいで心苦しい感じになってるけど……あれ？ 理事長いない？」

テディはもう一度ノックした。

「華夢衣の件でさつき報告した時はいたけど？ 理事長！」

内側からの返事を待たず、玲於是ドアノブを回して入った。

「……いない」

二人は呟いて顔を見合わせた。

「正井さん、あたしの見解を述べていい？」

ほとんど考えることなく、テディは結論を出した。

「たぶん同じことを考えていると思う」

そう言つて、玲於是頷く。

「裏切つたのは理事長だ」

「動機はわからないけど」

テディはそう付け足す。

「この木乃市封鎖は最初からキナ臭かった」

部屋の中央にある大きな机を叩いて玲於是言う。

「襲撃があるという話は三ヶ月前ぐらいから盛んにリークされていて、本部も警戒していた。そこに起こった昨日の襲撃、そして理事長の封鎖決断、このタイムラグがほとんどない。普通なら関連性の有無を裏取りするものだけど、あの天才テディがやられて、相手が鍵を持っていると言われれば動かないわけにもいかなかった」

「それじゃあたしが悪いみたいじゃない」

テディは抗議した。

「アンタが悪い！」

玲於是スーツのポケットから鍵を出し、自分の胸に突き刺すと、机を叩き壊した。彼女の身体からは真つ赤な光が迸っている。

「……えー」

「そもそも十八歳のアンタが街を任されるという話からおそらく仕組まれていた。だれの推薦だったかは後で確認するとして、襲撃を利用して、あの子供とアンタを市内で戦わせ、境界域で葬り、封鎖。そのすべてを画策できるのはこの街で聖家の人間をおいて他にいない。上のアンタに対する信頼の厚さも利用しようとしていたってことよ……そして、ないっ！」

砕けた引き出しを壁に放り投げる。

「いきなり机壊したけど、そもそもそこにあつたの？ 管理鍵は」
マスターキー

魔界の穴の開閉に使われる特殊な鍵である。

「今朝、確認した。箱ごとない」

「……そう、確定」

テディは少し寂しそうに言った。

理由はわからずとも他にやれる人間がいない。信じていたかった。二人は俯いて沈黙する。大先輩であり、この街を守るために死んだ先輩の祖母、気丈にもそれから多くの守護者を育ててきた。そして彼女たちも育てられた。魔法と言う領域での母、同じ正義を信じていたはずの人の裏切り。その息苦しいまでの重みがこの学院にはある。

そうした時、理事長室に、ひとりの候補生が駆け込んできた。

「失礼しまつ……え？」

一気に荒れた室内と苛立ちを顔面に滲ませている玲於の顔にビクツと背筋が伸びる。

「いい、言つて」

テディが促した。

「あ、はい、市内で強い魔力を観測しました。例の少年のようです。あと、どうも警察が動いているようで、ヘリが市内に……その、華夢衣さんとテディさんの件もあつて、みんなに動揺が広がっています。理事長の指示を仰ぎたいのですが、理事長は？」

「アタシが指示を出す。それでいいよね、テディ？」

手についた埃を払って、玲於は言った。

「どうぞ、正井さん」

「え、あの、それってどういう」

「街に散らばつて候補生および学院にいる候補生は市内の住民の安全確保に努めて！ 中庭はアタシとテディ、売村うりむらの三人で守る。命の保証はないと伝えて。学院内の人間は全員退避！ 教職員含めて、守護者以外は全員、急いで！」

「は、はいっ！」

候補生は慌てて部屋から飛び出した。

「三人で足りる？」

それを見送ってテディは尋ねる。

「どうかしらね……三人と言っても、連敗中の天才と、調整力ばかり買われる才能なしに、天然のんびり女だから……絶望感を深めるからアンタにはひとつ言っただけ、国内のこの街以外の穴は、今、襲撃を受けてる」

玲は首筋を伸ばすように両手で頭を押さえた。

「……！」

テディはあんぐりと開きそうになる口を押さえた。

「応援を頼まれて、二人守護者を送った。呼び戻そうにも間に合わない。この街だけ襲撃がないのが不思議だったけど、ここが本命だからだとはね……」

敵は用意周到としか言いようがなかった。

「やるしかないってことか」

テディも鍵を取り出した。

魔人との戦いからそこまで回復はしていない。不安はあった。だが敵の姿が明確になった以上、迷いなき正義はその力を発揮する。そう彼女は信じている。

「本当は穴から遠い場所で戦いたい所だけど、住民の被害を考えるとこの結界の内側でやるしかない。母校を自分たちの手で跡形もなく消すことになったとしても。他の魔法を準備している時間の猶予もあるかどうか、本気で来るからには守護者を抑える手立ては考えてあると思うべき、売村は実質防衛専門だから……」

ぶつぶつと玲は呟きながら室内をぐるぐると歩き回る。

それが緊張したときの彼女の癖であることはテディもわかっていて。本人は自嘲気味に才能なしなどと言っていたが、資質という意味での才能はある。問題はそれを生かせない性格、要するに守護者に向かない人間性だった。リラックスしていないと真価が発揮でき

ない。およその時点でダメなのだが、資質を持って生まれた時点で他に道もない。

追い込まれてこの場所にいる。

「大丈夫」

テディは玲於の肩を叩いて笑った。

「あたしが本当の天才の仕事を見せてあげるよ」

「……そういうことをさらつと言うのがアンタのイヤなところよ」
言葉の意味を察して、玲於は頭を掻いた。

みんな現実には追い込まれている。

「最年少記録破られたの、実は悔しかったんだ」

それでも、彼女たちは屈しない。それが世界を守る正義だと信じているからだ。だからこそ、逃げなくなる状況に陥ろうとも、さらに自分を追い込みながら前に進む。そうすることでしか道は切り開けないと知っているからだ。

——事態は最終局面を迎えようとしている。

聖木乃女子学院前、三人の女子と、一人の男が遠巻きに正門を見ていた。

地元の地理を知り尽くす彼女らと、潜伏と潜入を生業にしてきた男の経験と、ある種の悪運によって、幾度も捕縛される寸前のピンチを切り抜け、なんとかやってきたのだ。

「なんか、魔法少女が次々出てきてるっすね？」

「なにかあったのかしら？」

「慌ただしい、ぜつと」

傍目にも学院の状況は緊迫していた。

自衛隊の誘導で校内から自動車が次々と吐き出され、その後、格好とはアンバランスなまでに一樣に真剣な面持ちの少女たちが街へ飛び出していく。頭上也過ぎていく彼女らに見つからないように身を低くして隠れながら、四人はある種のチャンスを感じていた。

このどさくさに紛れば中に入れるのではないか。

「オニイサンの言うことが本当なら、学院の中庭が魔界に通じてるってことっすよね？」

「そういうこと」

「正直、信じられません。そういう口実で下着泥棒みたいなことじやないんですか？」

「もう性犯罪者から離れてくれない？」

「離れない、ぜつと」

女子たちからぼろくそに言われながらも男は諦めない。それが冴えない彼の人生を変える正義だと信じているからだ。だからこそ、なんと言われようと、目的に向かって進む。そうすることしか、この人生を変えられないと思い込んでいるからだ。

「行こうか」

自分の人生にかつてない好機が巡ってきている。そう感じられた。背中を押す風に身を任せ、好男は学院へ走り出した。

12 進むべき道（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

13 傍観者

「——最初で騒ぎすぎたかしらと反省はしています。やはり流行から背を向けて作りたいものを作っていると思っただから好きになったというか。それなら応援しなきゃっていうか。でも最近は見放されないように、流行に乗れるようにって、媚が見えてきてしまっただ。

他のアニメなら媚びてきても仕方ないかもと思いますが、この場合は冷めますね？」

「最近あんまり話に出ないと思ってたら切ってたすかー、自分もボーダーライン上っすけどね。キャラ萌えに傾いちゃって力入れるポイントを間違えた感はわかるっす」

「惜しい、ぜっと」

「なんの話してんの、この状況で？」

好男は緊張感のない女子高生三人組に言った。

「『アニメ』」

三人は声をそろえた。

「話題、尽きないんだね……」

学院までの道のりでも、そしてこうして生徒のみが知っているという抜け道を通じて敷地内に入り込んでも彼女らの話題はまるで変わらなかった。そっち方面への知識がほとんどない好男にしてみればそこまで数限りないアニメが放送されているということ自体不思議ですらあった。集中していないようでの確に人の気配を避けていることには舌も巻く。

だが、首尾よくここまででは来られたのだ、そろそろ潮時だろう。

「——シリーズ構成の名前を見たらある程度、出来の良し悪しも推測できるじゃないっすか？そういう意味で予想できないからこそ期待を集めてるんだと思うっすよ、あれは」

「焦れるには早すぎる、ぜっと」

「そうかもしれないけど、やっぱりもうひと押し欲しくなるとこ

るでしょう？ 強い引きがあつたのに、上手く観る人を掴めてないように感じられます」

「それはヤタテっちが、じゃないっすか？」

「男性キャラ同士の関係性が立ってない、とか言うんだ、ぜつと」好男は、そろそろと三人から離れ、隠れていた校舎の物陰からゆつくりと外に出ると駆け出した。校舎内に人の気配はもうなかった。どうやら中にいる人間が外に出されている。それがなぜかは彼にもわからなかったが、大変なことが起ころうとしているという空気は感じ取れていた。

もしかすると自分以外にも魔界の穴を目指している人間がいるかもしれない。

懷に仕舞っていた写真を撮り出す。

魔界の穴のある場所として、資料の中にあつた一枚だった。桜の巨樹、高等部の中庭。それだけわかつていれば十分である。校内の地図などはweb上からでも得られる。問題は、穴をどうやって開ければいいのかということだった。だが、そのことについてもおよその目星はあつた。この学院の理事長、金が流れるところに情報もある。

一般常識だ。

「理事長室も高等部にあるってあの子らが教えてくれたから……」さりげない会話から情報を聞き出すことは仕事だった。

運営組織を考えれば大学部あたりにあるのが自然な部屋だが、高等部にあるということが逆に魔界の穴について書かれた資料の確度を高めていた。なにかがあることは間違いない。さらに好男にとつて都合のいいことに、校舎はまったく戸締りがなされていなかった。まるきり慌てて逃げ出したという風である。

危険がせまっているからでは？

一瞬、脳裏によぎった思考を振り払って、好男は靴のまま校内に入り込んだ。ここまで来て怖気づいてはいられなかった。彼は基本的には小心な男だ。だが、危険と言うならば学院の外で起こってい

る状況の方がよほど危険であるように感じられた。少なくとも守護者は危険だった。焼失した駅前の光景を思い浮かべて、腹に力を入れる。

校舎内にはじつとりとした熱がこもっていた。

そして女子校だからだろうか、好男には嗅ぎ慣れない甘いようなねばつくような匂いが漂っている。生徒の出入りが普段より少ないであろう夏休みの最中でこれなのだから、普段はどれだけのだろうと思いつながら、彼は自分が勃起していることに気付いた。

「おっかしいな、溜まってたわけじゃー……？」
頭を掻きながら呟く。

こうして許可のない場所に立ち入るのも、危険を感じることも、彼にとっては極めてまれなことだった。怖さがある。それと同時に興奮もしている。それはむしろ情報を扱う人間の端くれだったからこそ、核心に迫る高揚なのかもしれない。

ここで得た情報を持ち帰るだけで自分はやり直せるのではないか？
だが、そんな期待は開け放たれた理事長室の惨状で吹き飛んだ。
破壊された机がそれを雄弁に物語っていた。これは終わった現場だった。それでもなにか情報が残っていないかと、そこらじゅうのものをひっくり返してみたが、好男が求めるものはなかった。少なくとも、ここにあるのはただの学校の理事長室である。

萎えていた。

「……どうすっかな」

無傷で残っていた立派な椅子に腰かけ、窓の外を見る。

見えるのは中庭だ。そこにあるのは巨樹。こうして目が届く場所であるからこそ、ここに部屋を設けたことに疑いの余地はなかった。推測は当たっている。問題は先を越されたということだ。好男は天井を見上げる。

「——だれにだ？」

この理事長室を荒らしたのは？

椅子から立ち上がり、好男は窓にかぶりつく、植生の激しい中庭

は校舎の四階から見下ろしたのでは人影を探すのも難しかったが、よく見ると巨樹の根元に何人かの少女がいる。わずかに吹く風にゆれる隙間でブロンドの髪がなびくのを確認した。

「あれは」

駅前で少年に詰め寄っていた守護者のリーダー格。

それがすぐそばの中庭にいる。魔界の穴を守る目的と予算を共有しているはずの理事長室が荒らされていることを知らずにだろうか？ まさか、そんなことはありえない。街も学院も混乱していたので室内が荒れていることを不審にも思わなかったが、ここには絶対的な守りの人材があつて、それはそうたやすく崩れるはずはないのだ。内部に通じていない人間にここを荒らすことなどではしない。だとすればこの状況は。

「彼女らは裏切られたんだよ」

「は？」

好男は思考に集中していて、背後に人が立つたことに気付かなかった。

「最も信頼していた相手」

どこか古めかしい学生服を着た少年がいた。

「学院の理事長に、ね」

七三にセットされた髪の毛と凛々しい眉、今どきのイケメンというよりは昔ながらのハンサム、モノクロ映画にでも出てきそうな二枚目の少年はすらりと伸びた腕を口元に当てるとクスリと笑った。上品だったが、少し上品に過ぎた。

「ここは女子校だろ」

とっさにはなんと言っているのかかわからず、好男はそう口にした。

「それはそうさ。僕がここの学生だって言ったかい？ 大友くん」

「名前を……」

「野末亮平。覚えているだろ？」

「……」

好男に情報をリークしてきた大学教授の名前だった。

「お前は、だれなんだ」

「僕かい？ まだ名前は決めてない。これからやってくる新しい時代が適当な呼び名を与えてくれるとは思うけれどね。かつては『先生』と呼ばれることが多かった。あまり好きな呼ばれ方ではないけれどね、不便ならばそう呼んでくれていい」

澄み切った発音で、少年はさらさらと喋った。

それは先生という単語に見合わない外見の違和感を消し去るようだった。言葉の意味はわからないが、相手は好男がどうしてここにいるのかという理由さえも知っているのだ。

「それじゃ、先生。理事長が裏切ったっていうのは」「言葉通りの意味さ」

「つまり守護者と対立しているってことなのか？」「そう」

「なぜだ？ 学院の理事長には魔界の穴とやらを守るメリットがあったんじゃないのか、莫大な予算も動いている。こうして街をひとつ封鎖するような力もある。それを手放す理由なんてあるとは……」「重要なことは、そういった今の時代をあの理事長は必要としていないということさ」

言いながら、少年は薄く微笑んだ。

「そして僕自身も」

この少年は何者なのだ？

「魔界の穴は開くのか？」

好男の声は震えた。

「どうだろうね。でも、どちらでもいい」

「……？」

「希望は残るとわかっているのだから、パンドラの箱は開けるべきなのさ」

楽しそうに言うと、少年は好男を手招きした。

「ついておいで、ここにいると巻き添えを食うよ？」

「先生は、何者なんだ？」

拒否することもできず、好男は促されるままに少年の後を追う。
「なに、大友くんと同じ、興味本位の傍観者だよ」

笑子の身体から抵抗する気力は失われていた。

記憶しているよりもはるかに年老いた祖母の顔を見て、笑子も流れた時の重みが実感としてわかってきていた。語りかけてきていた猫の言葉を疑っていたわけでもなかったし、ケータイも、街の変化も、現実であることはわかっていたのだが、彼女自身にしてみれば、死んで蘇ったというより未来へ飛ばされたという方が素直な感覚で、それは今も変わっていない。

頭の中が整理できなかった。

最初に見たときから勇希が自分に似ていることがわからなかったわけではない。瓜二つ、鏡写しのような人間、それでもそれを認めたくない気持ちがあった。それがどういう気持ちなのか自分にもよくわかっていなかったのだが、母親だと告げられてその正体が恐怖なのだと認めないわけにはいかなかった。自分の知らない自分がいて、自分が知らない自分の子がいる。飛ばされたかに見えた時間は確実に流れている。取り残されているのはだれなのか。

そして、その父親である猫は――

『そのことは気にしなくていい!』

――自分の知らない自分の、夫ということだ。

笑子はその現実について考える間もなく、その猫はその子によって殺されかけ、次にはわけのわからない大人たちによって子が殺されかけ、そこに祖母が現れた。それぞれがなにを言っているのか、なにを争っているのかもわからない。ただハッキリしているのは、死んだ自分の存在がそれぞれに影響を与えているということだけだった。

「本当に、お母さんになるつもりなの？」

「え？」

笑子は不意に呼びかけられた。

「だから、こういうことになっているのは、あなたがはじまりなんじゃないの？」

気絶した勇希から離れないと駄々をこね、まとめて車に押し込められることになった舞が膝枕した少年の頭を撫でながら言った。

「……わたしが」

笑子は俯いて考える。

「そうよ。よくわかんないけど、猫のお父さんも、勇希くんも、あなたが死んだから生き返らせたんでしょ？　それでお母さんになつてもらうかどうかで揉めてた」

「……そうみたいでした」

整理すればそういうことだった。

「そうみたいじゃなくて！」

舞が怒鳴り、運転席の男がバックミラー越しに後部座席を見た。

笑子のはじかれるように顔をあげ、隣に座っている少女と目を合わせる。

「なれるの？　お母さんに」

「……わかりません」

「舞にはわかるよ。なれない」

言つて、舞は勇希の頭を抱きしめた。

「それは……」

「勇希くんのこと、好きじゃないって顔に書いてある」

「そんなこと」

笑子は首を振った。

「なら好きなの？　お母さんになれるほど？」

「……」

笑子は黙るしかなかった。

「別にそれでいいんだと思う。母親になつてとか、妻にならなくていいとか、そんなの男の勝手な言い分だよ。そんなことで悩んだりする必要ないって。あなたはあなたの生きたいように生きるべき、それは権利とかなんとかじゃなくて、気持ちとして」

「舞さん」

見ると舞は笑子に向かって笑いかけていた。

なにか重たいものがすつと抜けていく感覚があった。それは猫が言った自由の押しつけでもなく、勇希が言った愛でもなく、でも心につかえていた硬い重石だった。

「勇希くんには舞がいるから、お義母さん」

その言葉に笑子は吹き出した。

「結局、お母さんなの？ でも、いいの？ 女装する子で？」

「好きだから」

舞は顔を真っ赤にして言った。

「……物好きだなー」

自分と同じ顔の子をどんな人間であつても好きだと言ってくれることがなぜか嬉しくて、笑子の顔は緩んだ。わからなかったが、母親と言うのはそういう感覚なのかもしれない。けれども、そんな顔を見られるのはなぜか恥ずかしくて流れる車窓に目を移す。

「だから、お義母さんは思う存分、第二の人生を楽しんでください」

「そうさせてもらいます」

自分のすべきことはなんなのか。

見慣れた、それでいて変化した街並みを過ぎ、まず勇希の曾祖母、祖母の家として懐かしい聖家の前に車が停車すると、笑子は舞に目配せをして車から飛び出した。すかさず運転手を取り押さえようとしたが、後ろから回り込んだ舞に膝裏を蹴られ、アスファルトに崩れる。

確かめることだ。

猫の気持ちと、自分の気持ちを。

「がんばって！」

ぴょんぴょん跳ねながら、舞は両手を振って見送っていた。

「ありがとう！」

それに応えながら、笑子は迷うことなく全力で走る。

言うべきことがある。

祖母と一緒に猫が行場所はどこののか、笑子には考えるまでもなくわかっていた。この街で一番大切な場所、代々守ってきた場所、あの大きな樹の下へ。ずっと呼ばれていたのだ。目覚めた時から、あるいは、目覚めるずっと以前、死んだ時から。

「生き返るために」

かつての自分が死んだのだと受け入れるために。
新しい人生のために。

13 傍観者（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

13 猫には猫の戦いというものがあるらしい。

「見られているな」

助手席の男がそう呟き、運転席の女がハンドルを強く握った。学院に近付くにつれて、確かに感じる視線が増えてきている。街から人の気配が減っていくのと反比例するように、冷ややかで、敵意に微かな哀しみも混じったそれは、私の隣に座る千笑に向かって注がれている。周辺から撤退していく自衛隊の流れに逆らい、学院へ向かう私たちの車両はおそらく目立っていて、おおよその事情は相手方にも把握されていると理解できる。つまり、千笑が守護者の敵に回ったのだということを、だ。

車内の緊張は否応無く高まっていた。

「候補生^{かのじよ}たちは、こちらに手を出せませんよ」

その視線を受け止めるように窓の外をじっと見たまま、千笑は言った。

「どうしてわかる？」

男は拳銃を取り出し、弾丸を確かめながら言う。

「街の住民を巻き込むような指示を出せる者が学院にはいないわね」
住人は既に人質の扱いだった。

「我々を学院で迎え撃とうということか」

「そういう決断をするでしょう」

守護者と警察の争い。単純に言えば構図としてはそういうことだ。守護者が魔界の穴を守って世界の安定を維持しているというのは、魔法に対抗できるものが魔法だけであるという前提にたった自然な決め事だった。だが、そのバランスは既に崩れた。人工魔力生成装置を体内に埋め込むという技術によって、擬似的なものとはいえ、鍵がだれの手にも入りうる状況が生まれている。資質の有無に関わらず、魔法を使えるようになるということだ。そうなれば、人々は魔法が持つ有用性を意識せざるを得なくなるだろう。

人を蘇らせる。

ほぼ無限の寿命を手に入れることに等しいこの一点を以つても魔法を活用しようという動きが起こらないわけがない。私がどうしたかは言うまでもないことで、それでも私は自力で魔力を生成する道を選んだが、魔界の穴という無尽蔵の魔力供給を可能とする場所を奪い合う状況は遅かれ早かれ起こった。そしてそれを守るという名目で独占していると看做されるだろう守護者とそれ以外の人々の争いも起こる。

いずれは、と私は思っていた。

遠くない未来の状況として想像はしていた。しかし、それについて深く思い悩むことはなかった。それがどういうものであるにせよ、人が新しい力を求めないわけがない。人工魔力生成装置を完成させる前も、争いへの時計の針を進める自覚はあったが、それを止めようとは一瞬たりとも思わなかった。そういう意味で私こそが典型的に愚かな人間の一人であり、それを自覚する悪辣な人間である。言い訳はしない。後悔もしていない。

その気持ちは変わっていない。

正直なところ、守護者と警察の争いはどうでもよかった。？先生？の政治的正義を考えればおそらく奪い合いになる前に魔力を地上に開放してしまおうとも思っているのだろうと推測はできる。とは言え、あえてそんなことをしなくとも、魔界の穴が存在する意味を考えれば、この世界がいずれ魔界と同じになることは間違いないことだ。守護者とはつまり、それを先送りする存在というだけのことだ。科学的に言えば。

けれども、そのために笑子は命を懸けた。

十年、魔力生成の研究を進めながら、私は私のしようとしていることが笑子の遺志に背いているのだということには気付いていた。あえて目を背け、耳を塞ぎ、間違っているとしてもそれでいいのだと己に言い聞かせた。彼女を蘇らせるためにこの世界が犠牲になろうとも構わないと本気で思っていたし、今も思っている。反省などしない。

これは報いだ。

静まり返った学院に到着し、肺まで焼けるような空気を吸いながら、私は覚悟を決めていた。反省などしない。だから、最期ぐらいは笑子の遺志に殉じよう。

「——目的を忘れるな、学院の管理鍵は聖の血を引くものにしか使えない。我々は中庭まで理事長を連れて行く。それで勝ちだ。守護者との戦いに拘るな」

既に到着していた三人と合流すると、男がそう告げ、四人が頷く。
「では行きましょう」

「ええ」

男に促され、歩き出した千笑を五人が囲んで正門をくぐる。

私はそつとその足下に近付き追いかける。

「自分の身は自分で守れよ、馬園。君を同行させるのは……」

「わかつている」

男の嫌味も遮って私は応えた。

敷地内に入ると空気が変わった。暑いことは変わらないが、異様な殺気が周囲を取り囲んでいる。実際のところ、それは犬に睨まれた猫が感じるものに似ていて、逃げ出したくなるような重苦しさを与えていた。そう感じていたのは私だけでなく、千笑をガードする五人も同様のようで、反射的に銃を周囲に構えた。

「たった五人？」

コツ、とそれは脚を開いて立っていた。

「いや、六人か……理事長も合わせると」

いつの間にそこに現れたのか、私たちが向かう進行方向正面に一人の女性が立っていた。若いが、この空間に充満する殺気の全てを一人で発していることは間違いないその異様な迫力に男たちの顔色も変わる。守護者に間違いない。

「そう言って頂けるのはありがたいのかしらね？ 正井さん」

千笑が立ち止まり、男たちは油断なく警戒をつづける。

正井玲於、私もその名前は知っていた。若くしてかなり組織の上

部に食い込んでいる。男たちもそれを知っているのだろ。銃口を向けながらも、引き金を引けずにいる。守護者の世界はおよそ実力主義である。

「でも安心して、現役を退いて久しいこの身体では守護者の力に耐えられやしない」

そうつぶけて、さも面白いジョークでも言っただかのように微笑んだ。

「敵であることは否定なさらないんですね、理事長」

正井の胸からは真紅の光が溢れ出している。

「否定すれば信じてくれるのかしら？」

「いいえ」

光の迸りが大きくなっていく。

「理事長がその人たちを連れて学院に戻ってきたのは見ていましたから、それでもう、アタシとしては躊躇う理由がありません。なにか言い残すことはありますか？」

「ないわね」

千笑がそう言うと、正井はハイヒールを脱ぎ捨てた。

「一人に気を取られ過ぎるな、守護者はまだいる！」

明らかに緊張した声で、男が他の四人に号令する。

「さて、たった五人でやる気になってるアンタたちの实力を見せてもらおうかな……」

五発の発砲音。

そして私の左斜め前にいた女の腕が碎ける音。

ほとんど同時だった。

正井に当たっていた弾は一発、額から血が流れ出ていたが、その振るわれた蹴り一発をガードした女は吹き飛ばされ、千笑を囲んでいた陣形は一気に崩れた。しかし、すかさず他の四人がさらに発砲する。

だが次の一瞬で後方の男が地面に叩きつけられていた。
「銃弾に魔力を込めるなんて……」

金髪の守護者。昨日の。

「魔力解除の欠点である相殺を手元から離すことで解決か。ヤだねー、そういう伝統を無視した合理性の追求。アタシたちの立場がないじゃない？」

そしてもう一人の女が地面を転がっていく。

一瞬の攻防で、立っているのは二対二。圧倒的な実力差だ。

「なるほど、これが本物の守護者ということか、子供とは違う――」
だが、それでも指揮する男は冷静だった。

さらに連続で発砲。

二人は避ける。

同時に、もう一人の男が千笑を抱きかかえて距離を取った。

取り残された私は慌ててそれを追いかける。

「――だが、当たれば効くという意味では同じことだ」

男の銃口は校舎の屋上を向いていた。

「どう見る？」

「速度で追いついてきてるってことは、あっちも魔力を使ってるでしょ」

そこに二人の守護者がいる。

距離を取ったということとは、おそらくは男の言う通りなのだ。

魔力による《変異》を攻防において使っている守護者にとって魔力を解除された状態で受ける銃弾は生身のダメージと変わらないものになる。既に相当消耗した状態で受けた勇希ほどに靦面の効果は得られないにしても、スピードで肉薄して、確実な武器があるのなら、戦いはわからない。

吹き飛ばされた三人が、それほどの深手でもない様子で立ち上がっていくのを視界に捉えながら、私は千笑の言葉を思い出していた。守護者たちは街の住民を巻き込まない。つまりは、全力で戦えないのではないか。となれば。

「ここは一人でいい！ お前たちは理事長を連れて中庭へ！」

男の叫びをきっかけにして私は走り出す。

千笑を抱えた一人を三人が囲んで守護者たちがいるのとは逆の校舎に飛び上がる。

この状況では、だれも私に注意を払う余裕はないだろう。

だが、だからこそ私に勝機がある。

守護者と警察の争いに興味はない。己のことだけを考えるならこの世界のことですら私にはどうでもいい。だが、勇希がいる。ここで私のすべきことはひとつだけだ。あの日の言葉に殉ずること。かつての笑子の遺志に応えることだけだ。

『行かなくてもいいじゃないか？』

もう子供を産むことで、聖の家を出たことで、守護者としての義務は負っていなかった笑子に私はそう言った。現場を離れ、絶対的にブランクのある彼女にまで知らせが回ってきた時点でよほどの事態だった。嫌な予感しかない。

私の不安を感じてか、腕の中で勇希が泣き出した。

『行かないわけにはいかないのよ』

息子の頭を撫でながら笑子は首を振った。

『ここが正義の街である限り、わたしは死ぬまで守護者だから』

それが私の最後に聞いた妻の言葉だった。勇希がピタリと泣き止んだことは覚えている。だが、その時、どんな顔をしていたのか、正直に言っと思って出せない。思い出されるのは、棺に納められて家に戻ってきた時の、奇妙に晴れ晴れとした死に顔だけだ。

正義の街。

笑子はその言葉に込めた意味はわからない。だが、確かなことがひとつある。

だから、彼女は死ぬまで戦ったのだ。

ならば、私も戦わなければならない。

きつとまだここは正義の街であるはずだ。月日が流れ、街並みが変わろうとも、守護者たちが守ってきたものはまだここにある。千笑の思惑がなんであれ、笑子を守ろうとしたものがあるのなら、私もそれを守ろう。私は死ぬまで守護者の夫なのだ。

すべきことはシンプルである。

千笑が管理鍵を使うことを阻止すればいい。

守護者と警察が争っている間に、おそらく千笑はあの巨樹の元へ赴くはずだ。そこが最大のチャンスであり、私が猫であるアドバンテージを生かす場面だ。鍵を奪うのだ。年齢がいくつだったかは忘れたが八十とか九十とかの老婆と猫ならばまだしも私に優位である。

中庭へ先回りして機をうかがうのだ。

背後で校舎が砕けていた。

私は茂みに飛び込み、身を低くして素早く移動する。

他にどれだけの守護者がいるかもわからない。昨日のこともある場合によっては私の存在が知られているとも限らなかった。この作戦は極めて隠密裏にこなさなければならぬ。土壇場で鍵を奪って逃げるといったそれだけのことであるだけに、失敗は許されない。失敗すれば魔界の穴は開いてしまう。

ともかくできるだけ先んじて現地に赴き、絶好のポジションを探さなければ。

中庭を囲んでいる渡り廊下にはシャッターが下りていた。回り込めば反対側にも入り口はあるだろうが、考えるまでも無く向こうも閉じられているだろう。おそらくまっすぐな進入を阻むために。だが、それほど悲観することもなかった、夏だけに適当に開け放たれた窓を見つけるのはそれほど難しくはなかった。私は一端校舎の中に入り込み、そこから中庭を指す。窓から覗くと、中庭には一人、守護者らしき少女がいた。三角フラスコのような体型で、ストレートの黒髪が眉毛のところパツツンと切られている。おだやかな印象で、よくわからないのだが、妙なステップを踏み、ダンスを踊っている風である。見た目に反してというか、軽やかだ。ともあれ注意が散漫なことに越したことはない。

都合のいいことに、昨日、勇希が守護者と戦った時に空けたらしい穴がブルーシートで簡易的に塞がれているのを見つけた。これぞ

13 猫には猫の戦いというものがあるらしい。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

14 同類

アイコンタクト。

溜息を吐きながら送られた玲於の視線だけでテディは自らの役割を了解した。

「――理事長を……」

男の叫びが終るより早く二人は校舎の上から飛び降りる。それを見て男が銃を構え、見越してテディは剣を抜き放った。銃口は玲於に向いている。

「三度目はないよ」

この場から離れようとする理事長たちから目を離さず玲於は言った。

「ありがとっ」

発砲音、そしてテディの剣が銃弾とぶつかって相殺。

テディは扉を開放。

次の一瞬で男を校舎に叩きつけた。

突進したテディは黄金色の光に包まれている。

「ケダモノだな……」

崩れ落ちる校舎から男が這い出してきた。

地面に血を吐き捨て、肋骨を押さえながら歩いてくる。

相手がこのくらいでは死なないことはテディもわかっていた。なんらかの方法で魔力を使っている五人の襲撃者の中で、リーダーと思われる男一人だけ明らかに動きが違っていた。資質を持っている。失敗続きのテディの名誉挽回に玲於が手柄を譲ってくれる程度には強さを感じさせる相手であった。

「女子校を襲撃する男こそケダモノだわ」

それだけに油断はできない。テディは両手を地面に置く。

「女子に紛れて通っている熊よりマシだろう」

テディの一撃でボロボロになった上半身の服を脱ぎ捨てながら、

男は拳銃から弾倉を引き抜く。そしてそのまま銃を投げ捨てた。

「一人で熊と獅子をどうにかできると？」

軽口で応じながら、露わになった男の胸部に機械が埋め込まれている様子をテディは確認する。それが魔力を供給しているであろうことも容易に推測できる。

狙いは絞られる。

「これからどうにかする。それにしても理解に苦しむところだ。魂を安定的に制御するためにケダモノに同化しようとする守護者の――」

ゆっくりと歩きながら男は弾丸を掌に出していく。

間合いに入っていた。

「お喋りには無理よっ！」

四足となったテディは後足で地面を蹴り、伸び上がって前足を振り上げた。

「そうでもない」

男は銃弾の一つをテディの鼻先で潰して見せた。

魔力の干渉があった。

その瞬間にテディの身体を覆っていた魔力の体毛が消え失せ、そこを狙って男の拳がカウンターでテディのボディを強かに打つ。

「かはっ」

テディの口から抑えきれない息が溢れた。

「扉さえ開放すれば自分たちが優位だと考える。そこが守護者の弱点だろう」

そう言いながら男は肋骨の下に突き刺さった拳をそのまま振り上げる。

「解除までいかなくとも同程度まで魔力量を相殺すれば、あとに残る《変異》した肉体は大人の男と、小娘のそれだ。どちらが優位かは考えるまでもない」

「……っ、小娘え？」

テディは空中で再び魔力を取り戻したが、

「そうだ、君らのような子供が守護者など、笑えない話だ」

男の追い打ちで地面に叩きつけられる。

正門前の地面が深く抉れて、砂礫が巻き上がる。

魔力による防御は働いていたのでダメージはなかったが、テディにとってはこうも簡単にあしらわれる状況と言うのが屈辱的であった。口に入った土を噛んで、彼女は男を見上げる。

男は指先で銃弾を弄びながら見ていた。

「君らは同条件の力を持つ者、あるいはまったく力を持たない者、そのどちらかとしか戦ってきていない。守護者の弱点を衝かれるという状況を想定していない。その優位性は相手が魔力を使えないという前提に立ったときのみ有効なものだ。こうして鍵がなくとも魔力を用いて戦えるようになるこれからの時代にはもう……」

「あなたたちのそれに鍵と同じ性能があれば、ってことでしょ」

テディは男に向かって爪を振り上げた。

剣と化した五本の衝撃が地面を裂いて男に襲いかかる。

「その通り……」

だが、それをものともせず、隆々とした身体から血飛沫を迸らせ、男は直線に突っ込んでくる。そこには覚悟の眼差しがあった。

「いい度胸ねっ！」

かわすことはできなくもなかったが、テディはあえて真つ向迎え撃つ。

小娘などと言われては引き下がれない。渾身の力で振りぬかれようとしたテディの拳に向かって男が銃弾をぶつけてくる。魔力が相殺。互いの攻撃がただ殴り合うのと同じ条件でぶち当たる。体格差はそれほどなかったが、

「っ！」

ほぼ腕力の差でテディがぐらついた。

「そうだ！ この装置では扉を開放するにも十分な魔力は得られない！」

男はそれを見逃さず、立て続けに打撃を叩きこむ。

「だが、それはっ！」

「だっ」

首から上へ、容赦なく意識を刈り取りに来る攻撃にテディの身体が宙を泳ぐ。

「今だけのことだ！」

浮いた少女の顎を男は思い切り蹴り上げた。

「技術は進歩する！」

「……」

中空へ放り出されたテディは白目を剥いた。

「そして伝統は淘汰される！」

両腕、両脚が重力にひかれるままテディの肢体が弧を描くのを見て、男は胸の装置のカバーをはぎ取った。銀色の管が体内に突き刺さり、その中央にはビリーヤード球ほどの水槽、薄い青色の液体がごぼごぼと泡を立てている。

「悪しき因習として！」

残りの銃弾を男は水槽に押し込んで潰した。ぐしゃりと潰れる音とともに内側から液体と血が溢れ、苦痛に顔を顰める。だが同時に男の身体が透明な輝きに覆われる。

「く……」

意識が飛んでいたのは一瞬。

だが空を仰ぐテディの視界に直後、祈るように両手を組んだ男が現れる。

「……つるぎ？」

守護者たちのそれとは違い、絶対的な魔力の不足が見て取れるナイフほどの大きさだが、テディの目には陽の光を歪めるその形が見えていた。

「まずは心臓！」

「！」

反射的に動いた手を貫いて剣がテディの胸に突き刺さった。

「おおおおっ！」

男は見えない柄を捻りながら力任せに腕を振りぬく。

テディはなんとか着地したが脚の踏ん張りがきかず、ずるずるとすべって校舎の壁にぶち当たる。気管から血が吹き出し、激しく噎せ入って膝をついた。

「浅かったか！」

「っは」

次の瞬間には男の手が頭蓋を掴んでいた。

壁をこするようにして引きずられ、そのまま校舎を貫いてグラウンドへと飛び出す。テディは力を使おうとしていたが不完全ながらも心臓をやられていて身体に魔力が行き渡らない。

「わかっていたはずだ！」

「……な」

「君らは守護者の名に縛られ、この世界のあるべき姿を見失っているだけだ！」

叫びながら男は両手でテディの頭を抱える自分の身体ごと投げ打ち地面にぶつけ、首に膝を押し付け押さえつけた。そして再び剣を抜き放つ。

「その軛を令、解いてやる！」

「……っ！」

声は出せなかった。答える代りに、テディは男の顔面に向かって血反吐を吐きかけた。

「っ」

見開かれていた男の目に血が入ってたじろいだところを両足で地面を蹴り体勢を入れ替えようとす。構わず振り下ろされた男の剣が頬を掠めて逸れた。衝撃にグラウンドが陥没する間にテディは起き上がって男と距離を取る。

「行儀の悪いガキだ！」

「れ、げほっ、礼儀作法でなにも守れないって……ばっ」

立ってはいたものの、テディの血は止まらない。

魔力による回復に頼るにしても要の心臓に深手を負ってはその速

度も遅くなる。扉の開放も維持できない。今の彼女は最低限の魔力で立つ裸の少女に過ぎない。死ぬには浅手でも戦いつづけるには深手だった。それは誰の目にも明らかだ。

「あ、あたしたちがなにに縛られてるって？」

だが、相手は一線を越えた。

「守護者であることに、だ」

「……バカね」

テディは跳んだ。

剣を抜くこともできなかったが、それでも戦わないわけにはいかなかった。

「最初の勢いはもうないようだが！」

「んぐっ」

迎え撃った男の手が胸の傷口を深く抉った。

空中で突き刺された格好で、テディの身体を血が滴り落ちていく。

「みんな、死ぬような気持ちで守ってきたのよ！」

心臓を引きずり出そうとするかのような男の腕をテディは掴んで押し止める。

「それが……」

だが男は表情を変えずさらに深く突き刺そうとする。

「あたしたちが守ってるのは、そういう積み上げた過去そのもの！その上に立ってあたしたちがあるの！それがわからないヤツに……」

その一瞬、テディは男の腕を自ら押し込み、

「死ねえええっ！」

バランスを崩した男に向かって渾身で頭突きを見舞った。ごずん。

大地の芯を打つような深い音が二人の頭蓋に響いた。テディは男の腕を引き抜き、そのまま仰向けに倒れる。視界が白くぼやけ、ぐにやぐにやに揺れた。地面も空も混ざって溶けて見える。

「言いたいことはそれだけか……」

しかし、男は立っていた。

「ならば、君が死ぬことになる」

焦点の合わない眼を向けるも、両手を組み、横たわるテディに向かって歩み出す。

「……っあ！」

逃げようとしたが、テディは動きは深まった傷の激痛でワントンボ遅れた。

やられる。

「終わりだ……」

男が腕を振り上げ、その手の先で陽射しが屈折する。

眩しさに目を細めながらも、テディは自分を殺す相手を見据えた。だが、

「……あなた、それ」

振り下ろされるその瞬間、男の手が消え失せた。

「時間切れ、か」

言っと、地面に接する足からその肉体が光の粒になっていく。そのままテディの横に男は転がった。先端から腕と脚が消えていく。

「まさか、自分の肉体を魔力に《転移》して……」

テディは呟いた。

「そうだ。そうでもしなければ守護者と互角になど戦えない」

「なぜそこまで」

さきほどまで殺すつもりだった相手だが、

「そんなことして、この襲撃が上手くいっても、生きられないじゃない」

言わずにはいらなかった。

「資質は父から受け継いだ」

男は目を瞑った。

「その父は守護者に殺された」

「復讐、だったの？」

横たわる男の影が薄くなっていくのを見ながらテディは問う。

「いや、父の思想はくだらない。魔力を金儲けに使うつもりだった。資質は受け継いでもそんなものは受け継ぐつもりはない。だが、子は父親を越えなければいけない。同じ資質を持った人間として、もつともな思想と力で守護者を打倒しようと思った」

「……そんなことしなくても資質があつたなら」

「どうでもいい父親でも、殺した相手に与することはない。母の哀しみを見ている。子供なんだ。そうするしかなかった。血を受け継ぐということはそういうことだ」

「は、あなたこそ縛られているんじゃない」

テディは空を見上げて言った。

「……そうだな、確かに」

消滅は加速していき、男の身体はその言葉を最後にして消える。後には胸に埋め込まれた装置だけが壊れたおもちゃのように残されるのみだ。

「バカね」

意識を保つのも限界だった。

グラウンドに吹く風に任せて、テディは目を閉じた。

笑子は追われていた。

「どこいったの、あの子！」

「例の子でしょ、どうしてこっちに？」

「それが、どうも一緒に戻ってきたとか……」

「どうということ？」

「よくわからないんだけど——」

聖家の本宅から学院までは一キロあるかないかの距離だった。自衛隊こそいなかったものの大勢の候補生たちが様子を見に外に出てきた住民を避難させている。特に隠れることなくまっすぐ走っていた笑子も当然のことながら発見された。

勇希と間違えられていることはわかったが笑子としても捕まれなかった。そもそも、市内に入った時に守護者の少女に手痛い目にあ

つてもいる。様子を窺う限り候補生たちが悪い人間ではないのだろうと推測はできて頼る気にはなれない。

どお……ん。

それほど遠くない場所から、花火が爆発した時のような強い空気の振動が響く。

「——学院が」

「これ、行った方がいいんじゃないの？」

「でも本当に守護者の人たちでもやれないのだとしたら出る幕なんて……」

「例の子もそうだとしたら」

「とりあえず数を集めましょう」

話し合っていた候補生たちが一団となって移動するのを見送り、笑子は民家のブロック塀裏から這い出した。生い茂った庭木の下、ベタベタする蜘蛛の巣を払って再び学院へ向かう。こんどは見つからないように、注意しながら。

学院に近付くにつれて人の気配は減っていた。だが、なにかが爆発するような音は激しさを増す。笑子は近場の初等部から敷地内に入った。かつてとそれほど変化のない学院内に入ったことで彼女にもある程度状況が把握できるようになる。

「高等部の方だ」

音のした方角に辺りをつけ、笑子は走った。

卒業記念に植えた木が大きく育っていることで時の流れを確認しながら、笑子は校舎の外を迂回して中等部を突っ切り、高等部のグラウンドに出る。広いグラウンドだったが、目が行くのは巨大なクレーターが出来ている地面と、向こうで砕けたようになっていた校舎だった。ほとんど災害の爪痕である。

「……まぞのさん」

じつとりと汗をかいた手でワンピースの布地を掴みながら笑子は注意して歩く。

勇希と警察の戦いの様子は見ていた。巻き込まれては元も子もな

い。

「ユウキ……」

風のさざめきに混じってしまふような小さな声だった。

「え？」

しかし周りを見回せば、グラウンドのえぐれた土とは明らかに違う白い肌がすぐに目に留まる。それが裸の女性であるということが瞬時に理解できず、一度立ち止まったが、よく見るとその肌は血に濡れていることもわかって笑子は駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか……」

とても大丈夫に見えないと思いながら笑子は言う。

仰向けに寝ている女性の胸は中心に大きな傷があった。それは塞がっている途中の状態だったが、もちろん戦っている現場を見ていたわけではない笑子にそれはわからない。

「……お母さんには会えた？」

「え？ あ……はい」

勇希と間違えられていることはわかったが、笑子は訂正しなかった。自分が蘇って、その息子とそっくりだという事情は、自分では説明できないと思ったからだ。それに、会っていることは間違いない。

「そう。良かった。約束、守ってくれて」

「……はい」

約束？

「ひとつ、お願いがあるんだけど」

「あ、はい、なんでしょう？」

「この鍵」

傷口に手を当てると、そこから黄金色に輝く鍵がずっと現れた。

「あたし、動けないから持っていて」

「え、と、それは」

「……境界域で説明したけど、その逆で、二本、鍵があれば穴は閉じられる。最初の樹のところに仲間がいる……から、見せて、それ

で話は通じるから……」

「樹……」

女性は笑子に鍵を握らせて目を閉じた。

「お婆様の言っていた、樹？」

学院の高等部、中庭。

笑子は受け取った鍵をジッと見つめて、勇希がしていたように自分に突き刺してみる。それは驚くほどすんなりと胸の中に納まった。そしてじんわりと身体に力が満ちていく。

「……これを使って、そうか」

鍵の声に耳を澄ませながら、笑子は女性の身体を持ち上げた。裸のまま放置はできない。

14 同類（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

14 私の猫生終わりました。

狂暴化した鼠など手に負えない。

背後から飛び掛ってきた一匹は叩き落したものの、直後には全身に噛み付かれ、私は絶叫した。発情期の猫がするよりよほど人間臭い己の声が廊下に響き渡る。肉を食い千切られ、汚れたモップのようになに倒れ臥す姿を幻視して、なにふり構わず逃げ出そうとする。

鼠、怖い。

「逃がさねえっちゅーんでやす！」

あの鼠の声が聞こえた。

へばりつく鼠を払いのけながら、私はともかく走った。前脚と後脚に食らい付いたままの鼠がいたが、速度を上げ、壁に体当たりを繰り返して押しつぶし引き剥がす。その度に激痛が襲ったが気にして入られない。視界の隅で鼠色の群れがひとつの生き物のように蠢いて折ってきている。それはもちろん彼らにも有史以来鼠取りとして人と共に生きてきた猫に対して恨みはあるだろうが、鼠が猫を襲撃するなんてこれまで聞いたことがない。中庭から出てきたことから推察するに、魔力の影響――？

校舎が振動していた。

おそらく守護者と警察とが戦っているのだ。ガラスの碎ける音に、建物自体が歪むような音発砲音、そして外気が弾ける音、戦いが行なわれている区域が広がっているのか、複数の方向から聞こえる。巻き込まれてはかなわない。追ってくる鼠にフエイントをかけるように、私は曲がり角ギリギリを駆け抜け、壁を蹴って急角度で、音から離れようとする。

鼠の群体が打ち付ける波のように碎けて割れた。

「これで……っ？」

ぢぢぢぢぢぢぢ……。

校舎の揺れに混じって聞き取れなかったが、それは廊下の天井か

猛烈な後悔が襲う。不要な慈悲が巡り巡って帰ってきた。人でな
くなったのに猫にもなりきれない私の失策だ。おそらく猫たちは容
赦しないのだ。食うものと食われるもの、自然には絶対的な関係
がある。それを本能が理解している。どうしようもない。もう後
には戻れない。中庭からも離れてしまった。こんな連中に追われて
いるのでは中庭に潜伏することもできない。なんとかしなければい
けない。なんとか。

先は行き止まりだった。ドアがあって閉ざされている。その手前
に上上がる階段、左側は教室、右側は窓、夏ではあるが使用され
ていないからか窓が開いている様子がない。鼻先で感じられる。空
気が流れていないのだ。二階へ上がったも、猫である私はどこかひ
とつ窓さえ開いていれば飛び出すことも可能だが、もちろん開いて
いる保証はない。鼠たちはさらに勢いを増している。もはや鼠色の
濁流だ。追いつかれれば死が待っている。しかし猫の肉体は連続で
長距離を疾走するようにはできていない。狩猟スタイルから行っ
ても待ちのハントをする動物なのだ。最高速度をそう長い時間は維持
できない。

G組からA組へ、教室カウントダウンが一気に進む。
上がるしかない、そう思った時、

「こっちなんか変な……」

天運。まだ私は見放されてはいなかった。

廊下の奥のドアが開いて、制服の少女がこちらを覗き込んで目を
丸くした。

無理もないことだ。

「どうしたのナツメちゃ……」

「ぜ、つく」

あまり共通項を感じさせない三人の少女が私の背後、鼠の大群に
硬直している。

なにふり構ってはいられなかった。

「助けてくれ！」

再びドアが閉まった直後、卵が壁にぶつけられたときのような音が連続した。見えなくてもおおよそわかる。万に近い鼠が一気に衝突したのだ。その勢いは恐ろしいもので、閉じられたドアがひしゃげて外側に膨らむ。下の鼠を押し潰しても、そういう自滅的突進であつた。

少女たちは一瞬硬直したが、すぐに駆け出した。

「逃げるっす！」

抱え上げられその場を連れ出されながら、私は二度と鼠は逃がすまいと心に決めた。

少女たちが逃げ込んだのはうす暗い、いわゆる体育館裏というやつだった。

「ここまでくれば大丈夫、っすかね？」

「大丈夫、じゃない？」

「……大丈夫だ、ぜつと」

それほどの距離ではない。三百メートルかそこらだ。若い割には息切れが早い、そんなことを思いながら、私は首を振った。ここは大丈夫ではない。

「助けてくれてありがとう、感謝する」

「……」

私がふたたび喋ったことで、少女たちはさきほどのことが錯覚でないことを感じたようだ。喋る猫という奇異以上のことがここで起ころうとしている以上、私も己を守ることだけに囚われてはいられない。ストレートに注意を喚起しなければ。

「しかし、鼠は情報を共有する。学院内にどれだけの数がひそんでいるかわからない。一匹に見つかれば数分の内には周辺数キロ半径で見つかるのと同じことになる。ここもすぐ見つかるだろう。君たちは急いで敷地内から出るべきだ」

「偉そうな猫っすね……」

よく日焼けした少女は眉をひそめて私の顔に詰め寄った。

「よく見たら不細工だし……」

落ち着いた雰囲気のある少女も腕を組んで不愉快そうだ。

「……」

表情の薄い少女はなにか言いたげな風で両手の指を合わせてもじもじしている。

どうも信用が得られていないようだ。猫だから無理もないのだが。
「えー……いや、自己紹介が遅れたが、私は元人間の猫だ。偉そうに聞こえたとしたら申し訳ない。学院の異常は気付いていると思うがこれからもっと酷いことになるかもしれない。私にもこれからどうなるかということを確認できないし、詳しく説明している時間がないのがあれなのだが――」

「魔法っすよね？」

「……そう、魔法。知っているのか？」

「変なオニサンに話は聞いてるっす。ここに魔界の穴が封じてあるとか、信じてなかったっすけど、猫が喋っちゃあ、ちよつと信憑性あがったっすよ？」

「その点では、ね。でも、猫の話を信じるって言うのもなんか道理に合わないような」

「ヤタテっち、黒猫は喋るもんっすよ、ジジ然り、夜一さん然り……は、オジサンC V っすけどもしかして人間に戻ると美女パターンもあるってことっすかね？ どうっすか？」

少女たちには緊張感が足りなかった。決定的に。

しかも、なにを言ってるのかさっぱりわからない。これがジェネレーションギャップというやつなのだろうか。長年大学で学生たちとも交流があつてそれほど置いていかれているとは思っていなかったのだが現実こうだ。自信がなくなってきた。

「ナツメ！」

私が言葉を失っていると、ずっと黙っていた少女が振り返るほどの大声を出した。

「ミズキっち？」

「抱いていい？」

そう言う少女の呼吸が荒い。

「……ああ、あの猫氏、この人は猫好きでして、いいっすよね？」
「いい？」

そう呟いて私はハツとして身構えたが遅かった。

猫になつてもっとも屈辱的なことはなにか。鼠のようなものまで食べることか？ いや違う。人間に可愛がられることだ。猫好きは思ふより多い。老若男女、彼らは出会った猫をとりあえず写真に収めようとする。そして目を細めながら接近してくる。それはまあいい。逃げられる場面ならば。だが一度捕まってしまうば、もうこれでもかというぐらい撫でられる。そして、私の人としての意思とは関係なく、猫の身体は悦びを覚える。

「にゃあああああああん」

どこから出ているのか己にもわからない甘えた声が我慢できない。そのとき、私の人としての尊厳は完膚なきまでに破壊される感覚がある。

いつも思う。

私の人生はもう終わりだと。

「ンニヤあああああああああああん」
もうイヤ。

「……おお、オジサンが悶えている」

「オジサンは受けて言うより攻めなんだけどな……」

「にゃんこにゃんこ、にゃんこ可愛い、可愛い、ぜつと！」

「にゃにゃにゃにゃにゃあああん」

「にゃんこ……そう言えば、名前にあんまり自分の口から言いたくはないっすけど、夏目友人帳の安定感は凄いものがあるっすよね……ねえ？ ヤタテっち」

「総受け」

「にゃんこも？」

「もちろん」

「ハードっすね……」

そして可愛がられている猫を助ける人間はいない。

私が話をした限りでは多くの猫が人間に愛玩されることについて「気持ちが悪くてエサももらえてまったくいいことだ」という意見が圧倒的大多数を占めているのでこればかりは猫になってしまった以上は甘受する他ないのだろうが。

「にゃあ」

ひとしきり、全身を余す所無く可愛がられた私は氣力を根こそぎ刈り取られた。

「で、この猫氏の意見を聞くっすか？」

制服の少女は他の二人に尋ねた。

「危ないって言うなら逃げた方がいいと思う、少なくとも魔法があるのは確かみたいだし」

聞いていないようでしたっかりと趣旨を理解している少女が答え、

「にゃんこ、もふもふ、満足、ぜっと」

うつとりとしながらも一人が関係ないことを言っているよう帰ることに同意した。

「ナツメちゃんはいいの？」

「自分から非日常に入り込むのは死亡フラグもいいとこっすからね、ここは退くのがアニメ研究会のあるべき姿ということで、じゃ、猫氏、自分たちは行くっすから」

少女たちは現実的な結論に達したようだった。どこか浮世離れしているようで、しっかりと自分というものを持っている。若者とは強かなものだ。

「……安全に送り届けたいところだが」

それに私にはここで為すべきこともある。

「猫にそこまで期待しないっすよ」

「失礼します」

「ばいばい、にゃんこ」

それぞれがなにかを納得した表情で去っていくのを私は地べたで

撫で回された身体の痺れと程よい倦怠感がなかなか抜けない。

のっそりと起き上がる。

問題は鼠だ。

屋上伝いに、別の校舎から一気に飛び込むのだ。

場所を探すのは大変だが、悩んでいる時間は……。

「フラグフラグって現実でそういうこと言わないで！」

騒がしい声が戻ってきていた。

⌋
⋮
⌋

286

戻ってきていて、そしてその背後から無数の濁った色が追いかけてきている。ドブのような色だ。

「こ、こっちに逃げてくるな！」

もう大人の分別も無く私は言った。

「なに言ってるんすか、安全に送り届けたいっていったのは猫氏っすよ！」

「建前だ！ それは！ 期待しないって言っただろう？」

無力な猫に頼らないでほしい。

「期待はしないけど、猫なら鼠くらいどうにかならないんすか？」

「無茶言うな！」

「最低っす！」「最低だよ、オジサン」「にゃんこ！」

私は私のことでいっぱいいっぱいなのだ。

大人とはそういうものなのだ。これが非情なる社会の現実なのだ。そうでなければこれほど事態は悪化しなかったし、私は猫にもなっていない。子供はそういう大人を見て、身勝手に育って社会を墮落させ、そしていつか限界を迎える。それだけが人類の営みであり歴史の永劫なる繰り返しなのだ。どうしようもない。そう言い聞かせて生きていく。

少女たちを待たず、私も走り出した。

「待って！ にゃんこ！」

「無理、もう無理だから！」

「役立たずっす！」

「この件に関しては！ 役立たずで結構だ！」

身も蓋もないことを叫びながら、私たちは敷地内を走り回る事になった。

助けを呼ぼうにも、学院は街から孤立している。

14 私の猫生終わりました。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

15 変態女装少年とストーカー少女

広い日本庭園を臨む畳敷きの大広間。

やたらと寝心地のいい布団の上で目覚めた勇希は、しばらく天井を見つめて身体を起こし、ここが聖家、つまり母の実家であることを思い出した。毎年の正月に訪れるときは何百人という人々が押し寄せ、曾祖母に挨拶をし豪華な料理を振舞われる部屋だったが、何十か何百かわからない畳の真ん中にぽつんと布団を敷かれてしまったので光景が一致しなかったのだ。

ぽちゃんと庭の鯉が跳ねる。

「……あれ？」

記憶が？がない。

頭を掻き、掛け布団の上につつ伏せて静かな寝息を立てている舞を起こさないように身体を引き抜く。父に鍵を渡したところまでは覚えている。見る限り舞は無事だ。あとは父と母。広い部屋を見渡してもいなかったが、勇希はそれほど慌てなかった。

「バアちゃんのところか……」

母方の祖母、つまり母の母。父とともにここに来ているのなら会いに行くのが当然である。

勇希は着せられていた浴衣の襟と裾を整え、ふらつきながら歩き出す。

立ち上がるとどうしようもない倦怠感が勇希の全身を覆っていた。まっすぐ歩くこともできず壁をつたうようにして進むが、途中で膝が折れた。負けたのだ。ひんやりとした床板に手を突いて締め付けられる胸に任せて息を吐きながら痛感する。母と舞を守るつもりでそう言った。けれど負けた。守れなかった。そして鍵を差し出して命乞いをしたのだ。

『……これを渡せば、みんな、助かる？』

拒絶したはずの父に。そしてその向こうにいる敵に。

「あああつ！」

何度も頭を振って拳を握りしめ、勇希は振り上げる。
だが、振り下ろせなかった。

『うつせーんだよ！ 役立たずの猫はそこでたまってる！』

『あんな猫の子のつもりはない！』

勝つつもりだったのだ。

父が力の無い猫である限り、自分が勝つはずだった。だが、肝心な所で負けた。守るべきものを守れず、自分が言ったことすら守れず、そして父が父であることに甘えた。都合よく子供ぶった。それが勇希にとつてなによりも悔しいことだった。半年前、父が死んだことになったときに、自分は自立して大人になるのだと決めていたのだ。

拳から力が抜け、腕ごと床に垂れ下がった。

「勇希坊ちゃん」

「……」

パタパタと駆け寄ってくる声に振り返る。

「お身体の具合がよろしくないんでしょう？ お布団まで……」

古くからいるという聖家の使用人の女性だった。勇希も何度も顔を合わせている。

「いいよ、バアちゃんは？」

身体を抱えようとする手を押さえて、勇希は自分で立ち上がる。

「千栄子さまなら仏間に居られますが……」

「ありがとうございます」

見守る視線を背中に感じながら、勇希はふたたびよろめいて歩く。

どう思おうと結果が全て。負けは負けなのだ。

「バアちゃん、いる？」

「勇希かい？ お入り」

「……」

襖を開けると、勇希の予想に反して、仏間にいたのは静かに正座している祖母のみで、猫の父や少女の母の姿はなかった。屋敷の中

ではそれほど広くない部屋を見回しながら、勇希はまず仏壇に線香を立て、合掌する。いくつかの先祖の遺影の中に祖父の顔がある。

「大きくなったねえ」

「……夏休みの頭に来たばかりだよ？」

そう答え、勇希は祖母の正面に正座する。

今でも学院の理事長を務め、聖家のトップに君臨する曾祖母千笑と比べると、祖母千栄子はそれほど高齢でもないというのに落ち着いた色合いの着物を着て、お婆ちゃん然としていつもニコニコとしている。派手な洋装を着る曾祖母とは逆の趣味だ。そんな祖母が勇希は好きで、同じ市内に在るといふこともあつてよく顔を出していた。

「お菓子、食べるかい？」

「え？」

「丁度ねえ、水羊羹を頂いたんだよ。そろそろいい具合に冷えて……」

千栄子はそそくさと立ち上がろうとする。

「バアちゃん、あのさ、ちがうよ。甘いものとかは別に。おれ、その、どうしておれがここに在るのかとか、もつと話すことあるじゃん。父さんと母さんは？ 在るんでしょ？」

「いないねえ。圭介さんも……笑子も」

勇希に背を向けたまま、千栄子は小さな声で言つた。

「……え？ 気付かなかつた？ 如月、つてあのおれの同級生と一緒ににきてるはずだよ、同い年ぐらいの、おれとそっくりの女の子が……あと猫、ぶっさいくな猫、あれを父さんだつて言つてもわからないかもしれないけど、その……え？ や……うそ？」

いくら喋つても振り返りもしない祖母のノーリアクションに勇希はからからになった喉を押さえた。考える限り、もうすべて決着がついていたはずだつた。

「いない？ だつて……」

鍵を渡してみんなが無事のはずだ。

「その勇希そつくりの子は、圭介さんを追いかけていった」

千栄子はまるで他人事のように呟いた。

「一緒にいたお嬢さんが教えてくれたよ。そういうことだそうだ」

「……バアちゃん、なんで落ち着いてんの？」

飲み込めない違和感を勇希はそのまま口にした。

「生き返ったんだよ？ 母さんが。母さんってことはバアちゃんの

……」

「死んだんだよ。娘は、もうとつくに」

「や、だから死んで、生き返って」

「笑子はこの家の呪いを背負って死んだんだよ」

千栄子はそこで振り返った。

「正義の街。あの日、あの子はそう言っただけ」

「……正義の、まち？」

祖母は、いままで勇希が見たことのない顔をしていた。圧倒的な怒りと哀しみ、千笑と笑子そして勇希自身、血の繋がりが。あらゆるものが含まれていて、そして千栄子自身がどこにもない。それは役目を終えた植物に似ていた。後は枯れて土に還るだけの。

それだけは直感できた。

「バアちゃん、もしかして今日のこと全部……」

「ごめんね……勇希。巻き込むつもりはなかったんだよ」

「ごめんね、母さん。今日はひとりなんだ」

「……どうしたんだい？」

勇希を連れることなく笑子が聖家に帰ってきたのはその日が最初で最後だった。

「ま、母さんの顔を見に、ってことかな」

「？」

笑子は久しぶりに守護者として戦わなければならないのだと説明した。

「——で、魔王だって。笑っちゃうよね。この二十一世紀に」

「魔界が統一されたということになるのかねえ……」
守護者にはなかった千栄子にもそれがどういう意味かはわかる。

「たぶんね。少なくとも上はそう判断してるみたい。記録が残っている限りではあつちの争乱が治まったことって今までなかったみたいで、それも魔人たちが主導して大きな国が出来上がっちゃったということになると、こっちも対応しなきゃいけないってことになるって」

「……攻めてきたのかい？」

「ううん、違う。今回の件はぶっちゃけ内輪揉め」

苦笑して、笑子は落ち着かないように、

「魔王は必ず攻めてくるから、こちらの戦力を増やすためにも広く守護者の存在を世に知らしめるべきだ、という人たちと、攻めてくることは間違いないにしても、戦力を増やすということ自体が相手を刺激して危険を招くから先に魔王側との交渉を進めるべきだ、という人たちが二つに割れちゃって。この一年ぐらいはそれでも、ま、いつもの派閥争いみたいなもので大したことなかったらしいんだけど、どうも両方に相手を捻じ伏せてでも強行にやろうって人たちが出てきちゃって、あれだよ、欲望のタガが外れちゃったね。いよいよ、というか遂に。拠点となる魔界の穴の奪い合いになってきちゃった。そうなってくると、当然、狭い地域に穴が密集している日本は激しい戦場という事になってくるわけで、わたしにもお鉢が回ってきちゃいました。という具合。大体のところ、そう……そういうことだから」

早口でまくしたて、片方の手を包むようにキュツと握る。

「味方だった人たちと戦うのは、辛いよね……」

「笑子……」

「母さん、勇希のこと、お願いね」

千栄子の言葉を遮るように、言っと部屋を出て行こうとする。

「あなたが死んだら、子供は……」

「親はなくても子は育つ、って言うでしょ？ わたしもそう」

「……」

言葉を失い、千栄子は俯いた。

「皮肉で言ってるわけじゃないよ、母さん。わたしが母さんの立場だったとしても、同じことをしたかもしれない。勇希が生まれてからよく思う。許せるかというところからないけど、責められない。母さんはわたしの母さんだし、孫を可愛がってる姿を見るとね、絆される」

「笑子」

「……お婆様は中立を貫くつもりみたい。どちらも正しい、時間をかけて話し合え、ってね。いい歳して理想論もカッコ良いじゃないだから、わたしは戦うことにした。母さん、聞きたくないかもしれないけど、これは母さんに対しての罪滅ぼしの気持ちだと思う」

千栄子は首を振った。

それを見て、笑子はゆっくりと息を吐く。

「お婆様にも圭介にも言っただけ、勇希には資質があった」

「……！」

「かなり強い資質だと思う。母さんは運が悪かったんだよ。ま、わたしが生まれた時点でお婆様も気付いてはいたはずだから、何十年もの確執を放置している時点で悪いのはどっちか明らかんだけど、それももついい。頑固なこの家の事情はもう終わりにしよう」

笑子はそう言って千栄子の両肩に手を置いた。

「たぶん、わたしが死んでも戦いは終わらない。明るい未来も期待できない。それはずっと、ずっと前からわかってた。この家に生まれて、守護者になって、ずっと、ずっと絶えず感じてた。でも戦うしかない。これからずっと、ずっと最後まで。なぜなら、それが大勢の守護者を送り出してきた聖家に課せられた責任だから。ここを守っていくことが正義だと教え、示しつづけてきたわたしたちがそれを背負わなくてだれが背負うの？」

千栄子は、笑子の瞳から流れ落ちる涙を見ていた。

「だから戦う。わたしは。せめて、ここを守るこれからの子たちが、自分の戦いが正義だと信じられるように。木乃市は、守るに値する正義の街だと胸を張れるように」

徹頭徹尾、勇希には理解できなかった。

「ごめんねえ、ごめんねえ……」

話を追えて畳に額を擦りつけ、そう言いつづける祖母をそのままにして、勇希は立ち上がる。かつて母がなにをして、これからなにが起ころうとしているのか、肝心なことがなにもわからない。なにも伝わってこない。

しかし、それがすべてなのだということは勇希にもわかった。

「バアちゃん、父さんと母さんはどこへ」

「……行ってはいけない、勇希。そこに行っても」

「どこだよ！」

目の前の老婆にぶつけても仕方がないと感じながらも、勇希は怒鳴った。

「このままだと二人とも死んじゃうんだろ！」

この状況で、母が死ぬ直前の話をする理由はひとつしかない。祖母はもう諦めているのだ。蘇った母の命さえもどうにもならないと孫に婉曲に告げたに過ぎない。

「……ああ、ああ、ああ」

千栄子は頭を上げることなく嗚咽を漏らした。

「くそっ」

仏間から勇希は飛び出して、とにかく屋敷の外へ出ようと廊下を走った。身体が思うように動かず、よるめいて何度も転びながら、それでも立ち上がった。自分のせいだという思いがあった。あそこで戦って勝っていれば、勝てないまでもみんなを連れて逃げていればこんなことにはなっていない。それが出来なかったという無力を痛感する。

「ちつく、しょ……」

這うようにして玄関先までたどり着くと、舞がいた。

「どこへ行くの？」

舞は勇希の顔の前にしゃがみこんで小首を傾げてみせる。大きく見開いた眼と口元が笑っていて、明らかにバカにしている。口に出さずとも顔が雄弁に語っていた。

「……どこだっていいだろ、つつーか、パンツ見えてんだよ」

うんざりしながら勇希は視線を逸らして答えた。

「見てもいいよ」

丈の短いスカートの裾をひらひらさせながら舞は言う。

「見ねーよ、隠せよ」

自分のときはそれほど気にしなかったが、人にやられると非常に鬱陶しいことだと勇希はようやく父の言葉の意味を理解した。デザインが派手だ。

「えいつ」

舞は勇希の顔面にチョップした。

「……だっ？」

首が押し込まれるような痛打であった。

「えいつ」

もう一撃。

「ちよっ、ま」

「えいつ、えいつ、えいつ」

さらに連打。

「やめろっ！」

勇希は舞の腕を掴んだが、かまうことなく押し込まれて叩かれる。

「どこへ行くの？」

「つつー、だから……どこだって」

「えいつ！」

もう一方の手で舞はチョップ。

「んがっ」

「こんな状態の勇希くんになにができるの？」

「あのな……」

「勇希くんはどうしてお母さんを追いかけるの？」

「そんなの、決まって」

「えいっ！」

「がっ」

やられっぱなしの上に、こんなところで足止めを食らっている場合でもない。

「いい加減にしろ！」

勇希は勢いだけで立ち上がり、舞の胸倉を掴んで立たせ

「ジャマだ、どけっ！」

突き飛ばす。

「お母さんの行き先、知ってるよ？」

よろけて廊下の壁にぶつかりながら、でも動じることなく、舞は含み笑いで言う。足を交差させ、腕を組み、嬉しそうに自分の胸を撫でた。

「……どこだよ」

苛立ちを堪えるように勇希はばりばりと頭を掻く。

「先に舞の質問に答えてよ」

「質問？」

「まだお母さんと結婚するつもりなの？」

「……そんなことどうでも」

「よくない」

「……」

冷やかな声に勇希は舞の顔を見る。真剣な表情ではあった。

「守るって言ったのに、おれは、守れなかった。だから……」とか、最初から、ダメだってことはわかってた。母さんになってくれて言っても、同年ぐらいで、どうにもならない気がして……それに、本当のことを知ったらもう……いいだろ、これで」

言いながら、勇希自身、自分がなにをしたかったのかよくわからなくなってきた。鍵が胸の中にあつたときは確かに感じられた

確信が霧散してしまっている。

なにより、それどころではないのだ。命の危険が迫っているかも知れない。

「それで、母さんはどこに？」

「もうひとつ」

舞は指を一本立てた。

「時間がねーから」

「舞と結婚の約束をして！」

勇希の声をかき消すほどの大声は静かな玄関先でじんわりと反響した。

「……は？」

「お母さんと結婚する気がないなら、舞と結婚して！」

「……意味がわからん」

話の腰を折られ、氣力を腰砕けにされた勇希は座り込みそうになり、壁に寄り掛かった。

「じゃなかったら、なにも教えないし、ここも通さない！」

「それ、質問じゃなくてキョーハクだろ……」

「どうするの！」

舞はつかつかと勇希の前に詰め寄ってくる。

「どーもこーもねーよ、おれは別にそんな……ん？」

キスされていた。

体重をかけられて、立っているのがやっとだった勇希はずるずると座り込み、口の中に差し込まれた舌の感触に戸惑っていた。これまでに何度もされてきたことではあるが、今までになく大人しく、そして奇妙に甘酸っぱい味がしていた。

唇を離すと、舞の顔は真っ赤になっていた。

「舞にはわかってたよ、勇希くん、ずっとさみしかったんだって」と

「……さみしかった」

「女装しても、マザコンでも、舞は、勇希くんの側からぜったい離

れないよ？　ね？」

「ね？　って……おれは、その」

状況は既に勇希の思考の限界を超えていた。

両親のこと、祖母のこと、そして自分のこと、街、今日起こった諸々の状況、なにかもが整理できずに頭の中でぐるぐると回っている。順序立てて考えるには身体も疲れすぎている。時間がない。そしてなにより、舞の言葉は概ね正鵠を射ていた。

さみしかったのだ。

物心つく前には死んでいた母、研究に没頭してきた父、不在は常に埋まらない空白として心の中にあつた。友だちもそれほどで、学校では浮いた存在になり、そういう時に語りかけてくれたのは舞だったことは確かだ。救われる思いがあり、そしてストーカーになつてからも彼女を決定的には拒絶できない自分がいた。わかつてくれているのではないかという、期待はなかったとは言えない。総じて言えば、付け回されても嫌いにはなれなかった。

いつかはストーカーが治まれば、あるいは好きになるかもしれない、そんな曖昧な感情はあつた。恋人というよりは主に友人としてであることは確かだったが。

「如月のことどー想ってるのか、わかんねーから……」

「好きって言つて！」

全開の瞳孔で見つめる舞は、勇希の両肩を掴んで、壁にガンガンと押し付けた。

「え？　っだ、や、だから……そこまででは」

「そこまでもどこまでもないの！　言えばいいから、言ってくれるだけでいいから！」

「……好き？」

勇希は妥協した。

「愛してる？」

さらに顔を近付け、鼻息荒く舞は畳み掛ける。

「あい？　そんな、ぜんぜ……」

「愛してる！」

「あ、あい？　してる」

猛烈に妥協した。

「結婚する？」

「けっこ……ってなに言わせ」

「結婚するよね！」

舞は容赦なかった。

「……え、あの」

どつと冷や汗が出てきていた。

勇希には自覚がある。自分が黙っていてもモテる美少年であり、将来それなりに選ぶことのできる立場にあるのだという未来への展望があつた。その根本を揺るがされている。いくつもあつたはずの道が、気がつけば一本道になっている恐怖感。それはもはや理屈ではなく、実感だつた。ここで言うだけなら難しくはない。それで母を追える。簡単なことだ。小学六年生の約束が未来永劫有効だなんてありえないことは常識で考えれば当然だ。

「本気？」

だが、目の前の少女にそれが通用するのかどうなのか。

「本気」

「……た、たぶんだけど、おれよりいい男にこれから出会うと思うよ、如月は」

「話を逸らさないで」

「お、おれがいやだつて言ったら？」

恐る恐る、勇希は仮定を述べる。

「頭叩いて、寝かせて、引きずって布団に連れて行く。今日は終わり」

重々しく、それ自体が鈍器のような声で舞は言った。

一瞬の静寂。

聞き耳を立てていたかのように鎮まっていた蝉の声に取り囲まれる。密着してくる舞の身体は汗ばんでいて、勇希の首筋も濡れ始め

ている。体温はそろそろピークを超えようかという夏の気温より明らかに熱く、互いの荒い呼吸が混ざって空気が薄く感じられる。

「あ」

不意に舞は呟いて、少し腰をずらした。

「あ……」

勇希も腰を引く。身体は節操がない。

「わかった、如月、結婚しよう」

言っちゃったよ、とどこか冷めた自分を感じながらも、覚悟を決めて勇希は言った。

「え？」

「それでいいような気がする」

別にモテることに誇りをもっていただけではないのだ。

「……うそ、じゃないよね？」

「如月の気持ちが変わらないなら、おれがもらってやる」

パチパチと落ち着かないまばたきをしている舞を自分から抱きしめながら、勇希はその耳元に囁くように言った。言いながら自分を納得させた。

「変わらない、舞は変わらないよ！」

母親の実家の玄関先でなにをやっているのだろうか。

抱いてみると柔らかく小さく、それほど恐ろしい女の子であったのかどうかさえわからない舞の感触を感じながら、これでよかったのだ、と勇希は何度も自分の中で繰り返す。ちよつとストーカー気味で、ちよつとSの気があるだけで、可愛いものだ。間違いない。

力を込めないと気持ち揺らぎそうだった。

「ダーリン、ちよつと苦しいよ」

「……それで、行き先はどこ？」

呼びかけには突っ込みを入れずに勇希は言った。

「そうだね、うん、その前にダーリン、着替えないと！」

「は？ 着替え？」

「ウエディングドレスがあつたの！」

満面の笑みで、舞は言い、手を叩いて立ち上がった。

「……ごめん、意味わからない」

勇希は気付いていなかった。

これが大いなる受難のはじまりであるということに。

15 変態女装少年とストーカー少女（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

15 ここからは私の戦いだ。

逃げれば逃げるほど鼠が増える。

そう錯覚してしまうほど、数限りない鼠が私たちの行く手に現れた。校舎の下から、生垣の中から、駐輪場の上から、虚を衝いてやってくる。その度に急カーブを切り、前後左右、東西南北、あちらからこちらという判断もままならないまま、走るしかなかった。

「……ど、どうして追いついてこないの？」

私の後ろをついてくる少女の声に、ハッと気付いた。

「確かに……」

単純なトップスピードで言えば相手が完全に上回っているはずだ。猫の狩りにおいてさえ、ルートを見越しての先回り待ちでやっとならぬ。鬼ごっこなど勝負にもならない。もちろん鼠共も無限のスタミナを持っているわけではないし、その点では猫や人間の方が優れているとも言えるが、それを見越してヤツらは次から次へと先回りをして、距離ではなく数で圧倒しようと……。

「いかんっ！」

誘いこまれている。

前脚を突っ張って急ブレーキ。切り替えして追ってくる鼠共を睨む。

推測通り、ヤツらは追う足をぴたりと止めた。

「ね、猫氏、急に止まられるとととと」

「ナツメちゃん？」

「……あ」

一番遅れていた少女が私をかわそうとして軽くジャンプしたのだが着地できずに転倒した。どう見ても運動不足だろう。年頃の女子にあるまじきあられもない体勢になっている。それを見て、他の二人が助け起こしている。

視線を感じて私は横の校舎を見上げた。そこにあの例の鼠がいた。

耳を立ててみると感じられる。ヤツは同族に向かつて鼠のみに通じる言語で何らかの指示を出している。おそらく、私をどこかの行き止まりまで追い込み、自らとどめをさそうと言っのだろう。

シンプルな復讐だ。

「狙いは私だろう！ この人間たちは逃がしてくれないか！」

こういう状況になった時点で話は通じないと理解しつつ、私は呼びかけてみた。学院の生徒ということは笑子の後輩でもある。まさか鼠のエサにするわけにはいかない。

ぢぢぢぢぢぢぢぢ。

鼠共は答えなかった。動物に話し合いなどという概念はないのだから仕方がない。食うか食われるか、これは人間が考えるより自然界における絶対的なルールだ。

逃げていてもはじまらない。

「にゃんこ、なんて？」

動物言語が聞き取れず首を傾げる少女たちに私は首を振った。

猫の身体でこの事態のすべてを解決するのは土台無理だ。できることからやらなければ。

「すまない。絶対に助けられるという確約はできないが、ここは私があゝの鼠の群れに飛び込む。その隙に逃げてくれ。多少は時間が稼げるはずだ」

「猫氏」「猫ちゃん」

二人の少女は私の覚悟を汲んでくれたのか、真剣に頷いた。猫ぐらい簡単に見捨てることもできるだろうに、なんとも真面目な子たちである。助け甲斐があるじゃないか。どうして学院にいたかはわからないが、巻き込んだのは私なのだ。さっきは見捨てようとしたが、知恵をつけた鼠の一網打尽にされるぐらいなら、犠牲は少ない方がいい。

「にゃんこ、そんなのダメだ、ぜつと！」

一人、猫好きの少女だけ私を止めようとしたが、残る二人が腕をロックした。

「いぞ！」

そう叫んで、私は鼠共に突っ込んだ。

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
—

一瞬で鼠の鳴き声しか聞こえなくなった。飛び込んで振るつた猫パンチで数匹を弾いたが、ものの数にはならない。鼠共はまったくひるまず、数十、数百の群を単位に次から次へと襲い掛かってくる。ひとつひとつの塊が猫一匹より大きいだろう。かまわずムチャクチャに脚を振り回し、口に入ってきたものに噛み付いてやったが、分が悪過ぎる。

鼠色の泥沼に飲まれるように、上も下も蠢くヤツらでわけがわからない。身体中が噛み付かれて痛みもよくわからなくなっていた。猫になつて半年、幾度も見た光景が蘇ってくる。死んだ猫のぼろぼろの毛皮だけが吹き曝しになつた、あの光景。車に轢かれたのかなんなのか、住宅地界隈レベルならば食物連鎖の頂点に近い位置にありながら、極めて無力で無残な死の姿。あれを見るたびに猫になつてしまった己の不幸を呪つた。これでは毛皮も残るまい。

これで終わりなのか。

研究に費やした十年、猫としての半年、そして結果としての昨日、今日。

やれることはやった。

妻は蘇った。息子も生きている。それ以上のなにを望めというの
 だろう。無力な猫だ。惜しむような命でもない。見知らぬ少女たち
 を助けようとさえした。十分だ。さすがに魔法の力を駆使する守護
 者たちのように世界を、この街を守ることは荷が重い。そもそもそ
 れは私の仕事でもない。求められてもない。そう、それで……。

[illegible]

「この畜生共があああつ！」

どこからそんな力が出たのか、私は鼠を跳ね除け、宙を舞っている。

た。

このまま死んだら、カツコ悪い男のままだ。

笑子の夫として、勇希の父親として、そしてなにより私自身生きたことに胸を張れない。

猫にされて、鼠に食い殺されるなど許容できるか。

ここからは私の戦いだ。

「まだ、齒向かうんでやすか……」

校舎の雨どいの外側をするとあの鼠が滑り降りてきた。

「言っただけだ、鼠風情が……」

着地しただけで崩れ落ちそうになる四肢を気力で支えながら私は言い放つ。

「……猫と鼠の理には齒向かってるのはどっちか、教えてやる」

「減らず口がそれだけ叩けりゃ十分でやす」

鼠が歩くと、私を取り囲んでいた群れが道を開けた。

「逃がした獲物をそのままにはしておかないあのアマの鞆に忍び込み、やってきたこの場所で得た力、正に鼠を超えた鼠、ちゅー鼠！

これほど早く使えるとはあっしの幸運も満更バカにしたもんでもないっちゅー……目ン玉かっぽじってよくみるといいでやす！」

「……」

うだうだ喋っている間に攻撃したかったが、満身創痍の私は動けなかった。

立っているのがやっとだ。

「ぢゅううううううう……」

鼠が唸り声を上げる。

異様な気迫だった。鼠の毛は激しく逆立ち、剥き出しの前歯が見る見る鋭さを増していく。食欲をそそる風だった丸みを帯びたシルエットは筋肉質になり、そして明らかに大きくなっていく。モルモットより小さいものから、猫よりも大きいカピバラクラスへ。しかしあののっそりとした愛嬌のある感じではなく、攻撃的なげっ歯類の意気を残して。

私は思わず後退り、周囲の鼠共も気圧され、じりじりと下がっていく。猫と鼠と言う関係性においてこれまた幾度も命をかけた戦いはしてきたが、そういうレベルの問題ではない。魔力だろう。こいつは鼠でありながら資質があったのだ。人間以外にも資質がある可能性は把握していたが、実際に目にする機会があるとは思ってもしなかった。

でかい犬に睨まれるより恐ろしいじゃないか。

「ぢゅぢゅぢゅぢゅ」

怯える私を嗤うように鼠は鳴いた。

じんじんと髭がかつてない感覚を伝えてくる。

「どうでやす？　ちゅー鼠」

猫の私の三倍はあろうかという身体をさらに大きく見せるようにふんぞり返って、鼠は勝ち誇った。動物として勝ち誇るに値する身体であることは間違いない。澱んだ鼠色さえ、くすんだ銀色ぐらいの貫禄を感じさせるのだ。

「……ちゅー鼠だな」

それはもう超って言えよ、と悪態を吐く気力も湧かない。

「さ、鼠捕り、来ないんでやすか？」

鼠は勝利を確信していた。そしてそれは事実その通りだった。

「い、今、行くところだ」

強がってはみたものの、前脚を一步出すだけで身体が竦む。ぢゅ！

「こつちからいくでやすよ！」

鼠の声より、周囲の鼠が動揺する方が早かった。

「どっこいしょあーっ！」

「は？」「へ？」

私と鼠はほとんど同時に空を見上げた。

ハンバーグをこねるときにボールに叩きつけるような音、というのだろうか。私の耳に生暖かいものが当たり、直後生温い液体が周囲に飛び散った。こつん、と地面に転がったものは、ヤツのご自慢

だったであろう立派な白い歯。猫に歯向かう牙だった。

目の前の鼠が跡形もなく潰れていた。

「まったく、デディめ、ちゃんと結界を修復しないから、その辺の生き物が魔獣になる」

両脚で鼠がいた地面を踏みしめているのは正井玲鈴。

私の戦いが茶番でした。

「……」

鬣のない頭の先から、太い尻尾まで、紅蓮の輝きを放つ体毛に覆われたその姿は獅子。それも本当に狩りをする雌のライオンである。新鮮な人間の血の臭いがする。ついさつき、ちゅー鼠を見たときよりも、私の猫の本能が平伏を要求する荘厳な気迫が溢れていた。逃げたいけれども、逃げた時に命がないのは明らかであるという絶対の危機。

できることはひとつだけだ。

私はごろりと血溜まりになった地面に仰向けに転がり、腹を見せる。

「あー、で喋る黒猫ってのはアンタ？」

玲鈴はそんな私の首をつかんで持ち上げる。

「は、はい」

誤魔化すという考えも浮かばず反射的に答えていた。

「連中と一緒にいたでしょ、五人のうち四人はもう始末したけど、肝心の理事長がいない。どこにいるか知ってる？ 知ってるわよね？」

「答えて」

それほど高圧的な口調ではなかったが、存在が高圧的なのだ。

「……し、知りませんが」

声が震える。

「あ？」

「し、知らないですが、中庭に向かっているはずだと」

「んなことは知ってるの！」

「は、はい……」

それはそうだ。あまりにもわかりきつたくだらない情報だ。

「役に立たない猫ね」

「よく言われます」

息子にも言われました。

「管理鍵は取り戻さないと安心できないからな……あ」

なんかムシャクシャするのでシマウマの一匹でも殺つてやるか、
とでも言わんばかりのしかめ面をした玲於の目が唐突に見開かれた。
瞳孔がぐりぐりと動く。獲物を見つけたという喜びが迸っている。
自分が見られているという訳でもないのに、内臓が凍るようだ。

しかし、私も恐る恐る彼女の視線の先を見る。

「あれは……」

リーダーを失った鼠共は早々に逃げ出そうとしていた。その行く
先、近場の地面だったのだが、千はいる群れが一気に吸い込まれる
ように消える場所がある。いくらなんでも鼠穴の規模ではない、ど
う見ても不自然な光景だった。

「そういうことか」

守護者の判断は早かった。玲於は私を掴んだまま、つかつかとそ
の場所に向かっていき、鼠ごと地面を踏みつけた。ごぼん、と土埃
とともに地面が落ち、校舎の下に向かって延びる人間も通れる通路
が露わになった。古い石造りの頑丈そうな地下通路である。

「理事長が見つからないわけだ」

「この学院は昔、城のあった場所に……」

笑子にそういう話を聞いたことがあった。

「うるさい。知ってる」

私は黙るしかなかった。

15 ここからは私の戦いだ。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

16 この緊急事態にケンカです。

複数方向からの風の流れ、散らばっていく鼠共の気配、入るまでもなく地下通路が広大で入り組んでいるのは明らかだった。作られた頃からそうだったのか、後に追加して行ったのかはわからないが、学院の敷地にくまなく張り巡らされていると考えるべきだった。

長身の玲於是腰を屈め、片手に私を掴んだまま奥まで入っていったが、通路がさらに地下へ伸びる分岐を見つけて、これが平面的ではなく立体的構造を持っていることを確認して、首を振った。ここを追跡するのは現実的ではないということだろう。

魔界の穴を守ることを優先するならば、中庭で待つほうが賢明なのだ。

「アンタ、理事長の目的は知ってるの？」

地上に戻って、私を地面に放り投げると、玲於是言った。

「私にも具体的には……ただ、私の妻を殺したものの最期を看取るのだ、と」

よろけて着地して、私は率直に答えた。

「妻？」

「ああ、十年前にここで死んだ守護者、笑子は……」

「ちよっと待って」

私の言葉を遮って、玲於是怪訝な表情をした。

「……アンタ、奥さんの死体は見た？」

「それがなんだと」

「頭と、心臓、残ってたはずよね？」

重要なことだという風に言葉を区切って玲於是念を押す。

「それはもちろん……」

動かない妻の姿を思い出して、言葉が詰まった。

「……話が見えてきたわ」

そう言くと、玲於是悔しそうに歯噛みした。

「どういうことだ」

「は？ アンタの奥さんちの事情よ！ アタシより——っ？」

なにか癪に障ることを言ってしまったらしく、玲於が声を荒らげた瞬間、その動きが止まった。何事か、と考える間もなく、地面を伝って私の全身にも悪寒が走る。髭がへたり、四肢から力が抜け、意思とは裏腹に耳がぺたりと閉じて震えながら座り込んでしまう。身体が自由が利かない。

玲於は背後の校舎、その先にある中庭の方角の空を見上げた。

「伏兵の一人や二人、いるだろうとは思ってたけど、だれが……？」

「……ま」

魔力なのか？

声すら上手く出せず、身体 of 震えも止まらない。恐怖とは違う。得体の知れない寒気としか呼べないものが当たり一面に溢れ、支配しようとしている。ふと見ると、地下通路に逃げ込んだ鼠共が戻ってきている。ヤツらは私など目に入らない様子で、学院から逃げ出そうとしている。その光景から類推されるものはひとつしかない。沈没する船。

本格的にまずい。実際のところ、今日この場にくるまでまずくないことなどひとつもなかったが、この猫の身体が動いてくれないのでは逃げることもままならない。なにもできない。もしかするとこれは、猫の身体と私の魂が分断……。

「いくよ」

「！」

同意など待つてくれるはずもなく、玲於は私の身体を抱えて飛び上がった。

無重力感さえ覚える勢いで、二つの校舎を飛び越え、まっすぐに中庭へ飛び込む。その間も寒気はどんどん増していく。その正体に近付いている。

「正井さん！」

巨樹の前に、さきほど廊下から見たフラスコ少女が地面に手をつ

きしゃがんでいる。その手の先からは放射線状に光が伸びていた。おそらくこの場を守る結界に魔力を送り込んでいるのだろう。体型からおよそ察しはついたが、自らの身体に対して《変異》を行なうより魔力の《転位》を得意とするタイプの守護者に違いない。

「あ、ああ、あの、ご、ごご、ごめんなさい、勝手に開いちゃって……その、あれ」

少女はぺこぺこ頭を下げながら、もう一方の手で正面を指差す。
「……ちっ」

玲於が舌打ちし、私も目を見開く。

黒い、霧のようなものが区画の一边、渡り廊下から溢れていて、あれほど生い茂っていた植物が、中庭の半分ほどまでそれに侵食されるように枯れていた。水分を完全に失い、見るからに風化寸前の有様である。そしてその方向から寒気もやってきている。

なにかがいる。

「売村、どのくらい持つ？」

玲於は私を少女の横に置いて、霧のようなものとの間に立ち塞がるように立った。全身から放たれる紅蓮の光が勢いを増している。寒気が少し弱まった感覚がある。なんと頼もしい。

「け、けっこう全開です。二十分いけるかどうか……」

「範囲を狭めていいから十分延ばして」

「は、はい！」

少女が大きく頷くと、一気に中庭の植物が枯れはじめる。結界を小さくしているのだろう。樹を中心にして、私たちはその内側、そして玲於は外側に立つことになる。

「貧乏くじはアタシだったか……」

広がってくる霧を前に、玲於は深呼吸すると大地を蹴った。

直後、正面にあつた渡り廊下が吹き飛ぶ。こちらにも向かつてくる爆風に、私と少女は体勢を低くして耐えた。結界の面に、墨をぶちまけるように霧のようなものが付着して、すぐに消える。横で少女が苦しそうに息を吐く。見るとぼつぼつと汗が肌に浮き上がって

いた。

「あれは一体……」

「だけれど、強制的に扉を開きました」

私の呟きに少女が答えた。

「強制的に？」

「ええ、そう意図して資質のない人に大量の魔力を《転位》すると

――」

不意に、広がっていた黒い霧のようなものが一点に凝縮され、私たちの視界にそれが姿を現した。前に立つ長身の玲於さえも見下ろす漆黒の巨軀。男だ。拳を振り下ろしているらしく、足下が徐々に沈んでいる。

「――ヒトでさえ、容易く獣に墮とされます」

ヒトの魔獣。

「オ、マエラ、ガコロシタ、セカイオレ、ノアシタ」

魔獣と化した男が裂けた口を開く。黒い体の中で、そこだけが赤い。収まりきらないおろし金のようなざらざらとした舌でたどたくしく話す。意味はわからない。だが、

「メニ、アウスオナ、ジトコロオク、テヤル、シネ」

明確に敵意がある。黒く染まった白目の中に浮かぶどんよりとした黒目がこちらを見ている。隣の少女の汗が垂れた。

「シネ」

もう一本の腕を振り上げた。その勢いだけで背後の窓ガラスが碎け、建物にも亀裂が入っていく。正対している玲於の顔はこちらからは見えないが、既に一本の腕を両手で受けていて、立っているのが必死の状況にしか見えない。

為す術などなかった。

「正井さん……」

少女は齒を食いしばりながらも、目は閉じなかった。

どうしようもない音とともに、ひしゃげた玲於の身体が左側面の校舎に突き刺さる。その後、拳の勢いなのか巨大な穴が校舎に開き、

崩れた。中庭を形成する二辺が失われ、この場所はグラウンドに剥き出しになる。守るものはもう少女の結界しかない。

「オマエラダツ、ギハ」

魔獣男はのっそりとこちらに向かって歩いてくる。

「……あの」

唾を飲み込んで、少女は呟いた。

「死にたくないですよね？」

「……ああ、もちろん」

少女が私に伝えたい意味はわかる。わかりすぎるほどに。

けれども死ぬ。

それでも死ぬ。

ともかく死ぬ。

もう死ぬ。

「冷蔵庫のエクレア、食べてくれば良かった。とっとなかないで」

集中するように目を瞑って、少女はそう言った。

「……ご愁傷様」

もったいないとはこういうことだろう。

魔獣男が目の前に立ち、腕を振るった。

「アグヲオオオオオオオオオ！」

結界が干渉して男は苦悶の声を上げていたが、その人の頭の五倍はあるうかという大きな拳がじわじわと突き抜けてくる。逃げたいだが身体はまったく自由にならない。おそらくあの黒い霧のような魔力を受けたときに、私の魂と猫の身体を繋いでいるものが致命的に切れてしまったのだ。どうしようもない。これは、もう。ダメだ。死ぬ。

「まそのさん！」

見上げていた視線の先で、黄金色の光が走った。両手で剣を握り、腕ごと拳を切り落とす、見覚えのある長い黒髪ワンピースの少女が、いた。

「笑子？」

なぜ？　ここに？

「ヲウオオオオアアアアア！」

魔獣男は痛みに仰け反り、先のない腕を空に掲げる。そこから噴出す黒い血が、私たちに容赦なく降り注ぐ。凄惨としか言いようがない。

「……」

横で少女も呆気にとられている。

「無事、ですか？」

こちらを振り向かず、剣を構えて笑子は言う。

「な、なんとか」

「なら、良かったです」

そう言つて、ちらりと私を見ると、哀しそうに笑った。

よくわからないが、なんとか生き延びた。と、油断する間もなかった。次の瞬間、笑子の身体が地面に叩きつけられていた。声を出す間もない。魔獣男はまだ苦しんでいる。だれがやったのか、私の目では捉えられなかった。

「華夢衣？」

となりで少女が叫んだ。

「対象、確認……」

そこにいたのは、今日、市内に戻った時に会った守護者がいた。どうやら私には笑子が、となりの少女には彼女が、タッチの差で助けに入るうとしていたらしい。その結果が、

「リベンジ
復讐」

「いや、ちょっと待て、違う……」

君を倒したのは勇希だ。というかりベンジはおかしいだろ。守護者として。

と、言葉を挟む時間が足りなかった。

「つたい……、あ、あなた、あの時の」

極めてバッドなタイミングで笑子が目を覚まし、二人はにらみ合う。相手は笑子を勇希と誤解しているが、笑子にしてみれば数時間

前の因縁だった。子供のケンカがはじまる瞬間、というのは大人が敏感に感じられて、まったく止めようもないことのひとつだろう。

「ちよつと、華夢衣、そんなことしてる場合じゃ……」

届かない。

そう思ったに違いない。横の少女と私はどちらからともなく顔を見合わせた。

「抹殺」

「やられるもんですか！」

頭の後ろの方でカーンと、乾いたゴングが鳴る。

この緊急事態にケンカです。

まあ、この二人は状況を把握していないわけですが。しかし、子供のケンカとは言え、互いに守護者の力を持っているとなると……いや、待て。どうして笑子がもう鍵を手に入れているのだ？ それも勇希が使っていたものとは違う色の光を放っている。

猫の目では追いきれないハイスピードのケンカで、周囲には土煙が上がり、見る見る校舎がなくなっていく。もうほとんど巨樹が全方位から剥き出しである。ひっくり返った魔獣男の血で私たちはどろどろであり、呆然と佇むばかりだ。

なにがなんだかさっぱりだ。

「なかなか目論見通りにはいかないものだね。馬園くん」

「理事長！」

私が声の方向を見るより早く、となりの少女が叫んだ。

若い男だった。少し時代がかった二枚目で、学生服を着ている。

そしてその横に千笑が立っていた。そうだった。私の目的はともかくこの場で魔界の穴を開くことを阻止することだった。立たなければ、そう思うが自由が利かない身体と、ぬめった血で脚が滑る。

「理事長！　なんでこんなことを」

「……」

少女の言葉に千笑は答えない。

「その守護者、黙っていてくれないか？　話の途中なんだ」

「は……？」

もはや私はこの場にいるだけ、役立たずにもほどがある。

あっと思う間もなく、その若い男が少女の頭を掴んで放り投げ、背後の樹にぶつけた。結界が解けた影響なのか見る間に枯れ始めた葉が情緒もなにもなく散り落ちる。守護者をぶんなげるなど、人間業ではないというよりこの男も力を持っている。そう判断する以外ない。

「私の名前を？」

「まだ、気付かないのかい？」

男はポケットから白いハンカチを取り出し、血を浴びた少女を掴んだ手を拭う。そしてそれをそのまま地面に捨てた。黒く染まっていく。

「もしかして？先生？……？」

私にはよく見覚えのある仕草だった。ハンカチは一度しか使わない。

「この状況でも、そう呼んでくれるのかい？」
若返っている。

そう表現するしかない男がそこにいた。

16 この緊急事態にケンカです。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

17 ギブ&テイクは終わった。

笑子の葬儀で、私は？先生？と出会った。

ということなのだが、私自身はあまり覚えていない。

妻の死を知ってから、葬儀後しばらくまでの私の記憶は極めて曖昧になっている。後に母に叱られたが、茫然自失そのものだったということらしい。その様子を見かねて聖家の人たちが葬式の一切合財を取り仕切ってくれたのだそう。喪主としての挨拶も原稿を渡されて、それすら最後まで読み切れなかったとか、実際とても情けない有様を晒したようだ。

しかしともかく、気付いたとき、その名刺は手元にあった。

肩書きも、名前もない。あるのは電話番号のみ。裏にも表にもなんのメッセージもない。しかし、絹のような手触りの紙に洗練された書体で印字された数字の列はただそれだけで異様な存在感を放っていた。私は吸い込まれるように電話していた。

後から考えると不思議なことだったが、その時は？先生？に直ぐ通じた。

「もしもし？」

『——ああ、馬園くんだね？』

相当に年季の入ったしゃがれ声であることは間違いなかった。

「はい。そうです」

自宅からかけていたので番号でわかったのだろうとは思った。

「あの、こちらからお電話差し上げて失礼は承知していますが、あなた、その……」

『構わない。こちらが何者かは教えないことにしている』

「それは、どういう意味で」

『大学に秘密にして進めている研究があるね？』

私の質問には答えず？先生？が要件を切り出した。

「え？ それは……」

どちらが電話をかけた側なのかまるでわからない。

『亡くなられた奥さんを蘇らせたくないかい？』

「……蘇らせる？」

その時には既に引き込まれていた。

『詳細については追って伝えよう。まずは研究を進めるといい。それが近道だ。予算についてもこちらで手を打つ。ただ内容は秘密のまま、派手にはしないことだ。必要なものがあればこの番号にかけるといい、次からは専属のスタッフが対応する。期待している』

それだけ言くと、私の返答を待たずに切った。

一方的な通告である。

今となってみれば、おそらく同様のことを相当数の研究者に仕掛けていたのだろうとも思うが、十年前の私は、混乱しながらもその言葉に一縷の希望を見ていた。地獄に仏。一本の蜘蛛の糸のようなものだ。死んだ妻が蘇るかもしれない。

人工的に魔力を生成する研究をはじめたのは私に魔法の資質がなかったからだ。

好きになった相手のことをよく知りたいと思うのは自然のことであると思う。それが魔法ともなれば自分で使ってもみたいと思うのも自然だろう。探究心を擲られないわけがない。だが、魔法を使うためにはそのエネルギーとなる魔力が最低でも必要である。しかしそれはこちら側に自然に存在するものではない。ならば作るしかない。基本的にはそういう流れだ。

もちろん、完璧なゼロからでは無理だっただろう。笑子と結婚する前に、魔法について最低限の知識は（関係者となるにあたって必要なことであるとして）教わっていたし、笑子本人からも守護者たちが候補生のときに渡される教本を読ませてもらってもいた。

ただ、それだけでは不十分だった。確かなこととしてわかっていたのは魔界の生活技法を完全に伝える書物は現存していないことと、守護者たちも必要な幾つかの魔法と鍵の使用法程度（それでも膨大ではある）ぐらいしかわからないということだけだ。魔法の根本的

な仕組み、特に魔力を構成するものについてはほとんどブラックボックスになっている。そこについてなにか確証があれば、秘密になどせず別の名目で堂々と研究をはじめたのだが、ともかくなにもかもが手探りで研究だった。それも仕事の合間をぬってのことだから、笑子が死んだときの時点では完成への見通しも立ってはいなかった。

それでも認められた。

「僕の研究が近道……」

自分の研究がどこから漏れたのかを考えるより、その事実が私を奮い立たせた。若かったのもあるが、期待されれば期待に応えたいなるのが人情だ。直後に届いた蘇生魔法に関する資料に、研究予算そして教授への抜擢、有頂天になるには十分すぎた。あの番号にかければ、必要なものはすぐ届けられる。その過程で対応していた男が？先生？と呼んでいたので私も気付けばそう呼ぶようになっていた。

魔力を生成するまでに三年かかった。

そのことを伝えると、すぐに呼び出された。

迎えに来たリムジンは外の景色が見えないようになっており、どこをどう走ったかもわからない。到着した場所はどこかの地下で、そこから階数表示のないエレベーターに乗せられ降りた場所は古書が散乱する書斎のような場所だった。もちろん外は見えない。わかるとすれば？先生？という人物がどこまでも自分の素性を隠したいということだけだった。

「二度目になるかね？」

ばさばさの白髪頭を掻きながら壁一面の書棚にかかった梯子をおりてくる。

「二度目？」

「奥さんの葬儀の時に名刺を手渡しただろう？」

「……あ、はい」

そうか、と私はそこでやっと納得した。

「覚えていなくても無理はない。あの時は、とても生きた目をしていなかったからね。しかし今はどうだ。充実した顔をしている。手を差し伸べた甲斐があるというものじゃないか」

「先生？は快活に笑うと、私の手を取った。」

人間の私はチビの部類だが、しかし目の前に立つた老人はとても大柄だった。腰がいくらか曲がっているのにそれでも頭三つほど大きい。太くて白い眉毛に、立派な鼻、深く刻まれた皺の中にあって見開かれる目の迫力は圧倒的だった。そのときの私の目が生きていたかどうかはわからないが、そちらこそ生きた目、と言っべきだった。なにがどうしたというものでもなく握手をしながら、私の足がガクガクと震えた。

「よく頑張ったね。馬園くんならやってくれると思っていた」

「いえ、まだ生成に成功しただけです……」

その成功さえも偶然の産物であつたということは多くの発見と同様である。

「しただけ？ 自分の仕事を卑下するのはよくない。何十年、何千人が挑んだ最重要課題をたった三年でクリアしたのだ。才能と強運、両方を持つものでなければできないことだよ」

「それはもう？先生？からお預かりした過去の研究資料あつてこそのもので……」

「いい。馬園くんをここに呼んだのは祝杯を挙げるためだ、かけたまえ、いい酒がある」

高級すぎて美味しいのかどうかわからないウイスキーを飲みながら、私は？先生？の研究について初めて聞かされることになる。

「薄々は気付いていただろうと思う。求めているのは永遠の命だ――」

「先生？は口元をハンカチで拭き、ゴミ箱に放り込んで言った。納得すべき動機ではある。」

どういふ人物であるかはまるでわからない？先生？だが、相当な金と権力を有することは間違いなく、そういった人々が最後に求め

るものはそれ以外にないと言っても過言ではない。でも、永遠の命を得て、さらに魔法の研究を完璧なものにして世界平和を実現したい。そういう趣旨のことを話した？先生？を素直に信じたというわけではない。私もそこまで世間知らずではないし、おそらくもつと口に出せない理由もあるだろうとは思ったが、特にその考えに共感を求められたわけでもなかった。？先生？は私の利用価値を認め、私も利用されるからには目的を果たそうと自分の目的を再確認したに過ぎない。

それで十分ではあった。

「——馬園くんのことはずっと監視していた。悪いとは思ったが古い先長いとは言えない身でね。どうしても研究を独占されるのではと疑ってしまうのだよ。しかし、少なくともこれまでの時点でそういう素振りはなかった。だから……亮平」

「はい、先生」

「よく知った顔だと思うが、これからはこの男も研究に加えてもらう」

はじめて知らされたことだが、野末亮平は？先生？の遠戚であるということだった。友人だったことは偶然だったが、研究について漏らしたのはこの男であったのだ。そういう忌みで、私の情報は、ほとんど筒抜けだったということだ。

そこで研究の完成した暁には真つ先に？先生？にそれを提供するという契約を結ぶことになる。多額の報酬と蘇生の石版の情報と引き換えでというものだ。契約が本当に履行されるのか疑念はあったが、妻の蘇生という目的の前には選択の余地はない。

それから一年に一度程度のペースで？先生？に研究を直接報告することになった。最終的に六年近くかかったわけだが、まったく死ぬ気配などなく、私を急かすこともなく、焦っているという雰囲気を出したことは一度もない。その命の先行きには興味がなかったが、？先生？を失えば研究は飛び、妻も蘇らないとわかっている私もただ研究に没頭しつづけた。そして最初の装置が一年前、半年前

に二つ目の装置は完成し、私は猫にされた。

それが私と？先生？のほとんど全てだった。

まるで自分が黒幕だとても言いたいかのような口ぶりの、若返った？先生？を前にして、私はゆっくりと口を開いた。

「……？先生？が野末に命令して私を猫にしたのだとは思っていません」

そんなことをする合理性がなにもない。

「契約通り、生成装置の一号機は差し上げました。報酬と蘇生の石版は受け取りました。見る限り先生もあと九十年は生きられる。永遠にはまだ遠いかも知れませんが、今更、こんな形で私の邪魔をする理由があるとは思えない。邪魔だと思うならもっと早い段階で猫などという回りくどいことをせずとも消せばすむことで、それもできたはずだ。そんな価値さえも私にないことはよくご存知だと思いますが」

「馬園くんの悪い癖だ。自己卑下が過ぎる」

？先生？はそう言うのと、隣に立っていた千笑の背中を押した。

「人は言わないかもしれないが、珍しい男だよ。妻を蘇らせること以外は、金にも権力にも魔法にさえも執着しなかった。長く生きて多くの人間を見たつもりだが、賞賛されるべき美德を持っているのではないかと思うね。だからこそ生かしたという面もなくはない。亮平の件についてはこちらの不手際だ。済まなかったとむしろ言わせてもらいたい。これが終わったら人間に戻るよう計らおう」

「それには及びません」

反射的に答えていた。問題はそんなことではないのだ。

千笑が無言のまま巨樹に向かって歩いていく。動けない私の横をすり抜け、さきほど投げられ横たわっている少女の脇を素通りし、一直線に。上空では笑子が戦っていて、爆音と閃光が交互に繰り返されている。呻いていた魔獣男も立ち上がりはじめた。

「それは……猫のままでいい、という意味かい？」

「もう、世話にはならない。そういう意味ですよ」
ギブ&テイクは終わった。

ここで力を振り絞らなくてどうする。

私はともかく立ち上がりうとした。だが、思うように猫の身体は動かない。猫として目覚めた日にさえ感じるこのなかった不自由だった。前脚を立てても後脚が自然にはついてこない。細い筒に腕を突っ込んでなにかを引っ張り出すようなもどかしい反応だった。

「んにゃああああ！　っあ！」

跳ね上げるように後脚を立てるとバランスを崩して顔面を地面に打った。

「孫娘が命懸けで守ったものをこんな風に無に帰すんですか！」

千笑に向かって叫ぶ。身体の変えるだけで猫の身体は左右にぐらついた。

「笑子を守った正義の街は、まだここにあるはずだ！」

「だからこそよ」

千笑は胸元から小さな箱を取り出していた。

あれか。

私はまったく自然な動きにならない四本の脚をでたらめに動かし、転がるように突進する。話し合って通じるものでもないだろうとは思っていた。現実的に言えば、この状況になるまでに結論などつくに出している。だが時間ぐらいいは稼げるかも知れない。

「見えないんですか！　今、この場でも戦っている笑子が！」

「……」

私の言葉に千笑は空を見上げた。

鍵を奪うチャンスは今しかない。私は勢い任せに飛び上がった。
「黙って見ているわけがないだろう？」

一瞬で？先生？が追いついてきていた。予想していなかったわけではない。

守護者を投げ飛ばした時点でそのくらいのことは。
だが、できることなどない。

「……っ」

めきめきと全身が碎ける音と共に猫の身体が地面に押し付けられていた。？先生？の若い手が頭を掴んで締め付けている。どこかの骨が折れて刺さったらしく、じわりと痛みが広がり始める。呼吸が苦しい。

「圭介さん」

千笑が箱の中から古ぼけた鍵を取り出した。守護者のそれとは違って特別な雰囲気はまるでない。よく磨かれているが明らかに輝きは鈍い。

「正義が、不要だったのです」

「……」

声が出なかった。

「正義がすべてを殺した。そういうことだよ、馬園くん」

？先生？はそう言うのと私の頭から手を離れた。

「この混沌とした状況を見ればわかるはずだ。人を狂わせ争いに至らしめる。それが正義だ」

私は既に原形を失い、瓦礫の山と化しつつある周辺を見渡した。

笑子は、おそらく私を助けるために。

相手の守護者は、復讐のために。

魔獣男は、自らの暴走する欲望のために。

守護者たちは、その使命を果たすために。

？先生？は、世界平和のために。

戦っている。

このすべてが、正義？

17 ギブ&テイクは終わった。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

16 歴史は蘇る

まるで知っているみたいだ。

自分の身体が、理解するより早く動くのを感じながら、笑子はまた目の前の相手が振るう剣を紙一重でかわし、軽く反撃を加える。力を確かめるように。

「……い？ このっ」

数分にも満たない攻防だったが、相手は弱っている。

「もう、止めない？」

狙いもなにもなく振り回された剣を反射的に抜き放った剣で受け止めながら、笑子は呼びかける。どうしてかはわからないが実力差が歴然だった。猫を助けようとした瞬間から、力が溢れて止まらない。最初こそ怒りに任せて戦ってはみたものの、あまりにも手応えがなく、冷静になってきている。

「……！」

じわ、と相手の目に涙が浮かぶのがわかった。

「……や、あの、ごめん」

気が済んじゃったから、とは流石に言えなかった。

「ほら、疲れたし、ね？ 高等部の校舎もなくなっちゃう……い？」

相手が剣から手を離し、蹴り上げてきた脚を思わず掴んだ。

渾身の力が込められているのはわかるのだが、それも容易く往なせてしまう。

「……」

明らかに泣くのを堪えている相手の表情が見て取れる。

まるでいじめているみたいで気が引ける。

「よ、よくよく考えたら、わたしたち自己紹介もしてないし？ あ、わたしからね？ 笑子、笑う、子供の子って書いて、笑子。あなたは？」

じんわりと嫌な汗をかきながら、笑子はなんとか懐柔しようとする。

る。

「……華夢衣」

そういいながら相手の少女はもう一本の脚で地面を蹴り、身体をひねって掴まれた脚を振りほどき、間合いを詰めて連打。鋭い突きと蹴りが襲う。

「かむい、さん？　へー、そう、カッコいい名前だと思う、雰囲気あるよ」

しかし難なくそれもかわしながら、笑子は相手のスピードに合わせてバックステップ。

かわした拳が校舎の壁を砕き、力を込めた脚が周囲のものを吹き飛ばしていくことに罪悪感を覚えながらも、これ以上相手を痛めつける気にはなれなかった。確かに痛い目に合わされはしたが、その借りはもう返してしまった。十分過ぎるほどに。

リベンジ
「復讐」

そしてどうやら相手は人違いをしている。

自分と勇希が見間違えられやすいのは笑子も理解していた。

「や、あの、わたしは、違うよ？　かむいさんが言ってるのはたぶん、わたしの……」

わたしの？

思わずステップが止まる。なんて言おうとした？

「油断……」

「あ」

避けきれず思い切り蹴り飛ばされ、笑子は残っていた校舎に叩きつけられる。反動で前のめりに倒れたところをさらに踏みつけられ、崩れた壁が背中中に降り注ぐ。

「こ、ども？」

わたしのこども？

まさか。

「抹殺」

「ありえないっ」

背中に向かって剣を振り下ろそうとしている華夢衣こと笑子は跳ね起きる。そのまま中空に浮いた相手を蹴っ飛ばすと、深く息を吐いた。鍵を差し込んでから、奇妙な違和感が広がっている。こうして立っている自分に対する違和感、自分が自分でなくなるような。

「落ち着け、わたし」

そう呟いて、胸に手を当てる。

心臓の激しい鼓動。生きている証拠。生きている。

「わたしは」

どうしてここに？

頭痛がして、こめかみを押さえる。

「わたしは……まそのさんに、生き返らせてもらったから……」

笑子は猫の姿を探した。そのためにここへ来たのだった。助けた直後に華夢衣に攻撃され、わけがわからなくなってしまったが、一時の感情に振り回されている場合ではない。

すっかり見通しがよくなってしまった校舎の向こうにその姿はあった。

「まその——」

猫は地面にぐったりと身体を横たえていた。息も絶え絶えの様子で。その横には学生服の若い男が立っていて、そして二人が見ている枯れかけた樹の前には記憶する印象より随分年老いた祖母がいる。その手には古びた鍵、どこかで見覚えのあるものを握って。

把握すると同時に、猫に向かって踏み出そうとした足がもつれた。

「——んう？」

眩暈、そして吐き気。

見たことのないはずの光景が、重なって見える。

樹は完全に枯れている。同じ場所に祖母が立っている。記憶にまだ近い祖母、そしてその横に立つ、女性。だれかはわからない。しかし、どこかで……同じ鍵を手になっている。微笑んでいる。なにかを言っている。そして祖母を押しつけて……。

「うつつ……」

口に手をあて、笑子は目を瞑った。

なぜかはわからないが見ていらなかった。全身の力が抜けるのとともに込み上げてくる熱に反して、手足の先まで震えてきた。寒気がする。痛いほどの太陽の光が当たっているのはわかるのに、唇に触れる指は凍えるほどに冷たい。

既視感。

あの光景をまるで知っているみたいに。

「オォーン！」

狼が吠えた。

首筋に喰らいついた牙の感触と同時に、笑子の視界が空を泳いだ。ぐるりと一回転して地面に突き落とされる。

骨に刺さってくる痛みで現実に取り戻され、反射で笑子はその頭に剣を突きたてる。氣遣う余裕はなかった。白い毛のように見えたそれは硬く、光が弾けた。さらに牙が深く突き立てられ、息も吸えなくなる。

「——のっ」

力任せに牙と首の隙間に手を突っ込んでこじ開ける。掌を鋭い歯の先が貫くのが見えたが、首が取れるとそのまま両手を口の中に押し込んだ。

「かむい、さん？」

人間の顔ではなくなってしまった相手に笑子は言う。人間が狼になつていうより、狼が人間になりにかけているという方が自然な姿だったが、目の色は変わっていない。間違えようもなかった。

「グルルルルグ」

唸りを上げ、ぶんと首を振った勢いで笑子は飛ばされる。

考えている暇はなかった。

自分に起こっている違和感と向き合っている場合でもない。まずは、猫を助けなければ。

体勢を立て直し、笑子は向かってきた狼の顔面を蹴り上げた。

「ぎゃん」

「あうっ」

だが同時に爪が脇腹に食い込んでくる。
力が拮抗しているのがわかった。今度気を抜けば殺られる。

同じ頃。

学院からなんとか逃げ出した三人は奇妙な二人乗り自転車と出くわしていた。

「あの、同じ顔か、喋る猫、見なかった？」

「？ ええ？ 喋る猫は見たっすけど、あの、学院は今ちよつと危ないと思……」

ナツメは、問われた意味より二人の扮装に目を奪われながら答える。

「学院！ そつか」

少年の方は手を叩いた。

「ほら、行き先わかったでしょ？」

少女が勝ち誇ったように言う。

「ほら、じゃねーよ！ 如月が母さんの行き先知ってるって言うから……」

「方向は合ってた！ 方向は！ あと、如月じゃなくて！」

「あ、舞！ そー、舞な！ わかった、もー、間違えない！」

「舞じゃなくて、ハニーって呼んで！」

見ている三人はびっくりした。傍目にも脈絡がない。

「うえ？ ハって？ おま、バカかよ……そんなもん言えるわけ少年も顔を真っ赤にしている。

「はい、嫌がらない！ セーの！」

「は……なー、やっぱそれはちよつと、恥ずいよ。変だし」

「恥ずかしがらない！ 変じゃない！ せえええのっ！」

少女は掛け声を張り上げる。

「……にー」

「声が小さい！」

「……は、はにー？」

「もつと、大きな声で！」

「ハニーっ！」

言わなければ先には進めないであろうと観念して叫んだ少年。それはヤケクソ以外のなにものでもないように三人には見えた。痛々しい。

「アイラブユー！」

「あ、あいらぶゆう」

愛もごり押しだった。

「オーケーっ！ 行くよ、ダーリン！」

「たのむ……うん。あ、ありがとうございましたーっ！」

一瞬で明らかに顔色が悪化した少年は思い出したように三人に頭を下げた。

仲が良いのかなんなのかわからないやりとりを繰り返した二人乗りは呆気にとられる三人を置き去りにしていく。いつ転ぶかわからないような危なっかしい自転車捌きで。

しばらくしてから、ナツメが納得したように頷いた。

「……如月って苗字に生まれたら、そう呼ばれたくもなるっすね？」

「ナツメちゃん、それは、伝わりにくいネタじゃないかな？ わかるけど」

ヤタテは苦笑いした。

「ハニーフラッシュ！ だ、ぜつと」

ミズキは例の有名アニメソングを口ずさむ。

「駅前で見た男の子だったね」

「ああ、言ってた美少年って彼っすか、なるほど」

「ノーマルなんだ……」

心底ガツカリという風に呟く。

「ヤタテっち、どう見てもあの二人はノーマルじゃなかったっすけど」

「男女交際だもの、ノーマルよ」

「ま、ノーマルな倒錯ではあつたつすけど……」

ノーマルという定義があやふやであつた。

それぞれ妄想の中に沈み、学院から離れていく。学院周辺には既に人の気配はなかった。候補生たちが住民の避難を終えつつあつたのだが、三人には知る由もない。夏の陽射しは頂点を越え、ゆるやかに夕陽へと変わりつつあつた。

「……っていうか、あの二人のあまりのインパクトでうつかりしてたつすけど、学院ついていま大変な状況になってるつすよね、行かせ……？」

ナツメは青ざめながら言った。

「「あ」」

完全に呼び止めるタイミングを逸していた。

「大丈夫でしょう、だってあの子、戦つてたし」

「魔法少女少年だ、ぜつと」

「なんかナチュラルに戦うとか魔法とか言つてて、日本ヤバいっすかね……？」

相当、深刻な状況かも知れない。

彼女たちはそれぞれそのことには気付いていたが、それ以上は追求しなかった。

今日も、明日も、明後日も、どこかのチャンネルで確実にアニメが流れていて、それをああでもないこうでもないと言いながら観る。そういう日常がなにかの拍子に壊れてしまいかも知れない。などということは、想像する意味もないことだったからだ。仮になくなったとしても、なにかが代わりになるし、本当になくなったとしても最後には自分の頭の中でそれらはすべて完結させることができる。強かだった。踊らされているようで、最後まで自分の好きなものしか愛さない。なによりも非現実を支えられながら、だれよりも現実に楽しんでいる。

オタクは死なない。決して。

「戦いも魔法も、通つてきた道だよ、ナツメちゃん」

「正義の心はパイルダーオンされている、ぜつと」

「そつすね。魔法とかなんとか、ありきたりの設定つすもん。自分ならもつと……」

三人は無事に帰宅し、その晩もアニメを見る。

世界が変化したことに気付くのはもう少し後のことだ。

校舎が崩れていく轟音に、眠ってもいられなかった。

「……ぜんぜん、収まってない」

初等部の保健室。

壁に貼られたプリントや、視力検査用のボードなどにひらがなが目立つ室内は高等部のそれと構造は同じなのに、どうしようもなく牧歌的だった。ディは自分が鍵を手渡したことを思い出し、つまり渡した相手がここまで運んでくれたのだろうと状況を把握する。悪い夢だった、と言いたかったが、男との戦いで受けた確実な傷が胸に残っていて、それは酷く悪夢的に痛んだ。傷口は塞がっていたが、傷跡は残りそうである。

「屈辱っていうか、玲於に合わせる顔がないよね、これは……」

昨日からまるでいいところがない。

子供にしてやられ、魔人からは逃亡し、敵とはやっとな刺し違えである。

抉れた傷口を撫でると溜息を吐き、ベッドから降りる。椅子に引っ掛けてあった白衣を羽織って窓辺に立つ。中等部を挟んで向こう側にある高等部の建物が見えるわけではなかったが、巻き上がる粉塵を観ればおおよそどんな状況にあるのかは察せられた。魔界の穴がまだ無事であることも。

本当に魔力が溢れ出せば、学院の敷地内はすぐ中庭と同じく植物が異常な活性を見せる状態になるに違いなく、それが学院の外周に張られた結界を破って街へ広がっていくのも時間の問題になる。それだけは避けなければならなかった。

魔界や魔力や魔法、そう言ったことをいつまでも隠し通せるもの

ではないことはテディにもわかってる。この世界がそういった意味で歪にできていることも感じている。だが、現時点ではそれをすべての人々に受け入れさせる準備どころか、受け入れさせるかどうかを決める話し合いのコンセンサスさえも形成されていない。だからこそ、現場の守護者にかかる責任は重い。起こってしまったから対処するなどといういい加減なことには断じてできないのだ。

「行かなきゃ、ね」

鍵を渡した時点で、できることはそれほどなかった。

それでもテディには見届ける責任があり、そこから逃げない責任がある。

校舎を出たところで、ボロボロのまま歩く玲於と合流する。

「なに、そのカツコ、白衣だけ？ 露出狂？」

テディの姿を見てそう言う玲於だったが、彼女自身も魔力が安定せず、裸同然である。

「ごめん、やられた。天才がザマーないって笑ってよ」

苦笑いしかできなかった。

「……生きててなによりよ」

責めるでもなく、しみじみと玲於は答える。

「やだな、しみりしちゃって。そっちは？」

「人間の魔獣。こっちの防御が役に立たない。ぜんぶ相殺されちゃう」

「ついてない」

「本当に」

テディは玲於の腕を取って、肩を貸すと引っ張るように進む。

「手はあるの？」

「売村一人じゃ守りきれない。穴を開けられるのは織り込んだ上で、すぐに閉じるしかない」

「……十年前と一緒にことね」

暗澹たる気持ちでテディは言う。

「歴史は嫌なところばーっかり繰り返すから嫌い」

玲於是そう吐き捨てた。

16 歴史は蘇る（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252t/>

正義の街

2011年9月24日03時30分発行